
名の無い魔獣

今井敏之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名の無い魔獣

【Nコード】

N9982N

【作者名】

今井敏之

【あらすじ】

名の無い魔獣は滅びを完成させるのか？ 何者かに拉致された王女の探索に、騎士団は怪しい情報屋に導かれて、大峡谷に足を踏み入れた。そこで出会った少年に少しの道案内を頼む。これが、全ての真実を知る人間が一人もない事件の始まりだった。

序章・約束

少女は少年と遊んでいた。

少女は九歳。少年は七歳。

少女は少し年下の、この少年と遊ぶのが一番の楽しみだった。弟のように可愛がっている少年と一緒にいるだけで嬉しくて仕方がなかった。

どうしてそんなに楽しいのか、彼女は享樂の源泉を深く考えたことはなかった。

花々が咲き、小鳥が囀り、温かい陽光が優しく降り注ぐ、おとぎ話のような庭園で、少年と一緒に遊んでいれば、それだけで楽しかった。

「これはなんという花だ？」

少女は少年と同じ瞳の深い青紫色の花を指差して尋ねた。

「それはね、スマレだよ」

答えた少年は、不意になにかを思いついた表情をした。

「そうだ。ちよつと待ってて」

告げるが否や、少年は立ち上がりスマレを丁寧に摘み始めた。

少女は不思議に思いその様子を見つめる。

やがて少年が丹念に編み上げたそれは、花の冠だった。

「はい」

少年はそれを少女の頭にかぶせる。青紫の花は、少女の金色の髪と調和して、美しさを引き立てる。

少し驚いたような少女は、すぐに笑みを浮かべる。

「ありがとう」

二人は笑顔で見つめ合っていた。

けれど、少女は不意に不安になる。少年の笑みはなんだか寂しげで、まるで今日を境にもう会えなくなってしまうような。

「その、私たちはずっと一緒であるよな？ そなたは私を置いて、

どこかへ行ってしまったたりはしないよな？」

少年はその疑問に不思議そうな表情をした。

「もちろんだよ。ぼくはずっと君と一緒にいるんだよ。だってコンヤクシャなんだから当然じゃないか」

少女は頬を赤らめてはにかんでしまう。

「そうだな。そうであつたな」

「ところで、前から気になってたんだけど……」

不意に首を傾げて疑問を提示する少年に、少女は言葉を促す。

「うん？」

「コンヤクシャって、なに？」

「……」

少女は沈黙した。そんな問い掛けは予想していなかった。

「どうしたの？　ぼく、変なこと言つたかな？」

少女は首を振る。

「いや、なんでもない。あのな、婚約者とは……」

「うんうん」

秘密のベールが解き明かされるのを、少年は好奇心で一杯の瞳で待ち受ける。それがなんだか面白くて、つい意地悪をしたくなった。

「んー、やはり教えぬ」

「えー」

少年からは不満の声。

「さあ、もう帰ろう。父上たちが我らを探し始める頃だぞ」

少女は先んじて親族のいる場へと向かった。

その後を追いかける少年は、重ねて追及する。

「ねえ、コンヤクシャってなんなのか教えてよ」

少女は立ち止まると、少年へ振り返る。スマイレに飾られた金色の髪が大きく揺れた。

「良いか。もし、そなたが今言つたとおり、私と一緒にいるのなら、ずっと傍にいてくれるのなら、いつか必ず教えよう」

「本当？」

「勿論だ。ずっと私から離れなかつたらな」

「わかった。ぼくは君の側にいるよ。ずっと君と一緒にいるよ」

「約束するか？」

「約束する」

こうして少女は少年と誓いを交わした。その本当の意味を理解しないまま。

テラスから誰かが少女を呼んだ。母上だろうか。侍女なのかもしれない。きつといなくなったので心配して探し始めたのだ。

「さあ、早く戻ろう。みんなが呼んでいる」

少年と手を繋ぎたくて、少女は振り向いて手を差し出した。

だが少年は手を握り返してくれず、少女のその手が掴んだのは空虚だった。

一陣の風が庭園を吹き抜け、草木が擦れる音と共に、木の葉が舞った。

少年の姿がどこにもなかった。

「……あれ？」

周囲を見渡しても、そこに居たはずの少年は、幻影であつたかのように忽然と消え失せていた。

「どうした？ どこへ行つたのだ？」

返事はない。

「どうしたのだ？ 隠れているのか？」

かくれんぼだ。よく遊んでいる。少年を見つけると、嬉しくて思わず抱きついてしまう。少年に見つかり、嬉しくてやはり抱きついてしまう。だがこんな時にすることはないだろうと思う。早く見つけて親族の集まっている場所へ戻らなくては。

少女は少年を求めて周囲を探し始める。

花壇の影でなにかが動いたのを見つけて、気付かれないように、足音を出さないよう慎重に移動した。

そして驚かせようと、つい笑みが出てしまう顔を唐突に出して見せる。

「ここか？」

少年はいなかった。動いていたのは、風に揺れる花壇の花だった。予想が外れて、不満に口を尖らせる。

「どこにいるのだ？ 早く戻らなくてはいけないのだぞ。もう出て来るが良い……あ？」

名前を呼ぼうとして、しかし喉がから出たのは疑念の呟き。

「……名前？」

少年の名はなんと言った？

今まで何度も呼んでいたはずなのに、なぜか思い出せない。

形容できない漠然とした不安が、名の代わりに喉下から湧き上がり、少女は無理に奥へと押し込める。

「どこだ？ どこにいる？ 人をあまりからかうな。隠れていないで早く出て来るのだ。どうした？ 返事をせぬか」

応えは静寂。名前を呼ばないからなのだろうか。だから返事をせず、姿を現さないのだろうか。

けれど頭に霞がかかったように名を思い出すことができない。どうしてこんな簡単なことが思い出せないのだ。

「出て来てくれと言っているだろう。私はこのような冗談は好かぬ。早く姿を見せよ」

誰も現れない。まるで名と一緒に、少年は消滅してしまったかのように。

「どうしたのだ。返事をするのだ。早く出てきてくれ。私の傍を離れないと約束したではないか。こんな、こんな冗談は止めてくれ！」

いつしか声は震えだし、気が付けば走り始め、庭園中を必死に探す、少年の姿は見つからない。

「頼む！ 返事をしてくれ！ どこにいるのだ！？ どこに隠れているのだ！？ どこへ行ってしまったのだ！？」

名前を呼べば少年は答えてくれるのに、どうしてか喉元で塞き止められているように出てきてくれない。

「私の傍に居てくれ！」

名がわからない。

「私から離れないでくれ！」

名が思い出せない。

「私と一緒に居てくれ！」

名をただ一言呼びたいのに。

「私と約束したではないか！」

一章・王女

「約束したではないか！」

エンカータ王国、王宮の二画にある第二王女リグヴェーダの寝室にて、その王女は目覚めた。

呼吸も鼓動も荒く乱れ、全身から玉のような汗が滲みシャツが肌に張り付いている。すぐに呼吸は治まるが、胸の動悸はなかなか静まらず、悪夢の余韻を確に残していた。

時計を見ると午前二時を指している。真夜中。草木も眠る丑三つ時。

「……はあー……」

王女は肺から全ての空気を搾り出すように、長く息を吐く。嫌な夢だった。もう、いなくなってしまった、忘れたはずの少年の夢。

いや、忘れたことなどなかった。心の片隅、記憶の片鱗、思い出の断片の中では、いつでも少年はそこにいた。過去の中だけに。

「……おまえの名は……」

現在という時の中で、現実という世界の中で、少年の名を呼んでも、応えは静寂。

返って来るはずがない。絶対に。

享年七歳。

少年は死んだのだから。

当時九歳だったリグヴェーダに、死の本当の意味を理解していたのか、彼女自身疑問だが、それでも少年は約束を守ってくれなかったのだということだけはわかり、少しの怒りと、溺れそうなほどの深い悲しみが、心に満ちていたことだけは憶えている。

少年とリグヴェーダの関係は、簡単に簡潔に記せば、親同士が決めた婚約者だった。

当時、少年の父、アフアマッド・クラノフ侯爵は様々な事業の連続成功で、巨大な財を築き上げ、それに伴い王宮内での発言力は急速に高まり、つまり巨大な権力を手中に収めた。

さらにクラノフ侯爵は権力の安定を図り、王族との関係を結ぼうと画策する。

それが、クラノフ侯爵第二子と、第二王女リグヴェーダとの婚約だった。

これが行われれば、クラノフ侯爵の力は不動の物となるはずだった。

だが、行われなかった。

クラノフ侯爵の野望は、一夜にして消滅した。

二人の大々的な婚約発表を控えた数日前、クラノフ侯爵家は正体不明の襲撃を受け、執事侍女を含めた全家族が殺害された。

クラノフ侯爵の館は同犯人に火を放たれ全焼し、遺体の判別すらできなかった。だが遺体の人数は合っており、それが判断材料となる。

襲撃者の正体、足取りは掴めず、その目的、背景も当然不明。襲撃から三年間、捜査は続けられたが、手掛かりとなる証拠類は一切発見できず、迷宮入りとなった。

そして、誰の指図か陰謀かと、根拠のない推測による流言飛語が飛び交った。

「リグヴェーダ王女との婚約が原因だ」

「事業を妬んだ者の仕業だ」

「政敵の仕業だ」

「ただの金銭目当ての強盗だ」

「失墜させられた者の怨恨だ」

「隣国敵国の仕業だ」

「仕事関係のトラブルだ」

「魔王崇拝者で神罰を受けたのだ」

「女絡みの事件だ」

「男絡みの事件だ」

と、その全てが真実を言い当てていても不思議ではないが、真偽の程はわからず、真実は闇の炎の中へと消えたまま。

クラノフ侯爵は一代で財力権力を築いた成り上がりで、親族血縁関係者はほとんどおらず、この襲撃事件により、クラノフ家は事実上消滅した。

こうして、一つの貴族の家系が消えたが、権力を欲しがる者は後を絶たない。

リグヴェーダ王女が十六歳になった現在、再び婚約の話が持ち上がっている。

相手は学問に秀で、武芸に通じた才能ある若者で、財力家柄共に申し分のない相手である。

父王並びに親族一同は揃って勧めるが、リグヴェーダは返答を避けていた。

なぜ？

思い出したからだ。忘れていた少年を。果たされなかった約束を。あの婚約は親同士が決めたことで、本人の意思などまるでない一方的なものだったが、それでも少年は彼女にとって、王族という特殊な環境の中で初めてできた、友だった。

それが、あまりにも呆気なく、容易く、なにもわからないまま、なにも知らないまま、何一つ理解できない裡に、消え去り、終わった。

死というどうすることもできない、一文字で。

あんな終わりでなければ、忘れることができただろうか。そんな終わりでなければ、忘れてしまっていただろうか。

こんな終わりでなければ、忘れる必要はなかっただろうか。

だが、全ては仮定であり、答えはすでに決まっている。

王族としての義務を果たせ。王族としての在り方を国民に見せ、

国民に手本を示し、国民に献身を尽くせ。

すなわち、理想的な結婚と模範的な家庭を国民に示せ。

それが王族に生まれた者の義務だ。

そんなことはわかつている。王族としての義務を果たす覚悟もある。

それでも心は迷うのだ。思うように心は在ってくれないのだ。どこまでが真実なのか判別できない、過去の思い出という幻想に心は囚われている。

「ふう……」

リグヴェーダは溜め息を吐くと、シーツを剥ぎ取って寝台から起きる。

侍女や執事を呼ぶための、ベッドの傍らのテーブルに備え付けてあるベルに、手を伸ばそうとした。そこで自分が、寝間着を着けていない、下着だけの姿だと気付く。服を着て睡眠をとることが苦手な彼女は、いつも下着だけでベッドに入り、そのことで侍女のサリナとささやかな争いを起こすのだ。

今夜の当直は、そのサリナだ。若いからなのか人柄なのか、誰もが思わず知らず萎縮する王女という身分の者に、物怖じすることなく意見するサリナは、当の王女にとっては逆に心を許せる存在だが、細かいことを諦めずに注意し続けるのは少し辟易する。

どうしたものかと思案したが、まあ良いかと思い、ベルを鳴らす。程無くしてサリナがやって来るだろう。そうしたら、汗で湿ったシーツを取り替えて貰い、体を拭くタオルと湯を持って来てもらう。ついでに寝酒用のワインを所望し、それを飲めばゆっくりと眠れるだろう。

今度は夢を見ないことを願って。

カタン……。窓ガラスが風に揺れて音を立てる。そしてキイと蝶番が軋む音を立てて少し開いた。

「……？」

カタン、と閉まり、キイ、と開く。夜風に揺れてその繰り返し。

鍵を閉め忘れたのだろうか。王女は窓を閉めようと足を進め……
ようとして止めた。

違う！

背後に微かに人の気配。リグヴェーダはベッドの枕元に隠してあった、東洋の刀とは異なるこの国独特の三日月のような形状の剣を、素早く手にすると向かって構える。

「ありやりや、見つかったか」

気配の正体は、リグヴェーダに向けて足を進め、朧な月明かりの下に姿を晒す。

「うつひょー。下着だけだあ、またいい眺めだねえ。あつりやー、股のモノ、立あっちまっちゃったよ。みつともねえー」

顔から手足の先まで、全身を包帯のような布で巻きつけた姿の男。緑黄色の斑模様の上着に、頭部には同じ模様の鉄帽をかぶった、奇抜な格好をした男だった。頭部が異様に大きく錯覚して見え、全体として人型の異形のように不気味だ。

「貴様、何者だ？」

リグヴェーダは全く怯えることも、自分の姿に羞恥して臆することもなく、誰何する。

その静かな声は、王家の血に連なる者が自然と発する威厳に溢れていた。

剣を正眼に構えた彼女の姿は、限りなく清んだ氷の輝きの如く凜として、灼熱の劫火の紅の輝きの如く猛々しく、極限まで研ぎ澄ました刃の輝きの如き美しさを放つ。

「……う」侵入者の男は微かに気圧される。

「もう一度訊くぞ。貴様、何者だ？」

「さ、さあねえ。何者でしょう？ ゲツゲツゲツゲツ」

男は気を取り直すかのように、おどけて奇怪な笑い声を上げる。

人の声とは思えない発音だが、男の奇抜な姿には相応しい声。

「実は俺さま誘拐犯。王女さまをさらいに来ました悪人悪者大悪党おとなしくしてくれりゃあ手荒な真似はしませんけどお、暴れた

りするとお、イータイ目にあっちゃうぞ〜！ ゲーゲツゲツゲツ」
歌うように悪行の行使を告げると、腰の両側に佩いている二本の短剣を抜いた。

この国の暗殺者の多くが使う、カタルと呼ばれる、特異な形状をした短剣。握りが刃に対して直角になっており、拳で殴る要領で突き刺すことができるので、特別修練を積まなくとも、絶大な殺傷力が発揮される。また鰐の代わりに二本の短剣が左右に広がる形で付けられている。そして、通常の剣とは違い、手首を動かす必要がなく、固定して使う形になるため、意外と防御にも適している。単純な発想だが、実戦性は極めて高い。

「ふっ」リグヴェーダはその武器を見ても、男の目的を知っても動じることなく、逆に不敵な笑みを浮かべた。「我が剣技を知った上でのことか？ もしそうであるならば、その口上褒めて遣わすが、知らぬであるならば……」表情を引き締め「今、ここで教えよう」

リグヴェーダ第二王女。今年度エンカータ王国武闘祭、剣術部門準優勝者。大陸でも最高の武術大会と称されるこの大会にて、若千十六歳での入賞は、国民を驚かせ、若くして達人と称賛された。

その強さに敬意を表して、闘姫と呼ばれる。

このような手合い、助けを呼ぶ必要もない。一人で取り押さえてみせる。

「おおー、こえーこえー。俺、ちびっちゃいそお」男は言いつつ足腰をわずかに下げると「シェア！」

一気に跳躍する。

「フッ！」リグヴェーダは短い息吹と共に、一気に詰められた間合いに合わせて剣を振り下ろす。

だが剣先が届くか否かの手前で男は踏み止まり、床を踏み鳴らし、真上に跳躍。軽々と天井まで届き、両足を天井に着けると、そこで再び跳ね、リグヴェーダ頭上を越えて、その背後へ。

「！？」

リグヴェーダは少なからず驚愕するが、動きを止めずに流れるよ

うに反転し、背後頭上へ鋭く切り上げる。

鋼の激突音。

男は両手の暗殺短剣^{カタル}を十字に重ねて、王女の一閃を防いだ。しかし、その一撃の反動で撥ね飛ばされ、だが空中で一回転して体勢を立て直すと、難なく着地する。

「ワーオ！ さーっすが闘姫さま。俺の動きについてこれるなんて、すうっごいねー」

男はおどけてカタルをひらひらとからかうように動かす。

リグヴェーダは再び男に向けて正眼に剣を構える。

「貴様……」

リグヴェーダは男の体術に疑念を持った。

男の動きは鍛え上げたものだけではない。あんな動きは如何に鍛えようと、如何に技を練ろうとも、通常の間人には不可能だ。

二つの方法を除いて。

^{スィフル}
魔法が薬物。^{ダワー}

^{ハジシャン}

「麻薬服用暗殺者。貴様、楽園^{ジャンナ}の手の者か」

世界最大の暗殺組織の名を挙げる。そこで育成される暗殺者は、身体能力を強制的に向上させる麻薬を服用しているという。

「当たり前ー。でも、雇い主は別だよ。ゲッゲッゲッゲッ」
どうする？ リグヴェーダは胸中呟く。

麻薬服用暗殺者に対抗するのは至難の業。痛覚などの感覚も鈍くしてあるため、生半可な攻撃は意味がない。それこそ一撃必殺の斬撃を与えなければ効果がないだろう。だが、強制的に向上させた身体能力のため、それ自体が極めて難しい。

加えて敵の技の錬度も問題だ。技をなにも知らない者が、薬物によって身体能力を向上させても、力任せに動くだけで、武術を習得した者にとってはそれほど脅威とはならない。だが、この男の技は、決して素人ではない。

負けるとは思わないが、勝つのが難しいのも確かだ。

このような相手に負けるようで悔しいものを感じるが、暗殺者な

どに剣士の誇りを貫いても意味はないだろう。素直に人を呼ぶべきか。

「ボツズル。なにを遊んでいる？」

不意に窓からもう一つの人影が現れた。

全身を黒で統一した衣服に、足元にまで届くローブを羽織った初老の人物。月明かりに照らされる銀髪が目を引き。黒衣の姿は闇に溶けるようでいて、その実、異様に映える。

「ゲシュタルの旦那」ボツズルと呼ばれた、奇怪な姿をした暗殺者は答えた。「いやー、この王女さま、結構強くてさー。ひよつとして負けちゃんじゃないかなーって、ちょこつと」人差し指と親指で大きさを示し「思っちゃったりしてー。ゲーゲツゲツゲツ」

「ふざけるな」恐ろしく抑揚を欠いた声で叱責する。「早く済ませる。時間の無駄だ」

「だけどよー、この王女さまほんとに強いんだぜー。俺一人じゃあ時間がかかっちゃうよ。だからさ」首と手を奇妙に捻った踊りのような動きをして見せて「旦那も手伝ってくれよん」

「……」ゲシュタルという男はしばらくの沈黙の後「わかった」

二対一。これは人を呼ぶしかない。

決心したその時、寝室のドアが開いた。

「王女様、お呼びでしょうか？」

しまった！ リグヴェーダは慄然とする。先程、呼び鈴を鳴らしていたことを完全に失念していた。

リグヴェーダが行動を起こすよりも素早く、ボツズルはドアの前に疾走。室内に入ろうとした侍女、サリナの首に腕を回すと、彼女の首筋にカタルの切っ先を突き付ける。

「お姉ちゃん、動いちゃダメ」

「あ？……王女様？」

ボツズルの腕に捕らわれたサリナは、恐怖で震え、その声はか細い。

「王女さまも動いちゃダメ。動かないでー、静かにしてー、おと

なく、捕まってちょうだい。ゲッゲッゲッ」

「……なに？ 王女様……なにが起きているのですか？」

サリナは突然の出来事に混乱を起こしかけていた。

ボZZルは、その彼女の頬に刃で一筋の傷をつけ、次に首筋に刃を当てる。

「ほーらほらあ。早く武器を捨てないとお、このお姉ちゃんの首が、あらまあキレーに切れちゃったりしてー」

「ひっ」サリナの短い悲鳴。

「待て！」リグヴェーダは叫び、静かに感情を押し殺した声で「わかった。捨てる」

「いけ……ません……駄目……逃げてください……」

サリナが叫ぼうとしているが、意に反して喉から出るのは小さな声。

リグヴェーダは苦渋の表情で、剣を床に捨てた。

「それでいいんだよ。ゲッゲッゲッ」そしてゲシュタルに「じゃ、旦那、よろしく」

ゲシュタルが肯いて了承の意を示すと、リグヴェーダに足を静かに進める。

どうする？

リグヴェーダは思案する。黒衣の男が接近するまで残り十歩。その間に打開策を考えなければ、囚われの身となり、サリナの身もどうなるか。この状況を打開する方法を考えなければ。

視界の端で、サリナが手をゆっくりと動かすのが入った。その手が向かうのは、扉の隣に備え付けられた、人を呼ぶための鈴。サリナの手が届く距離にある。そして呼び鈴は、緊急時に備えて、鳴らした場所では音が鳴らないようになっていた。

サリナが慎重に、呼び鈴に震える手を伸ばす。

人を呼び、衛兵が来れば、なんとかなるかもしれない。あの呼び鈴を鳴らせば他の誰かが気付いてくれるかもしれないと考えたのだろつ。

リグヴェーダは警告を出すべきかどうか逡巡した。

迂闊に警告すれば、二人の行動から察するに躊躇いなく、サリナを殺めるだろう。

だが、やつらに判明すれば、やはりサリナは殺される。

リグヴェーダは自分から行動することを断念した。自分から行動すれば、サリナの身が危険にさらされるしかない状況だ。

銀髪の男はこちらに向かっており、サリナには背を向けている。

サリナを捕らえている男も、自分に気を取られている。

気付かれずに成功してくれ。リグヴェーダは胸中祈った。

「ダメ」

だが唐突に、サリナの手をボツズルが掴んだ。

「ひっ！」サリナは思わず悲鳴を上げる。

「そんなことしちゃあ、ダメダメのダメダメ！　だーかーらー、お仕置き！」

「まっ」待てと、リグヴェーダは制止の声を上げようとした。

だがそれより早く、なにかが切断される、軽いのに鈍く嫌悪感を催す音が聞こえ、一瞬後、サリナの首筋から鮮血が吹き出た。

「あ、ああ、あああ！」

「サリナ！」

リグヴェーダは叫び、二人の侵入者に構わず、サリナに駆け寄ろうとした。

だがゲシュタルがその進路を遮り、左手をリグヴェーダに向ける。同時に破裂音にも似た音が鳴り、リグヴェーダは全身に衝撃を受けて、力なく床に崩れ落ちる。

こやつ魔法使いか！。

サーヒル

魔法使い。人間が持つはずのない力を持ち、操る者。古代の巨人

イムラク

たちの持つ力と技を継承する者たち。

如何なる魔法を使ったのかわからないが、体が痺れてまるで動かず、意識が急速に薄れていくのを実感した。

暗くなつていく視界に、セリナが首筋から吹き出る血を手の平で

押えようとして、それが全く効を成していないのが見えた。早く血を止めなければ、その命を失う。さながら水時計のように。

早く助けなければ。

サリナは出血を止めて、医者に直してもらわなければ。魔法使いでも良い。今すぐサリナを助けなければ。

「サリ……ナ……」

だが、仕える者を守護する使命感は、薄れていく意識を繋ぎ止めることはできなかった。

「誰かきて！ 誰かああああ！」

視界が暗闇に閉ざされる直前、サリナの最後の力を振り絞った声を耳にした。

だが絶叫に近いその声も、リグヴェーダの暗闇に閉ざされた視界に光を戻すことはできず、途絶えた思考も覚醒することはなかった。

ゲシュタルは、首筋からの出血多量によって死亡した、侍女の死体を見下ろした。

そして、ボツズルに抑揚のない声で「悪趣味だぞ」

「なんだよお、旦那。いいじゃねつかよー」ボツズルはおどけて踊って見せて「気に入らなかつたあー？ 文句あるうー？ ザーラデイスの旦那に言つて俺を解雇するうー？」

ゲシュタルは軽く首を振り、一言。

「いいや」

廊下から足早の音が複数、寝室に向かってくる。

「気付かれたな。当然だが」

「いいじゃねえか、もう終わったんだしよ。さっさと撤収、撤収ー」

十数秒後、リグヴェーダ王女の寝室に、近衛兵が到着したが、そこには事切れたサリナの他に、誰の姿もなかった。
寝室の主である王女も。

これが、これから起こる、そして全ての真実を知る人間は誰一人
していなかった、事件の始まりだった。

二章・教義

イラフ アーラム
神は四つの世界を御創りになられた。

四つの世界それぞれに、四つの名を御与えになられた。
フィルダウス

天界。

マーザンダラン

魔界。

アドゥン

地界。

カーフ

火の国。

それぞれの世界に住まう者として、四つの民を御造りになられた。

ダウー マラーイカ

光から天使を創り、天界に置いた。

ムスリム ディーフ

闇から魔族を創り、魔界に置いた。

トゥラフ バシャル

土から人間を創り、地界に置いた。

ナール ジンニ

火から炎の民を創り、火の国に置いた。

神は四つの民それぞれに四つの世界を与え、世界の在り方と四つの民の在り方を教えた。

四つの民は、母にして父である神に従い、教えを忠実に守護し続けた。

しかし千年目にして綻びが生ずる。

神の玉座に最も近い位置に在る七人の天使長が、突如として神に反旗を翻し、魔界を統べる魔族を従え、神に戦いを挑んだ。

この時から、七人の天使長はその地位を剥奪され、魔王と呼ばれるようになった。
シャイターン

これに対し神は、天使を率いて、魔王の軍勢を迎え撃った。

神と魔王。

天使と魔族。

二つの勢力軍による戦争が始まった。

神は人間に命じた。天使と共に、魔族と戦い、魔王を打ち倒せ。魔王は人間を誘った。魔族と共に、天使と戦い、神を打ち倒せ。だが、四つの世界を震撼させた戦いに、人間は参加しなかった。

臆病な人間は、神の勅命も、魔王の誘惑も、どちらも選ぶことができなかった。

そのため戦いは拮抗し、永遠に続くかと思われた。

しかし、存在するはずのない存在が現出し、単純にして純粋な結末を迎える。

滅び。
ハラカ

深淵の虚無から死が訪れた。ウツウツ死は魔王と魔族を、ジャハンナム地獄の奈落へと引きずり落とした。この時より四つの世界には死が訪れるようになった。

火の国から炎の王が立ち上がった。マールド炎の王は炎の剣で天使を焼き尽くし、天の扉を閉じ、炎の剣を据え置き、ラハット・ハヘレグ・ハミトウハベヘット天界と神の玉座を封じ込めた。この時より万物は古い、シャイフーハフアサダ腐し、タクスタイル朽ちるようになった。

イスム空虚なる混沌から名の無い魔獣が現れた。名の無い魔獣が全ての名を剥奪し、滅びは完成される。

完成された滅びは、全てを真なる永劫の内に終焉させる。イフタタマ

しかし神は奇跡を起こした。ムラジザ

名の無い魔獣に名が与えられ、名の無い魔獣は、名の無い魔獣ではなくなった。

そして世界は存続を許された。スイツリだが魔王も秘跡を起こした。

名を与えられたことによって、名の無い魔獣ではなくなったはずのものから、名を奪い、再び名の無い魔獣へと戻した。

そして名の無い魔獣は空虚なる混沌へ帰って行った。リフジャア再来することを告げて。

神は人間に説く。

汝らは、我にも彼の者たちにも従わなかった。それ故に汝らは善ハイルでも悪でもあり、そのどちらでもない存在となった。次に名の無い魔獣が現れるまでに、我の言葉を聞き入れなければ、我は救いを与えず、名の無い魔獣は全てを終わらせるだろう。

魔王は人間に囁く。

汝ら是我らにも神にも耳を貸さなかった。それ故に汝らは悪でも善でもなく、そのどちらでもある存在となった。次に名の無い魔獣が現れるまでに、我らの言葉を聞かぬならば、我らは褒美を与えず、名の無い魔獣は全てを終わらせるだろう。

モスク
礼拝堂にてシャイフ導師は教徒たちに語る。

聞きなさい。神の子供たちよ。神にも魔王にも従わなかった者たちの末裔よ。

この神話は我らの心を最も良く表している。

臆病であるがゆえに、善も悪も選ぶことのできない我らの性質。しかし我らは選択しなければならぬ。

神の救いを求め、神の言葉を聞き、神の下僕となるか。

魔王の褒美を求め、魔王の誘惑を聞き、魔王の奴隷となるか。

神は名の無い魔獣から救い、滅亡を止めようとされている。

魔王は名の無い魔獣を使い、滅亡をもたらそうと脅す。

どちらの言葉を聞くかは明白と言えるでしょう。

慈愛を持って救う者に従うか、恐怖を持って脅す者に従うか。

ハイル シャツル
善と悪。
イラーフ シャイターン
神と魔王。

我らは二つの選択から、一つに決断しなければならないのです。
アジ・アデイスム
名の無い魔獣が、再び現れる前に。

三章・敗者・1

エンカータ王国南西部に位置するそれは、全長約三百五十キロメートル、幅約二十五キロメートル。深さ最大千五百メートルの、ノラカル河の水流が数十万年もの長い年月をかけて刻んだ大地の裂け目。

それはあまりにも、広大で巨大で偉大で、それ故に極めて単純にそれを表現する名で呼ばれている。

アザマワデー
大峡谷。

その一画で、二足歩行の獣が群れを成して疾走する。蹄が掻き鳴らす地響きと土煙が巻き上がる。

その背に跨っているのは、十四歳の少年たち。

人口が疎らなこの土地で、大峡谷の住人たちは年に一度、大峡谷に点在する集落の中心地、ベドウィルム村に一年に一度集い、成人の儀式の一つとして競馬スィパークルハイルを行なう。

参加者はこの年、成年を迎える十四歳の少年たち。

ただ、通常の競馬とは違い、この地方の乗用動物であるティダが使われる。

ティダとは大峡谷に生息する動物で、保護色なのか、土色に近い茶色の体毛が全身を薄く覆い、頭部には木の枝のような角があり、鹿に似ていると言えないこともない。だが、鹿とは違い二足歩行で、遠くからはカンガルーともダチョウとも取れるシルエットをしている。体の大きさはそれらの二倍近くあるので、近くで見るとまるで似ていないが。

生活の基盤を、狩猟を中心としたこの地方に点在する村や集落は、ティダを常用動物として利用し、その優れた乗り手は、同時に優れた狩人サイドウであり、勇者バトルと賞賛される。

成人式の儀式の一つである競馬で優勝することは、子供から大人になる少年たちにとって、最高の名誉なのだ。

幅約三十メートル、距離三キロメートルの、天然の地形を利用して作られた、外壁に挟まれ曲がりくねった競技場で、十二頭のティダが走り抜ける。

先頭を走るのは、ベドウィルム村から参加した四人の少年たち。ダラス、リーバ、ジエドム。そしてマースム力。

他の村や集落の乗り手から大きく引き離して、自分たちの村の少年たちだけが先頭を占めて走るその光景に、崖上から観戦するベドウィルムの村人たちは歓声を上げる。

「いいぞお！ 突っ走れえ！」

「ジフ、マースム力もなかなかやるじゃないか」

「ゴールへ先回りしよう！」

「ああ、誰が優勝するのか見届けないとな」

彼らは少年たちの向かうゴールへの近道を走り始めた。

先頭から四頭目のティダに乗る少年、マースム力はティダに話しかける。

「セネ口、準備はいいかい？」

ブモオウ！ 牛のような雄叫びを上げ、セネ口と呼ばれたティダは応えた。

視界が開ける平野まで残り五百メートル、その手前で勝負をかける。マースム力は防風ゴーグルの中でその目を輝かせた。

残り四百メートル。先頭を走る少年、ダラスが一瞬後方を振り返った。マースム力を警戒している。

残り三百メートル。平野に入る手前の急激なカーブに差し掛かった。

「今だ！」

マースムカの場合に呼応し、セネロは急激に速度を上げた。

「なに！？」

先頭を走るダラスは、思わず疑念の声を上げた。

確かにカーブを曲がる時は速度を落とさなければならぬ。そこを狙い、あえて全力で突入すれば三人を抜くことは可能だろう。だが、直角に近いあのカーブを全力で走り抜けることなど不可能。曲がり切れずに壁に衝突する。あまりに無謀だ。

ダラスを含めた先頭三頭のティダは速度を落とし、体勢を斜めに傾けて方向を変え始める。

その横をマースムカは全力で、大幅に外側を走り、だがリーバ、ジェドムを一気に抜き去り、先頭のダラスに迫る。しかし、やはり曲がり切れずに壁に向かってしまっている。このままでは壁と接触して転倒するだろう。

バカが、そんなことをすれば当然だ。ダラスは笑みを浮かべ、正面へ改めて向いた。

「ダラス！ 抜かれるぞ！」

だが、リーバの声に思わず振り返る。

マースムカとセネロは体勢をほとんど真横にした状態で、外側の壁を蹴りつけてカーブを走り抜けた。ほどなく地面に戻り、速度を落としていたダラスよりも明らかに早く、一気に最大速度へ。

「冗談だろ！」ジェドムが叫ぶ。

速度と遠心力を利用して、壁を地面の代わりとする。単純な理屈だが、口で言うほど簡単ではない。乗り手とティダが正に一心同体の協調を行わなければ、体勢を崩して転倒する。大峡谷のティダ乗員全員で、これを行えるのはいったい何人いるだろうか。

その高等技術を、マースムカはやってのけた。

冗談じゃねえ！ ダラスは胸中叫んでいた。

必死でティダの尻に鞭を打ち、速度を上げるよう指示するが、彼のティダはこれ以上速く走れないとも言いたいのか、悲鳴のような声を上げるだけで、速度はほとんど上がらない。

それに対してセネロは、マースムカが一度も鞭を使わないにも係わらず、速度をどんどん上げて、ダラスに迫る。

冗談じゃねえぞ！　ダラスは再び胸中で叫んだ。

このままでは確実に抜かれる。優勝の名誉をマースムカなどに奪われてしまう。最高のティダ乗りの栄誉が、狩人の称賛が、勇者の称号が。

マースムカのようなクズに！

「ふざけんじゃねえ！」

ダラスは叫び様、ちょうど真横に来ていたマースムカに向けて、鞭を横に振るった。

「グッ！」

完全に不意を喰らったマースムカは、防ぐこともできずに鞭の一撃を胸に受け、体勢を崩して落馬しかける。かろうじて右手が手綱を握るも、振り落とされる寸前。

平野に入り一気に視界が開けた。同時にセネロは乗り手の異常に気付き速度を落とす。そこでマースムカの右手が手綱から放れた。

地面を転がるマースムカ。その横をリーバ、ジェドムが抜けて行く。回転が止まったマースムカは、落馬の痛みで呻いたが、後方からティダの一群が迫って来るのに気付いた。

まずい！　急いで横へ避難する。

ティダの一群が地響きを立てて、マースムカの横を通り過ぎて行く。

土煙を残し、群れが走り抜けた後には、土埃と泥で汚れたマースムカだけが残った。

立ち上がった少年の隣に、セネロが寄って来た。

「……セネロ」

力ない呼び声に、セネロは顔を摺り寄せる。元気付けようとするかのように、慰めるように。

「大丈夫だよ、セネロ。それと、よく気付いてくれたね。ありがとう」

セネロがマースムカの異常に気付かずに、全速力で走り続けていたら、マースムカの命はなかったかもしれない。

峡谷を抜けた荒野、三百メートルほど先のゴール地点で歓声が上がっている。

決着がついたのだ。

「行こう」

マースムカはセネロの背に跨ると、ゆっくりと歓声の方向へ向かった。

歓声に包まれたダラスは、誇らしげに両拳を天に向け、周囲の人々へ自らの存在を誇示していた。優勝者の当然の称賛だと言わんばかりに。

その両脇で、二位のリーバ、三位のジェドムが、やや控えめに手を掲げて戦績を誇る。

人々は三人を口々に褒め称える。

「大峡谷の新しい狩人の誕生だ」

「優れたティダ乗りだ」

「さすがダラスだ」

「ベドウィルム村の誇りだ」

マースムカは彼らの言葉を聞くうちに、誇りに満ちて勝利の栄光を受ける彼らを見ているうちに、怒りが湧き上がってきた。

マースムカは付けていたゴーグルを剥ぎ取った。

隠れていた顔が現れ、近くにいた者たちは、その顔を見て思わず後退りした。

少年というよりは、少女のような端正な顔立ちで、過酷な自然に鍛えられた粗野な彼らの中にあつて、逆に目立つ。そして瞳の色が大峡谷の者たちは黒だが、少年だけが蒼い。

だが、秀麗とも呼べる顔は、けして人を魅了することはなかった。右目から右頬にかけての周辺にある、古い火傷の痕。爛れた痕跡が、瞼を捲れ上がらせ、右側の目玉が飛び出ているように錯覚させている。

醜悪で、薄気味悪い、右顔。

美醜が同居する顔。

それは異形の魔物のように、見る者に否応なく不快感を与える。マースム力は彼らの前に出ようとするが、人垣に阻まれてなかなか前に進めない。マースム力に気付いた者たちが、その顔に驚き、または恐怖し、そして嫌悪感に道を開けるが、それでも人波を縫うようにして進み、ようやくダラスの前へ。

ダラスはマースム力を見ると、嘲るような笑みを浮かべた。いや、事実嘲笑しているのだ。

「ダラス！」マースム力は思わず叫んだ。

「なんだよ？ どうしたんだ、マースム力」瘡に障る笑みを浮かべたまま答えた。

「なんてことするんだ！ 死ぬところだったぞ！」

ダラスは意図的に肩を竦める

「なんのことだよ？」

マースム力は一瞬掴みかかりかねないほど激昂したが、寸前のところで正気に返る。

「どうしたのだね？」という声がかけられたから。

声の主はベドウィルム村の長老^{サイム}だった。大峡谷の最長老でもある。齢七十歳を超える高齢だが、足腰はしっかりしており、このような場でも顔を出す。白く長い髭を蓄えており、それを片手で撫で付け

るのが癖だ。

「長老」

マースム力は事情を説明しようとしたが、それより先にダラスが口を開いた。

「こいつが、マースム力が言いがかりをつけてくるんです。最下位になった腹癒せにね」

開き直って臆面もなくでたらめを口にするダラスに、マースム力は啞然とする。

「ダラス、おまえ……」

「マースム力、落ち着きなさい」長老が手で制する。「なにがあつたのだね？」

マースム力は一呼吸落ち着けてから「ダラスがレースの途中で僕に鞭を振るつたんです。そのせいで僕は落馬しました」

長老は「ダラス。マースム力はこのように言っているが、お前はなにか言いたいことはあるかね？」

「言いがかりですよ。俺はそんなことしていません」

「ふざけるな！ お雨が僕に鞭を振るつたところはリーバとジエドムが見ていたんだ！」

言ってからマースム力は、ハッと気付き後悔した。これから起こること、リーバとジエドムがなにを言うか予想できたから。

「リーバ、ジエドム。俺がマースム力になにかしたようなところを見たか？」

ダラスの質問に、二人は首を振る。

「いいや、そんなの見てないぜ」

「俺が見たのは、マースム力が無茶な速度でカーブを突っ切ろうとしたところだ」

「ああ、それでバランスを崩して転倒したんだ」

「そうだ。危なかったんじゃないか、あれ」

「他の奴を巻き込んだら、大惨事になってたかもな」

「……」マースム力はなにも言えず、己の迂闊さを呪った。

リーバとジエドムはダラスの友人であり舎弟同然。それに対して自分は仲間でさえない。その二人が、ダラスに不利になることを言うはずがないのに、そんなことにも気付けないなんて。

ダラスが周囲に向かって「他に誰か、俺が鞭を振るったとか、そういうことをしたのを見た者はいるか？」

返事は沈黙。手を上げる者、返答する者は誰もいない。あの時はカーブを曲がった直後で、後方にいた乗り手は勿論、観客からも見えない位置だった。そしてなにより、大峡谷においてマースムカに味方をする者は誰もいない。

皆、せつかくの喜びの場に水を差したマースムカに対して、非難の目を向けるか、あるいは、その醜い顔に不快感を示していた。

「なんだ、あの顔は？」

「顔も醜いなら、性根も醜いわけか」

「化け物じゃないのか？」

「ただの卑怯者さ」

人々は事態の真偽を確かめようとはせず、ただマースムカの醜怪な右顔に嫌悪と不快を指摘するだけ。

「どうです？ 長老、俺の身の潔白が証明されましたか？」

長老は、なにを考えているのか良く判らない表情で、相変わらず髭を撫で付ける。

しばらくして「マースムカ、お前の結果は確かに残念だが、その腹癒せに嘘を言って、誰かを陥れるということをしてはいかんと思うのだがのう」

「長老！ 僕は……」

長老はマースムカの言葉を制する。

「それぐらいにしておきなさい。第一、お前の言うことは全部証拠がない。それでは誰も信じやせん。そうじゃろう」

マースムカは悔しさに、爪が食い込むほど手を強く握りしめた。

「……はい」

ダラスがマースムカの肩に馴れ馴れしい仕草で手を置いた。とて

つもない不快感が体を侵食したが、それを払い除けようという気持ちはどうしても湧き上がらなかった。

「今ここにはな、大峡谷の住人が全て集まっているんだ。そんなところで、これ以上村に泥を塗る真似は止めるんだな」そして肩から手を離し、マースム力にしか聞こえない小声で囁く。「余所者が」長老は「さあ、皆の者。改めて新しき狩人たちの誕生を祝おうではないか」

その声に、最初は疎らに、やがて全員がダラスたちに祝福の歓声を上げる。

その中からマースム力は静かに出て行った。

敗北感を抱えたまま。

三章・敗者・2

ベドウィルム村で一番の器量良しと称されている少女、ラーナは、事態の顛末を危ぶみながら見届けた。

そして歓声の中から、齒を食いしぱり、拳を握り締め、その秀麗な左顔と醜怪な右目に、怒りと悲しみ、そして悔恨を抱えたマースム力が立ち去ろうとして行く。

彼に話しかけようと足を向けた。なにを言えば良いのかわからない。だけど、なにか話しかけなければ、誰かがマースム力の傍にいてやらなければいけない。上手く言い表せないが、そんな焦燥感と義務感が湧き上がるのだ。

だが、隣にいた母親がそれを見咎めて、ラーナの手を引いた。

「さあ、ラーナ。大峡谷の誇るティダ乗りのダラスにこれを渡してやりなさい」

花束を娘の手に強引に握らせて、ダラスを示す。

「あ、でも」

ラーナは戸惑い、ダラスとマースム力に視線を交互に変える。

「なにをてれているんだい。早く行ってやりな。お前が行けば、ダラスは喜ぶよ」

母親はダラスの方へと娘の背を押した。

それは他の人々も気付き、皆に押されるようにダラスの前へ。ラーナは仕方なくダラスに花束を渡す。

ダラスはラーナから花束を受け取ると、不意にラーナの腰に手を伸ばし、高々と持ち上げた。すると、周囲からこれまでとは違った、若い恋人を祝福し、からかう、野次の混じる歓声が上がった。

だが、ラーナにはそんな気はなく、突然のことに戸惑い困惑しているだけで、どちらかといえば迷惑としか思わなかったが、彼女の

内心に気付くものは誰もいなかった。

内気な少女が恥ずかしがっているだけとしか思わなかった。
なによりもダラスが。

ジフは少し息を切らし、ゆっくり進むようと、ティダを操る。

途中までは他の観客と一緒にゴールに先回りしようと、ティダを走らせていたのだが、疲れたので止めた。

初老に差しかった最近、体力の衰えが激しく、若い頃は軽く行えたことが、酷く労力を必要とする作業になってしまった。頭髮もほとんど白髪になってしまい、つまりは寄る年の波には勝てないと言っことか。

だが、ジフはあまりレースの結果に興味がなかった。マースムカの順位だけは気になるが、崖上から見たあの調子だと、それなりに良い結果を得られているだろう。

やがてゴールが見えてきた。決着は付いたらしく、歓声が上がっている。

だが彼は、やはり速度を上げずに、ゆっくりとしたペースで進むふと、見知った影が観衆の中から出て行くのが見えた。

マースムカだ。少年はセネロに跨ると、集まりから離れていく。

ジフはそちらにティダを向けた。

マースムカは気分が落ち込んでいるのを自覚していたが、落下していく精神を自制することができなかった。

また僕は負けた。競争ではなく、主張することだ。

人間関係は勝ち負けで成り立つようなものではないが、自分がかを主張すれば勝負になる。ましてや自分が正しいのならば、絶

対に負けてはならないはずだ。

だが、マースム力は負けた。引いてしまった。彼はそういう少年だった。誰かと争うことが苦手で、なにより全精力をかけて対抗し抗議する度胸も気力も、勇気もない。

おとなしく優しいといえは聞こえは良いが、概してそれは臆病と言ひ換えられる。

「どうした？ マースム力」

「あ、父さん」

今初めて気付いたのか、すぐ傍まで来ていた父に、少し驚いた表情を向ける。

「皆のところになくて良いのか？」

「……良いんだ」

マースム力は寂しげに答える。その様子に不審なものを感じたが、ジフは追求しなかった。

「競馬の結果はどうだった？」

マースム力はしばらく黙っていたが「……最下位だった」

「……そうか」ジフはなんでもないようなことに答え「まあ、気にするな。そういうこともある」

「……そうだね」

「さあ、村へ帰ろう。成人の儀式の準備があるだろう」

「うん」

そして二人で帰路に立つ。

二人は親子だが、血は繋がっていない。七年前、当時七歳のまだ幼かったマースム力を、ジフが王都の孤児院から引き取り、養子として育てた。ティダの扱いも、狩の技も、全てジフが教えた。

かつて大峡谷随一の狩人と呼ばれた人物に指南を受け、マースム力は現在、ティダの優秀な乗り手となり、優れた狩人となった。

だが、それでも村で疎外される。ダラスのようにあからさまに他所者扱いしてくるのはほとんどいないが、なにかにつけ不当に扱われてきた。

それは醜悪な右顔、爛れた火傷の痕に起因しているのは理解していた。そして引っ込み思案な性格や、人と付き合うということに不器用であることが、さらに拍車をかけている。

だが、自覚し理解しても、簡単に治せるものでも、解決できるものでもない。

少年は、だからこそ今日のレースで優勝したかった。せめて優秀な成績を収めたかった。

そうすれば皆が認めてくれると、村に受け入れられるようになる
と信じて。

だが、結果は最下位。それもダラスの卑劣な妨害によつて。そしてなによりも悔しいのは、自分の方が卑怯者とされたことだった。

どうして僕がこんな思いをしなければならなのだろう。謂れ無い非難を受け続け、それをなんとかしようとしても、何一つ上手く行かない。

マースム力は悔恨と悲しみが募る。だが、彼は一滴たりとも涙を流さない。少年は七歳の時から泣いたことは一度としてなかった。

ふと、マースム力は向かう方向に誰かがいることに気付いた。テイダではない、普通の馬に乗った黒衣の男だ。

銀色の髪をした黒衣の人物は、マースム力とジフへ向けて馬を進めていた。

二人はテイダを止める。

「父さん、誰だろう？」

マースム力は尋ねたが、ジフは答えず、黒衣の男を厳しい目で凝視している。驚愕とも怒りとも取れる目に、微かに怯えが混じっているような。

「父さん？」

「私の後ろに下がれ」

「え？」

「早く下がるんだ」少し語気を荒くして、指示する。

「う、うん」マースム力は戸惑いながら後方へ下がる。

黒衣の人物は小さな声でも届く距離まで来ると馬を止めた。

「久し振りだな」

男からジフに話しかけた。酷く鷹揚のない、まるで感情が欠落しているのではないかと思う声。

「なにをしに来た？ ゲシュタル」

「ご挨拶だな」一呼吸おいて「そう警戒するな。今日はただ顔を見に来ただけだ。たまたま近くに立ち寄ったものでな」

「ならば、早く立ち去れ」

「付き合いが悪いな。少しくらい話をしてもいいだろう。アザニスの悪魔」

「その名で呼ぶのは止める！」

「そう、怒るな」そこで初めてマースム力の存在に気付いたように目を向けた。「……その少年は？」

「息子だ」

「ほう。お前に息子がいたとは、知らなかった」

「話さなかったからな」

「養子ではないのか？」

「お前には関係ない」

「関係なくはないだろう。昔の仲間なのだから」

「昔のだ」

「今は違うとでも言いたそうだな」

「そうだ」

重なる二人の視線は、火花を散らしているとさえ錯覚するほど、緊張感に満ちていた。

「……フツ」

だが、不意にゲシュタルは少し俯いて視線を外し、苦笑した。感情がないと思われた男に。

「わかった。さっさと立ち去ることにする」

馬を操りジフとマースム力の横を通過する。だが、ふと思い出したように馬を止めた。

「ああ、そうだ。さっきのレース、か？ あれはなかなか面白い見世物だった。特に最後の場面は」

言葉とは裏腹、楽しさなど微塵の欠片も感じなかったかのように、感情のない声に戻っていた。

「先頭で走っていた少年が、お前の息子を鞭で叩き落したんだっとな。そのことでなにやら揉めていたようだが……」ゲシュタルはしばらく言葉を搜していたようだが「まあ、いい。くだらないことだ」マースム力は「見てたの？ 僕が落とされるところ。そのことで揉めていたことも？」

ジフは息子の質問に叱責するような目を向けたが、彼が何かを言う前に、ゲシュタルが答える。

「ああ、見ていた。……なぜ証言してくれなかったとでも言いたいのか？」

マースム力は肯定するべきなのか否定するべきなのかわからなかった。それは純粋な疑問だったからなのか。

ゲシュタルはやはり感情のない抑揚を欠いた声で答えた。

「俺には関係のないことだから」そして付け加えるように「少年……マースム力だったか？ 自分の居場所を確立したいのなら、争うことを恐れないことだ。そして引いてはいけない。引けば追い込まれるだけだ。そして、負ける」

ゲシュタルはマースム力の返答を待たずに、馬を進ませ始めた。

「……マースム力。汝の名はなにか？ 奇妙な名だ」

少年の名前の意味を、古代語の意味を知っている。

古代に使用された、名を問う時の言葉。

マースム力
汝の名はなにか？

銀髪の黒衣の男は、名前と呼べない名前にそれ以上の興味はなかったのか、そのまま去った。

その背後を沈黙したまま見送り、やがて男は峡谷の彼方へと姿を消した。

しばらくしてマースム力は尋ねる。

「父さん、今の人は？」

ジフは少しの沈黙の後、短く答える。

「知り合いだ。昔のな」

その日の夜。

ベドウィルム村で成人の儀式が行われた。

満月の月明かりの下、長老が祝詞を唱え、清酒を杯に注ぐ。

成人を迎える子供たちはそれを飲み干した。

やがて誰からともなく楽器を奏で始め、歌声がそれに伴い、一人、また一人と、やがて全員が併せゆく、重ねゆく。

静かで素朴な、それゆえに荘厳な、自然との調和が奏でる協奏曲。どこまでも、いつまでも、大地に空に、遙に彼方に、響き渡る。

偉大なる大峡谷に。

こうしてマースム力は、子供と呼ばれる時期の、最後の日を終えた。

ハジイマ
敗者のまま。

四章・第一日・1

エンカータ王国第二王女、リグヴェーダが拉致されてから、十日後。

リグヴェーダ搜索の一隊が大峡谷を訪れた。

ともすれば己の位置を見失いかねないほど広大で起伏に富み、天然の迷路のように入り組んだ地形の大峡谷を、長旅用の馬で、彼らは進み続ける。

一人の巨漢がふと外套の頭巾を外し、陽光を右手の平で遮って雲一つない空を仰ぐ。一応は砂漠の中なのだが、大陸三大河の一つである大峡谷にいるためか、運河が空気の熱を吸収し、大気に灼熱の暑さはない。しかし照りつけられる空からの光は紛れもなく、砂漠の昼の支配者がもたらす、恵みにして忌避すべき光熱だった。

巨漢の男は視線を前方に戻す。

「本当にこの場所で間違いないのか？」

肌が赤褐色に焼けた三十代後半の巨漢。筋肉ははち切れんほどに膨れ上がり、血管が浮き出るほど引き締まっている。黒髪を短く刈り、彫りの深い顔立ちには猛獣をも怯えさせる鋭くも静かな眼光。背には刃渡り一メートルを超える巨大な剣を担いでおり、腰に拳銃を一丁佩いている。馬の脇には巨大な盾。日除けの外套の下には、砂漠の長旅では邪魔になるので鎧ではなく、隠密作戦用の特殊防護服を着用しているが、それでも彼の姿を一目見た者はこう呼ぶだろう。

ファリス
騎士。

ラッガート・エディングス。

この搜索隊を率いる隊長であり、エンカータ王国騎士団百騎長の位を持ち、王家警護部のリグヴェーダ王女近衛隊長でもある。

この男に声をかけられただけで、ほとんどの者はその威圧感に萎縮してしまうのだが、質問を受けた先導の男は、まるで意にすることなく軽い調子で答える。

「大丈夫だつて。そのために俺を雇ったんだろ」

先導の男は懷から煙草を取り出すと、マツチを片手の爪だけで器用に擦って火を点けた。そして美味そうに深く紫煙を吸い込むと、至福に満ちた愉悦の笑みでゆっくりと吐き出す。

金の髪をバンダナで纏めた、この国では珍しく白い肌をした、二十代後半と思われる男。砂漠を渡るために必要な外套の下に身につけている軍用ジャケットには、六連装拳銃が二丁と散弾銃が隠されている。遮光グラスのゴーグルは砂嵐を警戒してのことなのか、ただの飾りなのか、少なくともサングラスの代用品にはなっており、強烈な太陽の光に悩まされることはないだろう。ただ、夜間だろうと睡眠時であろうと、外したことが一度としてなく、当然素顔を誰も見たことがないのが、問題でもあり謎でもあるのだが。

とにかく、口調といい、雰囲気といい、全体として軽薄な印象を受ける。

パプロと名乗っているが、本名かどうかは怪しい。

「王女さまがこの大峡谷に連れて行かれたのは確かだ。俺の情報網から得た情報だから間違いないつて。いい加減に信用してくれよ」

パプロの右後方に位置する女性が、全然信用していないような口調で答えた。

「ええ、信用しているわ。情報屋」

温和な印象を受ける、眼鏡がよく似合う知的な美女だ。整っている顔は、逆に特徴が捉え難いため、外見からは正確な年齢がよく判らず、二十歳程度とも、三十代後半とも見える。そのせいだろうか、穏やかな雰囲気であるのに、どこか妖艶な香りが漂う。

その体を覆う濃い青紫のドレスのようなローブに、十二本の短剣が仕込まれているのは、この場にいる誰もが知っている。最初に会った時に、自己紹介ついでに自分の武器について少し説明をしたか

らなのだが、その腕前がどの程度なのかは、危険な砂漠の旅で幸運にも盗賊団などに襲われなかったため、不明なままだ。

リグヴェーダ王女を拉致した者たちとの戦いで発揮してくれるかもしれないが、実のところラッガートは、彼女の短剣の腕前はあまり期待していなかった。期待しているのは別の武器。

そして彼女の武器は目に見えるものではない。

彼女の最大の武器であり、そして戦闘技術は、魔法^{スィフル}。

王国軍特殊部隊・魔術師団所属。セリナ・ランテルギー。

古代の巨人の力と技を継承した、人にして人ならざる技と力を持つ魔法使い^{サイヒル}。そして王国から魔法の師の称号を授与された者。すなわち、魔術師^{スカーフイー}。

その魔術師は手を振って周囲に漂う紫煙を散らす。

「でも、煙草は止めてくれないかしら」

「ああ、悪い悪い」慌ててパプロは煙草を片手の指だけで揉み消す。熱くないのだろうか、ラッガートは訝しく思った。

「大丈夫でしょうか？」

ラッガートの後ろで、一番若い男、ルマジャー・イーブが隣の男に小声で尋ねた。

去年騎士に叙勲されたばかりの新米で、王家警護部のリグヴェーダ王女近衛隊に配属されている。

砂漠旅用の外套の下には、ラッガートと同じ動きやすさを優先させた特殊防護服を着用しており、剣と拳銃を腰に下げているが、どこか着け慣れていない様子で、年齢もまだ二十一歳と、騎士と称されるにはいささか頼りない印象を受ける。だが、ラッガートは彼が見た目とは違い、極めて優秀で、有能であることを知っていた。

「俺に聞くなよ。難しいことなんかわかんねえんだからさ」

ルマジャーの隣にいる、最も年齢の高い男が、質問に困ったように答える。

周囲を落ち着かない様子で見渡している彼は、一応騎士団の一員だが、ルマジャー以上に頼りない印象を受ける。実際はそうでも

ないのだが、自分に対して自信がないことの表れだろう。

シエルダック・ジエドルケ。名家の出身で、騎士に叙勲できたのは、ほとんど家柄と親の意向とコネと金のためだと、本人は思っており、そのことに不満を持っている。不満というより、不安だ。

騎士として力も能力も不足していると、自分を低く評価しており、そもそもどうして騎士になれたのか、後ろ盾があつたとしても不思議なくらいだとさえ感じているようだ。

だが、そのためだろうか、逆に任務を必ず果たそうと努力と命を惜しまず、それが必ずしも成功するとは限らないが、誠実に職務に励んできたことが功を成し、出世こそできなかったが、周囲の騎士たちは彼に一目置いている。

隊長であるラッガートも、彼の経験と実績を高く評価しているが、本人は全く気付いておらず、シエルダックは自分は駄目な男なのだろうと思いつけながら、騎士の叙勲を受けて早三十年。そろそろ退職の時期が近付いている。

経験を積んでも、年を重ねても、今だに自信が持てないシエルダックは、手にする獵銃ライフルを絶るように握り締めて、周囲を警戒し続けている。

六発装填式の獵銃は、子供の頃に唯一、銃の腕前を褒められた時の物だと、ラッガートは以前聞いたことがある。それ以来、ずっと大切に扱い続け、重要な任務には必ず所持していた。これを握っている間は少しでも自信が持てるようだ。そして今回も所持して来た。「信用するかどうかは、問題ではない」

ラッガートが彼らに答えた。

「この者しか手掛かりがないのだ」付け加えて「少々、不安ではあるがな」

ラッガート。セリナ。ルマジャーン。シエルダック。そして、パ

ブロ。

この五人が大峡谷に訪れたリグヴェーダ王女搜索隊の全員だ。

一国の王女の搜索に当たるには少なすぎる人数。なぜなら、彼らは非公式の、そして非公認の搜索隊だからだ。

リグヴェーダ王女が何者かに拉致されてから、ラッガート率いる搜索隊が王都を出立する一週間前まで、王宮に急遽設立されたリグヴェーダ王女拉致事件搜索班は、実行動をほとんど取っていない。

正確には、取れないというのが現状で、動くには情報が少なすぎるためだ。

リグヴェーダ王女を拉致し、そして侍女サリナを殺害した犯人の手掛かりは全くと言っていいほどなく、犯行声明は勿論、営利誘拐の常套である、身代金の要求も政治的要求も脅迫の類も一切なく、犯人からの連絡は皆無。

捜査は難航し、しかも王宮の威信の失墜を恐れ、情報は一般公開されていない。国民は勿論、騎士団、王国軍、警察の上層部意外はほとんどの人間はリグヴェーダ王女がさらわれたことを知らされていない。

のみならず、情報の流出を警戒して、捜査人数は必要最小限にされ、実際に現場で捜査活動をしているのは数えるほどしかない、捜査班はアスベルト帝国を始めとした敵国の陰謀策略、もしくは巨大犯罪組織による犯行の可能性を想定しており、それに対応する体制を整えている

つまり連絡を待っている状態。言い換えれば、連絡が来ない限り動かない。

そして今もってなお連絡がないということは、永遠に犯人からの連絡がない可能性が高い。

だが、それでも捜査班は動きを見せない。まるで、何者かの指図、圧力があるかのように。

ラッガートはその状況を見て、独断で実行動を起こす決意をした。とは言っても、自らが国王に任された近衛隊を動かしたわけでは

ない。そもそも、騎士団は捜査から外されている。彼らは王家に近い分、感情的になる可能性が高く、人員としても必要ないという理由で。

エンカータ王国の武力組織は大きく分けて三つ。

王国軍。

警察。

騎士団。

当然それぞれ管轄が違う。

王国軍は他国の勢力に対する武力組織、いわゆる軍隊であり、他国からの武力侵略の対応、対抗。あるいは国外での活動などを、主な任務とする。

警察は、基本的に国内での犯罪行為の摘発、取締り、捜査、逮捕などを主な任務としている。リグヴェーダ王女の捜査も、一応警察の管轄になった。

そして騎士団。上下関係からいえば、王国軍、警察の上に位置し、その最高司令官はエンカータ国王本人。つまり国王の直轄軍。基本任務は国内外における治安維持と、曖昧なところがある。そのためか、時には王国軍のような行動を起こし、時には警察のようにも振舞う。両方に関係を持ち、同時に無関係。王国の利害に伴うことならば、どのようなことも任務とする、一種の特務機関と言えるだろう。

現在の主だった任務は、王家、貴族、民選議員の護衛となっている。裏で各国の諜報密偵活動を行っているという噂があるが、真偽のほどはラッガートも知らず、少なくともその部署に関わったことはない。

組織の権限や有用性を考えれば、リグヴェーダ王女の拉致事件の管轄を請け負ってもおかしくないのだが、国王はその命令を下さず、警察に任せた。もし、リグヴェーダ王女が国外に運ばれたのならば、警察では対応できないにも関わらず。

ラッガートは騎士団の王家警護部、それもリグヴェーダ王女の警

護の責任者であり、王女の安全に直接の関わっている者として国王に直訴したが、現段階では騎士団を動かすのは性急であるとして却下された。

確かに国王の判断はもつともなのだが、実の娘が誘拐されたというのに、冷淡とも取れる命令だ。しかし国王本人の様子を見る限り、娘の安否を気遣っていることは間違いなく、そうなると何者かの作為を推測せずにはいられない。

国王に近い誰かが、国王に忠言と称して、讒言したのではないだろうか。

冷静な判断を。安易に騎士団を動かせば、リグヴェーダ王女の身が危険にさらされるかもしれません、と。

それが、真実リグヴェーダ王女を案じてのことならばまだいい。だが、なにかの謀ならば捜査の妨害工作であり、ことによると国の一大事に発展するかもしれない。リグヴェーダ王女だけではなく、さらに大きな事件へ。

そしてラッガートは独自に捜査状況を、誰にも察知されないよう密かに調査した。結果、捜査における判断は、一つ一つをとれば間違っていないのだが、全体としてみると、なにかおかしいのだ。それとなく阻害されているような。

だが、ラッガートにできることは、騎士としては、なにもない。国王の命令がない限りは。

そこで、休暇を取った。

現在の状況で、しかもリグヴェーダ王女を守れなかった者が、呑気に休暇などというつもりなのかと、非難を受けられそうなのだが、意外なことに上官は簡単に許可した。

騎士団の上層部でも、リグヴェーダ王女の安否を憂いており、そして何者かの妨害工作が働いていることを感じ取っていた。

ラッガートの意図を読み取った上官は、休暇願を受理し、届けていない騎士団の武器の持ち出し携帯許可も一緒に出した。

そうして暗黙の了解の内に、ラッガートの非公式、非公認の捜査

が始まった。

ルマジャーとシエルダックはそれに付随してきた。

ラッガートが命令したわけでもなく、そもそもこのような命令は出せないし、出す意思もなく、逆に二人を止めた。今の時期にこのような行動を取ると、立場を悪くする。それにこの事件は、通常の任務より遥に危険度が高い。

だが二人は事件当日の当直をしており、リグヴェーダ王女を守れなかった責任を感じているのか、制止を聞き入れずに休暇をとった。これも難なく受理されたため、放って置くと二人だけで捜し出そうとするかもしれない、そちらのほうが、二人にとってもリグヴェーダ王女にとっても危険なため、ラッガートは同行することを認めた。そしてセリナ。王国軍に所属する彼女は、本来この事件の捜査をするべき人物ではない。捜査は極秘扱いにされているとはいえ、一応は警察の管轄であり、基本的に国外からの影響を対象任務とする王国軍の者が国内の事件を捜査すれば、内部で問題になりかねない。ラッガートたちのように、リグヴェーダ王女に係わっているわけでもない。

だが、間接的になれば、ある。

事件当夜、殺害された侍女サリナの、双子の姉だ。だから、彼女はラッガートの休暇の話を偶然知り、それがリグヴェーダ王女を探すためだと見当が付き、彼らに接触した。

彼女の目的は、リグヴェーダ王女の安否の問題もあるが、それ以上にサリナの敵を討つという利己的な理由によるところが大きい。セリナはその辺の事情は説明しなかったが、サリナと面識のあるラッガートは、セリナがなぜこのような非公認の捜索隊に参加しようとするのか、漠然とだが感じ取り、そして魔法使いであるセリナの力は必要になると考え、彼女を受け入れた。

こうして彼らは独断専行による捜索を開始した。

だが、やはり手掛かりは一切発見できず、そもそもどこでなにを調べればいいのか判らない有様だった。捜査班からの密かな協力者

のおかげで資料の写しを入手することはできたが、それを読み取ることが徒労でしかなかった。

休暇を取ったことも、なにもかも、全て無駄だったのではないかという、倦怠と諦めが三日目にして湧き上がるほど、何一つ進展しなかった。

そんな状況の中、パブロを見つけた。

正確にはパブロのほうから接触してきた。

三日目の夜、街の片隅にある酒場で四人がささやかな休息を取っていた時、夜にも関わらず遮光グラスのゴーグルを装着した男が話しかけてきた。

「あんたたち、王女さまを探しているんだろう。俺は王女さまがどこに連れて行かれるのかわかる。あんたたちが本当に王女さまを助けるつもりなら、俺がそこへ案内する。金次第だな」

素性を語らぬ正体不明の男に、不信感を抱きつつも、微かな希望を託し、この話に乗った。

四章・第一日・2

そしてラッガートたちは現在、大峡谷に至る。

「ところで、どこへ向かっているのか、まだ詳しいことを聞いてなかったわね」

セリナの何気ない質問は、真実ただの何気ない質問だったのか、そのように意図してのことなのか。

質問を受けたパブロも何気ないように端的に答える。

「当面はベドウィルム村だ」

「どんなところなんだ？」ルマジャーが訊く。

「大峡谷に点在する集落の中心になっている村。詳しいことは知らないが」

「そこに王女が居られるのか？」ラッガートも何気ない風に装って質問を重ねた。

「いいや、いない」

わかりやすい返事だった。思わずラッガートは、他の三人の顔を見合わせてしまうほどに。

「いない？」ラッガートが繰り返す。

「ああ、いない」

「ならば我々はどこへ向かっている？」

「だからベドウィルム村だって」

ラッガートが手を振り「聞き方が悪かったな。王女はどこに居られるのだ？」

「知らね」

四人は再び顔を見合わせた。

「ちよつと待て！」ルマジャーが慌てたように声を上げる。「あなたの言っていること無茶苦茶だぞ。リグヴェーダ王女がどこに連

行されたのか知っているんじゃないのか!？」

「知らねえよ」パプロはからかうように、そして付け加えて「俺、そんなこと言ったか？」

「言っただろ！ 自分で言ったことも覚えてないのか!？」

パプロはわざとらしく考える仕草をしてから「いいや、やっぱり言ってないぞ、俺は」

ラッガートの目が危険な輝きを放った。これ以上戯言を続けるのなら、この場で切り捨てよう。

状況が状況だけに、ラッガートは見た目の平静とは裏腹、内心気が立っていた。

無言の殺意にパプロは慌てて「俺がお前らに言ったのは、王女さまがどこに連れて行かれるのかがわかる、だ。わかる。知っているじゃない」

「詳しく聞かせてくれるかしら」セリナが穏やかに、しかしどこか剣呑なものを感じる声で促した。

「俺が情報屋だというのは最初に言っただろ。それで俺は、所属している組織が国中に張り巡らせてある情報網を使うことができる。

そいつに王女さまのことが引っかけたんだよ。十数人ほどの怪しい連中が大峡谷へ王女さまを連れて行ったってな。それで、ベドウィルム村で密告屋が……」そこで自分が使っている専門用語に気がつき「あ、密告屋ってのは、情報網を構成する人員のことなんだが、ベドウィルム村でそいつに会って、その時に詳細情報をもらう手筈だ。その時にならないと、王女さまの正確な位置はわからない」

「その密告屋というのは、どういう人物なんだ？」とルマジャーン。

「秘密」

ラッガートとルマジャーンは同時に剣の柄に手をかける。セリナは動かなかったが、魔法使いである彼女は動いていなくても、攻撃態勢に入っていないとは限らない。シエルダックだけが、どうすべきなのか判断が付かず、困惑していた。

「秘密だ！ これは絶対に！」パプロは慌てながらも、断固として

秘密を開示しない。「ほら、あれだ。企業秘密つか、仕事上の機密事項つか、有名料理店の料理のレシピは簡単には教えない、教えて欲しかったら弟子入りして最低十年は働けてやつで、とにかく商売上教えられねえ！ 仕事に差し支える！」

意味がよくわからない喩えで、教えられないことを説明するパブロを、しばらく睨んでいたラッガートは剣の柄から手を離れた。続いてルマジャーも離す。

「まあ、いいだろう」ラッガートは「仕事を果たしてくれるのなら、俺たちはそれでいい」

「おう！ 任せてくれ！」パブロはもう安全と見たのか親指を立てて見せる。そして額の汗を拭い小声で「ふう、ちよつとした冗談じゃねえか。短気な連中だぜ」

その呟きはしっかり聞こえていた。冗談など言っている時かと、怒鳴ろうかとラッガートは思ったが、パブロは気が付いていないのか、気を落ち着かせるためか、再び煙草に火を点けた。

「だから、煙草は止めて頂戴」とセリナは手を振って煙を散らす。どうも煙草が苦手らしい。

「ああ、悪い悪い」慌てて揉み消す。

その仕草に気が抜けて、ラッガートは他の二人と顔を見合わせて、同時に溜息を吐いた。

「本当に大丈夫なんでしょうか？」ルマジャーは、先程とは違う意味で尋ねた。

「わからねえよ。俺に難しいこと聞くなよ」

シエルダックもやはり先程とは少し違う意味で答えた。

「判らん。だが信用するしかあるまい」ラッガートはやはり先程とは少し違う意味で付け加えた。「色々不安だが」

しばらくして、探索の騎士たちは一人の少年と遭遇した。

漆黒の髪に、蒼い瞳をした、どこか頼りなさそうな雰囲気のある少年。この地方特有の乗用動物、ティダに乗っているのを見ると、おそらくベドウィルム村の人間なのだろう。ティダの両脇に駆動式短弓クロスボウと矢筒が添えられ、数匹の小動物を吊るしていることから、狩りの最中らしい。

ルマジャーンは、少年の右目が少し奇異に感じた。よく見ると顔の右側に火傷の痕があり、それが原因で右目の瞼が異様に捲り上がっており、眼球が飛び出ているように錯覚する。

彼は少し離れた場所から、警戒するようにラッガートたちを窺っていた。

どうしたものかと皆が顔を合わせ、ルマジャーンが手を軽く上げた。

「俺が行きます」

「任せた」ラッガートが首肯する。

そしてルマジャーンは少年へ馬を進めた。

大きな声を出さなくとも話せる距離にまで近付くと、少年が警戒しているのか、控えめに誰何する。

「あの、あなたたちは？」

近くで見ると、少年の顔は整っており、美少年と称しても良いほどで、それが右目の異様さをさらに際立たせており、突然視界に入れば目を背けなくなるだろう。しかし、それに耐えて見れば、少年の瞳には優しい光を湛えており、醜悪な右顔もすぐに気にならなくなり、なぜ一瞬でも不快に思ったのか自分に疑問を抱く。失明はしていないようだが、火傷の原因となった時の苦痛はどれほどのものだったのだろうか。

内心を表に出さずにルマジャーンは質問に答える。

「うん。俺たちは王都から来た……」騎士団と言おうとして、伝えて良いのか少し迷ったが「王都から来た騎士団んだけど、ベドウィルム村へ向かっているんだ。村はこの方角でいいのかな？」

「騎士様ですか」

少年は警戒を解かずに、言葉を繰り返す。

「そうだよ」ルマジャーンは肯定する。

「ベドウィルム村にはこのまま真っ直ぐ進めば一時間ほどで到着します」少年は重ねて「それで、村にどういった要件が？」

ルマジャーンは核心を伏せたまま、なるべく嘘を吐かない方向で離すことにした。虚言は苦手だが、隠し事をするのはそれほどでもない。

「旅の途中なんだ。それで、宿を提供してもらえると助かるのだけど」

「それなら、長老に相談すると思います。頼めば貸してもらえますから」

エンカータ王国では、旅人が訪れたのならば自らの食を割いても持て成せ、という風習がある。これは国土の半分以上が、水や食料に乏しい砂漠であることに起因している。水や食料を得ることが困難な砂漠で、旅の宿を断ることは、その者に死ねと言っているのと同義だからだ。

「そうか。ありがとう」

「よければ、案内しましょうか？」

「ああ、それは助かる」

ルマジャーンは後方のラッガートたちに簡単な手ぶりで、話が上手くまとまったことを知らせると、彼らは馬を進め始めた。

「そうだ、名前をまだ言っていなかったね。俺は、ルマジャーン・イーブ。君は？」

少年は一瞬躊躇ったが、名乗った。

「マースムカ」

村に到着した一行は、マースムカの案内で長老の家に向かう。切り出した石材を組み立てた家々は、建ててから百年以上経過し

ているように見えるが、おそらく間違いではないだろう。

樹木は砂漠では希少であるため、木材は戸口に使われている程度で、他にはほとんど見られない。代用品として、布類を窓に使っている家もある。運河が流れる大峡谷も、肥沃な土地とはいえず、木々は疎らで成長も遅い。

建築思想は基本的に王都と変わらない砂漠特有のものだが、その間取りや形式、壁に描かれた模様は、この地方独自のもので、大峡谷の民族の特色を表している。

村に入る前後から、村人たちが遠巻きに見ており、シエルダックはどうにも落ち着かない様子だが、他は特に気にした様子もなく堂々としている。パプロに至っては、にこやかに若い女性や女の子に手を振っていたりする。目が合っただけで隠れられてしまうが。

「気にしないでください。大峡谷の外から誰かが来るのは珍しいんです」

マースム力は村人の行動をフォローする。外の人間が訪れることが少ないので警戒していると言いたいのだろうが、パプロが避けられる理由は絶対に違っていると、他の四人は思った。

やがて長老の家の前に到着した。他の家と同じく、民族色の色濃い独特の模様が描かれており、異なる箇所といえば玄関に、呪術的な意味があるのか、ただの飾りか、なにかの動物の頭部の剥製が飾られているだけだ。

玄関から髭を長く蓄えた長老が姿を現す。

「マースム力、その方々は？」

「王都から来られた騎士様だそうです」

「ほう、騎士様でございますか」長老は大仰に頷き「して、このような辺境に一体どのようなご用がありますのでしょうか？」

「巡察を行っております」

ラッガートはあらかじめ考えておいた嘘を吐く。王女のこととは秘密だ、安易に口にするわけにはいかない。独断専行の最中であれば尚更。

「巡察ですか」長老は信じたのかどうか、言葉を繰り返した。
「はい、大峡谷の状況を巡察し、国王に報告します。それで、今日はこの村で宿を提供していただけるとありがたいのですか」
「ああ、勿論でございます。狭苦しいところではありますが、わしの家でよければ、どうぞご自由にお使ください」
「ご好意、感謝します」

その夜、村の集会場で、大峡谷には珍しい来客に対する酒宴が催された。とは言っても、先日の行われた成人式の続きのようなもので、ラッガートたちが来なくとも行われたのだが。

星空の下に集まった村人全員に、長老は王都から訪れた騎士を紹介すると、最後の科白で締めくくる。

「それでは騎士殿、大峡谷の狩人たちに、挨拶と食事と会話を。サラーム タアーム カラームそして、ゆつくりと楽しんでくだされ」

心弾む音楽と歌が始まり、酒が振舞われ始めた。

客人の周囲に自然と人が集まり、大峡谷の話聞かせ、または王都の話聞き、酒宴は盛り上がる。

巨漢の戦士のラッガートに狩人たちが集まり、戦士としての力自慢を聞かせる。

「そうだな、若者の中で一番の戦士は、やっぱりダラスだな」

「いや、村一番の戦士だ」

「あいつはすごい。昨日成人を迎えたばかりだが、大人でも敵わない」

「それに、ティダの扱いも村一番だ」

「ほう。たいしたものだ」

「そんなに褒めるなよ。てれるじゃねえか」

「もう一日早く来ていればな。スィバークルハイル競馬が見れたんだが」

「すごかったんだぜ。まあ、最後がちょっとあれだけだよ」

「その話は止めとけよ」

「あんたは、王都じゃどうなんだ？」

「やっぱりその年で騎士団長なんだから、さぞかし強いんだろ」

「百騎長だ」

「大して変わらねえって。強いことには間違いないんだ」

ルマジャーンには、王都の若い騎士に興味を持った若い女性が集まり、彼はすっかり赤面してしまっていた。

「ねえ、騎士さまは恋人はいるのですか？」

「あら、いて当然よ。こんなに素敵な方ですもの」

「い、いえ。まだ、いません」

「本当ですか！？」

「なに嬉しそうな顔をしているのよ」

「そ、そんなことないもん」

「あたしなんかどうですか？ 王都に連れて行ってくださあい」

「あー！ ダメダメ！」

「妬き持ち妬いてるー」

「あ、いや、あの」

「きゃー！ てれちゃって、可愛い！」

シエルダックの周囲には、やはり年齢の関係だろうか、老狩人や引退した者たちが集まる。

「若い頃は、そりゃあ危険なこともしたもんだ」

「だが、そういったことが、成長に繋がる」

「まったくです。だが、必ずしも成功に繋がるわけじゃない。それでも、若い頃は夢を見るべきなんだ。夢を見なかったら、おしまいだ」

「あんたは、王都で夢破れたのかな？」

「いや、まだだ。後もう少しだけがんばれる。後もう少ししかないが、それでも夢は見られるんだ」

「ああ、夢はいい。大きな夢でも、小さな夢でも、見ることが、そして叶えようとすることが大切なんだ」

セリナには老若男女問わず、色々な人間が集まり、王都の名物や名所の話をしていた。

「王都の王宮は世界有数の建築物として知られています。関係者以外は立ち入り禁止となっていますが、外観だけでも一目見ようと、大勢の人が訪れます」

「へえ、そんなに凄いのかい」

「それに、王都は水がとても豊富です。北の大山脈の雪解け水が河となって、王都のすぐ隣を流れているんです。そのため、この国の中でも二番目に水の豊富な場所として知られています」

「一番目は？」

「マシユー流域です。ですが、あの場所に住む人はあまりいません。頻繁に氾濫が起きて、住居が流されてしまつんですよ」

「水が多すぎるのも考えものだな」

「大峡谷はどうなんだ？」

「三番目か、四番目になると思います。ですが、地形の問題で、簡単に手に入るといふわけにはいきませんね。実は河から水を汲もうとして、転落しそうになりました」

「はは、他所から来た人には、ちよつと難しいな」

一人だけ誰も集まらなかったのは、パブロだった。

他の者は、王都からの騎士ということで、警戒心も特になく接するようだが、明らかに騎士ではない、素性不明のこの男にだけは、誰にも話しかけようとはしなかった。夜にも関わらずゴーグルを外さず、明るく人好きのする振る舞いをして、得体の知れない雰囲気は隠しようがなく、警戒感が自然と湧き上がる。

もっとも、パブロとしてはそちらのほうが都合は良かったが。

ふと、最初に出会った村の少年、マースム力に目を向ける。

少年ではなく、青年と呼ぶべきかもしれない。彼は一応この土地の風習、文化の規範では、成人しているらしい。だが、少年という呼称が本人に馴染んで抜け切っていない。

他の村人は、騎士たちの周りに集まり、あるいは彼らだけの輪を

作っているのだが、マースムカだけは少し離れた場所で、初老の男と一緒にいた。

その二人だけが酒宴の場から浮いている。というより、他の村人がマースムカに話しかけないか、話しかけても相手にしないようだ。その若者に初老の男が付き添っている。どういう関係かは聞いていないが、親子だと思われる。

やがてマースムカは父親らしき男に二三言交わすと、静かに酒宴の場を離れて行ってしまった。

パプロはなんとなく気になり、酒瓶を一つ手にすると、彼の後を追うことにした。

四章・第一日・3

マースム力は酒宴の席を離れ、自宅へ戻ると、セネロのいる納屋へと入る。

セネロはまだ起きていたのか、マースム力が姿を現すと同時に嬉しそうな声を上げた。

「クー」

もう一頭のティダ、ジャリスは眠っていたようだが、入って来たマースム力に気付いて、首を上げ一瞥するが、すぐに興味なさそうに再び寝入った。

「やあ、セネロ。調子はどうだい？」

セネロの頭と首筋を撫でると、セネロは嬉しそうに頬を舐める。

「あははは。よしよし」

マースム力は抱きしめるようにセネロの喉をくすぐってやる。すると、セネロはますます嬉しくなってマースム力に頭を摺り寄せた。村から疎外されているマースム力にとって、セネロだけが友達と呼べる存在だった。

ジフに引き取られ、大峡谷に着てから間もない頃、他所者であることと、その右目のために、村人たちからは邪険に扱われていた。もしジフというかつて大峡谷最高の狩人と呼ばれた男の庇護下になれば、ほどなく大峡谷から追いやられていただろう。

だが、ダラスのような一部の子供は、大人の目の届かない場所でマースム力を享乐的な暴力の対象としていた。そしてジフ以外の大人がそれを見ても、止めることはなく、ジフが問いただしても子供の遊びだといいわけにもならない弁明ですまされる。

大峡谷に来たのは間違いだと思いはじめ、それでも助けてくれるジフがいることや、大峡谷に来る以前のあのことから、とどまり続

けてきたが、三か月ほど過ぎた頃には、やはり大峡谷を出て行き一人で暮らす方法を、まだ十歳にもならない子供の内から考え始めていた。

悩んでいるマースム力は、村を離れて一人当てもなく歩いていると、一頭のティダが現れた。

その野生のティダはマースム力に興味があるのか、少し離れたところで少年を見つめ続けていた。

それがセネロだった。

それからというもの、村から離れると必ずセネロが姿を現した。最初の頃は遠くから眺めるだけで近付こうとしなかったが、マースム力が餌付けなどで懐いてくれるよう努力した結果、やがて傍に来るようになり、触れることを許し、今では一緒に暮らしている。

野生のティダを飼いならすということは極めて難しく、ほとんどの場合は徒労に終わる。

だが、余所からやってきた、ティダのことをなにも知らない少年が、熟達者でも困難なことを簡単にやってしまった。

村の風習では、ティダを飼い馴らすことは狩人の証の一つとされていた。このこともあって、村人はマースム力をそれなりに認め、追い出そうとする者はいなくなり、また子供たちがマースム力に暴力を振るうことを止めるようにはなった。

勿論、マースム力とセネロのことはほとんど偶然が重なっただけのことなのだが、マースム力は仲間として認められる方法を理解したような気がして、ジフから様々な技術を学んだ。そしてジフはそれに応えて多くの知識を伝え、マースム力は砂が水を吸い込むように習得した。その成長は目覚ましく、同年代の子供たちの中では飛びぬけていた。

だが、村人は才能を認める以上に、マースム力を恐れるようになった。長い年月をかけて培った自分たちの知識や技術が、まるで取るに足らないことなのだと示されたようで。

どちらにせよ、それが今もって村人がマースム力を疎外する最大

の理由だった。

つまり、嫉妬。

そして同年代の者では、マースム力に敵意を剥き出しにする者も現れた。ダラスのように。

マースム力はセネロの首筋を撫でる手を止めると、深刻な顔で話し始める。

「ねえ、セネロ。やっぱり僕は村から出たほうがいいのかな？　ここを離れてずっと遠くへ行つて、そこで新しくやり直したほうがいいのかな？　七年間ずっと頑張ってきたけど、少なくとも頑張つて来たつもりだけど、なんだか上手くいかないんだ。狩の腕が良くなれば皆認めてくれる。そう思つて一生懸命やつて。父さんはもう立派な狩人だつて褒めてくれるけど、他の皆は僕を認めてくれないんだ。今でも、僕を余所者だと持つて、僕の居場所はここにはないよ。うな……」

いつしか俯いていた顔を上げて、セネロと瞳を合わせる。

「セネロはどう思う？」

「クウー」セネロは話を理解しているのか、あるいはしていないのか、首を傾げたが、不意にマースム力の頬を舐めた。

「ああ、そうだよな」セネロがなにを言いたいのか、マースム力にはわかった。「そうだね、セネロがいるものね。父さんがいるよね」「クイツ」セネロは一声嘶く。肯定するように、元気付けるようにギイ……。不意にドアの蝶番が軋む音。

マースム力は怪訝に顔を向ける。こんな時間に、自分の家に誰かが訪れることなど今までになかった。

ガタン、ガタガタ。扉が壊れそうな音を立てる。この納屋の扉は古くて歪んでおり、立て付けが悪いのだ。

「あれ？　これ開かないのか？」

聞き覚えのある声だった。巡察団の一人。

名前は確か……「パブロさん？」

「おう」開かない扉の向こうから答える。そしてガタガタと扉を開

けようとする。

マースム力は慌てて駆け寄って扉を開ける。コツがいるのだ。開いた扉から、バンダナで金色の髪を纏め、夜なのに遮光レンズのゴーグルを装着したままの、怪しいことこの上ない風貌の男がのっそりと入ってくる。

「よお」そして酒瓶を掲げて振って見せて「お前は酒に付き合わなくていいのか？」

マースム力は首を振る。

「いいんです。僕は、お酒はあまり飲めませんから」

「そうか」それだけではないのだが、パブロは追求しなかった。そしてセネロに手を伸ばす。ごく自然に、警告する間もなく。

「あ」思わずマースム力は声を上げた。

「クユウー」

だが、セネロはなにもしなかった。それどころか気持ち良さそうに撫でられてさえた。自分以外にはけして懐かず、他の誰かが触れようとしただけで、足で跳ね飛ばしてしまう、そのセネロが、他の人の手に触れられることを許している。

信じられない光景だった。

パブロはこの重大性を知ってか知らずか「どうした？」

「いえ」マースム力は驚愕を胸にしまい首を振る。そして「あなたは皆さんの所にいないといいんですか？」

先ほどの質問を返した。

「俺も、ああいうのはどうも苦手だな」そして少し考えてから「それに、腹の中を探られているみたいで落ち着かない」

マースム力はパブロを見つめる。

彼は酒宴の場に目を向け「王都から来た騎士ってことで、歓迎しているように振舞っているが、その実、心を開いていない。余所者に対する警戒感というのとは違うんだが、なんつうか、早く消えて欲しい、って言うのか。そういう排除感がある」

この土地に住む者は、大峡谷は自分たちの土地であるという、あ

種の縄張り意識が強く、他者がこの地に踏み入れることを快く思わない傾向にある。

王都から騎士に対しては、さすがに礼儀を失することなく歓迎しているが。少なくとも、表面上はそうに接している。

「だが、俺たちが本当に巡察の旅をしているだけなのかどうか疑っている。いや、そこまで不審に思っているわけじゃないな。探っていると言った方がいいのか。それと、もしかすると長く留まろうとするかもしれないことを考えて、追いつく口実を事前に引き出そうとしている。だから必要以上に話をしようとしている」マースムカに視線を戻し「そうだろ？」

マースムカは正直に答えるべきかどうか、逡巡したが「そうです」パプロは肩を竦めて見せて「まあ、どっちにしろ、俺たちは明朝になれば出て行くんだから、どうでもいいんだがな」

「でも、どうして？」

「旅慣れている奴にはわかるさ。他の連中が気付いているかどうかは知らねえけど」

「いえ、どうして僕に気が付いていることを話したんですか？」

「ああ、お前も苦労しているだろうなと思ってなんとなく」酒瓶に一口つけてから「洞察力と観察力を自慢したかった、つてのもあるんだけどな。名探偵みたいだろ」

冗談めかした言い方だったが、マースムカは可笑しいと思うより、動揺していた。

それは、マースムカが元々この村の人間ではないということを見抜いていなければ出てこない科白だ。

「それは、どういう意味ですか？」純粹な疑問だった。

「どういう意味って？」

「僕が元々この村の人間ではないと、なぜわかったんです？」

「ああ」パプロは自分の眼の位置を指す。ゴーグルを外さないので眼を示すというわけにはいかなかったが、意味は汲み取れる。「眼だよ。この村の人間は、全員瞳の色が黒だ。だけど、お前だけ蒼い」

「それだけですか？」言われてみれば簡単なことだが。

「それだけで十分わかるさ。大体、村の人間の態度が、お前と接する時だけ、なんか変だしな」

それは右顔の火傷の痕と、怪物のように飛び出しているような右眼が原因だとは考えなかつたらしい。あるいは、それだけでは説明が付かないことを察したのか。

ふとマースム力は思う。このパブロという人が、夜でも遮光レンズのゴーグルを外さないのは、自分の右顔の古傷のようななにかがあるからなのかもしれない。この国には珍しい白い肌と金の髪。少なくとも、エンカータ王国出身ではないだろう。

そのパブロは、演劇の舞台で見せるような意図的な笑みを浮かべて「俺の推理力もなかなかのもんだろ。名探偵パブロと呼んでくれ」マースム力はそれに答えなかった。

代わりに「あなたたちはなんのために大峡谷へやって来たんです？」

「巡察つて言つたろ。まあ、実質ただの旅行みたいなもんだ」

「でも、嘘なんでしょう」微笑んで否定する。

「なぜ嘘だと？」

「ただの旅行なら、あんな多くの物々しい武器なんて持つてきませんよ」

護身用にしては武器は強力。量も多い。

「はははっ」パブロは軽く笑い「そりゃそうだな。なかなかの観察力に洞察力、そして推理力だ。名探偵マースム力くん」そして少しだけ真顔になり「ある人物を探している。詳しいことは事情があつて言えないが、王宮の要人で、現在生死行方共に不明。銀髪の男が関係しているってことはわかつたんだが」

「銀髪の男？ それってゲシュタルつて人のことですか？」

「なに？」パブロは不意を突かれたように聞き返す。

「昨日、銀髪の初老くらいの男の人と会いました。話はあまりしませんでしたけど、名前だけは……」少し間を置いてから「その人は

ゲシュタルと名乗っていました」

パブロは完全に笑みを消した真剣な顔になり、マースムカの両肩を掴む。

「そいつは、どこへ向かうか、そういうことは言ったか？」

「いいえ」マースムカは首を振るが「でも、見当は付きます」

「どこだ？」

「ここから北へ向かって二十キロほどぐらいでしょうか。古代の神殿があるんです。誰も住んでいませんし、訪れる人もいませんが。そもそも、どんな神を奉っていたのかもわかりません。大峡谷に住む人たちは邪神の神殿と思って近付きませんが、本当のところどういった経歴があるのか。記録はなにも残っていないんです。でも、ここから外の人が向かう場所は、それぐらいしかありません」

パブロはしばらくはなにかを考えているようだったが、不意にニツと笑う。

「マースムカ」

「はい」

「明日、そこまで案内してくれないか」

マースムカはしばらく吟味するように黙考していたが、不意に笑顔を見せた。それは、醜い右目がまるで気にならない、誰もが思わず見惚れてしまう、魅力的な笑顔だった。

「わかりました」

ラーナは酒宴の席を外したマースムカを探していた。

話したいことがあったのに、気が付けばその姿が見えず、自分も酒宴から、誰かに見られないようにこっそりと離れる。

酒宴を避けて、迂回してマースムカの住む家へ向かい、そして納屋から話し声が聞こえたので、そこへ足を向けた。

開いている納屋の戸から覗いて見ると、やはりマースムカがいた。

そして先客も。王都からの客人の一人。確かパブロと名乗っていたと記憶している。

なんだか声をかけづらくなって、だが酒宴に戻る気もせず、好奇心と興味もあって、影に隠れて二人を観察した。

なにを話しているのか、ここからでは声が小さくて明瞭に聞き取れないが、姿はランプの灯りで明確に見えた。

不意に、マースム力が笑った。

彼が笑顔を見せた。

とても明るい笑顔だった。

とても素晴らしい笑顔だった。

見る者の心を穏やかにする、とても魅力的な笑顔だった。

村人には今まで一度として見せなかった笑顔。

どうして？ ラーナの心に疑問が浮かぶ。

どうして笑っているの？

どうしてあんな笑顔ができるの？

どうしてあの人に笑顔を見せるの？

どうして今まで笑ってくれなかったの？

どうして私に笑顔を見せてくれなかったの？

なぜだか、信頼していた人に裏切られたような、心が締め上げられたような痛みを感じ、ラーナはいたたまれずにその場から離れた。

マースム力と一旦別れたパブロは、誰もいない村外れの野原に立つと、酒瓶に口をつけ、最後の一滴まで飲み干した。

そんなに飲むと体に悪いよ

夜闇の虚空のどこからか、少女の声がしたが、その姿はどこにも見えない。

「別に構わないだろ。どうせ作り物の体だ」

パブロは声の主を確かめることはせず、誰もいない虚空に向かっ

て答えた。

ま、そうだけどね

「それより、そっちの状況はどうだ？」

王女さまはまだ無事だよ。これからどうなるかわからないけど。でも、目的地には到着したみたい。昨日から移動を止めて、なにかの作業をしてるの。場所はベドウィルム村から川の上流へ向かって二十キロほどの……

「古代神殿だろ」パプロが先に口にする。

……どうしてわかったの？

「こつちで現地住民から情報を仕入れた。偶然だがな」

そついうことは先に言つてよ 声が少し荒くなっている。

「怒るなよ」パプロは宥めた。

で、あたしはこれからどうすればいいの？ そつちと合流して道案内する？

「いや、そのまま王女に張り付いていてくれ。できれば、敵の規模、目的、動向も調査しておいてくれ」

了解

そして声は途絶えた。

マースムカは家に戻ると旅の支度を始める。

三泊程度の短い道程だが、万全に備えて準備をする。それが狩人の最も基本的なことだというのが、ジフの教えだ。

そのジフが、支度をしている途中、家に戻ってきた。

「彼らについていくのだな」

「さっきの話、聞いていたの？」

「少しな」ジフは首肯する。

どこで聞いていたのか、全く気付かなかった。だが、ジフが気配を断てば、すぐ傍に接近されていても気付かないことさえある。

かつて大峡谷随一の狩人と賞賛された人物だ。人間より遙かに鋭敏な獣にさえ気付かれずに接近できるのだから、人間相手に聞き耳を立てるなど造作もないことなのだろう。

父さんは彼らを神殿へ案内することに反対なのだろうか。マースム力は思ったが、ジフはなにも言わずに家の奥の物置部屋に入ると、なにかを探し始める。

やがて出てきた父のその手には、長方形の箱があった。それほど大きくはない、一抱え程度のもの。

マースム力は受け取ると、蓋を開ける。

拳銃だった。薬莢と弾丸を別々に詰める、旧式の単発短銃。装飾品としての色合いが強く、握りに驚を象った紋章が施されている。

「……これは？」マースム力はこの拳銃にどういう由来があるのかすぐに理解した。「どうして、今頃になつて？」

ジフは質問に応えず「いつでも使えるように手入れをしておけ」

そして外へ出ると、今更ながら酒宴の席へ向かった。

最後の曲が流れ、やがて酒宴は終わりを告げる。

四章・第一日・4

ダラスは家に戻りつつ考える。

ラーナはどうも内気で良くない。俺たちの中は村中の皆が全員知っている。

村の若者衆の中で一番の狩人でありティダ乗りの俺。

若い女の中で一番の美女であるラーナ。

完璧な取り合わせだ。

大人になつたし、すぐにでも結婚してやろうと考えてやってるのに、ぜんぜん進展しないじゃねえか。

ラーナはなにもさせようとしないうしよ。俺がそういうことに誘うとすぐに引くんだよな。

花も恥らうつていうのか？ 焦らしているだけか？ そういうのは俺にだってわかるけどよ、もっと積極的になってもいいだろ。

ラーナがその気になるまで待つなんて紳士的に、っーか悠長に考えてたのが駄目だったか？ もっと男らしさをアピールして、一気に盛り上げたほうが良かったか？

酒宴でも途中でいなくなりやがるし。騎士さまに俺の恋人を見せやろうと思つてたのに。これじゃ、俺の立つ瀬がないぜ。ラーナの奴わかってんのか？ せっかく優勝してやったっていうのに、これじゃ意味ねえじゃねえか。誰のために優勝してやったと思つてんだよ。マースムカも勘違いして出しゃばってきやがるし。

ああ、クソ。こうなったら、ラーナを家から引つ張り出して一気に押し倒そう。あいつだつてその気になつてるのはわかつてんだ。そうさ。そうすれば全部収まるところに収まって全部解決明日には結婚式。毎日可愛がつてやるぜ。

酒のためか、支離滅裂な理論で自己中心的な結論に達すると、ラ

ーナの家に向かう。

家には彼女の両親もいるだろうが、そのあたりのことは考えなかった。というより、思い付きもしなかった。

がに股で足をどかどかと踏み鳴らしつつ、勢いだけは村一番という状態で進む。

ふと、足を止めた。視界の端に、パブロの姿を偶然見つけたからだ。

そういえば、あの男も途中で姿を消していた。どこへ行っていたのか知らないが、今は方向から長老の家、宿に戻るところらしい。

ラーナのことは一瞬で忘却し、その男へ興味が移る。

騎士さまは巡察に来ているのだと言っていたが、あの怪しい風貌の男は何者なのだろうか。

案内人だと言っていたが、あの男は大峡谷のことを良く知らないようだった。もしかしたら騎士さまは騙されているのかもしれないいや、そうに違いない。

「なら俺が調べて正体を暴いてやる。

代わりに俺が大峡谷を案内しよう。それがいいに決まっている。

勝手な考えを固めつつ、ダラスは長老の家に先回りすることにした。

長老が提供してくれた部屋で、ラッガートは二人の部下と魔術師とで、今後についての会議を始めようとした。

だが、情報屋がいない。

「あの男はどうした？」ラッガートは部下の二人に尋ねる。

「いません」シェルドックは首を振る。「酒宴の途中から姿を消したみたいで」

「どこに行っているんだ、あいつは」ラッガートが苛立たしげに非難する。

「密告屋、という人物に会いに行っているのかもしれないわね」とセリナ。

「あの男は本当に……」ルマジャーンはなにか言うとして止めた。
「本当に信用できるのか、でしょう」だがセリナが代わりに口にする。

「今更言っても仕方のないことだ。後には引けん」ラッガートが断ずる。

「そのとおりよ」セリナが同意する。

パブロがなぜリグヴェーダ王女の話を持ちかけたのか。この村で会う予定の密告屋とは何者なのか。そしてあの男自身何者なのか。それらの一切を知らない。金のためだと言っていたが、それが方便でしかないことは誰もがわかつている。

だが、あの男を信じるしか、リグヴェーダ王女へ辿り着く方法はない。

細く頼りない蜘蛛の糸。己の心から滲み出る不安感との戦い。

ただ一人落ち着いていたのはセリナだけだった。

そこへ、ようやくパブロが現れた。

「よう。一杯どうだい？」どこからかくすねてきたのか、酒瓶を二本翳してみせる。

「密告屋はどうした？」ラッガートは応えずに、質問する。「一体いつになったら会える」

パブロは肩を竦めて見せて「もうとつくに村を出て行った」

「村を出て行った!？」ルマジャーンが叫ぶ。「俺たちに会わずにか」

「会いたいななんて一言も言わなかっただろ」

「それはそうだが」

「それに必要なことは俺が全部聞いたからな。用がなくなれば出て行くさ。こんなところに他に用件なんてないんだからよ」

「その判断は我々がする」とラッガート。「ここへ連れて来るんだ。聞き逃したことがあるかもしれん」

「だから、もう村を出たから会えないって。今から追いかけると、時間を食うぞ」

「正確にどれくらいの時間がかかるのかしら？」セリナは穏やかに訊く。だが、僅かな綻びも聞き逃さないという感じではあった。

「半日くらいじゃないか」パプロは適当に言ってみる。

あからさまな嘘を感じるがラッカードはなにも言わないことにする。

セリナは続けて「その密告屋はどこへ行ったの？」

「王女さまのところへ、一足先に偵察だ。現場で合流して、その時に新しく仕入れた情報を受け取る予定」

それを信じたのかどうか、四人は顔を見合わせると、同時に諦めの嘆息をした。

「大丈夫かな？ 本当に……」シエルダックが不安げに呟いた。

「わかった。密告屋に直接会ったの諦めよう」とラッガートは「それで、王女はどこにおられる？」

「この村から河の上流へ向かって約二十キロ先に古代神殿がある。そこに連れて行かれたそうだ」

「王女は無事か？」

「今のところは。だが、王都から離れて、こんな辺鄙な所へ連れて来るんだ、営利誘拐ってわけがないよな」

「どう意味だよ？ それ」シエルダックが不安げに尋ねる。

「王女さまはさらわれて怪しげな神殿へ連れて行かれました。おとぎ話の類じゃ、この後はどうなる？」

「生贄を使用した魔法儀式」セリナが即答する。古代神殿と訊いた時点で、その可能性を考えていた。

「逆賊は王女様を弑するつもりなのか」ルマジャーンは声を上げる。エンカータ王族は、かつて神が四つの世界にその姿を見せていた

時代、神より直接、神の力の一部を賜り、その強大な神力によって大陸を統治していた、古代神人の末裔だと言われる。

神と魔王の戦いの後も、彼らはその力を代々継承し、大陸を統治し続けた。

そして、その力が最も強大に発揮されるのは、死が訪れる瞬間。つまり統治において神力は生贄という形で使われていた。

民草の力でも、古代神人が力を合わせても、解決できない事態に陥った時、王が自らの命を絶ち、その力の全てを注いで、事態を収拾したという。

そして、その事態というのは、たいていの場合、戦であったという。

すなわち、王族とは支配者であると同時に、生贄の候補者であり、最後の武器でもあった。

神代の時代が終わってから二千年近く経過した現在は、そういったことは行われておらず、また強い神力を持つ者も誕生しなくなった。

だが、このことは国の人間なら誰でも知っている。他国でも調べればすぐにわかることだ。大峡谷の住人も知っているだろう。

その凡庸で単純な利用法も。

若い乙女であり、血に連なる力を秘めているリグヴェーダ王女なら、生贄としては申し分ない。条件さえ揃えば、太古の邪神や、地獄に封印された魔王でさえ、呼び出せるかもしれない。

「今一つ根拠も証拠も欠ける推測だが、否定できないのが、どうにもこうにも」そして不意に酒瓶を振って見せて「で、酒はいらないのか」

「あー」控えめにシエルダックが手を上げる。「一杯貰えるか」これから先のことを考えると、一杯飲まないとやっていられないのだろう。

「あいよ」パプロは部屋にあった杯に注ぎ渡す。

そして他の三人にも改めて勧めるが、首を振って断られた。

「そうか」パブロは自分の分も杯に注ぎ、一口含んでから「古代神殿のことを村の人間に少し聞いてみたんだが、具体的なことはなにもわからなかった。大峡谷の住人は邪神を奉った神殿と恐れて近付かないそうだが、記述も口文もなにも残ってないんで、実際はなにを奉った神殿なのか不明。だから、もし本当に生贄にするつもりなのだとしても、それで具体的になにをするのか、見当が付かないな。魔神でも召喚するつもりなのか、それとも封印された太古の邪神でも復活させるつもりなのか、それとも全く別の何か。まあ、どっちにしる……」

パブロは不意に言葉を止めると、急に懷から六連装拳銃を抜いて、窓に向けた。

「動くな！」

パブロの誰かへの厳しい制動の声に、ラッガートは武器を手にして窓に向け、残りの二人も続けて警戒態勢に入る。シエルダックだけ反応が一瞬遅れ、慌てて武器を構えようとして、手にしていた杯を落とした。

「待て。待ってくれ！」窓の外に隠れていた人物は、両手を挙げて姿を現す。「なにもしないよ。撃たないでくれ」

ラッガートは窓際へ一気に駆け寄ると手を伸ばし、その男の胸倉を掴んで部屋の中へ引きずり込み、力任せに床に押さえ込む。

「イテエ！」そいつは悲鳴を上げる。「止めてください！俺です！騎士さま！」

その声にラッガートは憶えがあった。

「……ダラス？」

「そうです、騎士様」

ラッガートが手を離すと、ダラスは膝をさすりながら立ち上がる。擦り剥いたらしい。

「今の話、聞いていたのか？」ラッガートは鋭い眼で問う。

「はい」剣呑な雰囲気を感じていないのか、なぜか嬉しそうに答える。

「どうする？」シエルダックがルマジヤーンに尋ねる。

「どうする、って言われても」

判断に困っているが、ラッガートも同じ思いだ。

リグヴェーダ王女の拉致事件は、王宮の判断で秘密になっている。独断で行動を起こしている自分たちも、それは守らなければならぬことだと承知していた。

それを、こんな失敗で外部に漏らすわけにはいかない。

いや、パブロが知っているのだから、水面下では噂になっているのかもしれないが、とにかくここまで確定した情報として漏れるのは、最悪だ。

それに、ラッガートたちが独断で行動を起こしていることも、明確に伝わると、非常に危険なことになる。辺境の村だから情報が伝わる可能性は低いと言って油断はできない。現在の自分たちの王都での立場は、綱渡りのような危うい状態で、それが転落することになれば、王女の身にどのような影響を及ぼすか。

どうやってこの若者の口を封じるか。

「どうする？ 殺すか？」

パブロが物騒なことを平然と口にする。そのことに、シエルダックとダラスは、仰天したようだったが、他の二人は特に感想を抱かなかったようだ。

口にしただけの脅しと捉えたのか、それとも選択肢の一つとしてすでに認識していたのか。

「あの」ダラスは驚きからすぐに回復すると、なぜか嬉しそうな声で「大丈夫です。誰にも言いませんから。秘密なんでしょう、リグヴェーダ王女が誘拐されたのは。だから巡察団なんて嘘を吐いたんですよね」

「声が大きい」ラッガートが指摘する。

「あ、すいません」声を潜めると、繰り返して「安心してください。大丈夫です、誰にも言いませんから。約束します」

ラッガートは他の四人と顔を見合わせる。頼みもしないうちに約

束してきたが、信用していいのだろうか。

「だってよ」パブロが肩を竦めて「どうする?」

「約束するって言ってるんだから、いいんじゃないか」とシエルダック。もつとも、ダラスの言葉を信用したというより、血を見るのが嫌なだけなのかもしれないが。

パブロは「だけどこいつ信用できるのか?」

「……あんたがそれを言うのか」ルマジャーンはパブロの科白に釈然としないものを感じたらしい。

しばらく黙考してから、ラッガートはダラスの肩を掴む。

「ダラス。念を押すが、いいか、これは王宮の重大な問題だ。君がもしこのことを誰かに漏らせば、王宮の威信を落としかねない。いや、それどころか、国中を揺るがす問題に発展しかねないものだ。それはわかるな」

「はい、勿論」

「よし。では、少なくとも、事件が終わるまで口を閉ざすと約束してくれるな」

「はい、誓います。騎士さま」

ラッガートはダラスの肩を離すと、皆にこれで終わりだと、両手を軽く翳してみせる。

だが、ダラスは続けて「その代わりと言ってはなんですが、俺に神殿まで案内させていただきませんか」

「なに?」ラッガートは思わずダラスへ振り向き、眼を見開く。予想も付かないことだったので。

「俺にリグヴェーダ王女を助ける手伝いをさせてください。必ず役に立ちますから」

ダラスは、どうやら王女救出の名誉に肖りたいらしい。

「あ、それまじい」しかしパブロが口を挟む。「俺、もう他の人間に案内を頼んだんだ。今から解消すると怪しまれるんじゃないか」付け加えるように「というか、ちょっとだけ事情説明しちまつたし」「説明した!」ルマジャーンが声を上げて「リグヴェーダ様のこ

とをか？」

「そこまで話してねえよ。巡察が嘘だって部分だけだ」

「そんな細かいことはどうでもいいよ。あんた、なんでそんな勝手なことをするんだ」

「まさか他の人間にもばれるとは思わないだろ。どの道、案内人は必要なんだ。こっから先は、いくら俺でも手に負えないぞ」

大峡谷はとてつもなく複雑な地形をしている。それはさながら天然の迷路で、入り組んだそれは、平野に行く時より難しく、時間も二倍、三倍とかかる。その場所に住んでいる人間の案内が必要なのだ。

「だからってそういう……」

「止める」ラッガートが不毛な言い争いを止める。そしてダラスに「わかった。案内を頼もう。明朝出発する。それまでに準備をしておいてくれ」

「はい！」

ダラスは嬉しそうに返事をする、長老の家を玄関から出て行く。「こら！ お前どこから入ってきた？！」

長老の声が聞こえた。すぐに玄関の開閉の音が聞こえ、外からタバタと走る音。

パプロは音が聞こえなくなるのを待ってから「で、俺が頼んだ案内人のほうはどうなるんだ？」

「そっちも連れて行く」ラッガートはベッドに腰掛けると、疲れたように深い溜め息をつく。「そうするしかないだろう」

ラッガートは限りなく余計で、無駄な体力を使ったような気がした。

五章・第二日・1

明朝、ベドウィルム村で、巡察団の見送りに村人が集っていた。

村人は皆、ダラスの周囲に集まっており、マースム力を見送る者は一人もいない。いつものことなので気にしないようにしているが、少しだけ寂しい。

「そうか、ダラスが案内をするのか」

「ダラスなら安心だ」

「騎士さまをしつかり案内するんだぞ」

ダラスは騎士たちに付いて行くのを案内のためだと説明していた。事情を知らない村人は信じて疑わなかったが、マースム力だけは首を傾げた。

なぜダラスが案内するのに、自分は外されないのか。

パブロが少しだけ説明してくれた、秘密にされている王宮の要人搜索に、部外者を必要以上に入れるのは危険なのではないかと思う。ダラスがなんらかの形でパブロたちの事情を知り、それを隠すために案内として雇ったということなのだろうか。

だが、それならば自分には必要ない。案内は一人で十分だ。

パブロは、妙なことになってダラスも付いて来ることになってしまったが、とにかく気にせずに案内してくれと、少し申し訳なさそうにしていたので、追求しないことにしたが、答えを教えてもらったわけではない。

どうということなのか。

少しでも事情を、つまり巡察団というのが嘘で、本当は王宮の要人探索をしていることを、自分が村人に漏らすことを恐れているということなのだろうか。辺境の住人が知ったとしても、王都に伝わることなどほとんどないのに。

そんな些細な可能性もできる限り避けたいほど、探している人物は重要なのだろうか。

そして、それほど重要なら、なぜ秘密にしなければならないのか。重要だからこそ、秘密にしなければならないのか。

結論の出ない疑問を考えながら、荷物をセネ口の体に固定する。

「いつたいなにが起きているんだろうね？」

「クウー？」セネ口も疑問符の付いた声を出す。

「ま、いいか」マースム力は考えるのを止めた。

不明なことだらけだが、セネ口が警戒しないのだからパプロは少なくとも悪い人ではないだろうし、人になにかを頼まれたりするの
は、これが初めてで悪い気はしない。

誰かの役に立ち、感謝されることは、それだけで嬉しいものだ。

「マースム力」

不意に声を掛けられて、マースム力は少し驚いた。ジフかパプロたちの誰かであつたのなら驚くことはなかっただろうが、思いがけない人物だつたのだ。

「……ラーナ？」

彼女はなにか言いたいことがあるのか、しかし言い難そうに俯いている。

「どうしたの？」マースム力は彼女の返事を待たずに続けて「ダラスのところへ行かなくて良いの？」

ラーナはなにを言われたのか理解できないように、一瞬当惑したような顔をしたが、次には怒つたように「あなたまでそんなこと言うのね」

「なにが？」マースム力は面食らう。

マースム力は本当に理解できなかった。ラーナとダラスが恋人であることは村の誰もが知っている。だから、なぜダラスを見送りに行かないのか不思議で、そのことを聞いたただけなのだが、それでどうして怒るのかわからなかった。

ラーナは、マースム力の言葉に苛立たしげな言葉を返した。

なぜ自分がダラスの傍にいつもいなければならないのか。ラーナにしてみれば、また勝手にそういう役割を、ダラスの恋人という不本意な立場を押し付けられているようで、そんなふうに決め付ける他人に、そして違うのだと言えない自分にも腹立たしかった。そして、なんの根拠もないのに、マースム力だけは理解してくれていると思っていて、それが今、村人たちと同じように、自分の勝手な思い込みであつたのだと知らされて、つまりはそういう苛立ちだった。だがマースム力は、そんな彼女のそんな複雑な心境など推し量ることなどできるはずがなく、さらには誤解までした。

「あ、ごめん。その、別にダラスの邪魔とかしようってわけじゃないんだ。ただ、僕はパブロさんに頼まれて、それで案内するだけだから」

「？」今度はラーナが理解できなかった。

マースム力は続けて「それで、騎士様の方でもダラスに案内を頼んでいたらしくて、良くわからないけど、結局僕たち二人とも連れて行くことになったらしくて……」マースム力は言い籠もる。「僕はただ騎士様やダラスの手伝いをするだけで、そんな、邪魔をしたりしないから、その……」

どんどん言い淀むマースム力に、ラーナはようやく気がついた。騎士様に大峡谷を案内するというささやかな名誉を、マースム力が横取りしようとしているのだと自分が思っていて、それで文句を言いに来たのだと、誤解しているのだ。

自分はただ、マースム力を見送ろうと、少し話をしようと思っただけなのに。

「あの、違うの。私はただ……」ラーナは急いでお互いの誤解を正そうとする。

「マースム力、準備はできたか？」そこにパブロがやって来た。

「あ、パブロさん」マースム力は助けられたかのように「それじゃ、僕はこれで」

まるでラーナから離れたい一心のようで、返事を待たずに行ってしまった。

「あ、待つて」

ラーナはマースム力を追いかけようとしたが、その腕を誰かに掴まれた。母だった。

「ラーナ、あの子にあんまり関わるんじゃないよ。いいかい、あの子は余所者なんだよ」

ラーナは母までもがマースム力にそのように思っていることに愕然とする。

「そんな言い方酷いと思うわ。マースム力はもう七年近く村にいるのよ。それなのに、まだそんな風に言うなんて。それに皆マースム力を見送ってあげない」

「お前は優しい子だ。でも、お前にはダラスっていう決まって人がいるんだ。他の男と一緒にいると、変な誤解を招く。そういうのもね、あるんだ」

「わたしは別にダラスとそんな関係じゃ……」

「成人を迎えても、中身はまだまだ子供だね。恥ずかしがるのもいいけど、あんまりそういうことを言つと、ダラスの機嫌が悪くなっちゃうよ。ほら、ダラスのところへ行つてやりなさい」

「でも、マースム力は」

「あの子は、ほら、ジフが付いているよ。お前は心配しなくていいんだ」

ジフがマースム力と話をしている様子を指差す。

「さあ、ほら。早く行った行つた」

そして、ラーナはまた強引に押されるような形で、ダラスのところへ行かされてしまった。

実のところラーナの母親は、ラーナがダラスを好いておらず、寧ろマースム力を意識しているのだと知っていた。

だが、出自不明の者よりは、村の若者と一緒になつて欲しい。なにより、あんな醜い顔の者を息子として迎え入れることなど彼女には耐え難かった。

あんな顔のどこが好いのか、まるで理解できないが、一時の気の迷いということもある。とにかく、ラーナにマースム力を近づけてはいけない。間違いが起こらないとも限らないのだ。

ダラスは村人に囲まれていた。みんなが自分の栄光や名誉をさらに加えることを期待している。

それは、騎士を案内するというささやかなものであつても、辺境の村では珍しい。

だが、ダラスは案内だけで終わるつもりは毛頭なかった。約束どおり村人の誰にもまだ教えていないが、彼の目的はリグヴェーダ王女の救出。正確には、一国の王女を救つたという名声を手に入れることだ。

これでラーナも焦らすなんてことは止めるだろう。まさに勇者の女になれるのだから。

ダラスはラーナの姿を探して周囲を見渡す。一向に姿を現さないと思つたら、なんとマースム力と一緒にいるではないか。

あの野郎、なにをしてやがる。俺のラーナに手を出すつもりじゃないだろうな。

ダラスは勝手な思い込みで、殴り倒しに行こうとしたが、それより早く、二人は何事もなく離れてしまったので、止めることにしてやる。騎士の前でもある。だが、神殿までの道程でマースム力をいたぶつてやると決めたが、そうとも、マースム力がどれだけ低能で

卑小な人間か、騎士の前で晒してやろう。

そしてラーナがダラスの傍まできた。少し暗い顔をしている。きつとマースム力がないか言ったに違いない。

ダラスはラーナの肩を掴むと「ラーナ、あいつにないをされた？」

「え？」一瞬意味が理解できなかったようだ、すぐにマースム力のことでとわかったようで「ち、違うわ。別になにも……」

「そうか。それならいいんだが」ダラスは最後まで聞かなかった。

「だがな、あいつがなにかしてきたら、すぐに俺に言うんだぞ。俺が助けてやるからな」

村人はダラスの男気に感心し、マースム力に対する誤解をさらに深めた。

そうして、マースム力は孤立していった。

最初に村に来た時のように。

「なにやってるんだ？ あいつら」

シエルダックは馬にくくりつけた荷物を確認しながら呟いた。

「なにつて、見送りだと思えますけど」

ルマジャーが答える。

「いや、それはわかるんだけどよ。あんなに大騒ぎするほどのことか？」

巡察の案内にしては、いささか大げさな送迎だ。まるで、他の誰かを無視したいがための行動に思える。

誰を？ もう一人の案内人をか？ 村人は彼に対してあまり好意を持っていないのはすでに察しているが、これはあからさますぎやしないだろうか。曲り形にも村の一員なのに。

「まあ、いいか。この土地の風習なんだろ」

シエルダックは気にするのを止めて荷物を纏める作業を再開した。「シエルダック、ルマジャー。準備は終わったか」しばらくして

ラッガートが確認をしに来た。

「大丈夫です」ルマジャーンが即答する。

「問題なし」シェルダックが答えた。

ラッガートは頷いて了承の意を示す。

「こちらも終わった。パブロたちも終わったようだ。そろそろ出発するぞ」

そうして、巡察団と偽ったリグヴェーダ探索隊は、ベドウィルム村を後にした。

五章・第二日・2

ラッガートが率いる王女探索隊は大峡谷を、河の上流、北へ向かって進んでいく。

平地であれば一日で辿り着ける距離の神殿は、起伏が激しく入り組んだ地形の、さらに岩肌の露出した足場の悪い道のために、倍の二日を要する。

到着するのは、明日の夕刻。

神殿へ入るのは夜になるだろう。もっともそのほうが闇に紛れて都合が良いかもしれない。王女を拉致した者たちの人数にもよるが、戦闘は可能ならば避けて、王女を救出したい。

敵の目的、動向、規模。一切不明。正面から戦闘を行い、制圧あるいは殲滅するのは得策ではないだろう。隠密を旨とした潜入作戦が望ましい。

問題は、王女が捕えられている場所のことが不明であること。もっと情報が欲しい。パブロが使っている情報屋に、事前に調査させることはできないだろうか。もっとも情報屋自体、実在するのかどうか不明だが。

「それで優勝した俺がバシッと言ってやったんですよ。マースムカはそのいう卑怯なやつなんです。あいつには注意しないと。秘密が知られたら、とんでもないことをするに違いありません。でも心配ありません、俺がなんとかしますから」

無言で思案するラッガートの隣で、ダラスがなにか自慢話をしてるが、彼は王女の安否に意識が向いておりあまり聞いていなかった。

マースムカの隣で馬を進めるルマジャーンは、川岸に小さな小屋を見つけた。

「あれは、人が住んでいるのかい？」

ルマジャーンはマースムカに尋ねる。こんなところに住んでいるとしたら、河で漁業を行っているのだろうか。

「いいえ、あれは筏の保管所です」

「筏？」なぜ集落や村から離れたこんなところに。

「緊急用の筏です。大峡谷では材質に使える大きな樹木が少ないので、緊急に使用する筏を大峡谷の住人全員が管理しているんです。

怪我人が出たとか、そういう時に筏を使えば、川下の方角へは早く着きますから。逆に上流へは行けないんですけど」

大峡谷の河は、場所にもよるが、意外と速い。確かに筏を使えば早く移動できるだろう。自分たちは今上流に向かっているため、使うことに意味はないが。

東の空に見えていた太陽は、やがて真上に昇り、昼食と休息の間となった。

遠くで野生のティダが三頭、ラッガート率いる搜索隊が食事をする様子を見ていた。大峡谷の狩人とは違う姿の者たちに興味があるのだろうか。

シエルダックは自分が見世物小屋の珍獣になったようで落ち着かないようだ。

「なんなんだ？ あいつら、なんで俺たちを見てるんだよ？」

マースムカは「たぶん、見慣れない人間いるので、興味を持っているんだと思います。彼らは、結構知能が高いんですよ。ただの好奇心でしょうから、こちらからなにかしない限り、襲われることはありません」

野生のティダは基本的に単独行動をし、群れを作らないが、一時的に数匹で集まることもある。そして、協力して獲物を捕らえたり、あるいは遊んだりするが、あくまでも一時的で、数日から、短い時

は数時間で別れてしまう。しかし、一週間ほどすると再び集い即席の群れを作る。その様子は人間が仲間や友人と集まるそれに似ている。

縄張りというものは基本的に存在しないらしく、ティダ同士が遭遇しても争いが起こるということは滅多にない。当然決まった巢はなく、そのため行動範囲は極めて広い。

また人間ほどではないがとても器用で、前足で物を掴むといったこともでき、両手を使って食事を取るその姿は人間のようだ。ちなみに雑食性。

知能は高く表情豊かで、人里で飼い馴らされたティダは、人語をいくらか理解できる。人懐っこいとは言えないが、いったん飼い主に懐くと、その人間に忠義を尽くす。あるいは友達や仲間と見ているのかもしれない。

食事と休息が終わったその後も、道程を進みながら、ルマジヤーンはマースム力にいくつか質問をするが、少年は淀みなく即答する。ルマジヤーンは思う。マースム力と話をしているが、彼はかなり頭の回転が速いようだ。知識にも長け、質問に対して言葉を的確に返してくる。村ではなぜか好かれていないようだが、その理由は少なくとも能力が低いことによる足手まといという理由ではないらしい。あるいは、辺境の閉鎖的な村にありがちな、能力が高いゆえに阻害されているのだろうか。

もしそうなら、少年にとって不運以外何物でもない。閉鎖的な村から離れて、どこかで働くか学校に入れば頭角を現すかもしれないが、しかし大峡谷の世界しか知らない少年にとって、ここから離れるのはよほど勇気のいることだろう。

ふと気付くと、ダラスが忌々しげな眼をマースム力に向けていた。

神殿への道程を続け、問題が発生することなく進み、やがて西の

地平線に太陽が沈み始め、大峡谷は夕焼けに紅く彩られ、野宿の準備をする。

焚き火を囲んでそれぞれ夕食を摂る。ダラスは搜索隊の騎士たちと混じっているが、マースム力は距離を置き、焚き火を挟んで反対側で夕食を摂っていた。会話を聞かれないのか、騎士たちはマースム力に関心を払わなかった。

ただ、パブロが側へやって来て、色々話しかけてくる。

「このティダ。セネロだったか？ こいつ野生のティダだよな？
なんでお前に懐いているんだ？」

「ああ、そうなんだ。なんか珍しいよな、そういうの。」

「え？ 俺にも懐いてるって？ フツ、当たり前だろ。人柄ってもんがわかるんだよ。人徳、人望、人格。全て完璧なこの俺様が。」

「イテツ！ なにしゃがるセネロ！」

「なんで詳しいのかって？ 世界中をあちこち旅したからな。見聞が広いんだよ」

「今抱えている問題が解決したら、一緒に来るか？ 旅は面白いぞ。」

「お前の名前ってなにか理由があってつけたのか？」

「古代語を少しでも習った人間なら誰でも知ってるだろ。」

「マースムカ汝の名はなにか？」

「つて、セネロ！ それは俺の飯だ！ 俺の！」

言葉遣いは乱暴で馴れ馴れしく、会って間もない人間に対してはいささか無遠慮で、少年は初めこそは戸惑っていたが、けして不快ではなく、彼が無意識に行う話し方で、その奥に隠された優しさを感じとっていた。

夕食が終わると、マースム力はジフから渡された、握りに驚を模った紋章が描かれている拳銃をなんとなく玩んだ。

「なあ、それって旧式の単発短銃だよな」パブロは尋ねた。

「ええ」

「使い方、わかるのか？」旧式の単発短銃は、弾丸と火薬、雷管を別々に詰めるため、扱いが難しい。

「父さんから教わりました。他にも、狩や、ティダの扱いとか、色々」と

「ふうん」パブロは気のない返事。「ジフ、って言ったよな。おまえの親父さん」

「はい」なにが訊きたいのだろう。

「前にどっかで会ったような気がするんだが。親父さん、どんな人なんだ？」

「昔は大峡谷随一の狩人と呼ばれていたそうです。今は道具の製造に携わっていますけど……」しばらく記憶を辿り「……一時期、大峡谷を離れて旅をしていたことがあったそうです。その時に会ったんじゃないですか？」

「旅って、どんな？ 行商とか、色々あるだろ」

「いえ、詳しくは知りませんが」

「そうか」

パブロは夜空を見上げて沈黙した。思い出そうとしているのだろうか。そういえば、この人はいったい何歳なんだろう。父と会ったのならば、七年前より以前のはずだ。その頃は、彼は二十歳程度だろうか。世界中を旅しているのなら、いったい何歳の時から放浪し始めたのだろうか。

マースムカも夜空を見上げる。

養父のことも良く知らない。ジフは自分の過去を話したがらず、質問してもほとんど答えなかった。ただ、マースムカの父の友人だと。だから引き取ったのだと。そしてあの時、助けに来たのだと。ほとんどそれだけしか説明しなかった。

七年前、マースムカの両親は目の前で殺された。現在も捕まっておらず、そして正体もわからないあの時の犯人たちが、なぜ家族を殺したのか、それは今でもわからないままだ。

だが、ジフは知っていたのだろう。だからあの夜、助けに来たのだ。そして間に合わなかった。結局マースムカだけしか助けられず、そのことを今でも悔やみ続け、罪悪感を抱いているようだった。だ

から、逆になにも話そうとしないのかもしれない。そしてマースムカ自身、詳しく聞けなかった。

一旦孤児院に預けられた時、ジフはこれから絶対に自分の身元や両親のことを誰かに話してはいけないと言われた。その理由を正確に理解できるようになったのは数年たってからだが、そうしなければいけないのだとは、まだ幼かったあの時の自分でもわかった。

殺されるからだ。奴らに。

だが、どうして今頃になってジフは拳銃を渡したのだろうか。

王都から騎士がやって来た途端、それまで一度も存在を教えなかった、両親の形見、自分の身元の証とも呼べる拳銃を出した。まるで、彼らに全てを話せというかのよう。

どうして、今頃になって。

マースムカは色々な過去を思い出していく。

僕はどうして今更王都の出来事に係わろうとしているのだろう。

幼いあの頃の日々は、裕福ではあっても、けして幸せではなかったのに。

家庭を顧みることなく、仕事と出世しか考えなかった父。

自身を着飾り綺麗に見せることのみ腐心し、社交界で人々の注目と関心を集めることしか感心のなかった母。

家に帰ることもなく、裏組織の首領きどりのことをしては、警察に連行されてばかりいた兄。

いつも寂しかったのを覚えている。そしてみんな死んで、本当に孤独になった。

いや、そんなことはない。マースムカは自らの考えを否定した。セネロに出会えた。言葉を使わなくとも理解し合える、種を超えた友達。

ジフに育てられた。無愛想だけど、厳しくも大切に育ててくれた養父。

ああ、そういえば。マースムカは思い出す。

王都でも良いことが一つあった。一人の少女と出会えたことだ。

自分と同じように孤独で、だからなのか、すぐに友達になれた。色々なことがあつて会えなくなってしまったが。今は元気でいるのだろうか。友達をたくさん作れただろうか。今はどんな女の子になったのだろうか。

「そうだ」パブロが不意に「拳銃、見せてくれないか」

「はい」なんだろうかと思いつつ、拳銃を渡す。

パブロは少し拳銃を検分しているようだったが、拳銃に塗ってある油を指で確かめると「この油だと駄目だ。旧式拳銃だと暴発するかもしれないな」

「え、そうなんですか？」

銃の知識と整備は一通り習得しているが、油の種類までは気が回らなかった。駆動式短弓と同じ物ではダメなのか。

それにしても、この人は少し油を触って見ただけで判別が付いたのか。銃の使いに相当熟練している。

そのパブロは「手入れし直さないと。俺のを使え」

荷物の中から銃工具一式を取り出す。そして、自分の銃器類を出すと、パブロも手入れを始めた。

ラッガートが剣の手入れをしていると、ルマジャンが焚火の反対側にいる、パブロとマースム力を見ながら、彼らに聞こえないように囁いた。

「なにを話しているんでしょうか？ あの二人」

「さあな。わからんが、別にたいしたことではないだろう」

答えるラッガートは、もうパブロを怪しむのは止めていた。あの男の行動を見る限り、なにかを企んでいることはないとは断定して差し支えないと、結論を出していた。なにかを隠しているのは確かだが、王女に直接かわることではなく、もっと別のことだ。裏稼業に携わる人間ならば、誰もが持つ秘密の類。

ダラスも声を潜めて「でも、マースムカと一緒にいるのはまずいですよ。あいつきつと興味本位でついて来ているから、色々聞き出そうとしているに違いありません。そういう奴なんですよ。リグヴェーダ王女のことを知ったらなにをしでかすか」

「気にするな。今更なにを知ろうが、どうこうなるものではない」
顔に火傷の跡がある少年の話に乗ってこなかったことに不満を感じたようだが、ダラスは話を変える。

「ところで、あの男は何者なんですか？」パブロを指して「騎士じゃないんですよね？ セリナ様のように魔術師でもないですし」

そのセリナは短剣を並べて手入れしている。争い事とは無関係のような温和な美女が、無言で刃物を手入れしている様は、なぜか得体の知れない恐怖を喚起させる。眼鏡が焚火の明かりに照らされてその瞳が見えないのも要因の一つだろう。口元に薄ら笑みを浮かべているのは気のせいだろうか。

ダラスは話を続けて「案内人って言うてましたけど、いったいどういう？」

「王都で雇った情報屋だ。王女の居場所を知っていると、我々に売り込みに来た。それだけだ」

「え？ そりゃやばいですよ」ダラスは大げさに驚いて見せて「そんな怪しい奴、信じて良いんですか？」

「仕方がない。手掛かりがないのだ。なにかの罠であっても、王女に辿り着くには、奴についていくしかない」

もつとも、パブロがなにかを企んでいることはないだろうが。

「でも、神殿にいるのは判ったんでしょう。なら、もう必要ないんじゃないですか。神殿なら俺が案内しますから、ここで追い返したほうが良いですよ」

「神殿に王女がいなかった場合、あの男が必要になる」

「でも、敵かもしれないですよ」

「その時は、その時だ。まあ、それはないと思うがな」
「はあ」

なんとも言えない表情のダラス。どうやらパブロとマースム力をなんらかの形で排除したいようだ。

自分を売り込んで、騎士に取り立ててもらおうと考えているのかもしれない。そうだとすると、いささか安易で無知だ。騎士になるには、推薦だけではなく、各種の試験に合格しなければならない。何百年も前のように、英雄行為だけで騎士の位を獲得することは、現代はほとんど例がない。

王女救出において重要な働きをしたとしても、表彰と報償が与えられるだけだろう。望めば騎士養成学校へ入学する推薦書ももらえるだろうが、それだけだ。後は自身の力で騎士になるしかない。

「ところで、王女さまはどんな人ですか？」

間が持たなくなったのか、話題を変えてきた。

「人徳、人柄素晴らしい方だ。そして美しい」

それは王家に対するありふれた賛辞だったが、それは嘘ではなかった。闘姫と称賛されるリグヴェーダ王女は、その容姿も称賛されている。

ダラスの顔に、不気味な笑みが浮かんだ。救出された美しい王女が強く逞しい勇者である自分に恋する光景を思い描いたらしい。

そラッガートは少し呆れて、誰も気付かない小さな嘆息する。この少年はあまりにも俗物的な考えで動いている。後々厄介なことにならないければ良いのだが。

ラッガートとダラスの話聞いていたルマジャーンは、王女の話に及んで過去を想起し、自分の剣を見つめた。騎士叙勲において国王から賜った剣。そして王女と初めて出会った時のこと。

リグヴェーダ王女と初めて直接対面したのは、騎士選抜試験の最終日のことだった。

最終試験を受ける直前、緊張していたルマジャーンは試験会場の

闘技場から少し離れた通路で、心を落ち着けようと努力していた。騎士はあらゆる能力に秀でた者のみが叙勲され、それを見極める無数の試験があり、その全てに認められて騎士に選抜される者は、当然少ない。

現在の騎士は、民衆が思い描く過去の栄光ある騎士とは随分違うが、それでも優秀で勇気ある者だけしか騎士を名乗ることが許されないのは、今も変わらない。

ルマジャーンはその数々の試験に合格し、最終試験を残すのみとなったが、そこまできて緊張感が頂点に達した。

試験内容は単純で、現在の騎士の一人と剣を持って試合をする。勝つことが合格の基準ではないが、力量が基準に達しないと見なされれば、それだけで不合格とされる。

そしてその対戦相手は、最強の騎士と呼ばれる者の一人、ラツガート百騎長。武闘祭において、剣術部門優勝者。緊張するというのが無理だ。

無様な戦いだけはしたくないと、自らの心を鼓舞して勇気と度胸を振り絞るが、緊張で手足が震えるのがどうしても止まらない。

「大丈夫か？」

不意に声をかけられたルマジャーンは、それが誰なのか一瞬わからなかった。あるいは、こんなところにいるはずがないという先入観と思いこみがあつたためかもしれない。

慌てて敬礼をとるルマジャーンは、疑問を口にする。

「……王女殿下？ なぜここに？」

なぜ国王の第二王女という立場の人間が護衛もなく、一人でここにいるのか。

「騎士の剣術試合に興味があつて見に来た」

まだ少女にすぎないリグヴェーダ王女だが、武芸、特に剣術において才能を発揮していることは周知の事実だった。

しかし護衛がないことには答えていないが、その疑念に答えることなく、王女は続けて質問する。

「緊張しているのか？」

「はい、少々」

王女はルマジャーンの肩を軽く叩く。

「もつと力を抜くがよい。相手はあのラッガートだ。勝ち負けなど気にせず思いっきり戦えば良いのだ。当たって砕けるというのである。ほら、深呼吸をしな」

ルマジャーンは王女という身分の方に、気さくに話しかけられている事実には戸惑いつつも、王女の言う通りに深呼吸する。

「な、落ち着いたである」

自分より五歳年下の少女の微笑みに、ルマジャーンの乱れる心は急速に落ち着いていく。深呼吸よりもはるかに効果的だった

そしてルマジャーンの心は、試験を控えた緊張とは異なる感情で乱れ始めた。

「では、試験に挑むがよい。期待しているぞ」

リグヴェーダ王女は、彼の心に芽生えた彼女への特別な思いに気付くことなく、その場を立ち去った。

その後、ルマジャーンはラッガートに勝てなかったが、本人にその戦いを賞賛され、試験に合格した。

そして数日後、騎士叙勲式において騎士剣を賜った。

叙勲式に王族の代表として剣を授けたのは、リグヴェーダ王女だった。

王女に騎士となった自分の姿を見てもらうことは、ルマジャーンにこの上ない喜びだった。

「どうかしたのか？」

シエルダックは怪訝に質問すると、ルマジャーンは過去に思いを馳せるのをやめる。

「いえ、なんでもありません」

シエルダックは、彼が王女のことを思い出していたのだと見当がついた。

王女に個人的な感情を抱いていることにも、以前から薄々気付いていたが、身分の違いからその思いが叶うことはないだろうとも思っていた。

叶わぬ思いというのは青春時代にはよくあることだ。そして、そうした苦い経験が若者を成長させ強くする。

まあ、暖かい目で見守っておこう。見守ることしかできないが、失恋した時に酒場へ付き合うことはできる。

ルマジャーが不意に立ち上がる。

「どうした？」

「俺、あの二人のところに行ってきます。なにを話しているのかわらなくて、どうも不安で」

「ああ、そうだな。そうしてくれ」

五章・第二日・3

「よう、ルマジャーン。どうした？」

ルマジャーンが、焚火を挟んで離れた位置にいる二人の隣に移動すると、パブロは疑念の欠片もない歓迎の声をかける。

「いや、たいしたことじゃない」と隣に腰掛け「ちよつと話をしようと思つてな」

パブロは探りに来たのだとわかつているようで「俺のことまだ怪しんでいるのか。まあ、当たり前と言えば当たり前だけどな。ま、明日になればわかるさ。明日には神殿に着く。その時に全部決着が付くだろ」そしてマースムカに「ちよつと、それ取ってくれ」

「はい」工具の一つを渡した。

マースムカとパブロは銃の手入れをしている。

パブロが持っていた銃は全部で三つ。六連装拳銃二丁と、リヴォルバー散弾銃

が一丁。自己紹介の時にも見たが、改めて見ると、やはり最新式の銃のようだ。

「随分凄い得物を持っているが、ちゃんと許可証あるんだろうな？」

「あるわけないだろ」パブロは簡単に答えた。

「ない?!」ルマジャーンは驚いて「お前無許可なのか!？」

「当たり前だろ。俺みたいな身元不明に誰が許可証を発行するんだよ？」

「それ以前に違法だろ。犯罪だ。大体、どこでそれ買ったんだ？」

マースムカが少しきよとした表情で「銃を持つのに許可証が要るんですか？」

ルマジャーンは勢いを削がれて、肩を落とした。

「要るんだよ。警察に購入届けを出して、許可証を発行してもらわなければ、購入も所持もできない。第一それを提示しないと、店は売らないんだ」

エンカータ王国は、銃器類の規制が厳しい傾向にある。逆に刀剣類や弓矢は緩く許可が要らないため、一般の者が武器として所有するのは、たいてい刀剣や弓類だ。

「でも、村の人は猟銃を持っていますよ。僕は駆動式短弓を使っていますが」

「辺境の村の、手作りの粗末な銃まで制限したらきりがないよ。警察が取り締まっているのは、正規の銃工房で製造された精度の高い物だ。この所持に関しては厳しく当たる」そしてルマジャーンは改めて「それで、その最新式、どこで手に入れたんだ？」

「秘密」

「おまえなあ」拳を握り締める。

「蛇の道は蛇、ってな。俺が裏道まっしぐらの情報屋だってこと忘れてないか？」

「はあ」ルマジャーンは溜め息を吐き「もういいよ。でも、なにに使うんだ？」

「これから戦いになるかもしれないだろうが。お……」王女様とおうとして、マースム力に聞かれることに気付いたのか、口籠る。

「おまえらの敵、と言うか、連中とだ。まさか、話し合いで解決なんて考えているわけじゃないだろ」

「それはそうだが、なんであんたまで戦う必要があるんだ？」

「ここまで関わって、後は知らん振りすると思ったのか。そこまで不義理じゃない。前金は貰ったんだからな、最後まで付き合うさ。意外だったか？」

正直「意外だった」

「なんの話をしているんですか？」マースム力がそこで口を挟む。ルマジャーンはそこで、パブロが余計なことを言わないために見張りに来たことを思い出した。そして、なにより自分がぼろを出しているということにも気が付く。

「あ、いや、なんというか、その」

マースム力は微笑み「いいですよ、言いたくなければ。事情があ

るんでしょ」

「あ、ありがとう」ルマジャーンは話題を変えようと、マースムカの拳銃を指す。「ところで、それは君のかい？」

「ええ、そうです」

「ちよつと見せてくれるかい？」

「どうぞ」マースム力は渡す。

「随分凄い装飾が施されているんだね。特注品みたいだけど、どういった由来があるのかな？」

「さあ……良く知りません」なぜかマースム力は言い淀んだが、ルマジャーンは拳銃のほうに気になった。

「この握りの鷹を模った紋章。貴族の家紋だね。どこの貴族なんだい？」

「いえ、良く知りませんから」マースム力は慌てたように「あの、返してもらえますか。まだ整備の途中なので」

「ああ、ごめん」

ルマジャーンはすぐに返したので、紋章がどの貴族の物であるのか気付く時間はなかった。見たとしても紋章学に通じているわけではない彼にはわからなかったかもしれないし、紋章にそれほど興味があつたわけでもなかったので、追求しようとはまったく思わなかった。

皆が寝静まつた深夜、最初の見張りをしているのは、パブロとルマジャーン。二番目にセリナとシェルダック。最後にラッガートの順番だ。

案内人の二人には見張りはさせないことにした。労力を使う役割ということもあるが、二人は基本的に無関係だ。それに、眠ってくれている方が余計な話は聞かれにくいと、ラッガートは考えたのだろつ。

それは、パプロにも都合がよかった。

パプロはルマジヤーン以外、全員眠るのを待ってから、焚火から離れようと立ち上がった。

「どこへ？」皆を起こさないよう、ルマジヤーンは小声で訪ねる。

「少し周囲を見てくる」パプロはやはり小声で答える。

ルマジヤーンは特に不審に思わなかったのか、止めることはしなかった。

パプロは皆を起こさないよう静かに離れ、焚火の位置から十分離れたことを確認すると、誰もいない虚空に向かって話しかけた。

「リイジス。そっちの様子はどうだ？」

虚空から少女の声が返ってきた。

パプロ。まだ王女さまは無事だよ。でも、こいつらの目的がわかった。このままだと王女さま、殺されるよ

「ああ、やっぱり生贄にするつもりか」

状況から推測すれば、それしかないが、なるべくなら他の可能性であって欲しかった。

そうなの。でも、それだけじゃないの。こいつら、王女さまを使つてなにを呼び出すつもりだと思う？

「色々ありすぎてさっぱり見当がつかないな。なんだ？」

声は少し間を置いてから答えた。

アジアドイースム
名の無い魔獣

パプロはしばし絶句した。

「……冗談だろ」

本当だって

風が荒び、砂が舞う、大峡谷の谷間の丘陵にある、灼熱の陽に曝され赤茶けた神殿を中心として配置された、石柱の連なる奇妙な景觀。

それは巨大な魔法陣。^{ワフク}

なんのために造られたのか、その目的を果たせたのか、今はもう知る人間はいない。

だが、遙かなる時の流れの先端で、思惑は様々なれど、神殿を利用しようとする者たちが集まっている。

その名を忘れられた古代の神殿にて、銀髪の初老の男はどこへともなく歩いていった。目的があるのかないのか、彷徨っているようでもある、放浪しているようでもある、探索しているようでもある。あつた。「ゲシュタル」

銀髪の男に、不意に声をかけた者がいた。神経質そうに眉根を顰めた、初老ほどの小太りの男。ゲシュタルの、そして現在神殿にいる、三十名近くの人間たちの雇用人。

ザーラディース・ハーマン。エンカータ国王側近の一人であり王国軍三將軍の一人。

「ゲシュタル」不機嫌そうに繰り返して呼び「こんな所でなにをしている。儀式の準備はどうした？」

ゲシュタルは抑揚のない声で返す。

「パレスが指揮を執っている。私は必要ない」

「それはわかつている。だが、呼び出すものがものだけに、慎重に慎重を重ねばならないだろう」

「大丈夫だ。問題はない」感情が欠落した声は、返って反論を許さぬ畏怖を与える。

ザーラディースは喉を一波蠢かし「そ、そうか。それなら良い」

ザーラディースの手法の一つとして、軍務から大きく外れた非法活動を行うさいは、軍部の人間を直接使わず、外部から臨時で雇うという方法を取る。軍の人間を使わないため、動きが知られ難く、判明したとしても、私用という言い訳が立ち、隠蔽しやすい。そして、万が一の時は見捨てても問題なく、後に引くことがない。

今回のリグヴェーダ王女に関しても、この方法を用いた。

だが、ゲシュタルは他の者たちとは違い、臨時で雇われたのでは

なく、前々からザーラディースと付き合いのある、魔導士だ。

魔導士^{カーヒン}。禁断の呪法に手を出し、あるいは魔法によって犯罪に手を染めたために、世界魔術師連盟から指名手配され、邪悪なる烙印を押された魔法使い。

ザーラディースはこの男が極めて有能であることを最初に雇った時に理解し、それ以来臍肩としてしている。

だが、時折垣間見せる言いようのない雰囲気、威圧感とも恐怖とも取れぬ、不愉快な感覚を引き出す。

ゲシュタルは彼の心情を知ってか知らずか、変わらない声で「私としては寧ろ、お前が王都での工作が失敗してはいないか、ということのほうが気になる」

「それは大丈夫だ。万全を期している」

「ならば問題はない。名の無い魔獣の召喚は滞りなく行われるだろう。本当にミスがなければの話だが」

「くだいな、大丈夫だと言っただろう。この召喚儀式の成否には、エンカータ王国の存亡がかかっているのだと言っても過言ではないのだ」

エンカータ王国の存亡と言うより、自身の未来と権力と言ったほうが正しいが、ザーラディースは心情的に区別が付いていなかった。「神話に語られる名の無い魔獣。その存在を、その力を手中に収めることができれば、アスベルト帝国の新兵器など恐るに足りん」

アスベルト帝国。現在エンカータ王国と緊張状態にある、事実上の敵対国。二つの国は政治、経済、技術、軍事など、あらゆる面で対抗し、拮抗していた。だが、最近その情勢は帝国へ傾きつつある。新たに開発され、実戦配備が決定された軍用兵器。

戦車の登場である。

この移動する砲台は、軍事戦略に置いて劇的な変化をもたらし、実験演習において圧倒的威力を発揮したと、情報部にて報告されている。

そして、エンカータ王国に、それに対抗する兵器はない。

これは技術面において帝国に大きく遅れを取った証明でもある。

「いいか。我らに戦車を、もしくはそれに対抗する兵器を開発する時間的余裕はない。まだ戦争状態になつてはいないものの、我ら王国と帝国はいつそうなつてもおかしくない緊張状態が続いているのだ。そして、現在戦えば、負けるのは王国だ。確実に」

王国軍の將軍を職務とする彼は、あらゆる状況を想定、予想、予測し、結果を計算したが、勝利する確立は極めて低かった。

そこで、機械工学で対抗できないならば、全く別の方面から試みること思いついた。

魔法的面から。

滅びを司る神話の存在。名の無い魔獣^{アジ アディスム}を召喚し、支配し、制御する。神さえも滅ぼすその力を意のままに操ることができるならば、帝国など物の数ではない。

だが、召喚するにはどうしても必要な材料があつた。すぐ目の前にいるのに、手にすることができない者。

古代神人の直系。王族だ。

国王に、この召喚儀式を伝えたとしても、当然許可など出るはずがない。自らの最も近い血縁者、実の娘の命を奪うことを許すはずがないだろう。

だから、ザーラディースは独断で、非合法に、決行した。

世界最大にして最悪の暗殺組織にして暗殺教団、樂園^{ジャンナ}から、ボツブルを筆頭とした十三人の暗殺者を雇った。全員が麻薬によって身体能力を強制的に向上させた化け物だ。彼らの力でリグヴェーダ王女を宮殿から拉致するのに成功した。

また、以前から何度か雇ったことがある傭兵団から十人雇った。リグヴェーダ王女の運搬と、魔法儀式を行うための雑用だ。

ゲシュタルの伝手では、パレスという女魔導士と、彼女が従えている二名の魔導士を招いた。魔法儀式の準備には、ゲシュタル以外にも専門的な知識を持つ者が数人必要だったためだ。現在も彼女たちが傭兵たちを指揮して準備を進めている。

さらに、成功を確実にするために、王都であらゆる妨害工作を施しておいた。

王宮の名譽のためにと情報公開を控えさせ、犯人からの連絡を待ったほうが良いとして、捜査班をほぼ足止め状態にし、情報が漏れる危険性があるとして、人員を最低限にまで減らし、犯行はアスベルト帝国を始めとした、敵国や隣国、犯罪組織の存在を臭わせ、捜査の方向性を惑わした。

これらは完全ではないものの、確実に効果が出ており、自分自身には全く容疑がかかっていない。それどころか、逆にリグヴェーダ王女の安否を心から案じているとさえ思われている。

後少しだ。明日には儀式を始められる。このまま何事もなければ、いや、必ず成功させなければならぬ。これが失敗し、もし事件の首謀者が自分であると判明したら、王宮を追放されるだけではすまない。確実に死刑だ。

「国王が自らの立場というものを良く理解しておれば、こんな面倒なことなどせずに済むものを。国王、そして王族とは、国民に身を捧げ、心を犠牲にしなければならない者なのだ。リグヴェーダ王女は始めから国民への生贄なのだ」

忌々しげに不平不満を並べるザーラディースに、ゲシユタルは冷たい眼を向ける。

それは、おまえにも言えることだ。ゲシユタルは胸中思う。

ザーラディースもまた、古代神人の末裔たる王族の末席に名を連ねている。もし真に国のためを思うならば、自身を生贄に捧げるべきだろう。

だが、この男は自らの権力や利益のみに邁進し、国民のことなど顧みることはない。口先だけは大層だが、中身は支配欲の塊だ。国王への忠義も、国民への献身もない。ただ、己の欲望を満たさんが

ただだけに動いている。

この一連の計画も、国のため云々と言うのは建前で、他の二人の將軍を抑え込むための布石に過ぎない。名の無い魔獣の軍事利用が成功すれば、確実に王国軍を完全に掌握することができる。

もしかすると、王国軍を掌握した暁には、アスベルト帝国へ戦争を仕掛けるかもしれない。敵国の危険を排除する理由で。そして本心では侵略することに歓喜して。それに伴う夥しい数の死を考慮せず。

自分一人では何一つできない矮小な人間に過ぎないのに。

名の無い魔獣の召喚を教えたのは、ゲシユタルだ。戦車に対抗できる力であることも。神殿がかつて名の無い魔獣が出現し、そして消えた場所であり、その土地を守り封印するために建設されたものであることも、その他全て。

だがザーラデイスは全て自分で考えたということにしてしまっている。本当にそう信じ込んでいるのかもしれない。

自意識過剰とはこのことか。だが、そのほうが都合が良い。利用しやすいからな。

って感じなの

「まいったな。よりにもよって、アジアデイスム名の無い魔獣かよ」パプロは頭を抱えて呻く。「世界が滅亡するぞ」

どうする？

「どうするもこうするも……」困ったように頭を掻いて「とにかく、そのまま探ってくれ。明日の夕刻には俺たちも到着する」

でも、そんな人数で大丈夫なの？ こっちは三十人はいるんだよ。

おまけに化け物揃い

傭兵団はまだしも、ハシィシャン楽園の麻薬服用暗殺者に、カーヒン魔導士。この二つはとてつもなく危険だ。

「しょうがないだろ。俺の正体を知られるわけにはいかないんだ。

合法的な手段で王女の捜査班に接触できない以上、これが精一杯だ」

うつー。不安一杯

「連絡終わり。明日到着したら、また連絡を入れる。その時に行動開始だ」

了解

五章・第二日・4

パプロは溜め息をつく。

「アジアデイスム名の無い魔獣か。洒落なんねえな」

「ええ、本当に」

唐突に声を掛けられた。いつの間にいたのか、眼鏡の似合う美女がすぐ背後に立っている。その手に持つナイフを首筋に当てて。

身動きが取れない。迂闊に動けば切られる。

「……セリナ。いつの間に？」

「注意力散漫。内緒のお話をする時は、周囲の警戒を怠ってはいけないわ」

セリナはいつものように笑みを浮かべ、どこかおっとりした口調だが、氷の刃のような鋭さを含んでいた。

注意も警戒も怠ってなどいなかった。それにもかかわらず、彼女の気配を全く感じず、接近を察知できなかった。

パプロは額に汗が流れるのを感じた。初対面時から油断のならない人間だと思っていたが、やはり温和な外見と中身が一致しないようだ。ここから先、対応を間違えると始末されかねない。

「……ひよつとして、今の話、聞いてた？」

「ええ、あなたの声だけは聞こえていたわよ」セリナは当然のことのように肯定し「それで、念話でどこかの誰かと話をしているあなたは、いったい何者なのかしら？ ジン妖精族」

パプロは少し呆けたように、だがやがて苦笑してゴーグルを外す。隠されていたその眼は人間の眼とは明らかに異なっていた。白目の部分が一切ない黒い眼球に、細かい網目状の模様が浮かぶ。昆虫の複眼だ。

妖精族。創成期において、火から創造された炎の民の別名。ジン

肉体という物を元来持たず、煙の無い火と言い伝えられる、限りなく純粋な力だけで構築された存在と言われ、その姿はこの世において輝く光か、形の定まらぬ煙のように眼に映る。だが、それさえも副産物にすぎず、本来は見るということが基本的にできない存在だと伝えられている。

また、神から与えられた世界である火の国^{カーフ}から、この人間の住まう世界^{アドワン}へやって来る者が時折いる。

この世界に来訪した妖精族は大別して二種類。肉体を持つ者と、肉体を持たない者。

肉体を持たない者は、前述のとおり、希薄で空ろな存在で、接触事体が不可能とされているが、肉体を持つ者はその限りではない。彼らは肉体を製造し、それに宿ることで人間やその他の生物と同じ状態に近付き、この世界で行動する。

ただし、その肉体はどこか歪な箇所があるという。パブロの眼球のように。肉体の製造技術が正確性に欠けているためとも言われているが真偽は不明だ。意図的に行っているのだという説もある。

炎の民が火の国からこの世界へ来訪する目的は不明で、それを知っている人間は誰もいないといわれる。いたずら好きの妖精が人からかうことはあっても、それが真の目的ではないのは確かだ。

「気付いていたのか、^{スウィーファイ}魔術師」

「気付いていたわよ、^{シンニー}妖精族」

「なら、なぜもつと早く言わなかった？」

「確信がなかったから」

「いつから疑っていた？」

「最初に会った夜からよ。あなたは気付かなかったかしら。あなたは誰かのことを話す時、あの人間はとか、例の人間はとかって、種を表す言葉を使っていたの。人間、って。普通は、あの男はとか、あいつは、彼女は、と言うふうに、種そのものを指す言葉は使わないもの」

「ハハハ、気づかなかった。これからは気をつけるよ」

「これからがあればね」

首筋に当てているナイフが青白い輝きを発し始める。セリナの意思一つで攻撃的な現象が発動する魔法が付加されている、見た目より遙に危険な武器。

「あなたはいつたい何者なの？　なぜ炎の民が人間のことに関わるのかしら？」

「たいした理由じゃない。王女さまとは前からの知り合いだっていうだけの話だ」

「前から？　ランプから出して貰ったの？」

この国に古くから伝わる民話。ランプに封印された妖精イフリートの魔神を解放すると三つの願い事を叶えてくれるという。

「いや、俺はそういうわけじゃない。あんたたち人間や魔法使いが火の国に興味があるように、俺たちのほうでもこっちに興味がある。それで人間の世界を偵察するように命令を受けて来ただけだ。二十年程前にな。細かい話は省略するが、色々あつて情報収集に都合のいい仕事、裏社会の情報屋をするようになった。そして王女との関係だが、平たく言えば、個人的に雇われている諜報員だ。リグヴェーダ王女専属民間諜報員つてところか」

「諜報員？　妖精族のあなたか？」

「別にそんなに驚くようなことでもないだろ。とにかく、そういう関係で王女に王宮内外の情報を伝えていた」

「リグヴェーダ王女は、それでなにをしていたの？」

王女という立場にしながら外部の諜報員を必要とする、特殊な責務を任されていたのか。

パプロは肩を竦めて見せて「なにもしてない」「なにもしてない？」

「ああ、なにもしてない。ただ、王女というか、王族の立場って言うのは奇妙なもので、自分の与り知らないところで、自分にとって重要な事件が発生しても、それを肝心の自分が全く知らないということがよくある。どうも、それが気に入らなかつたらしい。それで

王女は俺を雇い、俺は王女関係でなにかあるたびに情報を売っていた」

「リグヴェーダ王女がさらわれた時も、あなたは知っていたの？」

「いや、知らなかった。知っていたら阻止していた。上客だしな。」

当然、あんたの妹も死なせたりはしなかった」パプロは自虐的な笑みを微かに浮かべた。「時期が悪かった。別件を調査している最中で、王都を少し離れていた時期だった。帰って来たら、ちょうど王女がさらわれた次の日だった」

「別件って、なにを調べていたの？」

「それは言えない。王女から直接聞いてくれ」情報屋は顧客以外の者にけして情報を漏らさないのが基本であり矜持だ。

セリナは深く追求しても無駄だと判断したのか、すぐに話を切り替える。

「私たちと接触した経緯は？」

「前に話したのとほとんど同じだ。王女が行方不明になっていることがわかって、すぐに調査した。そして組織の情報網に王女がどこへ運ばれていったのか引つかかった。長い付き合いだし、助けようと思ったんだが、当然俺だけで助けだせるもんじゃない。だが、捜査班に接触することは不可能だ。俺は身元不明の怪しい人物で、しかも人間ですらない。正体がばれたらなにをされるか。信用されずに無視されるほうはまだましで、異端審問にかけられて投獄されるか、最悪、生体実験に回される可能性もある」

人ならざる存在にして、人と同じく知性を持つ者。

そのためか、炎の民は偏見や誤解が多く、また不可解な行動もあって、危険な存在と見なされていることも多い。エンカータ王国では、特別な処置が規定されているわけではないが、王族に接近している妖精となれば、疑惑の目で見られることは間違いなく、断固たる対処が行われるだろう。

「とにかく、合法的に捜査班に接触するのは不可能だったんだが、困ってたところに、ラッガートのことがやっぱり情報網に引つかか

った。それで、渡りに船と、あんたたちに接触して、王女さまが運ばれたところへ案内することにした」

「リグヴェーダ王女はあなたが妖精族であることを知っていたの？」

「ああ」パプロは頷く。「知っていた」

そもそも、自分が雇われることになったのも、その辺りが関係している。

「そう」セリナは短剣を懐に収めた。

「信じるか？」武器を引いたということは、そのようにとって構わないだろうが。

「ええ、信じるわ。妖精族のあなたが人間のトラブルに自分から係るとは思えないし」

「そうしてもらえるとありがたい」

「じゃあ、次の質問。名の無い魔獣の召喚って言ったわね。どういうことなのか、詳しく説明してくれる」

「その前に、俺のことは他の連中には言うなよ。知られると色々まずいんだからよ。魔術師のあんたは俺たち炎の民に偏見はないだろうが、あの騎士三人は」焚火の方向へ目を向けて「頭が固そうだからな。捕まって異端審問に掛けられるのは御免だ」

セリナは艶然とした笑みを浮かべ「わかってるわ。情報屋」

パプロは笑い返した。それは、虎の笑みのようで、猛獣が美女に懐いたかのようでもあった。

「じゃあ、説明する。まずは、首謀者の名前からだ」

パプロは語り始めた。

セリナは少なからず驚愕した。

「ザーラディース將軍が、戦車に対抗するために名の無い魔獣を？」

「ああ」パプロは頷く。

「……でも、そんなの成功するのかしら。召喚するのは神話の存在

よ。実在するかどうかもわからないのに」

「いや、名の無い魔獣は実在する」

「どうして断言できるの？」

「俺は炎の民だ。炎の民の、そして火の国の支配者は誰だ」

「……」セリナは一瞬答えるのに躊躇ったが「炎の王」マールト

名の無い魔獣と同じく、滅びを司る存在の一つ。炎の王が天界を封じた炎の剣から発せられる火は、万物を少しずつ、だが確実に焼いていく。すなわち、古い、腐し、朽ちさせる。なにかの比喻や暗喩のように取れるが、パプロはそれがそのままの意味だと言いたいのだろうか。

「そう、炎の王だ。そもそも俺がこの世界に来ることになったのも、炎の王に命令を受けたからだ。その時、直に対面している。正直、二度と会いたくないんだがな」

パプロは微かにだが、明らかに恐怖を感じていた。炎の王とはいったいどんな存在なのか。

「それで、その時に名の無い魔獣のこともしろ聞かされた」

「名の無い魔獣を呼び出すのは可能だと？」

「召喚するだけなら不可能じゃないだろうな。だが、支配して制御し、思い通りに操るとなると、怪しいな。あの強大な存在を人間の手でどうこうするなんて、不可能としか思えない」

「どうすればいいのかしら」

セリナは途方もない規模の話に、途方に暮れそうになった。一国の王女がさらわれただけでも、大事件だというのに、神話の存在まで介入してくるとは。

「ハハハ」パプロは軽く笑い「そんなの決まっているだろ」

「？」当然のことのように言う妖精に、セリナは怪訝な表情になる。「王女さまを助け出せばいいんだよ。それで儀式ができなくなる。

名の無い魔獣は現れない」

同時刻、古代神殿の地下で、リグヴェーダ王女は、髪に付けていたヘアピンで鍵穴を開けようと奮闘し続けていた。

だが、開錠の訓練など受けていないので、当然開かない。

もともと鍵には、魔法が掛けられており、特定の鍵以外では開かないようになっているので、開錠技術を持っている者でも開けることはできなかっただろうが。

やがて彼女は諦めて、苛立ち混じりにヘアピンを床に投げつける。やはり鍵がなければダメだ。昔読んだ冒険小説で、今の自分と似たような状況に主人公が陥った場面が会った。それによると、鍵は牢の比較的近くにあるという。遠くに保管しておくとは緊急時にすぐに使えないという理由で。可能性を考えもしなかったので探さなかったが、案外手が届く範囲にあるかもしれない。

ちなみに、その小説は妹に低俗な三文小説といわれた。そんな本を信じて良いのか逡巡したが、探しても損はないだろうという結論に達する。

牢の鉄格子の隙間から念入りに見渡す。果たして鍵は、なかった。影の形もない。

当たり前だな。リグヴェーダは自嘲気味に胸中呟き、自らの正気を疑った。目の届く範囲に鍵を置けば、牢屋に入れられた者は、それを手に入れようと必死で努力するに決まっている。そんな所に鍵を置くはずがない。ましてや、手の届く範囲など論外だ。

疲れているのだ。ここに入れられてから二日。いや、もうすぐ三日になるのか。とにかくほとんど寝ていない。

王宮での出来事からずっと彼女は意識を失っていた。おそらくは魔法かなにかで強制的に睡眠状態にさせられていたのだろう。どれくらい時間が経ったのか、気がつけば大峡谷の一画にある神殿の前にいた。あとは地下に連行されて、今ここにいる牢屋に閉じ込められた。

現在、王宮では自分の搜索が行われているだろうが、ここを見つ

けてくれる可能性は極めて低い。

自力で脱出するしかない。そしてボツズルとゲシュタルを見つけ出して、殺す。脱出にはまだまだ時間がかかりそうだが、必ず脱出する。そしてサリナの敵を討つのだ、絶対に。

王女は拳を、自らの握力で砕くかのように、握り締める。

瞼の裏に焼き付いているあの光景。慕っていた侍女の首から噴出する深紅。それを思い出しただけで自らの胸が真紅の炎で焼け付くようだ。

サリナとは主従関係にあったが、関係はよく、友人といっても差支えなかった。その絆を言葉で確かめたことはないが、少なくとも自分は彼女を友と思っていた。そして復讐するにはそれだけで十分な理由だ。

それにしても……。リグヴェーダは思案する。いったいどういう思惑があつて奴らは自分をさらつたりしたのだろうか？ 政治目的か、営利誘拐か。

神殿に到着した時に少し周囲を目にしたただだが、ここが辺境にある大峡谷であることぐらいはわかった。こんな地形は、大陸中を探しても一か所しかない。

こんな場所に連れて来ることに如何なる意味があるのか。確かに隠して閉じ込めておくには良いかもしれないが、そのことを考慮に入れても、こんな遠くまで連行する理由にはならない。

この場所に連行することにどんな意味があるのか。

カッソ、カッソ。

足音が聞こえてきた。反響で正確な音源が判別できないが、人が来たのなら、脱出の好機かもしれない。

リグヴェーダは息を静める。全身に緊張が漲る。神経を集中し感覚を鋭敏にし、暗い地下牢の状態を把握する。

やがて暗い影が通路の闇の中から姿を現し、牢屋の前に立った。そいつは備えられていたローソクに指先を軽く触れる。すると、灯が点いた。

一本だけの小さな明かりだが、その男の姿を照らすには十分だった。

黒衣の初老の男。銀髪が灯に反射して赤く彩られる。

「……ゲシュタル」リグヴェーダは呻くように呟いた。

「私の名を覚えていてくれたとは。光栄だ、リグヴェーダ王女」

言いつつ、鉄格子の前に一歩、進み出た。

バン！

その瞬間、リグヴェーダは鉄格子に体当たりするかのように突進し、隙間から右手を伸ばし掴みかかろうとしていた。

だが指先が触れるか否かのところで届かない。

「激情家なのだな。王宮の時も思ったが、一国の王女はもう少し淑やかにしたほうが良いと思うのだが」

ゲシュタルは表情を変えず、淡々としている。

「貴様、よくもサリナを」リグヴェーダは獰猛な猛獣の如き声。

「あれは、ボツズルがやったことなのだな」

「黙れ！ 貴様ら全員殺してくれる。絶対に殺してやる。必ずだ！」

「……殺す、か」一呼吸の間を置いてから「無理だな」

「なんだと?!」

「我々が営利目的の誘拐を行ったのだと思うのなら、それは間違いだ。念のために言っておくが政治目的でもない。私は魔導士だ。政治にも金銭的な利益にも興味はない」

「ならば、なぜ？」

「王家の血に連なる者なら、想像はつくのではないのかな？」

「どういう意味だ？」

ゲシュタルは踵を返し、元来た通路を戻り始めた。
そして背中越しに告げる。

「ご自分で考えることだ」

六章・第三日・1

ベドウィルム村を巡察団が出立してから次の日の朝、ジフは一通りの支度をして、ジャリスに跨り村を出立した。

村を出る彼を見送るものはなく、ジフは一人で大峡谷を流れる河の上流へ向かった。

彼の行動を気にする者はいない。いたとしても、狩に出るくらいにしか思わなかっただろう。かつては大峡谷随一の狩人と賞賛されたが、人間関係においては希薄だ。

一度は村を出て、十年後に戻ってきてからのジフは、可能な限り人付き合いを避けてきた、その結果だ。付き合いといえば仕事上程度で、彼自身親戚がいけないこともあって、自然と孤立する。おそらく、彼自身そのような結果になるとわかった上で、村人と接してきた。

なぜ、人を避けるのか。その理由は誰にもわからない。村を離れていた十年間の期間になにかがあり、それが、人を避ける原因かもしれないと推測することはできるが、結局のところなにもわからない。

だが彼自身、親身な付き合いをしたいと思う人間ではなかった。

大峡谷へ戻ってきたジフは、どこか接することを忌避したくなる雰囲気を持っていた。それは嫌悪ではなく、恐怖だと誰もが理解してマースム力を養子にした理由も不明で、誰にも説明したことはない。マースム力もその話をしたことはなかったが、村人は少年がなにも知らないからだと考えていた。

村人の何人かがジフを見ると、一応挨拶をする。ジフもそれに答えるが、双方、社交辞令でしかなかった。

ジフが村を出立してから半日ほど川の上流、北へ向かって進むと、

彼は河原から少し離れた岩にくくりつけてあった筏を確認した。

緊急時に河を移動手段として使うための筏が、大峡谷に点在する。使った者は少ないが、ベドウィルム村は勿論、点在する集落の者たちは、近くによると必ず点検を行うのが慣習となっている。

この、十人乗り程の筏は、少々老朽化しているが、しっかりしている。これなら、問題なく使えるだろう。

「ジャリス」

ジャリスを呼んで、筏とロープをジャリスの鞍と繋げる。そして自分自身もロープを引っ張った。

筏の下に丸太を敷いて、車の代わりにするため、人間一人とティダー一匹でもなんとか運べる。そして二人で力を合わせて、河の近くまで運んだ。

「これで良い。しばらく休んだら、また進むぞ」

ジャリスは無言。それはジフの言葉を待っているかのようだ。

「思い過ごしならいいんだが、ゲシュタルが関わっているかもしれない。もしそうなら、彼らは無事では済まないだろう」少し考えてジフは言い直した。「……いや、生き残れないだろう、だな」

巡察の騎士たちの案内に付いていくマースム力を、ジフは止めなかった。自らの技術を全て教えた息子は、今では立派な狩人だ。そして本人に自覚を持たせないようにしたが、もう一つの側面でも。

村人は認めようとしませんが、先日大人になった若衆の中では随一だろう。

巡察団の役に立つはずだ。

そして同時に、マースム力に外の世界と接触させる良い機会だと考えた。マースム力は大峡谷には馴染めなかった。村人は不条理なほどマースム力を認めず、そして人間関係から外されているも同然のジフも、そのことに関しては何力になれない。このまま大峡谷にいても、少年自身のためにはならないだろう。

これを機会に自らの力量に気付き、外の世界に興味を持ち、そして大峡谷から旅立つてくれることをジフは期待した。

大峡谷はマースム力のいるべき場所ではない。

そう考えてマースム力を彼らと共に行かせたが、しかし一晚経過して、不意にゲシュタルのことを思い出した。関連性を考えもしなかったが、あの男と騎士が同じ時期に大峡谷に現われたのは偶然だろうか。

こんな簡単なことに思い当たらないとは、やはり引退してからの長い時間が、自身を衰えさせたのだろうか。

あるいはあの男の存在を考えまいとしていたのか。

いずれにせよ、以前の自分からは考えられないことだ。

それがジフの不安をさらに増加させた。

大峡谷を河上へ向かって進んだ騎士の一行は、夕刻になってようやく神殿を目にした。

大峡谷の一つの大きな丘の頂に立つ、その存在の意味を忘れられた、古代の神殿。
マアバドゥ

石材で建築されている巨大な神殿の外観は、エンカータ王国に見られる建築様式とは異なり、巨大な箱のような印象を受けるそれは、寧ろアスベルト帝国の建築様式に近い。石材の色は灰褐色のようだが、今は落日が禍々しい朱に染めている。

いったい誰が、いつ、何の為に建築したのか、謎に包まれている。これだけの遺跡が今迄調査もされずにいたことも含めて。大峡谷が一種の閉鎖的な土地であることに起因しているのかもしれないが。

神殿が見えてきた所で、少し離れた位置に馬を止めると、パブロとセリナが徒歩で偵察する。敵に発見されないよう、神殿から一定の距離を保ち、岩陰に身を顰めながら窺う。

ここからは神殿に見張りの姿は見えない。だが、敵も同じように姿を隠して警戒しているのかもしれない。少なくとも自分たちが発見される確率を高めることは避けるべきだ。

「パブロ、気がついてる？」セリナが神殿の周囲を見渡しながら訪ねた。

「ああ」パブロは頷き「これだけハッキリしていればな」

魔術師であるセリナと、妖精族であるパブロには、入り組んだ大峽谷の地形と河に合わせて流れる、霊的な力が見えていた。

ハヤ・サーラ
霊脈と称される大地を流れる世界の生命力。川の上流から四つが神殿の位置で重なり、そして下流に向かって四方向へ別れて流れていく。交差点ならぬ複合交差点。

全世界でも希少な、ハラム霊穴。

「神殿が建てられるのも頷けるわね。神を奉るには最高の場所」

「なにかを召喚するにも最高の場所だ。名の無い魔獣も呼べるだろうな」

「ところで、リイジスだったかしら、あなたの妹」セリナは話題を変える。「その子の連絡はどうだった？ リグヴェーダ王女はまだ無事なの？」

つい先程、リイジスから連絡を受けたばかりだった。魔術師ならば、これだけ近くで意識したなら、念話を感じすると思っていたが、どうやらリイジスの声は聞こえなかったらしい。得手不得手の問題なのか、それとも人間の使う魔法は、妖精の超能力とは異なるためか。

逆の意味で意外だったのは、セリナは自身を隠蔽する技術に長けていたことだった。場違いに濃い青紫色のドレスのようなローブを着ていることから、こういったことは不慣れだと思っていたのだが、考えてみれば、セリナは一応王国軍に所属している。王国軍特殊部隊、魔術師団。魔法以外の訓練も一通り受けたはずだ。

そして、セリナのドレスは着用者の命令一つで、色を変える魔法的な機能が付加されていた。今は、薄い赤褐色の色になっており、黄昏時の大峽谷に迷彩して、すぐ傍にいるパブロにも見分けが付き難い。他にも防御力向上の魔法が付加されており、軽度な鎧程度と同等の防御力を持っているそうだ。他には動きやすい形状に変形する

機能など付いているらしい。

闘いと関係した印象のないメガネの美女は、戦闘に関する準備を入念に用意していた。昨夜気配を感じさせずに背後を取ったことといい、セリナの得意分野は戦闘なのか。

パプロはそんなことを考えながら、セリナの質問に答える。

「今のところ無事だ。儀式は明後日行われる予定だそうだ。助け出す時間は十分ある。というか、今夜には助け出せるな」

「無事助け出せるかどうかは、わからないけどね」

返り討ちにあう可能性を、少し皮肉を込めて揶揄する。

「悲観的だな。もっと楽観的に考えないと人生辛いぞ」

「あなたが楽観的すぎるのよ」

セリナは笑い、話は終りと手ぶりで撤退の意を示す。

パプロは了承して、二人はラッガートたちが待つ場所へ戻り始めた。

シエルダックとルマジヤーンは、少し離れた場所でラッガートとダラスが話をしているのを眺めていた。

ラッガートは村から連れてきた若者二人に、引き返すようにと指示を出したのだが、ダラスは不服らしく反論してきた。

王女の救出にも参加したいと言いつ出したのだ。

「ま、こうなる気はしてたんだがな」シエルダックは武器、装備の点検をしながら呟く。

旅の間は荷物の中に隠しておいたが、これから先は戦闘になる可能性が高い。万全の備えをしておく必要がある。

彼らが今回の任務において用意したのは、隠密性の高い防護服だった。布と柔らかい皮を合成させた生地を主として、そして一部の急所や手足といった箇所に、必要最小限に金属を使用した防具。軍では隠密行動を任務とする部隊が採用している防護服だ。防御力に

おいては金属製の鎧にはるかに劣るが、軽量で動きを損なわず、それほど体力を必要とせず、ほかにも音が鳴らないなどといった利点がある。

もつとも、銃器類が発達し採用され始めている今では、全身金属の塊のような鎧は使われなくなりつつある。動きにくく、体力の消耗が激しく、そして銃弾の的になりやすい。銃器類といった武器が主流になった今では、こういった特殊な防護服が主流になるかもしれない。

マースムカやダラスの着ている服も似たようなものだ。急所を守る箇所に金属ではなく、硬質の革を使用しているが、全体として似ているのは、設計の基本理念が同じだからだろう。狩人の行動と、軍の隠密行動は、酷似している。

騎士の三人は全員同じ防具だ。武器はそれぞれに合ったものを用意しているが。

シエルダックは背中に槍、腰に剣と拳銃。そして猟銃。
ルマジャーンは剣と拳銃。騎士に与えられる基本武器だけ。

ラッガートは授与された剣ではなく、刃渡り一メートルを超える特注の巨大な剣を持ってきている。そして同じく特注の盾。拳銃は持ってきていない。なぜなら我らが隊長は、拳銃が致命的に下手なのだ。練習において、的に命中したことが一度としてなく、教官からは「君は絶対に銃を使うな。味方が後ろにいても、同士討ちする可能性がある」と言われたほどだった。もし他の能力が秀でていなければ、隊長に抜擢されることは永久になかっただろうと思われる。そして子供の扱い方もあまり巧いほうではないらしい。

「わかっていたなら、なんとかしてください。隊長、困ってますよ」シエルダックの隣で同じように装備を点検しているルマジャーンが要求する。

だが、それは難しいだろう。村からここまで一緒にいて理解したが、ダラスという少年は、視野が極めて狭く、独善的だ。自分の考えだけが正しく、ほかの意見は間違いだと思い込んでいる。

「俺に言わねえでくれよ。あの年頃の子供は難しいんだ。筋の通った説得をしたって聞き入れやしねえ」

子供と聞けば、ダラスは憤慨したかもしれない。

幸い聞かれず、ダラスはラッガートに懇願していた。

「どうしてですか！？俺も手伝いますよ！」

「駄目だ。おまえたちは帰るんだ。ここからは……」ラッガートはこれ以上の説明は、マースム力に知られたくないことを聞かせてしまうのに気がついたのか、咳払いをしてごまかす。「とにかく、我々には色々事情がある。言うとおりに引き返してくれ」

「そんなことわかっています。でも、村の代表として引き返すわけには行きません。騎士さま」

頑として言うことを聞かないダラスに、ラッガートは明らかに苛立っていたが、ダラスは気がついていないのか、参加することを主張し続ける。

マースム力のほうは、先程から騎士の様子に気付いており、これ以上は本格的に怒りを誘発させるかもしれないと危惧しているようだ。

「ダラス。言うとおりにしようよ。騎士様には事情があるんだ」

控え目に忠告するマースム力に、ダラスは忌々しげに言い返す。

「ならおまえ一人で帰ればいいだろうが。なにも知らないくせに口を挟んでくるんじゃないよ。ちょっと話を知ったら興味本位で付いてきやがって。おまえのほうこそ迷惑なんだよ。さっさと帰りやがれ」

「あ、な……」

自分のことを棚上げした一方的なダラスの非難に、言葉に詰まるマースム力。

ダラスはマースム力に蔑んだ一瞥を向けた。内心マースム力を、少し脅せばすぐになにも言えなくなる腰ぬけと嘲っていることが、容易にその表情から読み取れた。同じ村の仲間だというのに、ここまで軽蔑し嘲笑するとは。

シエルダックはダラスの存在を本格的に危惧し始めた。この少年はここで追い帰さなければ問題を起こす。過小評価しかない英雄気取りは、必ず他者の足を引っ張る。

「そいつの言う通りだ。もう戻りな。案内してくれて助かったが、ここからは、俺たちの仕事だ。おまえさんの出番は終わりだ」

シエルダックは少し厳しい言葉でダラスを諫めたが、ダラスはしつこく食い下がる。

「そんなことはありません！」そしてなにを根拠に否定しているのか、ダラスは再びラッガートに「お願いします、騎士さま。俺にもリグヴェーダ王女を助けさせてください」

「ダラス！」ラッガートが警告を叫んだ。だが、遅い。

「あ！」不注意にも重大なことを口走ってしまったことに、ダラスは気付いた。だが、やはり遅い。さっそく問題を起こした。

シエルダックは額を抑えた。内心「あっちゃー」と呟いて。

「……リグヴェーダって」マースム力はその名前を思い出したのか
「第二王女のこと？」

「チッ」ダラスは忌々しげに舌打ちして「うるせえな！ おまえは帰るんだから関係ないだろうが！ 臆病者はとっとと消えろ！」

六章・第三日・2

「なに大声出してるんだよ」いつの間にかパブロが戻っていた。「静かにしろよ。神殿にいる連中に気付かれるだろ」

「パブロ、セリナ」ラッガートはその姿を確認する。

二人は先に神殿の様子を見に行くと、偵察に行っていたのだが、パブロにとってそれが、密告屋に誰にも合わせないようにする方便であることはすぐにわかった。だからセリナが同行した。そして、確率は低いが、万が一この男が敵の手の者だった場合にも備えている意味もあった。

パブロはセリナが同行することに反論することなく承諾し、二人は偵察に向かい、そして戻ってきたが、密告屋の姿はない。

「密告屋は？」

ラッガートはパブロに目を向けて尋ねた。返答は予想できたが。

「神殿に戻ったよ」予想通りだった。

結局密告屋とは何者なのか不明のまま。セリナに説明を求めて目を向けるが、彼女は肩を竦めて見ただけで、なにも言わなかった。それにどういう意味があるのかは理解できなかったが。

そしてパブロは続けて「神殿の中でなにかの儀式の準備が進められている」その断言を不自然に思うと、パブロはごまかすように付け加えて「……みたいだな。まだ王女は無事だ。生贄にはされていない」

「ああ……」ラッガートは呻いて額を押えた。

この男も簡単に王女のことを口にしてしまっている。

「なにを悩んでいるんだよ。もうマースムカにもばれたんだろ。こちにまで聞こえてたぞ」

「それはそうだが、ごまかそうとは考えないのか？」

「今更なにをこまかすって？　ここまで来たならもう関係ない。王女さまを助け出して帰れば一件落着だ」

「やっぱり、リグヴェーダ王女が誘拐されたんですね」マースム力は確かめるように口にして、しばらく考えてから「僕も手伝います。リグヴェーダ王女を助けるのを手伝わせてください」

揺るぎない意志を感じる言葉だった。それはダラスのように名誉や栄誉、報酬を期待するというものではなく、本当にただ助けたい一心からだとわかる。

「なんで？　おまえさん関係ないだろ。危険なことに係わらなくなつていいだろうに」

シエルダックが純粹に疑問を口にする。ラツガートも同じ疑念を感じていた。

マースム力という若者は、村人が思っているような愚鈍ではない。今迄の行動や、ルマジヤーンやシエルダックたちとの会話を聞けば、寧ろ賢いことが良くわかる。王女が誘拐されたということを知った時点で、これから先どれほどの危険が待ち受けているか、理解できるはずだ。

だがマースム力は、それを理解した上で、参加したいと言っているのだ。

「どうかしたのかい？」ルマジヤーンも疑問に思い聞いた。

マースム力が答えるより早く、ダラスが口を出す。

「いや、なんでもないんですよ。すぐにこいつは帰らせますから」マースム力の襟首を掴むと無理やりセネ口のところへ引きずる。そして耳元で忌々しげに「臆病者がでしゃばるんじゃないよ。とつとと帰りな」と突き倒した。

「あつ」マースム力は体勢を崩して転んだ。

さらにダラスは地面を蹴って、マースム力に砂を浴びせかける。

「ブモオウ！」セネ口が闘牛のような雄叫びを上げてダラスを威嚇した。

「な、なんだデメエ」ダラスは後退った。

ティダを相手に生身の人間では敵わないというのは、マースム力の説明だった。その草食動物的な外見からは想像し難いが、ティダは熊より強いようだ。

そしてダラスは、勇者にあるまじきことに、助けを求めてラッガートたちのほうへと目を向ける。

だが、彼らはダラスの行動を非難する、咎めるような視線を向けるだけ。

ルマジャーンがダラスに目を向けずにその横を通り過ぎて、マースム力を助け起こす。

「大丈夫かい」

「……はい。ありがとうございます」

その様子を見たダラスは困惑している。

「な、なんで？」なぜマースム力を助けるのか理解できないようだ。ダラスは根本的に誤解し勘違いしている。ベドウィルム村で、マースム力が蔑ろにされ、不当に扱われてきたのは、顔の火傷の痕のこと以上に、他所者であるということに起因しており、マースム力自身の人格はあまり関係がない。

そして王都からやって来た、外部の人間であるルマジャーンたちには、そういった感情や先入観はない。

だがダラスは、マースム力がどんな人間にも嫌われているのだと思いつ込んでいた。醜い右顔は誰もが嫌悪するものだのだと。

しかし普通に見る者なら、その右目と火傷の跡は、おぞましきよりも、その時の苦痛を思つて憐憫の念を抱く。少なくとも、面面向かつてあざ笑ふことなどしない。

そんなことも彼は理解できていないのか。

「あ、あの、俺はただこいつを村に帰そうと思つて……」

ダラスは言い訳のようなことを口にし始めるが、ラッガートは取り合わずに言い捨てる。

「俺はおまえも帰れと言っているんだ。危険なんだ！」

所詮は少しの道案内にすぎず、そして偶然王女のことを知られて

しまったので情報流出を防ぐために連れてきたにすぎない。これ以上のは期待していないし、王女救出作戦を目前とした今では、寧ろ邪魔でしかない。

「いや、でも」

場の空気は感じ取っているのに、ダラスはまだ引こうとしない。今迄自分の思い通りにならないことなどなかったことが、彼に引き際というものを理解させないでいる。

「帰るんだ。わかったな」ラッガートはこれ以上の論議を許さない。だが、マースムカが彼の前に立つ。

「お願いします。僕にも手伝わせてください」

その醜い右目にある、真摯な瞳に、ラッガートは強く拒絶することができなかった。ダラスのように自己顕示欲の塊であれば気にせずには捨てることもできるが、純真な思いを持った者に彼は甘い傾向にある。

「人の命がかかっているのに見過ごすわけにはいきません。リグヴェーダ王女がなにかの儀式で生贄にされようとしているんでしょう。目の前で人が殺されそうになっているのに、なにもせずに引き返すなんて、そんなことはできません。お願いです、僕に微力を尽くさせてください」

ラッガートは返答に困る。単純に考えれば人数は多いほうが望ましい。だが、この二人は本来無関係だ。国と民を守る騎士として承諾するわけにはいかない。

「連れて行きましょう。二人とも」セリナが口を挟んだ。

ラッガートは驚いて「セリナ、なにを言っているんだ？ この二人は無関係なんだぞ。危険に晒すわけにはいかない」

「置いて行っても、自分たちだけで勝手に神殿に侵入するでしょう、この調子だと。それなら、私たちが付いていたほうがまだましだわ」ダラスが追隨して「そうですよ。俺は絶対に役に立ちますから」

セリナが役に立つとか、そういうことは一言も言っておらず、意味としては寧ろ逆なのだが、ダラスは自分が魔術師に認められてい

るのだと思った。

ルマジヤーンがラッガートに決断を求める。

「どうしますか？ ラッガート隊長。俺は二人が付いて来るのに反対はしません。リグヴェーダ様の救出が最優先事項です。人員は多ければ、それに越したことはありません」

言外に、彼らが犠牲になるのを厭わないことを含めていた。時として、普段の穏やかさからは想像も付かないほど冷酷になれる、この精神力が彼の強さの一つで、ラッガートはそのことを知っている。だから、驚かずに彼の意見を聞いていた。

シエルダックは反論する。

「俺は反対です。この二人は、戦いの訓練なんか受けちゃいません。言ってみりゃ素人だ。一緒にいたら、足手纏いにしかない。その辺に縛り付けてでも、置いて行くべきです」

そう考えるのが当然だ。もともと村人の話を聞く限り、それが話半分だとしても、足手纏いになることはないと思われるが。

問題は、無関係の者を危険に巻き込むかどうか。

パプロは両手を掲げて広げて見せた。意見は特にないという意味表示か、あるいはどうでも良いという意味か。

ラッガートに視線が集まる。皆がその決断を待っている。

「……そうだな。大事なのは唯一つ。それを行うのみ」マースム力とダラスに向かって「わかった。二人に協力を頼もう」

「やった！」ダラスは思わずガッツポーズをとった。

「ありがとうございます」マースム力が礼を言う。

シエルダックが髪を掻きながら呟く。

「マジかよ。参ったな。大丈夫なのか？」

ただでさえ不安が山積みなのに、さらに不安要素が増えてしまったことを懸念しているのだろう。

「話は決まったか」パプロが皆の不安を払拭するかのようになり、どこか陽気な声で「じゃあ詳しい説明をするぞ」

パプロが神殿の図を簡潔に地面に書き始めた。

大峡谷に多く見られる傾斜の激しい丘の頂に神殿は建てられている。頂まで三百メートルほどの高さの丘は、元々は中州なのだろうが、河は長い年月の末に移動しており、周囲に水は流れてない。北側の傾斜は比較的緩やかで、神殿の正面まで、ほぼ一直線の長い階段が続いている。

南側は半分ほどから下は崖になっており、稲妻状の階段があるが、神殿がある頂上まで続いていない。ただ、崖の中腹に小さな出入り口があり、神殿の地下に当たる場所に通じているようだ。

「まず、王女の居場所は、神殿の地下牢だ。丘の内部が元々空洞で、そこを利用する形で地下牢やその他の部屋や通路なども建築されたらしいな。その地下牢のどこかにいる。地下牢に辿り着きさえすれば、王女もすぐに見つかるだろ。問題は神殿の内部だ。北側から入ると、大聖堂というか、礼拝堂のような広間があつて、神殿の各所に通じている扉が四つある。そのうち奥の右側の扉に入つて、通路を真っ直ぐ進めば、地下牢に通じている階段と一応繋がっている。ただし、見張りがいるから注意しろ」

パプロは、正面から地下牢までの通路に線を引いた。

「それで、南からなんだが、中腹にある扉から入ると、通路になっている。ここは少しややこしい構造になっている」

迷路状態の通路を描く。

「この通路というか、迷路を抜けると、筒状の広い空間とその壁に設置された階段、巨大な螺旋階段だと思えばいいんだが、そこに繋がっていて、その下が地下牢に繋がっている」

そしてその迷路にも地下牢への線を引いた。正直わかっていても迷いそうだ。

「これが、地下牢までの経路。ただ、神殿内部は不明な箇所が多い。地上部分は一階だけで構造も単純なんだが、地下は五階まである上

に、複雑だ。密告屋は一応、正面から地下牢に続く通路だけは調べたが、他の部分はわからん。迷ったら、自力でなんとかするしかない」

北側は簡単だが、見つかりやすい。

南側は見つかり難そうだが、通路は複雑。

しかも、判明している通路にしても、見張りがいることは確実だ。「神殿内部に詳しい奴がいれば助かるんだがな」シエルダックが期待せずに、望みを口にした。「そうすれば、もう少し安全に行けるかもしれないんだが」

「ないものを言っても仕方あるまい」ラツガートが高望みを捨てるように忠告する。

「……あの」マースム力が控えめに手を上げた。「僕が少し知っています」

全員が同時にマースム力に目を向けた。

「知ってるって、なんで？」ルマジヤーンが尋ねた。「神殿には誰も近付かないんじゃないのかい？」

「……その」少し言い難そうだったが、「一人で来たことが何度かあります。中にも入りました。だから中腹からの扉からなら、地下牢までの道がわかります」

パプロはマースム力に親近感を持った。危険と思われる場所にあえて入りたがるのは男のさが。まじめで危険には近付かないような人間に見えたが、規律を意味もなく破るところはやはり男だ。

「おまえ！ 長老の言いつけを守らなかったのか！ この神殿には近付くなって言われただろうが」

ダラスが非難するのは、規律や戒律を守らなかったからではなく、マースム力が活躍するのが許せないためのようだ。

「まあまあ」パプロは宥める。「いいじゃねえか。おかげで少しは楽になりそうなんだしょ」

それでダラスは騎士の手前もあって引くことにしたようだ。先程マースム力を苛めたために顰蹙を買い、これ以上覚えが悪くなるこ

とを危惧したのかもしれない。そして内心、名誉挽回を考えているだろう。

ダラスが沈黙した隙に、パプロは説明を再開する。

「敵の数は約三十人。傭兵が十人ほど。魔導士が、たぶん四人」

「魔導士^{カーヒン}」セリナが繰り返した。

魔法を犯罪に使用したため、世界魔術師連盟から、危険人物に指定された魔法使い。

パプロは「だが、もっと厄介なのは、麻薬服用暗殺者がいる」^{ハーション}

「楽園の手の者か」ラツガートが微かに慄く。

世界最大の暗殺組織で育成された狂信者^{ダーウル}。その精神は信奉する神に捧げられ、その肉体は麻薬で侵し、常人離れた身体能力を手に入れた者たち。

「そうだ」パプロはラツガートに首肯すると、次にマースム力に目を向ける。「魔導士と麻薬服用暗殺者のことは知っているか？」

マースム力は少し怯えた表情でうなずく。

「知っています」

「そうか」

辺境の村の少年がどういった経緯で知ったのかはわからないが、裏稼業関係では有名な連中だ。一般人でも、知っていてもそれほどおかしいことではない。

「とにかくどういう経路でそんな連中を雇ったのかわからないが、とにかく真っ向からやり合ったら、まず俺たちに勝ち目はないな。人数はこちらが少ないうえ、向こうは化け物揃いだ」

「救出作戦は隠密行動で行わなければならないな」とラツガートは慎重論。

「なに言ってるんですか！ 神殿にいる連中なんか全員殺せばいいんですよ！ 化け物なんか俺が倒して見せます！」

ダラスが意気込んで反論すると、全員顰蹙の眼を向けた。それでダラスはバツの悪そうに沈黙する。

こいつは学習能力がないのか。パプロは内心呆れる。さっきセリ

ナが二人とも連れて行けばいいと言ったが。緊急時のための、使い捨ての駒として連れて行くつもりなんじゃないのかと、勘繰りたくなってきた。かといってここに置いていても、セリナの言う通り、おそらく勝手に行動し、たぶん事態を悪化させる気がする。

「基本作戦はこうだ。敵に知られずに、王女を救出し、撤退する」
ラッガートは念を押すように皆に説明した。おそらく、ダラスに念を押したのだろう。

「だな」パプロはラッガートに同意して「俺の説明はこんなところだ。他になにか聞きたいことはあるか？」

全員を見渡すが発言する者はいなかった。

「では、二手に分かれよう」ラッガートが指示を出す。「半分が北側から。残りが南側から侵入。神殿に入る時間は合わせよう」

「南側に到着するのは三十分ほど遅れる」パプロは補足する。

「正面はそれぐらいの時間を見て行動開始だ。さて、メンバーは……」

「俺は騎士さまと一緒にいきます」

ダラスが真っ先に口を開いた。勿論騎士に活躍を見てもらうためだろう。

ラッガートが溜息をつく。

「俺とダラス、それからシエルダックとセリナが正面からだ。ルマジャン、パプロ、それとマースム力。裏から回ってくれ。マースム力、二人を地下牢へ案内してくれるか」

「はい」

「王女を見つけたら、すぐに脱出しろ。状況次第では、俺たちを見捨てても構わん」

ダラスはぎょっとしたが、他の者は気にしなかった。

「良いんだな」パプロは確認する。

「構わん。王女の安否が第一優先だ。皆もわかったな」

ダラスを除いた全員が首肯する。

「では、夜になるのを待ってから行動開始だ。闇に紛れて侵入する」

そして、彼らは神殿への侵入を開始した。

そんな彼らを崖の上の影から、銀髪の男、ゲシュタルが眺めていた。

六章・第三日・3

神殿の奥に位置する祭壇の間で、儀式の準備が進められている。

十人の傭兵が、怪しげな装飾品を規則正しく並べ、床に複雑な模様を描いている。本来の仕事とは程遠いが、こういった魔法関係の仕事の経験が全くないわけでもないの、彼らは黙々と作業をこなしていた。

指示を出しているのは、きらびやかなドレスで着飾った小柄な女だった。顔に化粧を厚く塗っており、そのため年齢が判別しにくい。二十をすぎたばかりのようでもあるし、老婆のようにも思える。声も甲高くて判断材料にならない。

その脇に二人の人物が控えている。道化師のような真つ白な仮面をつけており、ローブの色は、右は赤、左は青の、性別不明の人物。背丈が異様に高く、大男がそろっている傭兵たちの誰よりも高い。指示を出している女の部下らしいが、詳しい関係は誰も知らない。

その女がヒステリックな声を上げた。

「ボツブル！ それは壊れやすいんだ！ もっと大切に扱っておくれ！」

緑と褐色の斑模様の鉄帽と、同じ模様の上着を着た包帯男、ボツブルは大きな瓶を地面に置くと、おどけるように踊って見せる。

「ンなこと言っただけよ、俺は元々警備とか、誘拐とか、敵を殺すとか、不審者を殺すとか、侵入者を殺すとか、殺したほうがいい奴を殺すとか、殺せそうな奴を殺すとか、殺したい奴を殺すとか、そういうために雇われたんだぜえ。こんな雑用なんかやってられっかってんだよ。パレス、なんとかなんねえのかよ。」

「そんなことは私じゃなくて、ザーラデイスに言っておくれ。」

「あーあ。人手が足りなくてこんなことする羽目になるなんて、ザ

「ラディースの旦那もケチだよなあ。金に物言わせて現地住民でも雇えばいいんだよ。こんな傭兵連中じゃなくてさあ」

その傭兵連中は無言で作業を続けている。彼ら十人の傭兵は、歴戦の兵士というわけではなく、ほとんど儀式の準備をさせる作業員として、ザーラディースに雇われたようなものだ。

それは彼ら自身自覚しており、なにより魔導士や楽園の暗殺者と係わることを忌避して、黙々と作業に集中する。時折、怯えたよう
にお互いの視線を交わして、安全を確認するだけ。もし、金額が低
ければ、絶対に引き受けなかっただろう。楽園の暗殺者は、傭兵と
いった稼業の者たちには恐怖の対象だ。たとえ雇用人を同じくして
味方の関係になつているとしても。

「愚痴ばかり言つてしないで早くしておくれ。人手が足りなくてたださえ遅れているんだから」

パレスが甲高い声で楽園の暗殺者に文句をつける。

「だったら、その」と仮面の二人を指し「愛想の悪い奴らも動か
せよ」

「こいつらは肉体労働には向いてないんだよ」

「俺だつて体弱いんだぜ。ちよつと無理をすると、ウツ、ゲホツゴホツ」咳き込むまねをして「うう、持病の腰ヘルニシン痙攣症の発作か」

傭兵団はお互いに視線を合わせて、なぜ腰ヘルニシン痙攣症で咳が？ と少し疑問に思った。そもそも腰ヘルニシン痙攣症ってなんだ？

「あんたの持病は頭の中身だろ。咳なんか出るもんかい。この麻薬中毒者が！」

「お、なんか差別発言」

「きい
い
い
い
い
い
!」

ふざけた会話ばかり続けるボツズルに、パレスは癩癧を起こしたのか、頭を掻き篁り耳障りな奇声を上げた。

「もう良い！ わかった！ あんたは王女様の見張りに行っておく

れ！ 後はこいつらだけでやる」

「ラッキー。じゃ、俺は行くぜ」スキップしながら祭壇の間から姿を消す。

「王女様に手を出すんじゃないよ！ 生贄に使うんだからね！」パレスはボツブルが消えた先に叫んでから「ああああー！」大声を上げて作業をしている一人に向かって走る。そしてスパンと頭を引っぱたと「あんた！ ここ間違えてるよ！」

そして戸惑う傭兵をそのままに、自分で間違えている部分を、猛烈な勢いで修正し始める。

「パレス！」

そこへ、唐突な呼び声に驚いたのか、筆を誤り大きくずれてしまい、歪な文字が出来上がった。

「キイイイイ！ 間違えちゃったじゃないのさ！」そして呼んだ本人、ついさつきりグヴェーダ王女のところへ向かったはずのボツブルに「なんだい！？ あんた王女様の所へ行ったんじゃなかったのかい！？」

「そんなことよりゲシュタルの旦那から連絡だ！ 侵入者が神殿に入っただってよ！」

ザーラディースはゲシュタルの報告を受けて動揺していた。

「どういうことだ？ 事前工作が失敗したということなのか？」言ってから自らの失敗の言い訳をしようと「いや、完璧だったはずだ。少なくとも私は目をつけられていなかったはず。それに、もし私を疑っていたとしても、こんなに早くここに辿り着けるはずがない。そうだろう？」

ゲシュタルは首肯する。

「そうだ。おまえが失敗したわけではない。それに、あの者たちのような存在が現れることは、ある程度予想していたことだ」

「なに？」

「独断で行動を起こしているのだ。リグヴェーダ王女近衛隊長ラッガートはな」

「なんだと！？」

「人員も正規の者ではないようだ。魔術師団の一員がいる」

「魔術師団？！ なぜ軍の人間がいるのだ？！ 騎士団とは組織系統が違うだろう」

「魔術師の名はセリナ。ボツズルが殺した侍女を覚えてるか？」

「ああ、たしか」記憶の片隅に聞いた覚えのある名前を掘り出す。酷似した名前を。「サリナかソリナだったな。そうか、姉妹かなにかなのか？」

「そのようだ。そして、王家警護隊リグヴェーダ近衛隊のルマジャーンとシエルダック。あと三人はわからんが、臨時で雇った者だろう。おそらく、そいつらから情報を買収したのだ」

二人知っている若者がいたが、それは説明するのは止めた。どうでも良いことだ。

「裏組織の人間か。確かに、非合法で動く奴らの情報網ならば、大峽谷にリグヴェーダを連れて行ったということくらいは知られたかもしれない。だが、それを知っている者に、ラッガートがこんなにも早く接触するなどということがありえるのか？」

裏組織、犯罪組織と呼ばれる、非合法で動く彼らは、同時に利益だけで動く。たとえ王国の存亡がかかっていたとしても、王女が誘拐されたとしても、自分たちに益がないのならば動くことはない。王女の拉致は、彼らに無関係だからこそ、動かないと判断した。そして騎士団や警察には、彼らと接触している者は少なく、情報流出を抑えるために捜査に制限を加えているとなると、彼らから情報を得ることはまずありえないのだ。それがなぜ？

「それだけ、騎士団が優秀だということだ。ラッガートと言うべきか」

「くそつ。おのれラッガートめ。命令通りおとなしくしていれば良

いものを」

「そういきりたつな。おまえはここで見物していればいい」

「どうするのだ？」

「始末する。そのために楽園の者を雇ったのだろっ」

マースム力たちは入り組んだ岩肌を登っていた。丘の南側は斜面というより崖と言ったほうが良く、階段も風化してほとんど崩れており役に立たない。足場の悪い斜面を、両手足を使って登る。馬やティダでは上れないので、作戦を練っていた場所に留めて置いてきた。それに神殿内部では邪魔になる。

中腹のところで石造りの扉を見つける。長い年月が経過しているにも関わらず、ここはほとんど劣化していない。つい昨日作られたばかりのようだ。中に入ってみても通路は劣化しておらず、色が褪せていることも損傷もない。

マースム力は二人を案内して、迷路のように複雑な通路を進み、やがて空間が上から下へ続いている、大きな筒のような形の場所に出た。壁に沿って階段が続いている。半径十メートルほどの巨大な螺旋階段は、柵がないため縁に近付くと転落する危険がある。二三十メートル上の天井からシャンデリアのようなものが吊るされて明かりを灯している。最下層でもなにか明かりがあり、目視で下まで五十メートルほど。

ここもやはり真新しく、ルマジヤーンが怪訝に壁を改める。

「これはどういうことなんだ？ 壁も床も新品同様だ。今神殿にいる連中が修繕でもしたのか？」

「いいえ」マースム力は否定する。「前に来た時もこうでした。ここだけじゃないんです。誰もなにもしていないはずなのに、神殿その物が昨日建てられたような状態に近いです。埃とかは積もっていても、風化したり損傷した形跡は一切ありません。僕も不思議に

思っているんですが」

「耐久強化の魔法でも掛けられているのか？」

「そうだ」パプロが肯定した。「だが、強度を高めた魔法じゃない。時間を止めているんだ」

「時間を止める？」マースム力は意味がわからず首を傾げる。

「ああ、時間が止められているから、原因と過程と結果が繋がらない」紫煙をゆつくり吐き「意味がわかるか？」

「全然」ルマジャーンが首を振る。

「つまり、こういうことですか。例えばこの壁に傷をつけようと、こう」

マースム力は拳で壁を叩くふりをしてみせる。

「こんなふうに衝撃を与えてみる。これが原因。だけど、壁その物に時間が存在しないから、叩いたから衝撃が入るという過程と、衝撃が加えられたから損傷を受けるという結果が、現れない」マースム力は考えながら「叩くという行為、損傷を受ける原因は時間の進んでいる場所では存在するけど、それから先、連鎖して続くはずの現象は、時間が止まっているこの建物では発生しない。原因だけで止まってしまうんですね。時間が止められているから、原因だけで終結する」自分で説明しながらマースム力は納得して「ああ、そうか。そうですね。だから原因から、過程、結果が繋がらないんだ」

パプロは煙草を手にしたまま口に付けず、マースム力を呆けた表情で見つめていた。ルマジャーンも同じ顔をしている。

マースム力はなにか気に障ることも言っただのかと不安になる。

「あの、僕、変なこと言いましたか？」

「いや」パプロは首を振り「良くすぐにわかったな、ちょっとしか説明してないのに」

「頭良いんだね。俺なんか本当に全然わからなかったのに」

ルマジャーンも褒めるが、呆然とした表情なので褒めているようには見えない。呆れているようにも思える。

二人はそれだけ、この少年の理解力と、頭脳の優秀さに驚いてい

るのだが、マースムカにわかったのは、一応二人が褒めているということだけだった。

「はあ、ありがとうございます」マースムカは生返事をしてから、そしてパプロに「煙草の火が根元まで来ていますよ」

「あ？」パプロは煙草を見ると「アチィ！」

慌てて煙草を捨てて火の粉と灰を振り払う。

そして落ち着くと「なあ、この件が終わったら、本当に俺と一緒に大峡谷を出ないか。街には学校がある。そこで正式に勉強するといい。おまえなら、たぶん優秀な成績を収められるはずだ」

「そうだ」ルマジャーが口を挟む。「騎士育成学校はどうだ。騎士学校への入学を僕が推薦する。いや、隊長に頼めば、すぐに入学できるはずだ」

「いや、えっと」二人の急な申し出にマースムカは戸惑う。「でも、僕は峡谷の外に出たことがないです」

少し嘘だった。意識したことではなかったが。

「それは、だから、これから出るんだよ」とルマジャー。

「そうそう、外にはすぐに慣れるって。あ、金の心配か？ それも大丈夫だ。仕事の紹介するって。苦学生に理解のある経営者とか知ってるんだ」

「あんたの紹介なんか怪しいことこの上ないだろ。犯罪すれすれの情報屋のくせして。俺が面倒見るよ。騎士団は国王認定のエリートだぞ」

「えっと……」マースムカは少し思案して、無難な答えを捻り出した。「考えておきます」

「おう、ちゃんと考えて置けよ」パプロが念を押した。

「絶対だよ」ルマジャーがさらに念を押した。

二人の勢いに少し引きつつ「は、はい」

辺境の村で輝く才能を、金の卵を産む鳥を見つけたのだと二人は確信していたが、マースムカは二人が自分になにを期待しているのかわからなかった。だが、村を出るといふ考えが再び、そして現実

的に湧き上がり始めていた。

そして、物質の時間を止める魔法を知っているパブロに関する疑念などは、今後の自分の身の振り方に考えが及んで、思いつきもしなかった。

「よし、話が纏まったところで、行くぞ」パブロが話を切り上げた。「えーと、下でいいんだよね？」ルマジャーンがマースムカに尋ねる。

「あ、はい」マースムカは一瞬地下牢への道のことを聞かれたのだと理解できなかったが、すぐに「下です。前に来た時、牢屋のような場所があるを見つけました。いえ、ようなではなく、牢屋だと断定してもいいと思いますが」

「よし、行くぞ」

「よし行こう、じゃないよ。この三馬鹿トリオ」

不意に、酷く耳に障る甲高い声が響いた。パブロは即座に懷の拳銃を取り出す。

「誰だ!？」

ルマジャーンが誰何の声を上げて剣の柄を握り、マースムカは周囲を見渡している。

だが、パブロは上を見上げていた。マースムカとルマジャーンはそれに気が付くと、視線を辿る。そこには、三人の人間が空中に浮いていた。

年齢が判別不明になるほど厚く化粧を塗ったドレス姿の女と、その両脇に道化師のような白い仮面を装着した、赤と青のローブの人物。

三人は音もなく下降し、同じ視線の位置に浮かぶ。

「あんたたち、あんな大声で喋り腐っついて気付かれないと思っているのかい。脳みそに蛆でも湧いてんじゃないの? イーヒツヒ

ッヒッ

真ん中にいる女が、耳障りな甲高い笑い声を、広い螺旋階段に響かせる。

「おまえら何者だ!？」その正体は明確だが、ルマジャーンはあえて誰何した。「おまえらが、王女をさらった一味だな」

「だったらなんだっていうんだい？ 捕まえるのかい？ 殺すのかい？」

マースム力は殺すという言葉に、明らかに動揺した。考えていなかったのか。リグヴェーダをさらった者たちと戦うことになることは予想していても、命を奪うことまでは。

だが、パプロはすでに覚悟を決めていた。ルマジャーンもだ。二人にとっては当然のことで、考えるようなことですらなかった。

「おまえらの出方次第ではだ!」ルマジャーンはマースム力の心境を知らず言い切る。

「三対三。数合わせは丁度だな」言いつつパプロは、二丁の六連装拳銃を両手に構える。

発見されたからには、彼女たちを迅速に処理する必要がある。援軍が来る前に。可能ならば自分たちの存在が伝達される前に。

「いいや」女が否定する。「六対三だね」

螺旋階段の上から、三人の影が降りてきた。それは通常の重力の法則に従い落下し、壁を跳躍して、パプロたちを挟む位置に着地する。緑黄色の斑模様の上着を着た男が、前と後ろに一人ずつ。螺旋階段の中心を挟んだ反対側の位置に、もう一人。三人とも、暗殺者が好んで使用する武器、カタールを両手に装備している。

「ほらね」女は自慢げに腕を広げる。「あんたたちを始末して、おし、ま、い」

まずいな。パプロは胸中呟く。どうやら、偶然発見されたのではなく、神殿に入る前から見つかったにらしい。でなければこのような対応はできない。シエルダックのほうも、敵に遭遇しているだろう。

もつとも、対処法は変わらないが。

「お、し、ま、い、じゃねえよ」口調を真似してパブロは「くたばるのはテメエのほうだ、この、ババア」

「ば、ババアですって！」

女は一瞬で癇癪を起こした。

「キイイイ！ やってお終い！」

六章・第三日・4

ラッガートたちは、夜の闇に紛れて正面から侵入する。

松明の灯火が要所に設置されているため、明かりに困ることはないが、反面敵に見つかる可能性が高い。光に入らないように点在する柱の影への移動を繰り返し、やがて神殿内部へ入った。

いかなる技術で建築したのか、一つ数トンはある石材で構築された神殿は異様に広く、支柱をほとんど使っていない。両脇の壁に連なっているが、飾りとして作られたものらしく、本来の機能を果たしているとは思えない。常識的に考えれば、この神殿は足踏み一つで崩壊してしまう。だが、幾百年の時を重ねても、崩れた場所は勿論、ほとんど劣化は見られない。現在の技術では建築不可能の、そして古代の技術でもありえない、存在するはずのない建造物。

現在、周囲に人の姿はなく、不気味なほど静まり返っている。神殿にいたはずの、リグヴェーダ王女を拉致した連中の姿もない。

正面からすぐに礼拝堂、もしくは聖堂のような広間になっており、如何なる神が奉られていたのかわからないが、向かって正面、聖堂の奥、神が奉られる位置に、信仰の偶像なのか、三つの石像が設置されており、さらにその奥に壁画が描かれている。教会などにある精密な物ではなく、寧ろ抽象画のような感じた。

壁画も石造も同じ姿をしている。

奇妙な形状の剣を掲げた鎧姿の男。

大きな鎌を手にした黒いローブの人物。

そして大きな一對の白い翼を背から広げる女性。

どういった意味があるのかわからないが、神殿が建築された目的には、この三人がなにか重要な役割を持っているのだろう。祈りの対象か、慈悲を司る救世主か。

「なんか、静かですね」ダラスが駆動式短弓を構えながら呟く。「誰もいないんじゃないんですか」

「いえ、パプロの情報は確かよ。どこかにいるはずよ」

ラッガートは怪訝に「信用しているな。おまえは奴のことを一番疑っていると思っていたのだが」

「ちょっと色々あつてね」セリナは曖昧な返答。

ラッガートは訝しく思ったが、深くは聞かないことにした。今考えなければならぬのはリグヴェーダ王女の居場所、地下牢への道を進むことのほうが先決だ。

足を進めようとする、不意に後方から重厚な音が響いた。

「なんだ?!」

振り向くと、入口の巨大な両扉が閉じようとしている。

ラッガートはすぐに走って閉まるのを止めようとしたが、到達する寸前、大きな音を立てて閉じてしまう。そして閉じた門は巨漢の筋力でも全く動かない。

退路を断たれた。この意味することは一つ。敵に侵入を気付かれた。ならば次に来るのは。

シエルダックが警告の声を上げた。

「上だ!」

二つの人影が柱の天井近く出張り付いていた。

「な、なんだ?!」ダラスが思わず声を上げる。

二つの人影は発見されると、手を離して落下してきた。そしてラッガートたちの前に着地する。十メートル近く落下したはずだが、その衝撃を意にすることなく難なく着地したことから、なんらかの手段で身体強化を行っている。

魔法か薬物。魔導士か麻薬服用暗殺者か。

両手に暗殺者が多く用いる特殊な形状の短剣、カタールを手にしていることから、この二人は楽園の麻薬服用暗殺者だろう。身体能力が大幅に強化されている、恐るべき相手。

「出やがったな」ダラスは歓喜を含んで叫んだ「どうしますか、騎

士さま。こんなのが出てきたってことは、俺たちが入ったことは完全にばれてますよ」

敵に侵入を知られることが、状況としては危険だということを理解しているとは思えない声に、ラッガートは苛立ちを感じつつ、背中の大剣を抜き、盾を構える。

「戦うしかないな」

王女が捕えられている牢につながる扉へ行くには、まず敵を倒さなければならない。だが、敵が自分たちの侵入をすでに知っているのなら、それに対処した行動をしているはずだ。自分たちが王女まで辿り着くのは不可能だろう。ならば、ルマジャーンたちが救出するのを期待し、そして可能な限り彼らに有利な状況にしなければならない。

すなわち、敵を引きつける。

「了解」シエルダックが猟銃を構えた。

「それしかないわね」穏やかに言いながら、セリナは両手に短剣を構え、それは青白い輝きを放ち始める。

「ダラス、おまえは後ろに下がっている」

ラッガートの指示に、ダラスは不服をあらわに駆動式短弓を構えた。

「俺も戦います」

ダラスは駆動式短弓を敵に向けて、引き金を二度引いた。発射された矢は狙いを違わず敵へ直進したが、奇怪な姿の敵は、体一つ分移動しただけで避けた。

そして、それがきっかけとなったのか、それまで踊るように佇んでいた敵は、奇妙な形状の短剣、カタールをかざして、四人へ疾走してきた。

「わ！ わわ！」ダラスは攻撃を簡単に回避されたことで、完全に腰が引けた。

「うおおおおお！」逆にラッガートはその敵へ向かって突進する。
「ぬううん！」

右手の盾で、敵の体当たりのような一撃受け止め、同時に大剣を左片手で振り下ろす。

薬物の作用によって強制向上された筋力による一撃を止めることも、一メートルを超える剣を片手で振ることも、並みの筋力では不可能だが、いかなる過酷な修練を積み重ねた結果か、ラッガートはそれを意図も容易く扱う。

だが大剣の強力な一撃は、驚異的な反射神経と瞬発力によって、後方へ跳躍して回避され、入れ替わりに一人の敵が迫り、カタールを突く体勢で構える。

「行け！」

セリナの一声と共に投げられた一本の短剣が、青白い輝きを放ち、ラッガートの頭蓋骨が刃で貫かれるより速く、高速度で敵に向かった。

セリナの短剣は、ラッガートを突き刺そうとした敵の短剣に命中し、一本を粉砕、そして衝撃によって敵は大きく吹き飛ばされる。「やった！」ダラスは快哉を上げる。

しかし敵は空中で体勢を立て直し、着地すると間髪入れずに跳躍し、ラッガートの腹部に飛び蹴りを食らわせた。

「ぐっ！」

弾き飛ばされた勢いで、壁に叩きつけられたラッガートは、衝撃で一瞬呼吸が止まり苦悶の声を出す。だが、鍛えた腹筋は蹴りの威力に耐え、たいした怪我はないようだ。すぐに起き上がり剣と盾を構え直す。

そしてラッガートを助けた短剣は、青白い残光を残しつつ、ブーメランのように弧を描いて、セリナの手元に戻った。

これがセリナの魔法か。ラッガートは初めて目にする彼女の魔法に感心する。短剣の攻撃力を増幅し、自由自在に操る。飛び道具としての特性を持ち、しかし投擲後に軌道を修正し変化させるため、予測防御は難しく、そしてその場から動かずとも回収可能のため、何度でも攻撃できる。個人としては恐るべき攻撃法。

その短剣を受け止めたセリナは「ダメね。衝撃力を高めてあるから普通なら気絶してもおかしくなかったのに。痛みをほとんど感じてないみたい。直撃で即死させないと倒せそうにないわね」

「じゃ、今のを連続でやればいいじゃないですか。すぐに命中しますよ」

ダラスの案もセリナは却下する。

「それもダメ。見てみなさい」

楽園の暗殺者の動きは、先程よりもさらに俊敏になり、セリナの短剣を警戒してか、的にならないよう動きまわる。

「今のは様子見だったのよ。命中させること自体、ちょっと難しいわね。それに体力も薬物で、肉体の限界まで大丈夫でしょうし」

「冗談だろ！ あんなやつどうやって倒せばいいんだ！？」ダラスが悲鳴のような声を上げる。

矢を回避する身体能力を持っている相手をどうやって倒すか。攻撃は命中しなければ効果がない。

ラッガートが指示を出す。まず厄介な動きを封じなければ。

「シエルダック、左側へ回り奴らの動きをかく乱しろ。無理に攻撃する必要はない。少しでも引き付ければそれでいい。俺は右へ回り一人の動きをなんとかしてでも止める。動きを止めたら、セリナ、おまえの魔法で攻撃してくれ」

「了解」シエルダックが答える。

「わかった」セリナが首肯する。

「よし」ラッガートは一呼吸置くと「行くぞ！」

シエルダックが合図と同時に左側へ走った。同時に猟銃を発砲するが、弾丸を回避された。どうやら銃口の向きと引き金を引く動作を視認して回避しているようだ。先にダラスの矢を回避したのも同じ理由だろう。

しかしシエルダックは構わずに連続発砲する。動揺して発砲をやめれば、逆に相手に付け入る隙を与えてしまう。シエルダックは冷静に相手の動きを予測しつつ、発砲している。この経験の豊富さに

裏付けされた行動の的確さが、彼の優秀さを示している。問題は本人に自覚がないことだが。

ともかく、麻薬服用暗殺者の一人はシエルダックが引きつけている。その時間が勝負だ。

ラッガートは左側へ走り、大剣をもう一人の暗殺者に向けて大きく振り下ろす。意図的に動作を大きくし、防がれるようにした。

狙い通り敵はカタールを交差して防御した。続けて腹部へ蹴り込んできたが、ラッガートは腹筋に力を込めて耐える。

そこで突然、ラッガートは大剣を捨て、暗殺者が短剣を持つ腕にその手を回し、さらに首をはがいじめにした。

「ぬううん！」

唸り声を上げて、腕の筋肉を最大限に発揮し、力任せに暗殺者の動きを止めた。

ラッガートの意図を察したのか、もう一人の暗殺者が攻撃を仕掛けようとした。

シエルダックが弾切れになった猟銃を捨てると、槍に持ち替えて攻撃し、妨害する。

「させるか！」

「やれ！」

ラッガートが叫ぶと同時に、セリナは短剣を暗殺者の頭部へ目掛けて放った。

バカンッ！ 頭蓋骨が粉碎する音。魔法の力が込められた短剣は、暗殺者の頭部を吹き飛ばしていた。

「やった！」シエルダックが快哉の声を上げる。

だが、その喜びが些細な隙となったのか、引きつけていたもう一人の暗殺者に槍を掴まれ、驚異的な臂力で振り回され投げられた。

「うわああ！」

地面に叩きつけられたシエルダックは、しかし大したダメージはなかったのか、すぐに立ち上がり、猟銃を構える。

そして暗殺者は一人では不利と見たのか大きく間合いを取り、シ

エルダックから奪った槍をへし折った。仲間を殺されたことに怒りを感じているのだろうか。

だが、攻撃するでなく、動きを止めたままだ。

セリナは手に戻った短剣を、再び投擲する体勢に構える。

残り一人。どうやら麻薬服用暗殺者は身体能力こそ高いが、しかし技術的には一般の兵士と大差ないようだ。身体能力に頼っていて、技術を疎かにしている。油断せず冷静に対処すれば、問題のない相手だ。

ラッガートは改めて敵を見据えた。

しばしの静寂。

「ほう、たいした者だ。楽園の麻薬服用暗殺者を倒すとは」

唐突に、抑揚を欠いた感情をまるで感じない声が聖堂に響く。

「ゲシユタルの旦那あ。感心してる場合じゃねえって。一人やられちまったんだぜ。ゲッゲッゲッ」

続いて不快な笑い声が響く。

「やはり、薬で身体能力を向上させているだけでは、熟達の戦士には敵わぬか」

ラッガートと他の三人は、声のする石像の方向へ目を向ける。

壁画の前にある三つの石像の下に、いつの間にか二人の間が立っていた。

「貴様ら何者だ？」

正体に見当は付いていたが、ラッガートはあえて誰何する。

「ゲッゲッゲッ」麻薬服用暗殺者と同じ緑黄色の斑模様の上着に、鉄帽をかぶり、全身に包帯を巻いた男が、奇怪な笑い声を上げた。

「なんか、王宮で同じこと王女さまに訊かれたっけなあ」

今の言葉、リグヴェーダ王女を拉致した実行犯であることを示している。

「おつやー？ なーんか王宮で殺した女と同じ顔の奴がいるぞあ。ひよっとしてえ、生き返っちゃったとか？」ボツズルは一拍置いてから「ンなわけないっかー。ゲーゲッゲッゲッゲッ」

「おまえが……」セリナは激情を押えるように歯を食いしばり「おまえがあの子を殺したのね」

「さあねえ」ボツズルは軽く踊るようにその場でターンしてみせると「ボクちゃん殺したサリナお姉ちゃんのお名前知りましえーん」

サリナはその瞬間、全身に布を巻いた男へ向けて短剣を投擲した。軌道に青白い残光を描き、一直線にボツズルへ。

だが、命中する直前、バチンツという破裂音と共に、ナイフが弾かれる。

「な!？」

ラッガートは驚愕する。魔法による防壁。セリナと同じ魔法使いなのか。

「ボツズル、ふざけるな」黒衣の銀髪の男が、叱責するというにはあまりにも感情を欠いた声で窘める。「次は守らないぞ」

いや、魔法使いなのは、正確には魔導士なのは、この銀髪の男だ。「いやー、感謝感激雨あられ。ゲシュタルの旦那は、私を守ってくれる素敵な、お、ひ、と」

「ふざけるなといった」やはり抑揚のない声。

「ふざけているのは貴様のほうだ!」ラッガートは男に向かって吼えた。「王女をさらったのはおまえたちだな!」

「だとしたらどうする?」

「王女を返してもらう」

「そ、そうだ!」ダラスが「おまえらおとなしく捕まるんだ」

包帯のような布を巻いた男、ボツズルは肩を竦めて銀髪の男に目を向ける。

銀髪の男、ゲシュタルはやはり感情のこもらない声でラッガートに答えた。

「やってみるがいい。できるのならば」

そしてボツズルが周囲に向かって叫ぶ。

「あいよー。みんなー、出てきてちょーだーい」

どこか陽気なボツズルの声と同時に、上から七つの人影が飛び降

りた。ボツズルと同じ緑黄色の斑模様の上着姿の男たち。ただ、包帯は巻いておらず、鉄帽もつけていない。

「俺の部下七人でーす。えーと、俺と、旦那と、最初にいたやつを入れてえ」ボツズルは指折り数えて「うわ！十対四！俺たちって無茶苦茶卑怯者かな？　ゲーゲツゲツゲツゲツ」

そしてボツズルはカタールを両手に構える。殺人という愉悦に、お菓子を目の前に差し出された子供のように舌なめずりしながら。

「冗談だろ」ダラスは性質の悪い冗談でも聞いたかのような表情で

「二人だけでもあんなに苦労したのに……」

それは他の三人の心境を代弁していた。

愉悦の笑みでカタールを広げるように構えた。

「んじゃま、遠慮なく楽しむとしようか、ナー！」

六章・第三日・5

「ハッ！」

リグヴェーダは鉄格子を、全身の力を込めて蹴り込む。綺麗な体勢の蹴りは申し分ない威力があり、力も体重も分散せず打撃点に集中している。武術指南は喜びで手を叩いて褒めるだろう。

だが、当のリグヴェーダは足が痛いだけで、鉄格子はびくともしなかった。

「なんなのだこれは!？」

王女は忌々しげに叫ぶ。鉄格子は見た目の細さとは違い、異常なまでに頑丈で、何度蹴り込んでも、鍵が外れるどころか、変形することさえない。奴らが駆けつけてくるのを覚悟で、強攻策に出たというのに、結果はこの通りだ。

牢の材質が、パプロの言う時間の停止した、理論上破壊不可能の物質で製造されていることを彼女は当然知らない。

「おのれ、この」王女らしからぬ罵倒を数言吐いてから「落ち着け」と自分に言い聞かせる。

どうする？ どうすればいい？

思いついた脱出方法は全て試した。最後には力任せの手段まで行った。だが、全て徒労に終わる。見張りがいないことを訝しげに思っていたが、なるほど、これなら見張りなど必要ない。この牢に絶対の自信があったからだ。

つまり、手詰まり。そして新しい考えは思いつかない。

「ああ、冗談ではないぞ。若い身空で命を散らすというのか」
命を取られると確認したわけではないのだが、リグヴェーダはほぼ確信していた。他に拉致された理由が思いつかないのだ。

王族が古代神人の末裔であるのは、王国の人間なら誰でも知って

いる。

そして魔法使いなら、その血の単純で凡庸な利用方法も。魔法儀式における生贄にして、最初の犠牲者。

「う……うあああ!!」

雄叫びを上げてリグヴェーダは椅子を持ち上げると、何度も鉄格子に叩きつける。武術武芸、技の修練云々など微塵もない、ただ力任せに叩きつけるだけ。

椅子が碎けるまで続けたが、当然牢を破壊することはできなかった。

王女はしばらく荒い息をし、やがて呼吸が落ち着くと椅子の足を捨て、諦めたように力なくうなだれ、床に腰を付ける。ここ数日の疲労が一気に押し寄せてきた。

今迄の十六年間の人生で出会った数々の人々が思い浮かぶ。

その強さに闘姫と称されたリグヴェーダだが、このように成す術もなく死に迫られたことは今迄になく、それでも修練で鍛えた強靱な精神力で脱出しようと試み続けたが、疲労はついに精神にまで及んだ。

すまない、サリナ、そなたの仇は討てそうもない。すまない、父上、親より先に旅立つなど親不孝の極みだ。すまない、母上、しょせん義母、血など繋がっておらぬなどと心を傷つけることを言ってしまった。すまない、姉上、あなたの話をもっと聞いておくべきだった。すまない、兄上、そなたのことを嫌っていたわけではなかったのだ。すまない、シャリン、妹のおまえをもっと可愛がってやれば良かった。

すまぬ、皆。

最後に、最初の友人のことが思い浮かぶ。

生涯の伴侶になる者として出会い、だが婚礼も行われることなく短い時間しか共有できなかった少年。

もうすぐそなたのいる場所へ行くことになりそうだ。向こうで再会したら、私はそなたの名を呼ぼう。夢の中ではいつもそなたに名

を呼ぶことができなかったから。私が名を呼んだのなら、そなたも私の名を呼んでくれるか？ そなたのいる場所では、お互いの名を呼び合えるか？

彼女の目から一筋の涙が流れた。

「……嫌だ」リグヴェーダは呟いた。「嫌だ、死にたくない。私はまだ死にたくない」

私がそなたの場所へ行くにはまだ早すぎる。そうである。私はまだ死にたくない。私はまだ生きていたい。助けてくれ。頼む、助けてくれ。

「王女さま、泣いているの？」

不意に状況にそぐわない、明るく楽しげな声がした。一瞬それが、亡くなった友の声に聞こえた。

「泣いてると、けっこう可愛いんだね。いつもは、こう、目尻を上げててさ、ちよつと怖い感じなのに」

「……リイジス？」

リグヴェーダは顔を上げて、すぐ目の前にいるものを信じられないような表情で見つめた。

「そうだよ」

金色の髪をバンダナでまとめ、同じ色をした瞳は面白いものを見たように楽しげだ。少女とも少年とも取れる可愛らしい顔立ちは、元気が満ち溢れる子供特有のもの。身長もリグヴェーダより頭二分低い。

しかしその背に蜻蛉のような羽がある。そして、それは飾りでも服装の意匠でもなく、少女の背から直接生えている本物の羽だ。

彼女を知らない者なら、自分の見たものが信じられず精神状態を疑うかもしれないが、リグヴェーダは、それが疲労から来る幻覚ではないとわかっていた。

リグヴェーダが私的に雇っている諜報員であり、火の国から人間^{カーフ}の世界に来訪した妖精^{ドゥン}。

すなわち、炎の民^{シンニ}。

「どうしたの？ 王女さま」おとぎ話に出てくるような妖精の少女は、楽しいいたずらが成功した時のような、どこか意地の悪い笑みを浮かべて尋ねる。

「リイジス……そなた、どうしてここに？」

「王女さまが悪い奴に捕まったって聞いたから助けに来たんじゃない。それ以外になにがあるって言うのよ？」

手に持っている地下牢の鍵を、手で回して見せる。この絶望の色を表すような薄暗い地下牢から脱出する、まさに希望の鍵。

「そ、そうか」リグヴェーダは涙を袖で拭くと「それならそれで、もっと早く来るがよい。いらぬ労力を使ってしまったではないか」

「うわ、さっきまでメソメソ泣いてたのに急に強気」

「うるさい！ それよりも早くここから出してくれ」

「はいはい」言いつつ鍵を開ける。

軽い金属音が鳴ると、今迄の苦勞が嘘のように、鉄格子の扉は開いた。

「よし」リグヴェーダは低い扉をくぐると「リイジス、そなたに感謝を」

「いいっていいって」リイジスは屈託なく笑うと、手をパタパタと振り「王女さまはお得意さまだからね」

リグヴェーダは笑い「出口はどこだ？」

「こっちだよ。付いて来て。皆も来てるから」

マースムカが駆動式短弓を赤いロープの人物に狙いを定めたが、引き金を引かない。狙いを定めたまま動きは止まり、その手は震えている。

「マースムカ！ 早く撃て！」

パプロは叫んで促すが、マースムカは答えずに、震えているだけ。明らかに人を殺すということを一度として経験したことのない人

間の反応。おそらく殺人を考えたこともないだろう。そんな人間にとって、殺人を犯すことは恐怖以外何物でもない。

戦いが始まってからまだ一分程度。

ルマジャーンは緑黄色の斑模様の上着の男と斬り合っている。拳銃には自信がなかったのか、混戦で味方に命中することを恐れたのか、剣を選んでいる。

だが、カタールを武器とする敵の身体能力は、人間には本来有り得ない力を発揮している。おそらくは薬物の効果。

「こいつらが麻薬服用暗殺者か」パプロは忌々しげに呟く。

ルマジャーンは剣を選んだことを後悔しているかもしれない。だが、拳銃を使ったとしても、やはり後悔しただろう。

パプロは他の者たちを牽制するように、拳銃を両手に持ち、連続発砲するが、命中しない。薬で強制的に向上させた反射神経で、指の動きを見た瞬間には、弾道からその身を外しているのだ。

「退け！」

ならばと、パプロはマースム力を押しやり、赤いロープの人物に狙いを付けると、引き金を二度引く。

弾丸は狙いを変わらず赤いロープの魔導士に命中する。だが、赤の魔導士は命中しても平然として、悠然と空中に浮いたままだった。ロープの命中した箇所を軽く手で払うと、弾丸が二発落ちる。少し間があってから、階段の遥か下から軽い金属音が聞こえた。

魔法による防御効果をロープに付加させている。

「クソッ！ 魔導士が」

「キャハハハハ」ドレスの女は耳障りな笑い声を上げる。「あんたの豆鉄砲じゃ効きやあしないんだよ。わかったかい、このトウヘンボク」

「うるせえババア！ その口塞いでトイレの穴に突っ込んでやるから覚悟しとけよ！」

啖呵を切って見せたが、確かに攻撃が効かないのでは勝負にならない。麻薬服用暗殺者には弾丸が命中しない。銃口を魔導士に向け

たままパプロは齒を食いしばる。

「やらないのかい？　なら、こつちからいくよ！」

ドレスの女の声と共に、控えていた赤と青の魔導士が、懐からなにかを取り出す。刃渡り一メートルほどの大鋏。

そして女魔導士は両手に三十センチほどの鋏を持つ。毎日研いであるのか、刃は鋭利な輝きをし、刃先は針のように鋭い。

「殺人鬼か、おまえらは」

どこか呆れた口調のパプロは左手で六連装拳銃を構えたまま、右手でもう一丁の拳銃薬莢を捨てて、器用に片手で弾を込め始める。女魔導士が弾丸の再装填を止めようとしなのは、ローブで防御できると確信しているからだろう。

女魔導士は急いで弾込めしているパプロを愉悅の笑みで眺めながら、その言葉をあつさりと肯定する。

「そうだよ」うつとりと夢見る口調で「この鋏で何十人切り刻んだかしら。旧王都じゃ、切り裂き魔^{リップ}、なんて呼ばれたこともあったわねえ。そうそう、前に切り刻んだ子は好かったわあ。まだ十歳くらいの男の子だったよ。こう、ね」鋏で切る動作をして「少しずつ手の指を切ってあげたの。そうしたら、その子、ちよっと切るたびに悲鳴を上げてね。あの声、あの顔。ああん、思い出しただけでもゾクゾクするわあ」

「こいつ、狂ってる」マースム力が戦慄して後退る。

パプロも似たような感想だった。

「デメエ、頭イカレてるんじゃないのか」パプロは吐き捨てる。「王女もそうやって殺すつもりだったのか？　そうやって魔獣召喚の生贄にするつもりだったのか？」

「なに！？　召喚のことだけならまだしも、魔獣のことまで知っていることに、驚愕した。『どうしてそのことを知っている？！』」

「知りたいなら力づくで来な！」パプロは弾込めを終えた二丁の拳銃を構える。

「キイイイイイ！　なんて生意気な小僧なんだい！　いいとも力

尽くで聞き出してやる！　じっくり拷問にかけてやるから楽しみにしな！」

女魔導士は叫びながら、両手を広げるようにして二つの鋏を構えると、滑るように迫ってきた。

不意にパブロは不適に笑みを浮かべた。

「こいつならどうだ」

言うが否や、二丁の拳銃を収め、代わりにジャケットの懷にしまっていた散弾銃を構えた。その間、わずか半秒。

「イイ！」ドレスの魔導士は意表を付かれたのか、驚いたような悲鳴を上げる。

同時にパブロは引き金を引いた。近距離で発射された散弾は、的を完全に捕らえた。

「ギアッ！」

短い悲鳴を上げ、十数発の小さな鉛球が全て命中した女魔導士は、魔法で重力を消してあったのが災いして、錐揉み状態で反対の壁にまで飛ばされ激突する。

「よし！　こいつなら効く」

重力中和と魔法防御を同時に行っているのなら、魔法防御は案外強固ではないかもしれないと考え、手持ちの武器の中ではもっとも威力のある散弾銃を使った。そして考えは正しかった。魔法防御で威力が半減され、致命傷に至らなかったものの、散弾の衝撃と壁に激突したことによって、ドレスの女は気絶した。

彼女を庇う位置に移動した赤と青の魔導士に、パブロは続けて狙いを定める。

「さあ、来やがれ」

一方ルマジャンのほうでは、かなり苦戦を強いられていた。リグヴェーダやラッガートのような武術の達人ならばともかく、剣術

に関しては凡才の彼には、薬物を使用した暗殺者相手に渡り合うのは無理だった。

乱戦では銃は味方に当たる確立が高いと思い、とっさに剣を選んだのだが、やはりまだ比較的腕の良い拳銃を使うべきだったかもしれない。しかも他の二人の暗殺者は逃げ道を塞ぐことに専念しているのか、まだ動いていないのだ。あの二人が加われれば、確実に終わる。

「マースムカ！ 援護してくれ！」

ルマジャーンは助けを求める。

「で、でも……」

マースムカは未だに躊躇っていた。殺人に恐怖しているのだ。理屈では自分たちが正義と呼んでも差支えなく、そして彼らはリグヴェーダ王女を殺そうとしている、まさに邪悪な人間だ。だが理解はしていても、感情は自身の思い通りにはならない。

人の命を奪うということは、とてつもなく精神力を必要とする。特に最初は。たとえそれが自分を、そして誰かを平然と酷薄に殺すことができる者であっても。

そしてマースムカは、今迄に殺し合いを考えたことがないのは、その様子を見れば明らかだ。

「マースムカ！ 頼む！ 援護をしてくれ！」

ルマジャーンは叫びながら、マースムカをここに連れてきたことを後悔した。シェルダックの言い分が正しかった。素人である彼らは足手まといにしかない。そして、このままでは全員が殺される。

「ダメだ！ やっぱりできない。人を殺すなんてできないよ！」

マースムカが拒否すると同時に、ルマジャーンの肩を暗殺者の刃が切り裂く。

「グッ！」

だが浅く、たいした傷ではない。剣を振るのに問題はないだろう。しかし、迷い続けた拳句に戦いを拒絶したマースムカが、ようや

く駆動式短弓の引き金を引いた。狙ったのは太股の部分だ。足を止めれば、殺さずに無力化できるかもしれないと思ったのかもしれない。

一本の矢が、風を切り、暗殺者の足に迫る。

眼の端にマースムカの動きを捉えたルマジャーンは、切られた腕で剣を横に薙いだ。狙ったのは首。暗殺者の動きを一瞬でも止めれば、矢が命中する。そうなれば状況が逆転するかもしれない。

暗殺者は、まさか切られたほうの腕で攻撃するとは思っていないのか、今迄とは違い大きな動きで、体を屈めて避けた。

そして、ルマジャーンはそこまで意図したわけではなかったが、その眉間の位置は、マースムカが狙った太股の位置だった。

鈍い音がした。

「あ！」マースムカが思わず声を上げる。

暗殺者の眉間には矢に取り付けられた羽が、まるで装飾品のようにつき立っていた。後頭部からは鉄の鏃が覗いており、まるで仮装舞踏会の扮装ように、頭に矢が突き刺さっていた。だが、これは玩具の小道具を使ったからではない。本物の殺傷力のある弓矢だ。

眉間から後頭部にかけて矢が突き刺さった暗殺者は、まるでそれを確かめるように手を眉間に伸ばす。そして、バランスを崩して、あるいは平衡感覚自体失っていたのかもしれないが、螺旋階段の淵から足を踏み外し、縦に回転しながら落下した。

「よし！」ルマジャーンが快哉の声を上げる。「よくやった！マースムカ！」

だがマースムカは、まったく喜んでいなかった。

ルマジャーンの賞賛も耳に届いておらず、もはや震えは手だけではなく、全身に広がって満ちている。

「あ……違う、足を狙って。僕は……こんな、殺すつもりじゃ……」

意味を成さない単語の羅列。

殺した。

人を殺したくない。人殺しなんてなりたくない。

だが、もう人を殺した。人を殺してしまった。足を狙ったなど、ただの言い訳でしかない。自分の撃った矢が人を殺したのだ。

僕は人殺しになった。

人を殺すということはこんなに簡単なことなのか。

あまりにも簡単で、簡単すぎて、マースム力は全身に恐怖が満ちて動けなくなった。

「マースムカ！」パプロは叫ぶ「気を抜くな！ 敵はまだ四人残っている！」

その言葉どおり、残り二人の暗殺者は、仲間が殺されたことをきっかけとしたのか、二本のカタールを構えつつ、間合いを狭め始めた。そして主を倒された赤と青のローブの魔導士も、大剣を鳴らし、散弾銃の的を定めないように空中を旋回しつつ、攻撃する隙を狙っている。

パプロは続けて「腹を決める！ 俺たちは殺し合いをしているんだ！ 殺らなければ殺れるんだ！」

「でも、でも……」

「危ない！」

ルマジヤーンがマースム力の体を押しやり、次の瞬間鋭い金属音が鳴り響く。暗殺者の一人がマースム力を攻撃し、ルマジヤーンが防いだのだ。ルマジヤーンの剣と、暗殺者のカタールが鏖競り合う。「この、野郎！」

力任せにルマジヤーンは暗殺者を押しやった。ラッガートの筋力があれば押し返すのは簡単だったろうが、ルマジヤーンの力では一歩押しやるのが限度だった。それに片腕に受けた傷から血が一滴一

滴流れ落ちている。かなりの痛みを感じているはずだ。

そこにもう一人の暗殺者が加勢する。ルマジャー目掛けてカタルを突き出した。

マースム力が咄嗟に駆動式短弓で受け止めて防いだ。意識しての行動ではないだろう。その表情には恐怖が溢れ、体勢も力も安定したのではなく、マースム力は暗殺者にそのまま力任せに床へ押し倒された。

そして、暗殺者はもう一本のカタルで喉を突き刺そうと、刃を振り上げた。

「させるかよ」

パプロは拳銃を撃つ。距離三十センチの至近距離。暗殺者は、信じられないことにそれを避けた。蛙のように跳ねると、マースム力たちがやって来た通路のほうへ下がる。

「クソッ！　なんでこの距離で当たらないんだよ、化け物が！」

マースム力がすぐに立ち上がって駆動式短弓を暗殺者へ向けるが、その指は引き金にかかっておらず、全身が小刻みに震えている。それは殺されそうになったからなのか、殺したという精神的な衝撃によるものなのか。

どうする？　パプロは胸中自問する。

ルマジャーは腕に負傷し、戦闘能力が低下。

マースム力は初めての戦闘経験のためか、殺し合うということに怖気づいてしまって役に立たない。

暗殺者一人とドレスの女は倒したが、それもほとんど偶然だ。

現在四対三。劣勢なのは変わらない。そして気絶したドレスの女はいつ意識を回復してもおかしくはない。

このままでは負ける。

どうする？　考える。この状況を打破するなにかを、打開策を考えろ。

六章・第三日・6

ズダン！ 突然床が踏み鳴らされる音が響いた。

ルマジャーと罅迫り合いをしていた暗殺者が、突然弾き飛ばされ壁に叩きつけられた。だが暗殺者は痛みを感じていないかのよう
に、すぐに跳ね上がるように立ち上がり構えるが、続けて刃のよう
に鋭く早い回し蹴りが、その首筋を捕らえ、暗殺者は脳震盪によっ
て昏倒する。

その蹴りは、ルマジャーではなかった。そしてパブロでも、勿
論マースムカでもない。

ルマジャーは突如加勢した人物の名前を口にする。

「リグヴェエーダ様！」

それは金色の髪が燦然と輝く王女。

「リグヴェエーダ様！ ご無事でしたか！」ルマジャーは状況を忘
れて歓喜の声を上げた。

「うむ」リグヴェエーダは力強く肯く。「ルマジャー、そなたも無
事か？」

「はい、なんとか」

「あたしもいるよ！」頭上から場にそぐわない可愛らしい少女の声
が響く。そして重力による落下速度以上の加速で、人影が落下して
きた。それはルマジャーたちの高さの位置の空中で停止すると「
えーい！」

突然、螺旋階段に光が満ちると、赤と青のロープの魔導士が、ど
ういうわけか苦痛の咆哮を上げた。

「「グオオオオオオ！」」

「パブロ！」声が続けて叫ぶ。

「おう！」

答えつつ、パブロは散弾銃を構えると、引き金を何度も引いた。散弾は赤と青の魔導士を捕らえ、パレスと同じく、壁まで吹き飛ばし気絶させる。

「ナイスタイミングだ！ リイジス！」

「へへ」蜻蛉のような羽を広げた、少女の姿をしたなにかが、笑って鼻を擦る。

パブロは笑い返すと、通路に残っている最後の一人に散弾銃を向けた。

「さて、どうする？ ハッシュャン 麻薬服用暗殺者」

最後に残った暗殺者は、劣勢と見たのか、脈絡もなく背を向けると、全力で逃げ出した。

「あ！ 待ちやがれ！」

パブロが間髪入れずに散弾銃を撃つが、二発で弾切れを起こす。すぐに弾込めを行うが、その時にはすでに通路を曲がって姿が見えなくなった。

「クソっ」パブロは追い付くのは無理と判断したのか、追い駆けるのは止めた。そして改めてリグヴェーダへ向き直ると「よう、王女さま。助かったぜ」

「礼を言う必要はない」リグヴェーダは首を振り「私のほうが礼を言わねばな。パブロ、リイジス、そなたたちに感謝を」

「気にするな。お得意さまだからな」パブロは軽く手を振ってみせる。

ルマジャーンは話に付いていけず、怪訝に「あの、リグヴェーダ様。この男と知り合いなのですか？」

「ああ。私的に雇っている諜報員だ」

簡単でたいしたことのないような説明に、一瞬意味がわからなかったのか惚けた顔をして、それから驚愕の表情へと変わる。

「なんですって?!」

「ククッ、驚くのも無理はないか」リグヴェーダはパブロを見て笑い「怪しいことこの上ないからな。この男の容貌は」

パブロは頭上を見上げて「うわ、助けに来てやったのに、その科
白」

「たまにはゴーグルを外せ。私はおまえがゴーグルを外したところ
を見たことがないぞ」

「これは俺のポリシーだ。絶対に外さん」どういうポリシーなのか。
「ちよつと待てよ」ルマジャーンがパブロに「あんたなんで最初か
らそれを言わないんだ？ 王女の諜報員だって教えれば、もっと人
員だって増やしたし、他にも色々できただろう」

「最初に説明したとして、それを信じたのか？ 素性もわからない
男の言うことをだ」

「それは……」その通りだ。全てを明かせば逆にまったく信じなか
っただろう。だが「いや、まだあるぞ。その少女はなんだ？ 羽が
生えているぞ」

「ああ、リイジスカ」パブロはなにかを考えてから「こいつが密告
屋だ」

「は？」ルマジャーンはぽかんと口を開く。

「だから、この妖精が、例の密告屋なんだよ」

「よろしくうつ」リイジスカが空中に浮遊したまま、明るい笑顔で敬
礼のポーズをとる。

パブロは方をすくめて見せて「わかっただろ。姿を出さなかった
理由が。妖精をおまえらが信用するとはとても思えないからな」

「あ、ああ、そうかもな」ルマジャーンはまだ釈然としないものを
感じたが、とりあえず後回しにすることにした。今はリグヴェーダ
王女の安否が先だ。

リグヴェーダは「とにかく。ルマジャーン、そなたにも命をかけ
て救出に来てくれたことに礼を言わねばな」リグヴェーダは彼の手
を取り「そなたこそ忠義の騎士だ。感謝を」

ルマジャーンは赤面して「いえ、そんな。俺だけじゃなく、隊長
とシエルダックさんも」

「来ているのか？」

「はい、分かれて侵入したんです」説明してから彼は思い出し「ああ！ 隊長たちと早く合流しないと。リグヴェーダ様を助け出したんだから、もうこんなところに用はない！」

「だな」パプロは首肯して「早いとこ脱出するとうるか」

「うむ」リグヴェーダも肯いて「ところで、その者は？」

マースム力を見て尋ねた。そこで初めて、明確にマースム力の顔を目にし、不意に表情をなくした。それは自分自身がなにを感じているのかまるでわからないかのような。

「ああ、紹介を忘れていました」その様子に気付かずにルマジヤーンはマースム力を紹介する。「この少年は、近辺の村の者で、リグヴェーダ様の救出に志願したものです。名前はマースム力。彼にも労いをかけてやってください」

マースム力は困惑しているような、それでいて懐かしむような、そんななんとも言えない奇妙な顔をしていた。だが、一国の王女に直に対面したことによる、敬愛や畏怖ではないようだ。妖精に氣を取られているわけでもない。

ルマジヤーンは怪訝に「マースム力、どうしたんだい？」

リグヴェーダはそのマースム力の顔を、信じられない者を見たかのような、強張った表情で凝視していた。

「どうされました？」ルマジヤーンは改めて王女に目を向けてその様子に気付き「あの、この者の右目は恐ろしいかもしれませんが、心はとても優しい少年ですので、ご安心を」

一緒にいて気にならなくなっており、いつしか忘却していたが、少年の顔右半分は火傷の痕があり、特に右目は瞼が異様に捲れ上がって、眼球が半ば飛び出ているように錯覚する。

初対面のリグヴェーダは嫌悪や恐怖感を抱くかもしれない。最初の自分と同じように。

だが、リグヴェーダは不快とは感じていないのか、逆に少年に足を進めてその顔を良く見ようと、自ら顔を近付けた。

「あ、あの？」

戸惑いの声と共に後退るマースムカは、その顔を王女から背けようとしますが、リグヴェーダはまるで逃がすまいと両手の平で添えるように掴んで、丹念に観察するように見つめた。

「リグヴェーダ様？」

そんなに興味を引くのだろうかとルマジヤーンは怪訝に思う。だが、ことによれば、かなり失礼な行為をリグヴェーダがするとは思えず、少年のなにが王女の興味を引いたのか、疑問に思うだけ。

「……？」

パブロとリイジスも、王女の行動の意味がわからないのだろう、その表情には疑問が浮かんでいる。

リグヴェーダは呟く。

「まさか、そんな……」

目の前にいる少年は、年齢を重ねていても、けして忘れることのなかった、忘れようとして忘れることのできなかった顔だった。その右側が火傷を負い、成長して変化していても、見誤ることも見間違えることもない。

だが、ありえない。ここにいるはずがない。存在するはずがない。なぜなら、死んだはずだから。

「おまえは……」

リグヴェーダは少年の名を呼んだ。

マースムカは胸の鼓動が一つ大きく鳴った。

気が付けば、飛び退るようにリグヴェーダの両手を振り解いた。

「……どうしてわかったの？」

それはリグヴェーダに聞いたのではなく、自分自身の問いかける

ような言葉だった。

ガタンツ！ 突然大きな音が鳴り、マースム力たちが通った通路が、天井から下ろされた鉄格子によって塞がれた。

「なんだ！？」パブロは驚愕で叫ぶ

そして螺旋階段の反対側から甲高い声。

「なにを和んでんだい。この、大馬鹿集団！」

気絶していたパレスが、いつの間にか目を覚ましていた。そして壁に隠されていた起動レバーの一つを引き、神殿に仕掛けられていた罠の一つを作動させたのだ。

「あんたたち、よくもやってくれたね。この綺麗な柔肌に痣ができちまうじゃないのさ！」

「もう目を覚ましたのか」ルマジヤーンが言う。

そしてパブロは「っていうか、どこが綺麗な柔肌なんだ？ 厚化粧満載のくせして」

「キイイイイ！ なんて失礼な奴らなんだい。こうなったら」
パレスは他の二人の魔導士に「アハマル、アズラク、さつさと目を覚ますんだよ」

その声に、倒れている赤と青のローブの魔導士は、何事のなかったのかのように起き上がり、再び空中を浮遊し始めた。

「よし、じゃあ、いくよ」

パレスは悪意に満ちた笑みを浮かべると、もう一本のレバーを引いた。

「いくよって、なにがだ！」パブロが叫ぶ。

パレスは説明せずに浮遊する。

「せいぜい楽しませておくれよ」

全員が嫌な予感がした。そして嫌な予感に限って的中する。

螺旋階段の最下層から、断続的な機械音が響き始め、それは徐々

に近づいて、早くなっていく。

「なんだ!?」ルマジヤーンは誰にと問わず聞いた。

だが、それに答える必要はなかった。

階段が最下層から上へ向けて順番に、壁の中に吸い込まれるように収納されていく。このままでは足場を失い、遙か下へと落下することになる。

「やばい! 逃げる!」パブロが叫ぶと、全員が階段を駆け上がり始めた。「なんでこんな仕掛けがあるんだ!」

「キャハハハハ!」パレスが耳障りな嘲笑をあげる。「ほらほら、もつと速く走らないと落っこちちゃうよ」

「うるせえ! このババア!」パブロは言いかま拳銃を連射する。だが、当然効いていない。

「キャハハハ! どうしたどうした? ぜんぜん効かないじゃないか。散弾銃を使ってみるかい? でも、近くで撃たないと効かないねえ」

魔法防御ごと鉄女たちに衝撃を与えるには、近距離でなければ効果が無い。遠距離だと弾が散ってしまい、威力が半減してしまう。

気絶している間に仕留めておくべきだった。

戦っている時は余裕がなかったが、暗殺者が逃げた後なら問題なくとどめを刺せたはずだった。しかしリグヴェーダのほうに気を取られて、彼女の存在を全員忘れてしまっていた。

マースム力が後ろを振り向き、階段がどのくらい消えているのか確認した。

「パブロさん! あの人が!」

そして、忘れていたことを叫ぶ。リグヴェーダが気絶させた暗殺者。パブロが振り向いて見た時には、暗殺者のいる場所の階段は壁の中へ収まり、足場のなくなった暗殺者は落下する。あの高さからでは助からないだろう。

「なんてことを」マースム力は呻いたように呟く。

「おいおい、仲間を殺しているぞ」パブロは呆れたように言った。

「ハンツ！ なにが仲間なもんかい。あの麻薬中毒者どもとは別組織なんだよ。一緒にしないでくれ」

「似たようなもんだろ！」パプロは言い返してから、リイジスに「リイジス、先に外へ行け」

「ええ？ なんで？」一人空中を飛んで安全なリイジスは、意味がわからず戸惑う。

「この連中の足があるだろ。それを頼む」

リイジスはパプロの意図を理解したのか「わかった」

一気に上へ飛翔した。

ドレスを着た魔導士は、先の上に逃げた妖精と、パプロたちを交互に見ていたが、妖精は放置しても問題ないと判断したのか、すぐに視線をパプロたちに向けて固定した。

「今はバカにしてくれた連中の、滑稽で面白い姿の見物が優先、と」
「少しはリイジスも気にしろよ」パプロは呻く。

一人くらいはリイジスを追いかけてくれれば、戦力が分散されたのだが。

後ろを見ると、思ったより階段が消えるのが早く、すぐ背後まで差し掛かっていた。

「リグ！ みんな！ もっと速く走って！」

マースムカが叫んだ。

なぜカリグヴェーダの愛称も。

同時刻、セネロは神殿の方向へ目を向けると、動物にしては表情豊かな顔を厳しくした。

そしてなにを思ったのか、ラツガートたちが使っている馬の傍に行くと、繋いである綱を岩から器用に解いた。それを口に咥え、さらに前足でしっかり握ると、先導して神殿の方向へ向かう。

そこに、ダラスのティダが一声嘶く。なにをする気なんだ？ と

聞いているようだった。

セネロは目を向けると、やはり一声嘶く。それは説明しているようだ。

しばらく二匹のティダは声を交し合った。そして一段落ついたのか、再びセネロは馬を神殿へと向かわせる。

ダラスのティダはしばらくその場で、どうするべきか悩んでいたようだったが、セネロが付いて来たくないのなら来なくていい、という風に一瞥すると、結局一緒に付いて行くことにした。

七章・第四日・1

「ハイ！ハイ！ハイ！ハイ！ハイ！ハイ！ハイ！ハイ！ハイ！」

ボツズルはカタールによる速く鋭い連続攻撃を、舞踊のように滑らかに絶え間なく繰り返して来る。

ラッガートはその連続攻撃を盾で防御し、剣で捌ききった。そして一瞬攻撃が途絶えた瞬間、反撃に大剣を横薙ぎに振るう。通常の状態でも麻薬服用暗殺者以上の筋力と、大剣の重量による攻撃は、生半可な防御を粉碎する。

だがボツズルは攻撃を予想していたかのように、防御せずに跳躍して回避。ラッガートの頭上、真上にまで移動し、そして落下が始まると同時に体を捻じって反動をつけると、コマのように回転し、二本のカタールをラッガートの脳天に目掛けて突き出した。

「シャアッ！」

「ぬん！」

ラッガートは盾を頭上に構えて防御。二つのカタールと激突し、耳障りな金属音が鳴り、接触点で火花が散る。

「イイーヤッ！」

ボツズルは剣先で盾の上に逆立ちしたまま、体勢を崩さず、そのままの状態で腕立てのように腕を曲げると、盾を足場として腕だけで再び跳躍した。そして縦回転しながらセリナへ刃を向ける。

体全体が回転する刃の武器のように迫るボツズルに、セリナは臆することなく迎撃態勢をとる。

彼女が着用していた、動き難い濃い青色のドレスは、いつの間にラッガートたちのような防護服に変形していた。動きやすく、おそらく防御力は騎士たちの防具より強度だろう。

セリナは周囲に円形に展開していた短剣をボツズルへ放った。魔

力を帯びた短剣は正確にボツズル目がけて一直線に走るが、ボツズルに命中したかのように見えた短剣は、回転に合わせたカターの刃によって弾かれた。

セリナは続けて短剣を放つ。一本、二本、三本……。すべて弾かれる短剣。

「うお！」

しかし、さすがに七本目の短剣で、ボツズルの回転が止まり、体勢が崩れ、空中で一瞬無防備状態に。

ラッガートはすかさず走り、大剣を再び横薙ぎ。ボツズルは着地と同時にカタールを交差して防御態勢。回避する余裕がないのだから、ラッガートの臂力と大剣の攻撃力ならば、防御ごと叩き斬ることができる。

取った。確信したラッガートは、しかしボツズルの動きに驚愕する。

ボツズルは大剣の攻撃方向に合わせて跳躍した。命中はしたが威力は半減しており、浮遊する羽毛を攻撃したかのように手応えがなく、ボツズルは跳躍力と攻撃力が合わさって十数メートル飛んだが、空中で体勢を整えて難なく着地した。

「おっと」と

着地に軽くよろめいたが、それは本当に体勢を崩したというより、意図的に見せたように思えた。

だがラッガートとセリナは、構わずに追撃をかけようとした。

「隊長！ そっちへ行きました！」

シエルダックが叫んだ。命中させることはできないものの、猟銃の牽制で他の敵の接近を防いでいたが、弾切れになり、その隙に四人の暗殺者がセリナとラッガートに迫る。

ラッガートは大剣を連続で突いて一人を寄せ付けず、もう一人の攻撃を盾で防ぎ体当たりで転倒させる。二人の暗殺者は床を転がって間合いを取る。

もう二人の暗殺者は、魔術師が周囲に高速度で短剣を竜巻のよう

に回転させ接近を防ぐ。

そして麻薬服用暗殺者の攻撃が一旦止まった。向こうも簡単に倒すことができないと考えたのか、騎士たちの周囲に展開して牽制している。

「三人とも無事か？」

確認を取るラッガートは、肩で息をし、体の数ヶ所にカタルで切られた傷ができている。だが、戦士としての技量か、深い傷はない。

「ええ、まだなんとか」セリナもまた息を切らしつつ答えた。

魔力を仕込んだ短剣を七本同時に使用し、見えざる糸で操るように常識では不可能な動きで飛ばし、敵を攻撃する。七本の短剣を操るというより、全部で一つの武器であるかのような、総合性の取れた、流れるように、そして的確な攻撃。これほどの魔法を長時間使えるとは、魔術師の称号を与えられたことはある。彼女がいなければ、とうにやられていただろう。

だが、暗殺者はその攻撃さえ、ほとんど反射神経だけで回避している。それに、同時に操れる最大数は七本まで。しかも体力の消耗が激しく、しばらくすれば限界に来るだろう。

「こつちも無事です」シエルダックが猟銃に弾を込めながら返事をする。

「おおら！ 来やがれ！ ぶっ殺してやるぞ！」ダラスは返事をせず、敵に威嚇していた。

闘争心が高ぶっているというより、恐怖していると言つべで、その顔はひきつっている。彼の放つ矢は、俊敏で意表を突く動きの暗殺者には一本も命中しておらず、ダラスの狙いはどんどん雑になっていく。

シエルダックの忠告を採用するべきだったか。ラッガートはダラスを連れてきたことを後悔していた。

ダラスという少年は確かに村の中では強いかもしれない。だが、あくまで辺境の村という、限定的な基準での話だ。

広い世界を体験したことのない少年は、自分より強い相手と戦ったことがないために、強敵と対峙する時の精神力が養われなかった。そして今、始めて自分以上の強敵と遭遇し、勇氣よりも恐怖が勝っている。精神の強靱さは、自分より強大な存在と戦って初めて培われるものだが、彼にはそれが無い。

今までの常識や、戦いの技も力もまるで通用しないことに、ダラスは恐怖を覚え、それをごまかすために大声で威嚇しても、虚勢でしかないのは敵にも明らか。このままではダラスは混乱を起こし、状況をさらに悪化させるかもしれない。

そうなる前に状況を変化させなければならない。だが、どうやって？

三人とも、今のところ致命傷になる怪我はないが、いつまで持つか。暗殺者の数人にかすり傷を追わせただけで、一人も仕留めていない。こちらは体力が確実に減っているが、やつらは息切れ一つしていない。勿論それは、薬物によって強制的に向上させた身体能力の結果だ。

そして精神は恐怖を麻痺させている、その顔にある薄ら笑いは、戦いと虐殺と彼らが信奉する神への献身による、喜び。

麻薬服用暗殺者が二人だけの時でも手こずった。今は魔導士を入れて十人。逃げようにも門は閉ざされてしまい、他の入口にも最低一人が陣取っている。もし全員で一斉に襲撃されたら、とうに終わっていた。それをしなかったのは、様子見か、逃げられないようにと考えたのか、あるいは暗殺者の筆頭らしき人物、ボッズルが自身の嗜虐を満足させたいためか。

「隊長、どうしますか？ このままだと俺たちは……」シエルダックは猟銃を構えながら、指示を求める。最後まで言わなかったのは、絶望を口にしたくなかったからか。

「諦めるな！ 諦めずに好機を待て！ 必ず好機はあるはずだ」

「ゲッゲッゲッゲッ」ボッズルが不快な笑い声を上げる。「あるわけねえだろ、そんなもの。おまえらは、みいーんな、ここで、

死ぬんだ、ヨー！ ゲーゲツゲツゲッ」

勝利を確信したボツズルの嘲笑は、不意に止まった。

「ん？」

パプロが説明していた地下牢へ繋がる通路から、数人の走る足音が聞こえ、ボツズルが怪訝に足音の正体を確かめようと目を向けた。

その瞬間「どけ！」

ボツズルは何者かの飛び蹴りを顔面に受けて転倒し、両手に持つカタールを落とした。

「くお」不意打ちをまともに受けた鼻を押えながら「な、なんだあ？」

現れたのは、囚われているはずのリグヴェーダ王女だった。

螺旋階段の罫をなんとか落下せずに、地上部分へ出たリグヴェーダたちは、マースム力の指示で通路と部屋の組み合わせを走り抜けた。

そして眼前に広い場所が見える。礼拝堂か、祭壇の間なのか。

「どけ！」

リグヴェーダは先へ走り、通路を妨害している、麻薬服用暗殺者を不意打ちで蹴り倒し、その間に全員がそこへ入った。

周囲を見渡すと、四人の味方を確認した。

「パプロさん、皆がいきました」マースム力が歓喜の声を上げる。

パプロは険しい表情のまま「喜ぶのはまだ早い。なんか、敵が増えてやがる」

言いつつ拳銃を連射して、敵を攻撃する。命中しないものの、接近を防いでいる。

パプロの言ったとおり周囲に敵がいる。螺旋階段で遭遇した暗殺者と同じ格好をした者が九人。

その内の一人、鉄帽をかぶっている者をリグヴェーダが蹴り倒し

た。気絶させることはできなかったのか、すぐに起き上がると、銀髪の初老の男の傍へ。

その二人を見て、リグヴェーダは頭に血が昇る感覚に襲われる。サリナを殺した二人。

「王女！」

後方から呼ぶ声がした。

目を向けたリグヴェーダはラッガートたちの姿を確認した。王宮で近辺警護に当たる近衛騎士の三人。この身の危機に馳せ参じてくれたのか。

「ラッガート！」

「王女。ご無事でしたか」

「うむ。そなたたちも無事か？」

言いつつ、リグヴェーダはボツズルが落としたカタールを一本拾い、装備し構える。

そしてラッガートたちの後方に、閉ざされた門を確認する。

巨大な両扉が閉まっていた。このためにラッガートたちは退避することもできずに、ここで闘っていたのか。

「近付くんじゃねえ！ おらおら！」

パプロが何度も発砲して敵を牽制し、その間に全員が同じ場所に合流し、敵の攻撃に備えた円を描く陣形を取った。

そこでリグヴェーダは不意に瞳に映った人物に驚愕する。自分が見た者を一瞬理解できず、しかしそれが間違いではなく、確かに存在することに愕然とした。

「サリナ！？」

サリナは殺されたはずだ。

だが、目の前で殺されたはずの侍女が、今目の前にいる。

死んだと思っていた人物に再開するのは、短い時間のうちに二度目。この神殿は死者が現れる場所なのか。

だがサリナと同じ顔をした女性是否定する。

「いいえ、王女。私はセリナ。サリナの双子の姉妹です」

その言葉でリグヴェーダは、サリナが以前話してくれたことを思い出す。同じ日に生まれた姉妹のことを。

そして、その姉妹がここにいる理由は一つしかない。

「そうか。セリナ、なぜそなたがここにいるのかは説明せずともわかる。サリナを殺めたのは、あの包帯のような布を体中に巻いた麻薬服用暗殺者。それと、その隣にいる銀髪の魔導士だ」

「はい。存じております」

「仇を討つぞ」

「はい」

初対面の二人は、同じ目的を確認し合い、短い時間で強い心の絆が成立した。

それに水を差したのは、以前から個人的に雇っていた情報屋。

「そんな余裕ねえだろ。周りを見てみる」

リグヴェーダたちを追跡してきた三人の魔導士が、通路から現れた。

「キイイイイイ！」

赤と青の魔導士は、広間に出ると頭上で旋回を始め、ドレスの女は、銀髪の男の傍に着地する。

「なんて逃げ足が速いんだい！ 落つこちると思ったのにい！」

「パレス。なぜリグヴェーダ王女がここにいる？」ゲシュタルはリグヴェーダが現れたことに動じた様子を見せず「牢からどうやって出た？」

「そんなこと知るもんかい。あたしらがその」とパブロたちを指差し「三馬鹿トリオの相手をしてたら、いきなり出てきたんだよ。まったく、どうなってんのさ？ あの牢からは出られないはずじゃなかったのかい？」

「ふむ」ゲシュタルは思案していたが、やがて「まあ、いい。もう一度捕まえば済むことだ」

そしてゲシュタルは魔力を構築し始めた。セリナとパブロには知覚できた、魔力の微弱な共振信号。なんらかの魔法を使う呼び動作。

ボツズルは暗殺者たちにまだ控えるように、彼らだけの手信号で命令する。だが、いつでも強襲攻撃に移れる状態だ。

そして頭上には赤と青の魔導士。刃渡り一メートルの大鋏を開きつつ、二人は円を描いて旋回している。パレスの指示でいつでも上から攻撃を仕掛けてくるだろう。

門は閉じられており逃げ道はない。

リグヴェーダたちの現状は圧倒的に不利。

戦力からすれば全滅させられてしまうだろう。

「おい、ラッガート」パブロが拳銃に弾を込めつつ「突破する方法は？」

「俺はおまえにこそ聞きたかったがな」

「方法があります」ルマジャンが一呼吸置いて「何人かがここで奴らを食い止めれば、リグヴェーダ様と、後二人くらいなら逃げられます」

「バカな！」リグヴェーダは拒否する。「そなたたちを犠牲にして助かれというのはか？！」

忠義の臣下を見捨てるくらいならば、共に戦い、共に散ったほうがましだ。

「他に方法はありません」ラッガートが「ダラス、マースム力。リグヴェーダ王女をつれて逃げる。なんとしてでも突破口を開く」

「そんな！」マースム力が叫んだ。「そんなことできません。皆さんを見捨てて逃げるなんて」

「他に方法はないんだよ」パブロは拳銃の弾込めを終えた。

「それしかないわね」続けてセリナが七本の短剣を自身の周囲に浮遊させて展開させた。仇だけは必ず討取るつもりだろう。

「ここが、俺の死に場所かな」どこか諦めたように、そして待ち望んでいたように呟いて、シエルダックが猟銃を構える。

そしてラッガートは二人に告げた。

「二人とも、リグヴェーダ様を頼む」

リグヴェーダはとても承服できなかった。危険を顧みずに救出に

来た忠義の騎士たちを捨て駒にするなど、王家の誇りと、人間の尊厳にかけて、絶対にできない。

だが、この者は？

リグヴェーダは迷いの中で、友である少年を見る。

マースムカも困窮していた。

どうすればいい？ 確かにこのままでは全員殺されてしまう。でも、パブロさんたちを見捨てることなんてできない。

なにか、なにか方法を考えないと。

だが、ダラスだけが違う考えだった。

やったぜ、これで助かる。ついでにマースムカもここに置き去りにしよう。そうすれば、手柄は全部俺のものだ。村に帰ったら皆は勇者として尊敬するぞ。しかも王女しばらく二人きりだ。俺に惚れるに違いない。そうだ、これが終わったらラーナをつれて王都へ行く。国王からきつと表彰が渡される。こんな辺境の勇者じゃない、この国の勇者だ。

やがてリグヴェーダを救った英雄として、王都で祭り上げられる自分の姿を思い浮かべ始めた。

もしかするとダラスは戦闘の昂揚と恐怖で少し頭がおかしくなっていたのかもしれない。

だが、すぐ我に返る。その前にここを確実に逃げ出さなくては。

「わかりました。リグヴェーダ王女を連れて脱出します」

ダラスは了承すると、ラッガートは「頼む。任せたぞ」

「はい」

ダラスは嬉しそうに答えた。

七章・第四日・2

「なに言ってるんだよ、ダラス。皆を見捨てるの!？」

マースム力は非難する。ダラスは仕方なく皆を犠牲にするのではなく、明らかに喜んでいた。手柄を立てること、そして自分がそれを一人占めにできることを。以前から自分のことしか考えないような人間だった、このような状況下でさえ、自尊心を満足させることしか考えないとは。

「うるせえ！ 役立たずは黙ってる！」いつものように思い通りにならないとなると、大声で怒鳴る。

だが、リグヴェーダがマースム力に同意した。

「私も同意見だ。そなたたちをここには置いて行けない。私も戦う」「いけません、リグヴェーダ様」シエルダックが猟銃を敵に向けたまま「俺たちは、あなたを助けるためにここに来たんす。俺たちの任務はあなたを救出することです。あなたを死なせるためじゃありません」

ルマジャーンが続けて「あなたの救出が俺たちの任務です」

それが国王からの正式な命令でなくとも、自分自身に課した使命として。

三人の騎士は攻撃態勢に入った。一拍遅れて、魔術師と、情報屋も。

敵も体勢を察し、牽制状態から、攻撃態勢に移行する。

マースム力は必死に脳裏で考えを廻らす。なんとかしなければ、なにか方法を考えなければ。状況を脱する方法。なにか、全員で逃げることのできる策があるはずだ。

正面の門へ目を向けた。ラッガートたちが入った正面の門は閉ざされており逃げ道を塞いでいる。確かにこの神殿から出るには、地

下まで戻る必要がある。それには誰かが敵をここに引き付ける必要がある、ルマジャーンの言うとおり、誰かが犠牲になるしかないだろう。

逆に考えれば、閉ざされた門をなんとかすれば、全員が脱出できる可能性がある。

だが、一見して頑丈な大扉をどうすればいいのか。ラッガートたちがここで闘っていたことを考えれば、固く閉ざされて容易に開けることができないと断じて良いだろう。破壊するのも、その大きさから考えて難しい。

だが、なにか方法があるはずだ。開けるにはどうすればいい。開けることができないなら、破壊することは。

ふと、懐の単発式拳銃のことを思い出す。弾丸と薬莢、雷管を別々に装填する、旧式の拳銃。火薬は懐に入ったままだ。そして火薬は雷管の火花によって簡単に爆発するため取扱に注意が必要な代物。「そうだ、これを使えば……」

纏めて火薬を発火させれば、かなりの爆発力を発揮するだろう。うまくやれば、扉に穴を開けるくらいなら。

「皆さん、少し時間を稼いでください。あの門をなんとかします」マースムカに視線が、あるいは注意が向けられる。

「なんとかって、どうやって？」

パプロが方法を聞くが、マースムカが答える前に、ダラスが抗議する。

「おい、変なことするんじゃないよ。おとなしく騎士さまの言うことを聞いて……」

「なんとかできるのだな？」リグヴェーダが、ダラスの言葉を遮った。

「うん」マースムカは肯く。

「わかった」そして全員に「皆の者、聞いたな。しばらくの時間、この者を守れ。そして皆で生き延びるのだ」

リグヴェーダの声で、騎士たちはマースムカを囲む陣系をとる。

マースムカは大急ぎで懷の薬莢を入れた袋の一つを矢にくくりつけた。

鏃を外し、代わりに雷管と薬莢を装着する。油を注いで火薬を塗り、導火線の代わりにする。上手く行けば誘爆する。

一発ではおそらく破壊できない。最低でも二本は必要だ。迅速に作らなければ。

「早く始末した方がいいぞ」

ゲシュタルはマースムカがなにかを企んでいることにすぐに気づき、隣のボツブルへ命令を促す。

「あいよ。よし、おまえらあ！ 始末しろ！」

ボツブルのぞんざいな口調の命令で、暗殺者が一斉に攻撃を開始した。

「させるかよ！」

夜にも関わらず遮光ゴーグルを着けたままの男、パブロが二丁拳銃で当たりしだい撃つ。左右前後に高速度で動き回る麻薬服用暗殺者に命中しないが、接近させることだけは防いでいる。

「行け」

ドレスが変形した特殊防護服を着用した魔術師、セリナの言葉で周囲に浮遊していた七本の短剣が一斉に放たれた。標的は三人同時。一つは暗殺者。一つは青の魔導士。最後にボツブル。

だが暗殺者は避け、青の魔導士は結界ではじき、そしてボツブルはやはり避けた。

「旦那あ、守ってくれよあ」ボツブルが懇願する。

「次は守らないと言った」ゲシュタルは冷淡に返す。

飛翔する青の魔導士が、若い騎士ルマジャンの拳銃を受ける。セリナの短剣の一撃を防いだ直後で、その攻撃のために魔法防御が緩んだ瞬間だったためか、拳銃から発射された鉛球は効果が現れ、

青の魔導士は肩が弾かれる。

若い騎士は効果を確認したか、連続して発砲。青の魔導士は一撃を受けることに、衝撃で仰け反り、翻る。

そこへパブロが散弾銃を撃った。強力な散弾を受けた青の魔導士は、ついに大きく弾き飛ばされ、床へ落下して動かなくなる。

だが、出血が見られないことから、昏倒しただけか。

「ああ！？ アズラク！ なにをしているんだい！ しっかりおし！」

パレスが叱咤するが、気絶しているので聞こえていないようだ。
「むうん！」

巨漢の騎士、ラッガートが雄叫びを上げ、同時攻撃を仕掛けた暗殺者の短剣を防御した。一人は大剣で、もう一人は盾で。そして間髪入れずに体を回転させ、その勢いで二人の暗殺者は弾き飛ばされる。大きく振り回された大剣は一人に命中したようだ、カタールで防御したようだ。しかし、その威力を緩和することができなかったらしく、床に着地でできずに転がる。

やはり他の者はボツブルほど戦闘技術に優れているわけではないらしい。それでも痛みをほとんど感じていないため、すぐに起き上がるが。

リグヴェーダがボツブルから奪ったカタールで戦っている。あの類の武器を使ったことはないだろうが、剣術と格闘術を応用して使いこなしているようだ。闘姫と呼ばれるだけのことはある。

そしてこちら側としては、無傷で捉える必要があるため、手加減せざるを得ず、結果三人を引き付けていた。

しかし王女の表情からして、真剣に命のやり取りをした経験はないのは明らかだ。剣術の才があり、修練していたとしても、王女という保護された立場の人間であることには変わりはない。殺人に対する忌避感もあって精神の消耗が激しいだろう。

「くっ……落ち着け。基本はいつもと変わらない。練習や試合と変わらないのだ」

呟いているのは、自分自身に叱咤して勇気を鼓舞しなければ、足が震えだしてしまうからだろう。それでも最初の戦闘における恐慌状態に陥らなかったのは、賞賛するべきことか。

「危ない！」

老練の騎士、シエルダックが王女の背後を取ろうとした暗殺者の一人に向けて発砲。

暗殺者は反射的に回避したが、左肘に命中した。痛覚が半ばマヒしているため、苦悶の表情はないが、リグヴェーダがすかさず振り向きざまに攻撃し、それも大きく間合いを取って回避。戦闘は続行可能だろうが、左腕はもう使い物にならないだろう。

シエルダックはリグヴェーダの背後を守る位置に立って、猟銃を構える。

大峡谷の村の若者、ダラスは混乱気味に、駆動式短弓を構えては矢を放っていたが、狙いは散漫で命中しない。正確に狙ったとしても、回避されるだろうが。

構え直そうと一旦駆動式短弓を少し下ろした瞬間、なにかの拍子に引き金を引いてしまったのか、ダラスの視線の方向と、駆動式探求の方向が全く違う時、唐突に矢が放たれた。

矢は真っ直ぐ飛び、暗殺者の一人の胸を貫いた。暗殺者は心臓を貫かれ、即死する。

「え？ あ！？ やった！ やったぞ！」

ダラスは一瞬なにが起きたのかわからなかったようだが、すぐに快哉の声を上げる。王都の騎士や、魔術師でもできなかったことを、最初にやったことで無邪気に喜んでいる。

実のところ、その暗殺者はちょうどルマジヤーンを攻撃しようとして意識がルマジヤーンに集中し、周囲の気を配るのが途絶えた瞬間だった。ダラスのことも一応確認していただろうが、矢が放たれたのが事故に近い形だったために、反応できなかったようだ。

ようするに、ただの偶然だ。もう一度、意図して行おうとしても、あの少年の技量では不可能だろう。

「やっぱり俺は強い。間違いなく強い。今まで上手く倒せなかったのは、運が悪かったただけだ。そうとも、俺は大峡谷最強の狩人だ」しかし、ダラスはそんなことに気付くはずがなく、自信を取り戻した。もしくは、過信を。ラッガートはなにを考えてあのような少年を連れてきたのか。

「しかし、まずいな」

ゲシュタルは呟く。騎士たちは予想以上に手強い。こうなれば、暗殺者を巻き添えにするのを覚悟で、対処するべきか。

「キィイヤアア！」

パプロはマースム力に向かって飛翔するパレスに、散弾銃を発砲。やはり魔法防護によって致命傷を与えられないが、それでも攻撃を防ぐことはできた。

そして、マースム力はそこで声を上げた。

「できた！」

二本目の火薬矢が完成したのだ。マースム力は急いで駆動式短弓に装着し、正面入り口の塞いでいる門に狙いを付けると、火薬矢を発射する。

効いてくれよ。パプロは胸中祈った。なにに祈りを捧げたのか、自分でもわからなかったが。

矢は正確に門の真ん中へ命中。先端に付けられた雷管が発した火花は、矢に塗られた油と火薬に引火し、瞬間的に反応を起こし、括り付けられた火薬に火が到達し、爆発した。

轟音と衝撃。

門の片方が粉々に吹き飛ぶ。

少し遅れて、もう片方が緩慢に開いた。

「凄い！」マースム力の思わず口にする言葉。

即席の爆弾でこんなに威力があるとは思っていなかったのだろう。

予想以上の破壊力は一発で門を破壊した。

だが、パブロは誰にも聞こえない声で呟いた。

「……無理だろ」

不可能だ。あの程度の火薬の量で、あの破壊力はどう考えても不自然だ。ましてや、マースム力の使ったのは本来銃に使われる火薬だ。工事や軍などで使用される破壊目的に調合されたものではない。それに、迂闊にも失念していたことを思い出す。それ以前に、門を破壊すること事体不可能のはずだ。それとも門だけが例外だったのか。

だが、そんなことなど気付くよしもないマースム力は、合図を叫ぶ。

「今だ！ みんな走って！」

考えるのは後だ。パブロは全員が走り出したのを確認すると、自分も続けて走る。敵のことは無視だ。破壊された門を通過し、長い階段を駆け下り始める。

いつの間に点灯されていたのか、階段に並列している篝火に照らされて、階段の一番下に、離れた場所に置いてきたはずの馬が待っているのが見える。

「セネロ！」マースム力がその姿に名前を呼んだ。

神殿の異常を感じて、セネロがここまで馬を連れてきてくれたのか。

「頭のいいやつだ」

だが、勿論敵も見逃しはしない。

「逃がすんじゃない！」

門のところでボツズルが叫び、その声を聞いたセリナが立ち止まる。

「なにをしてる！」パブロが腕を掴んで「早く逃げろ！」

「あの男を、妹を殺したあの男を殺してからよ」

「アホ！ そんなこと言ってる場合か！」と腕を引いた瞬間「グッ！」暗殺者の一人がいつのまに傍に来ていたのか、パブロの脇腹に凶

刃を突き刺していた。

セリナの表情が強張る。

「パブロ！」

パブロは口元から血を吐き、だが苦悶の表情ではなく、口元に笑みを浮かべる。

「捕まえたぜ」その手は暗殺者のカッターを持つ手を掴んでいる。

「これなら避けられないだろ」

五発の銃声。一発体に鉛球が貫通することに、大きく痙攣するように仰け反るが、手を掴まれているので、後ろへ引くこともできず、暗殺者はその場で鮮血を撒き散らし、最後に頭部から赤く濡れた白い肉塊を弾き出して、絶命した。

「逃げるぞ！ セリナ！」

セリナは一瞬躊躇したが、パブロが脇腹から血を流しているのを見ると、身を挺して諭したのだと理解し、肯いて了承の意を示す。

そして肩を貸して再び駆け下り始めた。

ほとんどの者はすでに下まで降りていたが、二人は怪我をしているせいもあって遅い。

そして、後方に敵が迫っていた。

「パブロさん！」マースム力が警告を発する。

赤の魔導士が大剣を広げてパブロとセリナに迫る。このままでは二人は追いつかれ大剣の餌食になる。

マースム力はもう一つの火薬仕込みの矢を装着し、駆動式短弓を向けた。門の大扉一撃で破壊した威力だ。魔法防御など打ち破れるだが、引き金をすぐには引けなかった。今度は偶然で殺すのではない。自分の意志で殺すのだ。

自分の殺意が、人の命を奪う。

「うう……」マースム力は呻き、そして叫ぶ。「うあああああ！」

放たれた矢が一閃となつて飛ぶ。

赤の魔導士は、ただの矢に過ぎないと思ったのか、結界で簡単に防げると思ったのか、それとも気付かなかったのか、それを避けなかった。

命中。爆発。

それは人として、生物としての原型を留めず、肉片となつて四散し、周囲を赤く染める。

さらに爆風が、近くにいた暗殺者を一人吹き飛ばした。

「うお!」「わあ!」

爆音でパブロとセリナが身を屈めたが、すぐに走り出し、マースムカの傍に。

「マースムカ、助かったぜ!」

だが、マースムカは駆動式短弓を降ろして、呆然としていた。

殺した。人を殺した。偶然ではない。自分の意思で、人を殺した。マースムカの歯が噛み合わず、ガチガチと鳴り始め、全身から力が抜けていくのを感じた。

「マースムカ!」パブロが叱咤する。「おい、なにしてる! 早く走れ!」

「は、はい」パブロの声でかろうじて正気を取り戻したマースムカは、再び走り始めた。

敵が追いかけてくるが、パブロが背中越しに銃を撃ち、前方でもシエルダックとルマジヤーンが援護してくれている。

そしてセネロのところへ辿り着くと、その背に跨る。

「リグヴェーダ王女、こちらへ」

ダラスがリグヴェーダの手を引いて、自分のティダへ乗せる。

ラッガートたちは、そしてリグヴェーダもそのことで意義を唱えなかった。彼らの馬は基本的に一人乗りだ。二人乗りなら、ティダのほうはまだ向いている。

全員が馬とティダに跨ると、彼らは全力で走らせ始めた。敵から逃げるために。

その中でマースム力は二つの出来事が頭から離れなかった。

螺旋階段で頭を貫いた暗殺者。今、爆殺した赤の魔導士。二人を殺したのは自分なのだ。

「うううう……」

僕は人を殺した。人を殺した。人殺しだ。僕は人殺しだ。

リグヴェーダが、そんなマースム力を見ていた。

銀髪の男ゲシュタルは、マースム力たちが消えた大峡谷の向こうを見つめ続けた。その顔に感情はまったく表れず、なにを思っているのか、推し量れない。取り逃がしたことも、なにもかも、あらゆることを面に出さない。

ただ、なぜ、と少し疑問に思う。

なぜジフの息子がここへやってきたのだろうか？ 無関係であるはずなのに、己の命を危険に晒すことができるような少年には見えなかったのに、なぜあの少年は危険を顧みず、リグヴェーダ王女を助けに来たのだろうか？ そして、ジフはこのことにどれだけ関わっているのだろうか？

だが、ゲシュタルは考えるのをすぐに止めた。敵ならば排除する。それだけだ。かつての仲間の息子であっても。そして、かつての仲間自身であってもだ。

隣でボツブルが指示を出している。

「早く馬を持って来いって。なにをもたもたしてんだよ」部下はなにかを二三言告げると「はあ？ そりやどっとうこった？」

「どうした？」ゲシュタルは尋ねる。

「いや、よくわかんねえけど、馬が全部逃げ出しちまったって」

「逃げた？」

ゲシュタルたちが気付くよしもなかったが、神殿の上空ではリィジスが意地の悪い笑みを浮かべ、彼らを眺めていた。

パブロが指示したとおりに、彼らの馬を柵から放し、ついでに少し吃驚させた。恐慌状態に陥った馬は、現在ボツブルの部下から全速力で逃げ回っている。捉えるのには時間がかかることだろう。

「まあ、いい」ゲシュタルは端的に返すと、神殿へ足を戻す。「ここで少し待っている」

階段を上る途中で、パレスがしゃがみこんでいた。

その場に、赤の魔導士が四散している。

「ヒヒ、イヒヒヒヒヒ、ヒイ、ヒヒヒ」

パレスは泣いているように笑いながら、赤の魔導士の肉片を掻き集めていた。

「どうしちゃったんだよお、アハマル。そんなにバラバラになっちゃ動けないだろお。早く元に戻らなきゃあね。ほらあ、こんなに体を散らかしちゃって、まったく仕方のない子だねえ。早く元の姿に戻って、動けるようにならないと」

掻き集めた肉片を粘土のように捏ねるが、それで人の形になるわけでもなく、つけようとした端から崩れていく。

「ウヒッ、ヒヒヒ、ヒハ。ほら、すっかりおし。ちゃんと自分で立てるようにならなきゃ」

「それは死んでいる」ゲシュタルは同情も憐れみもない、冷淡な声で告げる。「今はただの肉片だ」

「うう、うううううう」

パレスはそれでなにを感じたのか、なにを思ったのか、涙をぼろぼろと流し始め、肉片を口へ運ぶと、租借し始めた。

「ちくしょお。殺してやる。あのクソガキ。殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる……」

呪詛のように、いや、まさに呪いとして、自らの愛する者を奪った少年へ、憎悪の言葉を吐き続ける。死肉を食みながら。

ゲシュタルは興味を失ったのか、それとも始めから興味などなかったのか、それ以上なにも言わず、再び神殿へ足を進めた。

そして神殿の門の所で、破壊された門を確認する。普通の石材だ。

神殿の建築材に使用されている時間を止めた物質ではない。

「だから破壊できたのか」

神殿の特性については調査していたが、全部を調べたわけではなかった。神殿が破壊不可能の物質で建築されていることから、扉も同じだと思っていたが、どうやら違うらしい。再調査すれば、他の不備も判明するかもしれない。もっとも、再調査するとしても、それは全てが終わってからだが。

「ゲシュタル！ どこだゲシュタル！」

色々考えていると、今度はザーラディースが現れた。安全のため、傭兵がいる儀式の間に避難させておいたのだが、一応一段落付いたことを知ったのか、大声で呼ぶ。

「ゲシュタル！」小走りで駆け寄ってくると「ゲシュタル、どういうことだ！？ リグヴェーダ王女が逃げたと聞いたぞ」

「そうだ」ゲシュタルは簡単に肯定する。まるで、それがどうしたのだ、というふうに。

ザーラディースは気色張り「なにを悠長に構えている！ リグヴェーダ王女が逃げてしまつては儀式ができないではないか！」

「落ち着け。また取り戻せば良いだけの話だ」

「どうやって！？ 馬が逃げてしまったのだろう。これでは追いつけないぞ！ まさか、もう一度王宮から拉致するというのではないだろうな？ そんなことは不可能だ！」

一度拉致が成功したからには、王宮ではこれを教訓として警備を厳重にするだろう。二度目の成功はない。

「いいや、そんなことをするつもりはない。緊急用に用意して置いた馬の代わりがある。それを使えばすぐに追いつくだろう」

「代わり？」

ザーラディースの疑問には答えず、ゲシュタルは神殿へ足を進めた。急ぐわけでもなく、緩慢でもなく、自分に適した足取りで。

そして十数分後、上空で偵察していたリィジスは、神殿から出てきたものを見て、驚愕する。

「なによ、あれ？」

七章・第四日・3

神殿を脱出してから数刻。王女を含めた騎士たち八人は、大峡谷を南へ、ベドウィルム村へ向けて馬を走らせ続けていた。

左側は崖で、その下の河は激流だ。転落すれば命はないだろう。

足場の悪い峡谷を、夜の闇の中で走らせることほど危険なことはないが、追跡のことを考えれば致し方ない。追いつかれることのほうが、よほど危険だ。

ダラスはティダを操りながら、妙な妄想を始めていた。

リグヴェーダはこれで俺に惚れるぞ、どうだこの手綱捌き、マースム力ごときや、他の連中とは一味違うぜ、そうとも、王女と一緒に乗るのは俺に決まっている、大峡谷随一の狩人である俺が相応しいんだ、命を助けてやったし、俺にメモロだぜ、おお、胸を押し付けてやがる、誘ってるんじゃないのか、いや、絶対にそうだ、まいったぜ、そうだ田舎臭いラーナより、リグヴェーダをものにしよう、それがいい、リグヴェーダを俺のものにすれば、この国の王だ、そうとも、おれはただの勇者じゃない、王になる男なんだ、少しばかりマースム力が手柄を立てたが、それも自分のものにしてしまえ、手柄は国王になる俺だけのものだ。

リグヴェーダは、ダラスが果てしない妄想を続けていることなど知る由もなく、ただマースム力に目を向けていた。マースム力と名乗る少年に。

「パブロさん、大丈夫ですか？」

すぐ隣を走るパブロに、マースム力は心配で尋ねる。パブロは脇

腹の傷口を手の平で押えているが、指の隙間から血が流れ出ている。「だ、大丈夫だ。ちよつと痛いけど」答える声は明らかに強がりだ。「隊長、ルマジャー。傷の具合は？」シエルダックも他の気になったのか、二人に聞く。

見るとラツガートも全身から血を流している。パプロほど深くはないが、数が多い。

ルマジャーも暗殺者の一刀を受けた右肩から血が流れている。

「心配するな、この程度の怪我などたいしたことはない。それより、今は少しでも早く、奴らから遠く離れなければ」

「停める」リグヴェーダが唐突に「全員馬を停める」

「な、なにを言ってるんです？」ダラスが戸惑って聞き返した。「怪我のことより、今はとにかくできる限りに逃げないと」

この者の言うとおり今はできる限り遠く離れなければならないだろう。神殿のやつらがこのまま見逃すはずがなく、そして今の自分たちでは勝ち目は薄い。もしかすると勝てないこともないのかもしれないが、何人かは確実に命を落とすことになるだろう。

だが、皆の怪我を手当てしなければ、逃げ続ける事態が危うい。迅速に手当てをし、逃走するのが最善策と考えるべきだ。

それに、騎士たちが苦痛に耐え続ける姿は見るに忍びない。

「とにかく停めるが良い。その者たちの手当てをする」リグヴェーダは再度命ずる。

「しかし……」ダラスは自分の命をこれ以上危険に晒したくないようだった。

その自分だけのことしか考えない思考は、リグヴェーダにもわかり、怒りを顕わにして一喝する。

「早く停める！」

「はいっ」ダラスが思わず返事をして、ティダを停めた。

ダラスに続いて他の者も馬を停めと、マースム力はすぐにセネロから降り、パプロの馬へ駆け寄って下馬するのを手伝う。

「パプロさん、しっかりしてください」

「……すっかりしてるつもりなんだがな」

言いながらもそれは力なく、半ば滑り落ちるかのようだった。脇腹かの出血が酷く、衣服は足まで紅く染まっている。死なずにすんだのは奇跡に近く、乗馬し続けていられたのはまさに奇跡としか思えない。

リグヴェーダも駆け寄って手伝い、降ろしたパブロの背を、近くにあった岩に預けさせる。

そしてマースム力に「なにか手当てをするものを」

「うん」マースム力はセネ口のところへ戻り、急いで荷物から治療具一式が入った袋を取り出した。

「よこせ」だが、そこにダラスが傍にやって来て奪うようにして取る。そして「おまえが傷のこと言い出したから、リグヴェーダ王女が気にしたんじゃないか。連中が追いかけて来てるって時に、止まって悠長に手当てなんかしてる余裕なんざあると思ってるのか、ああ？ 少しはもの考えて喋れ、この足手纏いが」

「あ……」言葉に詰まるマースム力。

仲間のことをまるで気にかけないダラスの言い方に啞然としたのが半分。実際に手当てをしている場合ではないのだということを指摘され納得してしまったのが半分。

ダラスはさげすんだ一瞥を向けると、治療道具一式を持ってリグヴェーダのところへ。

リグヴェーダはそれまでパブロの傷を見ていたので、マースム力たちの一連のことは見ていなかった。治療道具一式を持ってきたのが、マースム力ではなくダラスだったことに怪訝な表情をしたが、手当てが先と追及はしなかった。

「うー」手当てを始めると、パブロは呻いた。

思った以上に刃傷は深い。シエルダックもラツガートに手当てを始めた。こちらは傷が多いが、浅く、パブロほど酷くはない。

ルマジャーンはセリナが。こちらは傷も浅く肩の一箇所だけなのですぐに終わる。

マースムカは手当てされている様子をセネ口の傍で見ている。ダラスが手伝っているの、自分には必要ないと。だが、心配ではある。パプロは本来なら致命傷になっていてもおかしくなかった。これよく死なないと驚くほど。運よく急所を外れ内臓に損傷を受けなかったからなのか、それともパプロがそうしたのか。だが不死身というわけではなく、重傷であることは変わらない。

そしてマースムカは再び思い出す。自分が殺した二人のことを。思い出すだけで体の底から恐怖が突き抜けてきた。それに伴う脱力感。

僕は、人殺しだ。リグを助けるためとはいえ、人を殺したことに変わりはない。そしてそのことに對する罪の意識は消えない。いくら理由を付けても、言い訳をしても。

七年前に、僕を殺そうとした人間と同じことをした。そして神殿にいる者たちとも同類になった。

もし、敵に追いつかれたら。もし、もう一度戦うことになったら。その時、自分は戦うことができるだろうか。

手当をするリグヴェーダは、パプロに尋ねる。

「リイジスほどの程度時間を稼ぐ」

「はい？」ダラスが自分に訪ねられたのだと一瞬勘違いしたようだ。リグヴェーダは訂正することなく、パプロも気にせずに答えた。

「二時間ぐらいは連中と差がでるだろ」パプロは付け加えて「だが、やつらに探知系統の魔法で捕捉されれば、一時間程度だ」

リグヴェーダの位置を捕捉する魔法を使用される可能性は高い。

探知するには、対象物になんらかの処置が必要だ。神殿にいた間、リグヴェーダは魔導士たちになにかをされた覚えはないが、自分が知らないだけということもある。寧ろ、意識を失っている間に魔法的な刻印処置を施された考えるべきだろう。

自分自身か、あるいは衣服か。この場で着替えて衣服は捨てたほうがいいだろう。発見される可能性は少しでも軽減するべきだ。

「そうか」リグヴェーダはそれ以後、治療に専念した。

十数分後、一通りの手当てが済み、ラッガートが具合を確かめる。応急処置だが、年季の入ったシエルダックの手当ては見事なもので、包帯を巻かれながらも体の自由を損ねることはない。これならば馬の手綱も問題なく操れるだろう。

ルマジャーも包帯を巻かれているが、右肩だけのこともあって、動きを損なっていないようだ。

反面、パブロは酷く動き難そうだが、リグヴェーダの腕が悪いからではなく、傷が深いためだ。マースム力が肩を貸して、セネロへ跨るのを手伝う。この状態では、これ以上馬を操るのは無理だと判断し、マースム力が変わりに手綱を取ることにした。

パブロをセネロの背に乗せると、リグヴェーダは少年の名前を呼ぼうと思った。今着ている服を脱ぎ棄てるために、新しい服を貰わなければ。

だが、なぜか友の名前を呼ぶことを躊躇う。

「あのな、その……」なにを言えば良いのかわからず言い淀み「聞きたいことが色々あるのだ。それに話したいことも、たくさん」

かつて婚約者だった少年は首を振る。

「後にしよう、リグ。今はまだ危険だよ」

「そうだな」リグヴェーダはすぐに納得し「そのとおりだ。後で、必ず」

「うん」少年は微笑む。

リグヴェーダは急に懐かしい思いに囚われ、少年を抱きしめたくなった。

ああ、変わっていない。七年の年月は、少年を大きく変えたが、しかし大切なことはなにも変わっていない。

弟のように大切な、私の友。

パブロは二人の話を聞いて、怪訝に思う。どうも二人は知り合いらしいのだが、どういう関係なのか見当もつかない。もっとも自分と王女の関係も、他から見れば見当も付かないのだろうが。

空が朧に明るくなり始めていた。

もうすぐ夜が明ける。明るくなれば崖に転落する危険は少なくなるだろう。マースムカの案内で連中にはわかりにくい経路を走れば、見つかる可能性も少なくなる。

十分に逃げ切れる。

だが不意に、声ではない声が届いた。

パブロ！ ヤバイよ！

ラッガートは三人が妙に親しげな雰囲気なのが気になったが、今はそんなことを考えている場合ではないので、追求はしなかった。不意に、カラン、カンカラン、と石が一つ崖下に落下する音が響いた。峡谷は一種の音響管と同じ現象を起こし、遠くからでも音が届くことがあるが、今の音は比較的近くであることは、大峡谷の自然現象に慣れていない者でも判別が付いた。

ラッガートは音の方向に鋭い目を向けた。遅れて他の七人も。そしてそれぞれ武器を手にする。

村の方角からティダがやって来る。その背に乗るのは知っている人物。

「父さん？」マースムカが疑念の声を上げた。

どうして彼がこんなところにいるのか、息子でも疑問に思っている。

ジフはマースムカたちの姿を確認すると、ティダを早足で歩かせ、すぐに彼らの場所へ。

「どうしました？ 騎士殿」ジフは丁寧な口調で聞いた。

ぶつきらばうなのは相変わらずだが、尋ねるといふより、なにかを確認しているようだ。

「そこにおられるのは、もしやリグヴェーダ王女ではありませんか？」

ラッガートはどう説明するべきなのか少し考えてから「いや、説明は後にももらいたい。今は一刻でも早く村に戻らなければ危険なのです」

「危険？」ジフの眉が微かに動く。

「とにかく、戻ってから話します」

早くここから移動しなければ。ラッガートは、他の者に馬に乗るように指示を出した。

「ちよつと待て！」

だが、パブロが唐突に制止し、左耳に左手を当てた。その行動の意味を他の者にはわからなかったが、セリナだけがその唐突な行動を理解したように聞く。

「どうしたの？」

「絨毯？」

聞き方によつては、セリナの質問に答えたように思えるが、問答にしては噛み合っていない、首を傾げたくなる様子だった。

パブロは続けて「時間は？ どれぐらいで追いつかれる？」

ラッガートは正直戸惑い「パブロ、なにを言っている？」

パブロは答えずに「五百メートル先に来てる！？ そんなの逃げ切れるか！ 隠れる！？ んな場所どこにもねえよ！」

神殿の方角から奇妙な音が聞こえ始めた。巨大な鐘楼が鳴っているような、狭い空間で重低音の楽器を鳴らしているかのような、形容しがたい奇妙な音。

それは確実に、急速に接近していた。

「なんだあれは！？」ラッガートは驚愕で叫ぶ。

そして音を発しているなにかが、上空に届く朝焼けに照らされて

姿を現した。

ラッガートは自分の目になっている物が、非現実的で我が目を疑った。

絨毯が上空を浮遊していた。

裏側に取り付けられた八つの水晶球が朧に輝いている。そこから奇妙な音と共に、風が発生し、濛々と砂煙を巻き上げ、ラッガートたちは手をかざして顔をかばう。

「魔法の空飛ぶ絨毯。なんつー古典的な」パプロが感心したような、呆れたような声。

セリナは信じられないものを見たかのように「どうして？ 現存している空飛ぶ絨毯は厳重に保管されているはずなのに」

魔法の空飛ぶ絨毯はその製造法が失われ、現存しているのは五つしかないと聞く。そして五つとも博物館や魔術師協会などが保管しているはず。それがなぜここにあるのか。

「まさか、あの魔導士たちが作ったの？」

セリナが可能性を提示すると、パプロが肯定した。

「みたいだな。現存している五つとは形式が異なる」

絨毯は地上に降り、そこに乗っていたのは、十一人。

緑黄色の斑模様の暗殺者が八人。一人だけ鉄帽をかぶっているのはボッズル。

そしてドレス姿の厚化粧の女と、青いローブを羽織った白仮面。

彼らの先頭にいるのは、銀髪の男、ゲシュタル。

朝日に照らされて現れた夜明けの使者は、騎士たちを夜明けの死者にする。

「ゲシュタル」ジフが忌々しげに名前を口にする。それは銀髪の男に向けてなのか、それとも他の誰かに男の名を伝えるためなのか、それとも自分自身に聞かせるためなのか。

「また会ったな、アザニスの悪魔」ゲシュタルが冷淡に答えた。

この二人は知り合いなのか。味方同士というわけではないようだが。

「アザニスの悪魔……」パブロが驚愕する。「まさか、あの伝説の傭兵、アザニスの悪魔なのか？」

「え？」マースムカはパブロに視線を向ける。「なんの話ですか？」
ゲシュタルがマースムカに目をやり「息子になにも伝えていなかったのか？」

「黙れ！」ジフが叫び「アザニスの悪魔などという過去は捨てた。私はただの大峡谷の一介の狩人だ」

ボツズルがゲシュタルに聞く。

「なんだよ、アザニスの悪魔って？」

「伝説的な傭兵だ。いや、暗殺者といったほうがいいのか。数々の不可能作戦を成功させ、ありとあらゆる破壊工作、暗殺を達成した、稀代の天才的特殊工作員」

「黙れと言った！」ジフが叫んでそれ以上の説明を止める。

だが、ゲシュタルは無視して「依頼があれば老若男女問わず殺し、幾百人の人間を闇の中に葬り去った殺し屋。ボツズル、おまえの先輩だな」最後は皮肉を込めていたのかもしれない。

「えー、俺の先輩い」ボツズルは驚いたような仕草をして「いやー、感激だなあ。そんな凄い人に会えるなんてえ」ズボンで手の平を拭くと、浮遊する絨毯の上からだが、それを差し出す。「握手してくれる？」

返答は、駆動式短弓の矢。

ボツズルは大げさに矢を避けて「おお、さーすが。問答無用とは、基本だね、基本。でも、そんな遅い矢なんざ当たりやしねーよ」

ジフは避けられたことを意にかけなかったのか、ボツズルを無視して「ゲシュタル、いったいなにを企んでいる？ リグヴェーダ王女をさらい、いったいなにをしようというのだ？」

「関係ないのではなかったのか？ おまえとはもはや仲間ではないのだろう。リグヴェーダ王女の身柄を渡せ。さもなくば死ぬことになるぞ」

ジフは改めて駆動式短弓を構えて答えた。

「なにを企んでいるのかは知らんが、リグヴェーダ王女を渡すわけにはいかん。貴様の考えなど、人の命を顧みぬ、人道に外れたことに決まっている。貴様は、魔導士^{カーヒン}なのだからな！」

魔導士。魔法を犯罪に使用した魔法使いの総称。その使用法はほとんどの場合、命に関わる人体実験だという。魔法に関する好奇心を抑えられずに、禁断の領域に踏み出した者たち。

「貴様も私と同類だろう！ アザニスの悪魔！」ゲシュタルが叫ぶ。それは、この男には極めて珍しいことに、指摘されたことに苛立ちを感じていたのかもしれない。「貴様とて人間の命を商品として扱ってきたではないか。そのおまえに非難されるいわれはない！」

マースム力は頭が混乱する。突然与えられた情報を受け付けられないように。

父さんが傭兵？ 殺し屋？ 暗殺者？

嘘だ。そんなの嘘だ。父さんが殺し屋だなんて。だって、僕を助けてくれたじゃないか。育ててくれたじゃないか。あの時、僕が殺されそうになった時、自分の身も省みずに助けてきてくれた。父さんが暗殺者だなんて、そんなことあるはずがない。

だが、同時に思い出す。七年前、襲撃を受けて殺されそうになった時、助けるために襲撃者を躊躇わずに殺したことを。それが神業のように思えるほどの腕だったことも。

なぜこんなことを思い出したのかわからない。だが、想起された途端、ゲシュタルの言葉を受け入れそうになってしまった。納得してしまった。

だが、必死に否定する。あれは仕方のなかったことなのだ。自分を助けるために仕方なくやったのだと。

「父さん」マースム力は力なく尋ねる。「嘘だよな？ あの人の言ってること、全部嘘だよな？」

ジフは答えなかった。どこか苦渋の表情を浮かべて。

七章・第四日・4

「なにをベチャクチャ喋ってんだい！」パレスが顔を憤怒で醜悪に歪めて叫ぶ。「とっとと皆殺しにして、王女を奪い取ればいいんだよ！」

「パレス、落ち着け」

ゲシュタルは制したが、怒りで我を忘れているパレスは聞き入れなかった。

「殺っちまいな！」

叫ぶと同時にパレスは飛び出し、大剣を持つ両手を広げて構える。四つの牙を持った怪物の顎が開かれたように。

青の魔導士も、刃渡り一メートルの大剣を広げ、パレスに続く。こうなっては躊躇う暇はない。危険を覚悟で王女を奪還するしかないだろう。

ゲシュタルは冷淡に「ボッズル」

「リョウカーイ」

ボッズルは楽しげに返答すると、暗殺者たちが一斉に周囲に展開した。

戦いが始まった。

「おおお！」

ラッガートが気合の声と同時に、接近する暗殺者の一人に剣を振り下ろす。暗殺者は真横に回避すると、カタールを二本同時に突いたが、ラッガートはそれを盾で横に払った。

その力任せの防御に、暗殺者は弾き飛ばされて岩壁に激突する。だが、麻薬で痛覚を鈍くしてあるため、苦悶の声も出さずに起き上がると、再びラッガートに刃を向ける。今度は二人が連携をとる。「行け！」

ゲシュタルは動きを観察していると、ラッガートとは離れた位置にいたセリナが呪文を唱え、魔法の短剣が一閃となつて迫る。

魔法の絨毯を操っているのがゲシュタルだと判断して、先に排除しようと考えたのか。だが、短剣はゲシュタルの眼前で火花を散らし、絨毯の上に落下した。魔法の結界による不可視の防壁。ゲシュタルは身をかがめて、セリナが使う魔法の媒体であり武器となる短剣を拾った。これで武器が一つなくなつたわけだが、彼女にはまだ十本以上残っている。

「さて、どうしたものかな。あの魔術師は、もしかすると騎士隊長以上に厄介かもしれんぞ」

魔術師がいなければ、神殿で騎士たちは逃がすことなく、殲滅できただろう。

「俺に任せてくれよ、旦那」

ボツズルは絨毯から跳躍して降りると、セリナにナイフを構える。

「ゲツゲツゲツ。お姉ちゃんのお相手をして、あ、げ、る」

「サリナの仇！」セリナは激昂して叫ぶ。

魔術師とボツズルから少し離れた場所では、ルマジャーンが右手で拳銃を撃ちながら、左手の剣を振るう。

「この野郎！」

拳銃も剣も命中せずに全て避けられる。暗殺者を一人引きつけてはいたが、どうやら若い騎士は特別に戦闘能力が秀でているわけではないらしい。

背後でシエルダックが援護していなければ、最初にやられていただろう。

「この！ この！」

シエルダックが猟銃を発砲する。命中こそはないが、暗殺者が三人接近できないでいる。滅茶苦茶に発砲しているのではなく、あの状況下にあつて狙いは正確だ。そのため暗殺者は回避に専念するしかないようだ。迂闊に間合いを狭めようとすれば、弾丸が命中するだろう。

シエルダックとルマジヤーンの近くで、リグヴェーダはシエルダックの剣を借りて暗殺者二人と対峙していた。

お互いに隙がなく、動けない。暗殺者はリグヴェーダを殺すわけにはいかず、リグヴェーダも二人同時に相手にするのは無理があるようだ。常人ならともかく、相手は麻薬服用暗殺者だ。いかに闘姫と称賛される剣術の持ち主でも、あくまで試合での話。実戦はこれが初めてだろう。そして、おそらくは殺人に対する抵抗感があり、動きが試合の時より鈍くなっているはずだ。王宮の時も、ボツズルを一太刀で仕留めることが可能だったはずだが、できなかった。それでも、最初の実戦においてここまで動けるのは、剣を学ぶ者としてこのような時のために覚悟をしていたからだろう。それは賞賛すべきことだ。

そして、ベドウィルム村の狩人の一人、ダラスは駆動式短弓を適当に狙い発射するという行動を、延々と繰り返し返しているが、やはり命中せずそろそろ矢が尽きかけてきている。

「畜生、なんで当たらねんだよ」舌打ちして、ラッガートが相手をしている暗殺者に狙いをつける。ちょうど罅迫り合いをしている。「当たれ！」

命中した。ラッガートの相手をするので手が一杯だった暗殺者は、避けるだけの余裕がなく、その胸を貫かれ動きが一瞬止まる。そしてラッガートがその隙を逃さず、剣を横に薙ぎ、首を跳ね飛ばした。「いいぞ、ダラス」

「任せてください！」一人倒しただけで有頂天になっている。

そしてパブロでは、先程から動かないマースムカの付近で、散弾銃を連続して発砲。

「ぼさつとしてんな！」

脇腹から出血していることから、激痛を感じているはずだが、精神力で無理矢理こらえているようだ。

銃口から火が吹き、マースムカに接近していたパレスを弾き飛ばす。

「ギア！」だが距離が遠く、威力はドレスに付加されている魔法防御で緩和され、数メートル後退しただけで、何事もなかったように空中を飛び続ける。

「このお、やってくれるねえ」

憤怒と憎悪に顔を歪めて、パレスは大剣を改めて構える。

パレスとパブロが相対し続ける。

そこから少し離れた場所にいるジフは、沈黙したまま駆動式短弓から矢を放った。暗殺者の一人は矢を難なく避けた。だが、その矢は背後の岩に命中し、それは上へ大きく跳ね上がり、暗殺者の頭上を越えて落下し、その足に突き刺さった。暗殺者は足の力が抜け、膝を屈しかける。

地面に縫い止められた暗殺者は矢を引き抜く前に、二本目の矢が額を貫く。さらに二本の矢が、眉間と心臓を正確に貫いた。

ジフのその目は酷く冷酷だった。七年前と変わらず。

さすがだ。ゲシュタルは胸中呟く。大峡谷に訪れた時、再び仲間に引き入れようと考えていたが、やはりなんとかして引き入れるべきだった。今となっては遅く、そして失敗だった。

こちらの戦力は残り九人。

騎士たちはまだ一人も減っていない。

だが、一人まるで戦力になっていない者がいる。

マースム力だ。

マースム力は戦いの中、奇妙に虚ろな目でそれを眺めていた。

僕は今殺し合いをしている。そして、父さんはあの人たちと同じなんだ。そして、父さんに育てられた自分も、今は人殺しだ。

今まで気が付かなかったことだが、そして考えたこともなかったが、もしかすると考えるのを避けていたのかもしれないが、少年は人の死に対して、人が殺されることに、人を殺すことに、根本的な拒絶感を持っていた。

それは生来によるものなのか、もしくは幼い頃、圧倒的で容赦のない暴力と殺意によって、両親を目の前で殺されたことに起因するものなのか、それはわからない。

ただ、そういうことに気が付かないまま、自分がその忌み嫌う、殺人者になった。

酷く恐ろしかった。自分も、そして自分を育ててくれたジフも。

ジフが自分を育てたのは、狩の技術を教えたのは、自分の後継者として、人殺しの技を教えていたのではないだろうか。

だから、僕は人を殺した。

筋の通らない説明だが、マースムカにはそれが真実のように思えてならなかった。そしてもっと大勢の人間の命を奪ってしまうような気がして、自分自身が恐ろしかった。

マースムカはただ恐怖で震えていた。

パプロは右手で拳銃を撃ちながら、左手だけで散弾銃に弾込めをする。

「マースムカ！ しつかりしろ！」

戦いを経験したことのない少年は、ついに精神力の限界に達し、恐怖にとらわれ、完全に動かなくなった。

どうする。敵の数は残り九人。だが、こちらは少しずつ劣勢に追い込まれている。

「どけ！」

突然ゲシュタルが叫ぶと敵は全員その場から離れた。

同時に魔法の絨毯が大きく変形する。四方の端の部分が紙縊りのように巻き、触手のように伸びた。そして四つの槍のように地面に突き刺さると、土砂を掻き揚げてパプロたちを攻撃した。

王女と騎士、狩人たちは悲鳴と苦悶の声を上げる。目暗ましのつもりなのかもしれないが、大量の土砂と石礫はそれだけでも攻撃力

がある。

ゲシュタルは続けて触手を鞭のように振り、あるいは串刺しにしようとして連続して突いてくる。

パプロはすぐに立ち上がると、地面すれすれに撓る触手が眼前まで迫り、咄嗟にその場で跳躍して避けた。

ラッガートたちもそれぞれ回避したようだ。

魔法の絨毯が変形した攻撃方法は、速度は暗殺者に比べれば明らかに遅く、動作も大振り。よけるのはそれほど難しくない。

あの魔法の絨毯は、おそらく大峡谷の地形を迅速に移動するために製造されたもので、本来戦闘用ではないのだろう。今の攻撃もあくまで応用によるものにすぎない。

だが、その破壊力は強力だ。地面に深く突き立てた攻撃力なら、人間の体を容易く貫き、土砂をまき散らした力ならば、人間の体を一撃で破壊する。

「クソ！ どうすればいいんだよこんな物！？」シエルダックが叫ぶ。

魔法の絨毯から伸びる四本の触手に、暗殺者たちと魔導士が加われば、脅威は増大する。

だが、制御に難があるのか、攻撃は大雑把で、連携をとることは難しく、無理に戦闘に加われば、同士討ちを起こすようだ。

「銀髪の男だ！」パプロが叫ぶ。「ゲシュタルをやれ！ 操る奴がいなくなれば、絨毯は動きを止める」

ゲシュタルは絨毯の上から動いていない。魔法使いがその上で直接命令を出していなければならぬようだ。

そして動かなければ、やつらの移動手段は失われ、逃げるのが可能かもしれない。

パプロは叫びつつゲシュタルへ向けて散弾銃を撃った。だが、境界で塞がれ、十数発の小さな弾丸は、ゲシュタルの眼前で跳ね返された。

銃器類による遠距離攻撃は、魔法防壁によって防御される。効果

があるとするば、直接攻撃だが、浮遊する魔法の絨毯は、その位置のために攻撃し難い。

「行け！」

セリナが魔法を行使する。セリナの周囲に展開していた浮遊する短剣が、全てゲシユタルへ向かった。槍のように一列になり、一直線に走るそれは、連続して攻撃を一点に集中し、生半可な結界を貫通するはずだ。そして銀髪の男は暗殺者のように避けられるほどの身体能力はない。

体力の限界に近いはずだが、この攻撃にかけるつもりか。貫いてくれ。

だが、ゲシユタルはセリナが短剣を放った瞬間、触手を集中し螺旋状に回転させ、短剣を全て弾き飛ばした。魔法による防御ではなく、物理的な防御。

「……そんな」セリナは力を使い果たし、膝を地面に落とす。

それは致命的な隙。

「隙だらけ！ 好き好き好き好きだらけええー！」

ボツズルがカタールを両手に構えて迫る。

セリナは体力を使い果たした状態で、しかし反射的な行動なのか、体を反らした。

ボツズルがカタールを振り下ろす。

左腕の肘から先が宙を舞う。

「おっと」切断したセリナの左腕を、ボツズルは飛び上がって右手で受け止める。

「くうああ……」

左腕肘先から夥しい出血が始まり、右手の平で押えても簡単には止まらない。

ボツズルは切断したセリナの左腕の指先まで舐めあげると「ちょっと失敗。さあ、今度こそ僕ちゃんの愛を受け止めてえええええ！」左腕の切断部を右手で押えるセリナは、その攻撃を回避しようとしたが、しかし体力の限界に達し、さらに左腕を切断されたために

肉体的にショックを受けたのか、足が動かない。

「アブねえ！」パプロはセリナを体当たりで押し退けた。「ガ！」そして横腹と背に凶刃が深々と突き刺さった。「あ、ああ？」

「パプロ！」セリナが悲痛な声を上げる。

「ありやりやー？　おいおい、人の愛の告白タイムを邪魔すんなよ。昔からいうだろ。人の恋路を邪魔するやつは、八つ裂きにして殺してやるって、なー！」

「うがあああああ！」パプロは力を振り絞り、至近距離で拳銃を撃とうと、腕を上げた。

だがボツズルは拳銃を容易く払い飛ばした。散弾銃と拳銃が異なる方向へ転がる。

「うるせー」そしてボツズルは後ろ回し蹴りでパプロを蹴り飛ばした。

数メートル宙に浮き、そして弧を描いて落ちるそこには地面がなく、パプロは峡谷の遥か下、激流へと落下していく。

だが、その目はゴーグル越しにボツズルを見据え、最後に残った六連装拳銃を向けると、落下しつつ発砲する。

ボツズルはその弾を踊るようにして避ける。

一発、二発、三発、死発。

カキン。激鉄が空撃ちの音を立てた。弾切れだ。

最後の攻撃は全て避けられた。

「クソったれ」

かすかに呟いたパプロの声は誰にも届かず、そして水面に体が叩きつけられ、水飛沫の音も、激流の轟音にかき消された。

「パプロ！」

ルマジャーンは悲痛に叫ぶ。

あの情報屋はどんなことがあっても死なないような、たとえ全滅

するような事態になっても、あいつ一人だけ助かるような印象を持っていた。

だが現実には、簡単に殺された。

ボZZルがパプロに別れを告げるように手を振った。

「いやー、なんか俺たち手間取ってるねえー。やーっと一人目かよ。ゲッゲッゲッゲッ」

「貴様あー！」リグヴェーダが憤怒に剣を横に払った。

ボZZルはそれをカタールで受け止める。

「王女！」ラッガートが叫ぶ。

「皆の者！ 絨毯の上の男を倒せ！ パプロの最後の言葉だ！」

「はい！」

ルマジャーンとラッガートは了解すると、同時にゲシュタルへ走りだした。

だが、魔法の絨毯から伸びる触手の攻撃、連続して突いてくる巨大な槍のような攻撃で、接近を防がれる。

だが、ルマジャーンはそれを避けきった。ゲシュタルがラッガートを危険と判断し、そちらに攻撃を集中させたため、ルマジャーンの技量でも避ける余裕があったのだ。

しかし浮遊する魔法の絨毯は、攻撃の届かない位置にある。拳銃も効果がなかった。攻撃を命中させるには、直接届く位置、魔法結界の中へ飛び込まなければ。

ラッガートが両手を組んでしゃがんだ。

「ルマジャーン！」

ルマジャーンは即座にその両手へ足を乗せた。タイミングを合わせてラッガートは上へ投げ、ルマジャーンは跳躍する。

ラッガートの腕力と、ルマジャーンの跳躍力が合わさり、空中に浮遊する魔法の絨毯へ届く。

ルマジャーンは拳銃を撃ちつつ、一気にゲシュタルへ、そして斬撃の範囲に到達し、確信の声を上げた。

「取った！」

この男を倒せば魔法の絨毯を操る者はいなくなる。敵が移動手段をなくせば、逃げる余裕がでるだろう。敵を殲滅することも可能かもしれない。これがおそらく最後のチャンス。

そしてパブロの仇を討つのも。ほんの数日だったが、あの男とは確かに仲間だった。

「うおおおおお！」

ルマジャーンは吼え、剣を振り上げた。

「ガッ！」そして苦痛の声。

ルマジャーンの剣は振り上げた状態のまま止まっていた。

苦痛の声はルマジャーンのもの。魔法の絨毯から伸びる触手が一本増えていた。不測の事態に備えて、もう一本存在するを隠していたのか。それはルマジャーンの背から腹部にかけて貫いていた。

「お、ゴホ、ゴブブブ」そして大量の血を吐き出す。

「ルマジャーン！」シエルダックがその名を叫んだ。

若き騎士は返事をする事ができず、それでもなお、その剣で銀髪を切り倒そうとして振り下ろしたが、届くはずもなく、酷く滑稽に空振りする。

「あ、隊……シエル……」ラッガート隊長、シエルダックさん。必ずリグヴェーダ様を助けてください。

「セリ……」セリナさん。サリナさんの敵討ちを果たすことを祈ります。

「マ……スム……カ……」マースムカ、ダラス。こんな危険なことに巻き込んですまなかった。

パブロ。おまえのあとを追うことになってしまったようだ。

リグヴェーダさま。申し訳ありません。あなたをお守りすることが俺の仕事だったのに、俺の使命だったのに、全うすることができませんでした。

「リグ……ヴェ……ダ……」

リグヴェーダ様、結局告げることはできませんでしたが、俺はあなたのことが好きでした。せめてこの思いだけでもお伝えしたかった。

た。

リグヴェーダ様。お別れです。必ず生き延びてください。

そして、彼は力を急速に失い、その手から騎士叙勲式の時にリグヴェーダから授かった剣を落とした。

大地に剣が突き立つ。それは彼の最後の意思を象徴したのか、ただの偶然か。

少なくともルマジャーンの瞳に、その剣が映ることはなかった。永遠に。

七章・第四日・5

「ルマジヤーン！」

ラッガートは目の前で起きたことが信じられずに、若い騎士の名を叫ぶ。だが、触手に貫かれているルマジヤーンは完全に脱力した状態でぶら下がっているだけで、返事をしなかった。

ラッガートは憤怒の形相でゲシユタルを睨むと疾走する。

「貴様あ！」

大剣を握り締め、迫り来る触手の攻撃を避け、岩肌を駆け上がり、反動をつけて跳躍した。避けられればそのまま河へ転落しかねない方法だが、触手を出してから魔法の絨毯はほとんど動いていない。おそらく、攻撃と移動は両立できないのだ。

それを確信したラッガートは、雄叫びをあげて剣を振り上げた。

「ウオオオオオオ！」

だがゲシユタルは触手に突き刺したルマジヤーンを、ラッガートめがけて投げ飛ばした。

「なに！？」

意外な攻撃方法だったからなのか、それともルマジヤーンを武器として使われたからなのか、動揺したラッガートは、空中に飛んだため避けることができず正面に受けてしまった。

「グッ」

衝撃で地面に落ち、倒れたラッガートはすぐに起き上がったが、そこへ横払いに触手が攻める。

咄嗟に剣を構えて防ぐが、人間の力で受け止められるはずもなく、弾かれて岩壁に激突した。

剣で受け止めたので致命傷は免れたが、岩壁に激突した衝撃で、肋骨が数本折れ、脳震盪を起こした。

「……お、おお……お」

意識を失うまいと気力を振り絞るが、虚しくも視界は闇に包まれ、地面に崩れ落ちた。

動かないラッガートに止めを刺そうと、暗殺者が三人迫る。

「隊長！」

シエルダックが叫んで猟銃を発砲した。暗殺者はそれを避けるために、ラッガートから離れた。

「なんでだ！　なんでだよ！　チクシヨウ！」

シエルダックは叫びながら撃ち続けた。

なぜルマジャンが死ななければならぬ。まだ二十歳だったんだ。あいつはまだ若かったんだ。それなのに、あいつの人生はこれからなのに、どうしてこんなところで死ななければならぬんだ。

「うあああああ！」

猟銃が弾切れを起こした。シエルダックは急いで再装填しようとしたが、援護する者もないその隙を、暗殺者が逃すはずがなく、その背に刃を突き立てた。

「ぐあ！」

苦悶の声を上げながらも、シエルダックはその暗殺者に目掛けて、猟銃を振り回した。もう弾を込めることは考えていなかった。ただ、棒を振り回すかのように猟銃を振り回す。

「ぎ！」その脇腹にさらに刃が刺さる。

さらに胸に。足に。脇腹に。肩に。

次々とカタルが突き立てられ、シエルダックはそれでも立ち続けようとしたが、もはや体の筋肉はともに繋がっておらず、どんなに気力を振り絞っても、意思を反映することはなく、シエルダックは倒れた。

「隊……長……」

だが、まだ意識は絶えておらず、暗殺者がラッガートへ向かっていくのが視界に入る。そして目の前に、パブロが落とした散弾銃があった。

シエルダックは力が入らない震える手を、意思を振り絞って伸ばし、散弾銃の持ち手を掴んだ。そして地面に伏したまま、背後を見させている暗殺者へ発砲。

暗殺者はもう死んだと思っていたのか、背後だから気付かなかったのか、散弾を受けて頭部を四散させた。

シエルダックは満足そうに呟く。

「ざまあみやがれ」

ボZZルが、まだ生きているシエルダックの、その頭部にカタールを突き刺した。

頭蓋骨を突き破ったその衝撃は、脳にどのような影響を及ぼしたのか、シエルダックの目玉が限界まで裏返り、その意識は強制的に消滅した。

「パチパチパチパチ」ボZZルが拍手をして「はい、三人目ー。そしてえ」セリナとラッガートに向き「もうすぐ四人目えー。五人目、六人目ー。そしてみーんないなくなっちゃった。ゲーゲッゲッゲッ」

パブロの六連装拳銃がマースム力のところに転がってきた。指先に当たったそれを虚ろな目で見ていたが、やがて急速に現実感を取り戻す。

「……パブロさん？」峡谷の遙か下、川の流れの中にはパブロの姿は見えない。

「ルマジャンさん？」岩に引つかかるようにして、逆様の状態でぶら下がっている彼は、血を滴らせながら動かない。

「シエルダックさん？」地面に伏して動かない彼の体には、何本も

のカタルが突き刺さったままだ。

三人が死んだ。そのことによりやく気がついたように名前を呼んだが、当然返事は返ってこない。

「ああ……ああ……」

急速に現実感を取り戻したマースムカは、悔恨の念で呻く。

僕はなにをしていたんだ。呆然としている場合じゃないのに。戦わなければならない時なのに、リグを守らなければならないのに、父さんの過去や、自分のことなんて後で良い。今はリグを守らなければ。

「リグ」マースムカは立ち上がり名を呼んだ。

ボツズルと相対しているリグヴェーダへ駆ける。

そこにパレスが上空からマースムカ目がけて一気に下降した。

「死ねええええ！」

マースムカはそれに気付いたが、避けるには間に合わない。

だが、鋏がマースムカを挟み切る寸前「ゲエ！」蛙が潰れたような声で、パレスは蹴り飛ばされた。

窮地を救ったのは「セネロ！」

「この獣があ！」パレスは血走った目で睨む。「あたしの邪魔をする気かい!?」

「ブモウ！」セネロは闘牛の威嚇のごとき嘶きで答えた。

ヒュン！空を切る音と共に、一本の矢がパレスに当たった。

「ちい！」パレスは舌打ちして、ドレスに刺さっている矢を払い落とす。魔法防御の効果で体には到達していない。

「父さん！」

ジフは駆動式短弓をパレスに構えたまま、マースムカに指示を出す。

「マースムカ、リグヴェーダ王女を連れて逃げろ！」

「え？」

「早く逃げろ。河に筏がある。それを使え」

大峡谷の住人たちが用意している、緊急用の移動手段。大峡谷に

点在するように、常に準備されている。

「う、うん」

マースムカはリグヴェーダの元へと走った。

僕はなにを考えていたんだ。自責の念が込み上げる。父さんを、こいつらと同じだと思っうなんて。

父さんは、確かに人の命を奪った。

けれど、それは僕の命を守るためだった。誰かを守るために、こいつらのような人間から守るために戦っているんじゃないか。

父さんはこいつらの仲間なんかじゃない。

「リグ！」

ダラスは周囲を見渡すと、全員見捨てて逃げる決心をした。

勝ち目がない、完全に。

だが、全員を見捨てて捨て駒として置いて行けば、彼らが足止めして逃げるだけの時間が稼げる。

だが、リグヴェーダ王女だけはなんとかして連れて行こうとは考えた。王女を連れ帰れば、手柄は全て自分のものだ。

ティダに向けて口笛を吹いて合図をする。

暗殺者の何人かがそれに気付いて、攻撃しようとするが、駆動式短弓を向けて牽制する。だが、長くは持たないだろう。

早く来い。ダラスは胸中叫ぶ。だが、ティダは来なかった。後方で岩陰に隠れてこちらを伺っているだけだ。

ダラスは苛付いて「なにしてんだ！ 早く来い！」

叫ばれてもティダは動かない。それが、彼のティダの扱いを如実に表していた。

「リグ！」

リグヴェーダはマースムカの声に一瞬顔を向ける。セリナとラッガートに敵を庇う位置に立っていた王女のその一瞬の行動を逃さず、暗殺者の一人が襲いかかってくる。

「しまった！」リグヴェーダは反応するが、遅かった。

リグヴェーダの持つ剣が弾かれ、それは地面を滑って離れていく。マースムカが咄嗟に駆動式短弓を、その暗殺者へ狙い定めた。

「伏せて！」

リグヴェーダは屈むと同時に、マースムカは躊躇いなく引き金を引いた。

空を切る鋭い音がリグの耳に届いた瞬間、暗殺者の肩に矢が突き刺さっていた。怯んだ暗殺者の顎に、リグヴェーダの右肘が捕らえた。屈んだ状態から、起き上がる時のバネを利用した、渾身の肘上げ。暗殺者は顎を砕かれ、昏倒する。

マースムカが敵を弓矢で攻撃しつつ牽制し、攻撃を避け、一呼吸の間にリグヴェーダの傍にやって来た。

「リグ、大丈夫？」

「なんとかな。だが、武運は途絶えてしまったようだぞ」

暗殺者たちは周囲を取り囲み、逃げ道を失った。突破するのは不可能に近い。こちらの戦力はたったの四人。ラッガートは気を失っており、セリナも体力を使い果たし魔法はもう使えないうえ、左腕を切り落とされている。

だが、敵はまだ七人と一体がいる。特に、魔法の絨毯を破壊する方法がなく、操縦している魔導士を倒すことも現状では不可能に近い。

「マースムカ、てめえのせいだぞ」ダラスが忌々しげに「おまえが止まって傷の手当てをしようなんて言わなきゃ追いつかれずにすんだんだ」

その言葉に、リグヴェーダは自責の念に眉根を顰めた。手当てのことを言い出したのはリグヴェーダであって、マースムカではない。

ダラスには自覚がなかったが、今の言葉はマースムカへの非難のようで、リグヴェーダに向けられたに等しい。

そして、事実、その発言のために、三人の忠義の家臣を死なせてしまった。リイジスが時間を稼ぐと判断した、その考えの甘さのために。

もつとも、立ち止まらなくても、あの魔法の空飛ぶ絨毯の移動力を考えれば、追い付かれるのは時間の問題だっただろう。寧ろ、手当てをしたことで、長く戦うことができたのだが。

ダラスはティダに向かって「なにしてやがんだ！ 早く来い！ また飯抜きにされたいのか！」

相変わらずダラスのティダは離れた場所から動かなかった。逃げようかと考えてさえいるようだった。

マースムカが叫ぶ。

「セネロ！」

セネロは声を聞くと同時に、全速力でマースムカの元へ走った。パレスの追撃は、ジフによって防がれ、暗殺者の垣根を跳躍してその頭上を飛び越え、一呼吸にしてマースムカの元へ。

「リグ、乗って！」マースムカは指示を出す。リグだけでも逃がさなければ。

「しかし」セリナとラツガートに目を向けて、躊躇するリグヴェーダ。

「早く！」マースムカは急かした。「君が助からないと、僕たちが来た意味がないんだ」

リグヴェーダはどうするべきなのか迷った。三人の死を無駄にしないことは、おそらく自分が逃げて助かることなのだろう。しかし、さらに死を増やすことにもなる。

なにより、この少年を置いていくことなどできない。

今度は、二度と会えない。

今度こそ、今生の別れとなる。

「おい！ 勝手なことするんじゃないやねえよ！」

ダラスがリグヴェーダの腕を取った。

マースムカがリグヴェーダを連れて逃げようとしているのだと、自分の手柄を横取りしようとしているのだと、自分勝手に言いがかり同然の思い込みから来た、突発的な行動。

その行動にリグヴェーダは、不快感を通り越して、怒りさえ感じた。

だが、それはリグヴェーダの命を救った。

そしてセネロの命を奪った。

「殺つやちまいな！」

パレスの声に青の魔導士は、一瞬の間もなく手にする刃渡りメートルの大鋏で、セネロの首を切断した。

セネロの人間的な表情を出す顔が、その首が、転がり落ち、胴体の切断面から、血が吹き出た。

「セネロ！」

マースムカの悲痛な声。

「パレス！」

ゲシュタルは制止の声を上げる。今のは、もしダラスがリグヴェーダの腕を取らなければ、確実に彼女の命を奪っていた。

「パレス！ なにをする！？ 王女は生け捕りにするんだ！」

「お黙り！」パレスは一蹴し「そんなことあたしの知ったことかい！ こうなったら皆殺しだよ！」

パレスは正気を失っている。このままでは本当にリグヴェーダ王女を殺してしまうかもしれない。ゲシュタルは手にする一本の短剣、セリナが攻撃し、魔法の結界で弾き、そして拾った魔法の短剣に魔力を込めた。

そしてリグヴェーダに向けて投擲する。それは彼女のすぐ足下に突き刺さり、次の瞬間、眩い閃光と共に破裂音にも似た音を発した。

「ッガ！」

雷撃をまともに受けたリグヴェーダは、地面へ崩れ落ちる。王宮で気絶させた魔法と同じ。あの時のことを思い出したかもしれないが、やはりあの時と同じようにすぐに意識が消失したようだ。

「ぬお！」

ダラスはその余波を受ける。距離が離れていたため電撃は微弱で意識を失うことはなかったが、体の感覚がなくなっているはずだ。

「あ、あが、う、体が、動かねえ」

このままでは嬲り殺しになると、地面を這いずり逃げようとしているが、しびれてほとんど動かないようだ。

「ああ?!」

マースム力はなにが起きたのかわからずに、動揺しているが、雷撃の影響は受けていない。ダラスと立ち位置が変わったため、ちょうど、リグとダラスが壁になって届かなかったのだ。

成功だ。ゲシュタルは胸中安堵した。今の魔法は不慣れな補助具を用い、もしかすると雷撃は意図したものより強力になってしまいかもしれなかった。だからこの方法は使いたくなかったのだが、とにかく成功だ。リグヴェーダを気絶させただけで済んだ。

「ボツズル」

ゲシュタルは呼ぶと、ボツズルはその意図を汲み取り、気を失ったリグヴェーダの体走りざま脇に抱えた。マースム力が気付いた瞬間には、その場を離脱していた。

「リグ！」マースム力が叫んで追いかけようとした。

だが、そこにパレスが迫る。

「死ねええええええ！」

王女に意識が向いていたマースム力は、その攻撃を避ける動作が遅れた。

「マースム力！」

だが、ジフが走りざま、暗殺者の一人の喉をナイフで切り、屠ると、パレスの絶叫と同時にマースム力を庇った。

「ウゲッ！」

その胸に、刃渡り三十センチの鋏が突き刺さる。そしてジョキリと肉が挟み切られる音。

血が吹き出る。ジフは構わずに、マースム力の持つ単発式拳銃を奪うように取ると、パレスの顔面へ向けて、ほぼ零に等しい至近距離で発砲した。

「ギア！」

大口径の弾丸は、パレスを弾き飛ばし、仰け反って回転させ、岩に激突させ、パレスは気絶する。

ジフはそれを見届けると、力尽きたのか、前のめりに倒れた。

「父さん！」マースム力がその体を支える。

ジフは明らかに深手を負ったが、まだ息がある。すぐに手当てをすれば助かるかもしれない。

「ゲッゲッゲッ、これで勝ち目は完全になくなったな」

だが、鉄帽をかぶった暗殺者の頭、ボツズルはリグヴェーダを部下に渡すと、カタールをジャッグルしながらマースム力へ間合いを少しづつ詰める。

この男の言うとおりだった。マースム力は我々と戦い勝つことも、逃げることも、全ての不可能に等しい。なにより、リグヴェーダを助けることも。

だが、ゲシュタルは「ボツズル、退くぞ」

「あん？」ボツズルは首を傾げ「なんだって？ 退く？ これからが本番だぜ。楽しい楽しい弱い者虐めの時間だ」

「リグヴェーダ王女は取り返した。もう用はない。それに体勢も立て直さなければ。何人死んだと思っている」

「でもよお」ボツズルは不満一杯。

「ボツズル」ゲシュタルは名を繰り返して呼び、その目が剣呑に細められる。

「わーかったよ。わかりました。退くよ、それで良いんだろ」

ボツズルが部下に指示を出すと、パレスと、顎を砕かれた部下を

魔法の絨毯の上に運び、そしてボツブルもその上へ。他の者もそれに続いた。

魔法の絨毯を動かす前に、ゲシュタルはマースムカとジフに目を向けた。その胸中に渡来したものはなんだったのか、その動かぬ顔からは窺い知ることはいできない。

ゲシュタルたちが去った後、その場に残されたのは、楽園の暗殺者の死体と、ルマジヤーンとシエルダック、そしてセネ口の遺体。気を失ったラッガート。左腕の出血を止めようとしているセリナは、体力を使い果たし歩くことすらできない。体が痺れて立ち上がることのできないダラス。

そして、ジフを抱え、震え続けるマースムカ。

「マースムカ」ジフは息も絶え絶えに「マースムカ。皆を一旦村へ連れて帰るんだ」

「父さん」マースムカは我に返り「待って、すぐに手当てをするから」

ジフをその場に寝かせその辺に転がっていた治療道具一式を拾うと、急いで手当てを始めた。

大峡谷では珍しい雨が降り始めた。

稀有な天からの恵みの雨は、やがて戦いの後に残った血を、大地から洗い流し始めた。

断章

少年は父と母の二人目の息子として誕生した。

少年にとってその両親の元に生誕したことが幸福だったのか、それとも不幸だったのかと問われれば、少なくとも幸せを感じたことはなかったと答える。

資産家で地位のある父の息子という立場は、なぜか友ができない環境にあった。異なる立場が隔たりとなって、友と呼び合うほど親しく関わることができなかった。

傳く使用人は少年に仕事以外のことで関わろうとはせず、孤独に憐れみを向けることもなかった。

家族とはどうだったのか。

兄がいたが、仲は良くなかった。話をした記憶も少年にはない。父親に極度に反発していた兄は、家に帰ることも少なかった。少年の記憶の中の兄は、常に憎悪と憤怒に満ちた顔をしていた。

母は自分の子供に興味がなかった。興味があるのは、社交界で注目を集めること。抱きしめられたことも、頭を撫でてくれた記憶もない。

父もまた、息子に興味がなかった。父の興味は金と権力にだけだった。

後で知ったことだが、母との結婚も、一代で巨額の資産を築き上げた父は、侯爵という肩書を手に入れるため、母方の親族へ多額の融資することと引き換えに、結婚を要求したらしい。

もし二人が誠実で人間の心に満ちていたなら、そんな始まりでも愛情が育ったかもしれない。

だが、両親の間に愛情が生まれることはなく、生まれた二人の息子にも、愛情を与えることはなかった。

少年は広い館で七年間、ほとんどの時間を一人で過ごした。そして父は、二人目の息子を政治に利用することにした。

権力の確立を狙って、第二王女の婚約者にした。正式に婚姻すれば、その権力と地位は不動のものとなる。

だが、父の画策は結局失敗する。

十数名の正体不明の襲撃者に、強襲を受けたことによつて。

当時七歳だった少年には、なにが起きたのか理解する間もなく、ただ怯えて洋服棚の中で隠れていた。

父は胸にナイフを何本も突き刺された絶命した。

母はその顔に銃撃を受け、その誇った美貌を無残に破壊された。

兄は弟である少年を見捨てて、一人で逃げようとしたが、崩落した天井に巻き込まれた。

執事も侍女も、屋敷にいる人間全てが殺されていき、屋敷のあらゆる場所で悲鳴が上がっていた。

どこかで火の手が上がり、煙が漂っていた。

襲撃を受けてからしばらくして、動く者は襲撃者たちだけになった。

「どこだ!？」

「まだ見つかりません」

「早く見つける。あの子供が標的だ」

「向こうは探したか？」

「そっちへ行け」

「俺はあっちを探す」

「早くしろ！　すでに付近に気付かれたぞ」

洋服棚で隠れていた少年は恐怖で震え、次は自分の番なのだと怯え、洋服棚の中で息を潜め、耳を塞ぎ、襲撃者の声も、悲鳴も、全て遮断しようとしたが、それでも殺意は届いていた。

襲撃者たちは少年を探していたが、広い屋敷で一人の子供を探し出すのは困難だった。しかしそれも時間の問題にすぎず、いつか見つかる。

あるいはその前に、屋敷に放たれた炎に焼かれるか。充満する煙は洋服棚の中にまで侵入し、禍々しい紅い炎は部屋を焦がし始めた。誰か助けて。誰か助けて。誰か助けて。

少年はただ、声にならない悲鳴を上げていた。誰にも届くはずがないのに。

やがて洋服棚の部屋に誰かが入ってきた。部屋の中を搜索している音が聞こえ、気配が動く。

見つけないで。ここを開けないで。

少年は声を出さずに懇願したが、虚しくも洋服棚の戸は開けられた。

少年と、開けた者との目が合う。

男は手に血で塗れたナイフを持っていた。そして父が持っていた拳銃も。

「うわああ！」

少年は悲鳴を上げて洋服棚から飛び出した。

戸を開けた襲撃者は、その行動を予想していなかったのか、子供に突き飛ばされただけで体勢を崩して転倒する。

その脇を少年はすり抜けて走った。

どこへ逃げればいいのかわからない。考えることもできない。無我夢中で走り続ける。

他の襲撃者がその姿を見つけて追いかけてきた。

逃げないと、逃げないと、殺される。みんな殺された。次は僕の番だ。僕で最後だ。

死の恐怖だけが、全身を動かした。

突然、通路の床が抜け、炎に満ちている階下へ、少年は落下した。「うわあああ！」

床に落ちた少年の全身に激痛が走り、さらに体を炎の熱が炙る。

その暑さが少年の意識を明瞭にし、意識を失わずにすんだが。

「ううえ……ごほごほ……」

煙が充満し、呼吸がほとんどできない状態で、必死に逃げ場を探す。

だが、どこにも逃げ場がないことにすぐ気付く。扉は塞がれており、窓は炎が遮っている。

不意に柱の一つが崩れた。そして連鎖的に少年の頭上の天井も崩落する。

「わあ！」

咄嗟に飛び退いたが、炎を纏った木材が少年の顔に命中した。

「あああ！」

顔の右側に走る灼熱の痛みで悲鳴を上げる。

同時に扉が破られた。凶熱が少年を支配する中、かろうじて残っていた意識が、破壊された扉へ逃げようと床を這う。

だが、そこから三人の襲撃者が姿を現した。彼らはすぐに少年の姿を見つけ、手にするナイフを翳して、炎をもともせず近付いて来る。

「ひい、ひい」

恐怖で後退るが、二階からの落下と、燃える木材の打撃の痛みによつて、体が言うことを利かない。

三人の襲撃者が、少年に迫っていた。

次の瞬間、一陣の黒い風が舞った。

三人の襲撃者が突然動きを止め、そしていつせいに倒れた。

なにが起きたのか理解できなかった少年は、ただの風と思ったものが、人が動いたものだと気付いた。

少年の前に、洋服棚を開けた先程の男が立っている。黒装束の男は顔を隠していたが、同一人物だとなぜかわかった。

「静かに」それはささやきだったが、有無も言わせぬ口調でもあった。

男は少年を抱えると、少年の様態を確認した。顔の右側に酷い火

傷を負っている。右目は失明してしまったのかどうかわからないが、早く手当てをする必要があった。

同時に、部屋に襲撃者の一人が入ってきた。ドアの周囲は炎に遮られていたため、部屋に入るのに覚悟がいるのか、その場で誰何してきた。

「おい、なにをしている?!」

答えは一本のナイフ。少年を抱える男はナイフを投擲し、襲撃者の喉に瞬きの間に突き立つ。

「グッ!」

襲撃者は苦悶の声を上げて、口をパクパクと魚のように何度も開閉したが、それ以上声は出ずに、炎の中に倒れた。

なにが起きたのか理解できない少年に、男は告げる。

「静かに。助けに来た」

「あなたは?」少年は尋ねる。

「アフアマッドの友人だ」男は少年を肩に担いだ。「絶対に声を出すな。目を閉じて、息を止める」

返事を待たずに男は、炎が遮る窓ガラスへ向かって走った。

少年はわけがわからなかったが、炎への恐怖で目を閉ざして息を止めた。

そしてガラスが碎ける音がした。そして肩の上で揺れながらも目を瞑り続け、やがて周囲から凶熱が消え去り、夜の冷気が肌を冷やし始める。

「もういいぞ」

目を開けると、屋敷の外の舗装路だった。すでに街中に入り、屋敷から離れている。

自分を担いだまま、燃える屋敷から脱出したのだということだけは、少年にも理解できた。

町の住人が屋敷の火事に気付いて騒いでいるが、それを避けるように裏路地を男は走り続け、少し離れた教会まで少年を運ぶと、そこで少年を降ろした。

「いいか、おまえはこのままこの教会に入って、保護してもらうんだ。すぐに火傷の手当てをしてもらえ。急がないと失明するかもしれない。だが、自分の素性をけして明かすな。自分の名前も、家族のことも、今日のことも、全て、誰にも言っんじゃないぞ。わかったな？」

男の静かだが言葉に込められた迫力に、少年は無言で肯くと、男は踵を返し、屋敷へ戻ろうとした。他の生存者を探そうというのか。「あ、待って」少年はそれを引き止めた。「名前は？ あなたの名前はなんていうんですか？」

男は一瞬躊躇ったが、名乗った。

「ジフだ」

彼が去った後、少年は教会に保護してもらった。尼僧には言われたとおり、なにも説明をしなかった。

ただ名前だけは答えなければなかった。

「あなたの名前は？」

本名を言うてはいけないと思った少年は、尼僧の質問で、ふと思いつ出した言葉を告げた。

現在では使われなくなった古代の言葉で、尼僧の質問を繰り返すだけ。

マースムカ
汝の名はなにか？

教会の人間は、その素性に察しが付いたようだが、しかし子供が誰なのか声高に知らせることは、幼い少年の命を危険に晒すことになると考え、追求することも、少年の保護者となるべき人物を探すこともしなかった。

治療を受けたマースムカは大きな怪我はほとんどなかったため一週間で回復した。

だが顔右側には火傷の跡が残った。

半年後、再びジフが現れ、教会から少年を引き取り、自分の故郷だという大峡谷へ連れて行った。

大峡谷で暮らすことになった少年は、見慣れない景色に子供心に感動していた。

だが、どんなに素晴らしい景色でも、その中にいる人間の心が素晴らしくなるとは限らなかった。

一緒に暮らすことになる村人たちの反応は冷ややかなものだった。かつて故郷を捨てた男に対する冷淡さと、他所者の少年に対する排除感。

それらは村の子供たちにもあった。

一人になった少年に、ダラスをはじめとする数人が囲んだ。

最初は当たり障りのない話をするだけだったが、その内に嘲笑を含んだ攻撃性を感じていた。だが、この時の少年は対処法などわからず、困惑するだけだった。

そして子供達は、程なく少年を小突き始め、本格的な暴力に発展し、遠くで村の大人がそれを見ていたが、彼らは止める様子もなく、その場を立ち去った。

偶然発見したジフが止めるまで、幼い子供ゆえの際限のない暴力にさらされ続けた。

それ以来、少年はジフからなるべく離れないようにし、ジフもそのようにした。

だが、ダラスは執拗とも呼べるほど、少年に暴力を加えることに執着し、ささいな隙を見つけては暴力を振るった。

それが終わったのは、大峡谷に来てから三ヶ月後。セネ口と出会ってから。

丁度八歳になったばかりの子供が、野生のティダを飼い馴らしたことに、大峡谷の住人は驚きを隠せず、だが少年を受け入れることはなかったが、少なくとも追い出そうとする者はいなくなった。

それを始まりとして、少年は狩人の技術をジフから急速に習得し、十歳になる頃には、大人たちにも引けを取らないほどだった。

しかし村人は少年の存在を認めようとしなかった。外の人間が、自分たちより優れていることを頑なに認めようとはしなかった。

だが、少年はそれでもよかった。

自分を守り、育ててくれるジフ。

自分といつも一緒に居てくれるセネ口。

二人がいればそれで満足だった。

そして、いつか村人も自分を受け入れてくれるかもしれない。狩人として優れた技能を修得すれば、村のみんなに貢献し続けられ、いつかみんなも受け入れてくれるかもしれない。

そう思っていた。

根拠もなく呑気にそう思い込んでいた。

誤りだと思い知るまで。

八章・真実・1

大峡谷の神殿から王女を救出することは失敗した。

その戦いの場所から離れた河岸で、緊急用の筏をマースム力は見つけた。ジフが事前に用意しておいたもので、すぐにでも使える状態だった。

マースム力たちは、それを使って村へ向かった。

村は川の流れの方角、それも大峡谷の複雑に入り組んだ地形を考慮せず、最短距離で移動できるため、馬で移動するより早い。

セリナは左腕の出血をなんとか止め、自力で動けるぐらいに体力が回復した。

ダラスもしばらくして体の感覚が戻り、動き回れるようになる。

一連の失敗はマースム力の責任だと責めるぐらいに。

ラッガートは村に到着してから目を覚ました。肋骨を折っているようだが、元々体力に優れているため、命に別状はない。ただ呼吸をするたびに鈍痛に悩まされる。手当はしたが、治るまで動きや力は鈍ることになる。

ジフは傷が深く、危険な状態だった。応急処置だけではどうにもならず、大至急、医者に見てもらう必要があった。

急いで河を下り、村に到着した時は、夜が訪れた頃だった。マースム力たちは、村人呼んでジフを医師の家に運ばせた。

医師はあらゆる手を施したが、今夜が峠だと告げた。

ルマジャーンとシエルダックの遺体をしばらく安置することになった小屋に、セリナは入った。

白い布でその姿を隠されたルマジャーとシエルダックを前に、ラッガートが膝を付いている。

なにも言わず、なにも語らず、沈黙のまま、そこで両膝を床に付いている。

憔悴しているのかもしれない。ラッガートは信頼する部下であり、仲間でもある二人を同時に失ったのだ。

セリナも憔悴している。体力の限界まで魔法を行使した結果か、左腕を失ったためか、それとも戦いの結果のためか。その全てが原因か。

左腕の切断部からの出血は完全に止まっている。体力がある程度回復してから、魔法で治癒したのだ。左腕を完全に再生させることは不可能だが、傷口をふさぐ程度ならばなんとかなる。

セリナはしばらくラッガートの後ろでどう話しかけるべきか、躊躇った。しかし説明しなければならぬことがある。一呼吸落ち着けてから、名前を呼んだ。

「ラッガート」

「……セリナか」ラッガートは顔を向けずに答えた。入ってきたことには、すでに気付いていたのだろう。

「ラッガート、話があるわ」

セリナは返事を待たずに説明を始めた。

今回の事件の黒幕。その目的、手段。リグヴェーダをさらった理由。

それはパプロの説明と同じだったが、彼が炎の民であることだけは隠しておいた。そういう約束だ。もう約束を守る意味はないのかもしれないが、だからこそ黙っていた。それは死者へのささやかな礼節だったのかもしれない。

そのパプロの遺体は発見できなかった。河に流されて、今はどこにいるのかわからない。

説明を黙って聞いていたラッガートは、終わってもしばらく返事をしなかった。

しばらくしてから「そうか。パプロは王女の……」部下だったのか、と言おうとしたのかどうか、その先は口に出さなかった。

沈黙が流れる。

それは短い時間だったが、なぜか長く感じた。

沈黙を破ったのはセリナからだった。

「あなたは、これからどうするの？」

「……わからん。おまえはどうする？」

「わかっているでしょう。もう一度神殿へ行くわ。サリナの仇を討ちに。そして、リグヴェーダ様を助けるために」

「勝ち目はないぞ」

一度侵入を受け、そして何人が生かしたままにしておいた奴らは、警備を厳重にしているはずだ。

それに対して、こちらは人数が少なくなり、残っている者も怪我をしている。総合的に戦力は大幅に低い。

「わかつている」

「ザーラディースの目的は？ 名の無い魔獣が召喚してどうするつもりだ？」

「ザーラディースは実質的に、王国軍を掌握するつもりだと思う。名の無い魔獣の軍事利用の成功は、政敵である他の二人の将軍を退けることができるでしょう。そして次は帝国に戦争を仕掛ける。名の無い魔獣の強大な力を手に入れば、帝国に勝つのは確実と判断して。彼は強硬派だというのは王国軍内部じゃ誰もが知っているわ」
エンカータ王国とアスベルト帝国。

世界的な二つの大国は、その強大さゆえに、戦争が始まれば夥しい数の人間が死ぬことになる。そのため、王国と帝国は、対立しつつも、戦争状態には突入しなかった。互いに思慮分別があるのが、かろうじて平和を保っている。

だがザーラディースは、帝国に対して積極的に武力を誇示するべきだという持論を掲げている。実質的な行動は起こしていないが、好機さえあれば戦争へ突入することを躊躇わないだろう。

名の無い魔獣の軍事利用の成功は、まさにその好機だ。

しかし、一つ問題がある。

神話が現実にあったことなのかどうか。

伝説よりも古い物語である神話は、どこまで真実を伝えているのか。

アジアデイスム
名の無い魔獣は存在するのか？

「魔術師のおまえならわかるだろう。名の無い魔獣はいるのか？」

セリナは少し答えるのを躊躇った。

神話における三つの滅び。ハラカ

イラーフ
神は四つの世界を御創りになられた。

四つの世界それぞれに、四つの名を御与えになられた。

フィルダウス

天界。

マーザンタラン

魔界。

アドウン

地界。

カーフ

火の国。

それぞれの世界に住まう者として、四つの民を御造りになられた。

ダウー マラーイカ

光から天使を創り、天界に置いた。

ムスリム ディーフ

闇から魔族を創り、魔界に置いた。

トゥラフ バシャル

土から人間を創り、地界に置いた。

ナール ジンニ

火から炎の民を創り、火の国に置いた。

神は四つの民それぞれに四つの世界を与え、世界の在り方と四つの民の在り方を教えた。

四つの民は、母にして父である神に従い、教えを忠実に守護し続けた。

しかし千年目にして綻びが生ずる。

神の玉座に最も近い位置に在る七人の天使長が、突如として神に反旗を翻し、魔界を統べる魔族を従え、神に戦いを挑んだ。

この時から、七人の天使長はその地位を剥奪され、魔王と呼ばれるようになった。シャイターン

これに対し神は、天使を率いて、魔王の軍勢を迎え撃った。

神と魔王。

天使と魔族。

二つの勢力軍による戦争が始まった。

神は人間に命じた。天使と共に、魔族と戦い、魔王を撃ち倒せ。

魔王は人間を誘った。魔族と共に、天使と戦い、神を打ち倒せ。

だが、四つの世界を震撼させた戦に、人間は参加しなかった。

臆病な人間は、神の勅命も、魔王の誘惑も、どちらも選ぶことができなかった。

そのため戦いは拮抗し、永遠に続くかと思われた。

しかし、存在するはずのない存在が現出し、単純にして純粋な結末を迎える。

ハラカ
滅び。

深淵の虚無から死が訪れた。ウツウス 死は魔王と魔族を、ジャハンナム 地獄の奈落へと引きずり落とした。この時より四つの世界には死が訪れるようになった。

火の国から炎の王が立ち上がった。マールド 炎の王は炎の剣で天使を焼き尽くし、天の扉を閉じ、炎の剣を据え置き、ラハット・ハヘレグ・ハミトゥハベヘット 天界と神の玉座を封じ込めた。この時より万物は老い、シャイフーハフサダ 腐し、タクスイル 朽ちるようになった。

アジ・アデイスム 空虚なる混沌から名の無い魔獣が現れた。名の無い魔獣が全ての名を剥奪し、滅びは完成される。イスム

完成された滅びは、全てを真なる永劫の内に終焉させる。イフタタマ

しかし神は奇跡を起こした。ムラジザ

名の無い魔獣に名が与えられ、名の無い魔獣は、名の無い魔獣ではなくなった。

そして世界は存続を許された。

だが魔王も秘跡を起こした。スイツリー

名を与えられたことによって、名の無い魔獣ではなくなったはず

のものから、名を奪い、再び名の無い魔獣へと戻した。

そして名の無い魔獣は空虚なる混沌へ帰って行った。

再来することを告げて。

神は人間に説く。

汝らは、我にも彼の者たちにも従わなかった。それ故に汝らは善^{ハイル}でも悪でもあり、そのどちらでもない存在となった。次に名の無い魔獣が現れるまでに、我の言葉を聞き入れなければ、我は救いを与えず、名の無い魔獣は全てを終わらせるだろう。

魔王は人間に囁く。

汝らは我らにも神にも耳を貸さなかった。それ故に汝らは悪でも善でもなく、そのどちらでもある存在となった。次に名の無い魔獣が現れるまでに、我らの言葉を聞かぬならば、我らは褒美を与えず、名の無い魔獣は全てを終わらせるだろう。

セリナはしばらくなにかを考えていたが、やがて質問に答えた。

「いるわ。名の無い魔獣はたぶん実在する。そして今も、神話の時代にやり損ねた役割を果たそうとしている」

「なぜ確信できる？」

セリナはしばらく沈黙する。

「私が魔法使いになるきっかけは、奇妙な事件に巻き込まれたことだった」

セリナは唐突に過去を語り出した。

「詳しくは説明できないけれど、饒舌に尽くしがたいあの事件で、あの存在に遭遇した。私は、死を見たの」

ラッガートは怪訝に繰り返した。

「死を見た？」^{マウツウ}「どういう意味だ。」

「そう、死よ。神話に現れる、死。^{ウツウ}私には、いえ、人間の言葉では説明ができないけれど、あれは間違いなく、根源に存在する滅びの一つである、死^{マウツウ}だった」

ラッガートはその言葉の意味することを考える。

セリナは続けて「パプロは、炎の王マールトと会ったことがあると言っていたわ」

「パプロが、炎の王と……」

「嘘は吐いていないと思う。勿論見間違いや、勘違いと言う可能性も否定できないけれど、多分それはない。本当に遭遇したことがあるんだと思う。だからこそ、ただの情報屋にすぎない彼が、王女を救出しようとした。少なくとも理由の一つではある」

忠義心があるでなく、金で雇われているにすぎない情報屋が、危険を冒してでも救出しなければならないと判断した理由。

「炎の王デース・ウツグス。死。神話の存在のうち二つが存在するのなら、名の無い魔獣が存在しないと言う保証はない。寧ろ、その逆。おとぎ話や絵空事、空想の産物ではなく、現実に存在する証拠と言えるでしょう」

「ザーラデイスが名の無い魔獣の制御支配に失敗したのなら……」

「世界は滅ぶ」

「成功する確率は？」

「無いわ」

セリナは断言する。

「永遠に死なないことなどできないように、老い腐し朽ちることを止められないように、名の無い魔獣の力は、絶対的ななにか。人間の力で操ることなどできない。魔法使いであっても、崩壊と死の二つだけは、根源にある滅びだけは、避けることはできない。ましてや人間がまだ遭遇していない、未知の滅びならば尚更。万が一制御支配に成功したとしても、王女は死ぬ。そして戦争が始まる」

どちらにせよ、大惨事が始まることは確実。

「……ルマジャーナならばどうするだろうな？ シエルダックならどうするかな？」

ラッガートは独り言のように呟く。

ルマジャーナの剣を握り締めた。騎士を叙勲する時、付け慣れない彼は、それでも誇らしげにしていた。

傍らにシエルダックの猟銃が置いてある。騎士になる前から愛用していたという猟銃は、自信を持てなかった彼が唯一、自信を持つことができるものと、常に携行していた。

若き騎士と、老いたる騎士。二人の部下はその職務を最後まで果たそうとした、確かに騎士の名に恥じない勇敢な男たちだった。

ラッガートの質問にセリナは答えなかった。だが、答えはわかっていた。

セリナがその左腕をなぞる。彼女が失った左腕が一瞬そこにあるような気がした。だが、失ったものは戻らない。

問題なのはこれからどうするべきなのか、その選択。

「あなたの正しいと思った判断を。あなたは、隊長なのだから」

ラッガートは立ち上がり、セリナに顔を向けた。隊を率いる者に必要な冷静さと、その内に闘志を燃やす騎士の瞳で。

「村人に全てを伝え、勇志を集めよう」

世界の危機を止めるために。

一時間後、集会場に村人が集められた。

ラッガートはセリナから聞いた説明を彼らに語り始めた。

人の集まりから少し離れたところで、岩に腰掛けているマースムカは一袋の包みを抱いていた。

セネ口の首だった。胴体部は重量がありすぎて、持ち帰ることができなかった。

「……セネ口」

喉の奥底から搾り出すように名を呼んだ。

セネ口はマースムカが名を呼ぶとすぐに傍へやって来た。顔を嬉しそうに摺り寄せてきた。その背に乗って大峡谷と一緒に走った。一緒に狩をして、その肉と一緒に食べ、草木の実を採り、一緒に食べた。

七年前のあの日から、ずっと傍にいてくれた、たった一人の友達。

涙は出なかった。ただ、胸に空洞が開いたような、空虚な感覚だけ。あまりにも多くの出来事が起きて、正常に感情が働かなくなってしまったかのように。

自分の手で人を殺したこと。リグヴェーダとの再会。新しい友達になれたかもしれないなかった、パブロの死。ルマジャーンとシエルダツクの死。ずっと一緒だったセネロの死。

怯えて何一つできなかった自分。

そして、ジフの死。育ててくれた父の、最後の言葉。

死の床で、ジフはマースム力呼び寄せた。

医師は今夜が峠になるだろうと言っていたが、それすらも気休めの言葉でしかないことはマースム力にもわかった。今生きているのが不思議なくらいなのだ。

だが、マースム力はそれを極力顔に出ないように、最大限の努力を払って、ジフに話しかける。

「父さん、なんだい？」

ジフが微かに笑う。

「まだ、父と呼んでくれるのだな」

「当たり前だよ。あんな奴の言うこと気にしてるの？ 昔のことなんて関係ないよ。父さんは、僕の父さんだ」

ジフは首を振る。

「私はおまえの父ではない」

マースム力はその言葉に少なからず動揺したが、平静を装ってその場を取り繕うようにシーツをかけ直す。

「なにを言っているんだよ？ もう喋らないで。傷に触るよ」

だが、その手をジフが握って止める。

「私は、おまえに父と呼ばれる資格などないのだ」

ジフがマースム力に向ける目は、なぜか怯えていた。

「……おまえの本当の父親を殺したのは、私だ」

「……え？」

マースム力は今度こそ、その言葉の意味を理解できなかった。

「私は以前、あの男、ゲシュタルと共に非合法の仕事をしていた。そう、あの男の言ったことは全て本当だ。私は、傭兵であり、暗殺者だった」

いつの頃からだろうか、大峡谷から離れたジフは、どんな仕事に就いても上手く行かず、やがて食い扶持を稼ぐために、犯罪に手を染めた。

そして、いつしか殺人を仕事とするようになり、依頼があれば誰であろうと殺した。

ゲシュタルと出会ったのはその頃だった。

ある仕事を一緒にしたことをきっかけに、二人はパートナーとなった。

二人が組んでからは、一度として仕事に失敗したことがなく、数々の仕事をこなし、多くの人間の命を奪い、気が付けばその業界で異常なまでの成功率の高さから、アザニスの悪魔と呼ばれるようになっていた。

そして七年前、二人は一人の男から仕事を請けた。

当時、將軍職に就任したばかりの男、ザーラデイス・ハーマン。依頼内容は、政敵アフアマッド・クラノフ侯爵の暗殺。

政府の人間の仕事は危険が多い。暗殺対象よりも、依頼主自身に口封じとして殺される危険が多いため、ジフはこの仕事に気乗りではなかったが、ゲシュタルが依頼を受けることを強く主張したため、結局仕事を引き受けた。そして二人はその場限りの仲間を数人集め、襲撃を決行した。

この時の指揮官はゲシュタルだった。この男には珍しいことに襲撃という強攻策だったが、事は潤滑に進み、アフアマッドを含めた

屋敷の人間全てを殺害することになんなく成功した。

ただ一人を除いて。クラノフ第二子。その少年だけがなかなか見つけることができなかった。アフアマッドは仕留めたのだから、依頼達成基準を満たしているとして、撤退することを提案したが、ゲシユタルは禍根を残す可能性を指摘して、少年も必ず始末するよう命令した。

そしてジフは見つけた。洋服棚に隠れていた少年を。

「私は、あの時、おまえを殺すつもりだったのだ。洋服棚に隠れていたおまえを見つけた時、これで屋敷の人間を全て消し終える。仕事が終わると、それだけしか考えなかった」

そして刃を振り上げた。

「だが、殺せなかった。おまえの目に、限りなく澄んだおまえの蒼い瞳に見つめられた時、なぜだろうな、私はとうになくしたはずの罪の意識が蘇った。良心の呵責を感じたんだ。それを理解した時には、私はもうおまえを殺せなくなってしまった」

そして少年は逃げられた。

だが、それが他の者に姿を見られることになり、少年の顔に深い火傷を負う原因となった。

「あとのことはおまえも憶えているだろう。その場で見つかった仲間を殺し、おまえを教会の孤児院へ預け、私は再び屋敷へ戻った」
襲撃と火の手が上がった屋敷の混乱に紛れ、少年を殺したと偽り、その場をやり過ごした。

それからゲシユタルと手を切り、ほとぼりが冷める半年間潜伏して身を隠し、孤児院からマースム力を引き取り、故郷であるこの村に戻った。

「そして、全てを隠したまま、七年間を過ごしてきた。そうして全てを偽ったまま、七年間生きてきた。おまえに優しくしたのは、同情でも哀れみでもない。おまえを育てたのは、痩せこけた良心の呵責を紛らわすため。ほんの微かな罪悪感から目を逸らすため。全ては自分の過去をこまかすためだった」

マースムカは沈黙していた。

なにを言えば良いのか、なにを感じれば良いのか、なにを考えれば良いのか、なにもわからなかった。

「マースムカ……許しを請うつもりはない、どれほど私を憎んでくれても構わない。今のおまえの境遇は、全て私のせいなのだから。だが……」

ジフはマースムカの手を強く握る。

「だが、これだけは信じて欲しい。おまえを、愛している」

そうして、アザニスの悪魔と呼ばれた一人の男は、この世を去った。

八章・真実・2

皆が集まる広場で、ラーナは騎士の話を聞いていた。

彼らの語る内容は、とても信じられるものではなかったが、体に残る痛々しい怪我が、全くの嘘ではないと示していた。

騎士の話は終わり、村人は沈黙している。

皆とは少し離れた場所で、マースム力が岩に座っていた。騎士と一緒に戦った彼は、憔悴しているのか、空虚な眼をしている。

村人は誰もマースム力のことを気に止めない。父親がなくなったというのに、それを慰めるものは誰もいない。

ラーナは彼の傍に行きたかった。彼を慰めてやりたかった。けど、なにを言うべきなのか、まるで思いつかない。

説明を終えたラッガートに長老が最初に質問する。

「お話はわかりました。しかし、それで我々にどうしろと言つのですかな？」

「勇志を集めたいのです。神殿へ向かい、王女を救い出し、奴らと戦う戦士を」

村人はそれぞれに囁き合う。だが、それは賛同の言葉ではなかった。

「つてもなあ。ジフでさえ敵わなかったんだろ」

「俺たちが集まったってどうなるんだよなあ」

「大体、俺たちは関係ないだろ」

「王都の妙な陰謀を大峡谷に持ち込んで欲しくないぜ」

「そうだ。要するに死に行くようなもんだろ」

「冗談じゃない」

「名の無い魔獣だよ」

「そんなものいるわけないだろ。子供に聞かせるおとぎ話だぜ」

いつしか騎士たちへの非難へと変わる。

「騎士だからって勘違いしてるんじゃないか」

「王家の人間なんか知ったことか」

「なんで俺たちが戦わなければならないんだ」

「おまえらだけで行けよ」

「俺たちを巻き込むんじゃない」

「とっとと出て行け」

最初の日の時の歓迎は一体なんだったのか。そこにあるのは、余所者に対する不信感、排除感、拒絶感だけだった。

「おう！」突然威勢のいい声を上げて、ダラスが立ち上がった。「おまえらそれでいいのか！ ティダ乗りの、狩人の誇りはないのかよ！ 俺たちの大峡谷で邪悪な儀式が行われているんだぞ！ それを放って置いて良いのか！ 怖気付きやがって。俺は行くぞ！ 邪悪な敵を倒し王女を救うんだ！」

村人はダラスの勢いに当てられ、沈黙してしまった。それは己の臆病さや卑小さを恥じたからなのか、ただ大声に驚いただけなのか。だが、その中から二人が立ち上がった。

「俺も行くぞ」と、リーバ。

「俺もだ」とジェドム。

ダラスといつも一緒にいる、先日ラーナたちと同じように成人した二人だ。実質的にダラスの舎弟のようなものだから、兄貴分の声に賛同したのか。

「リーバ、ジェドム」ダラスは嬉しそうに「よし！ それでこそ大峡谷の男だ！」そして改めて村人を見渡し「他にいないのか！ 誇りある狩人は他にいないのかよ！ ええ！」

村人は再び囁き始めた。騎士への非難は混じっていないが、勇志となる者は現れない。

ふと、マースム力はふらりと立ち上がる。そして村人の集まりに向かった。

「マースム力？」

それに気付いたラーナが声をかけるが、しかしなぜか思わず道を明けた。

他の者も、マースム力に気付いて怪訝な目を向けるが、彼が前に来ると、自然と道を明けた。それは、醜悪な右目のためではなく、言いようのない異様な威圧感ため。マースム力から発せられるそれに、道を遮ってはいけないような気がしてならなかった。

マースム力はそうしてラッガートの前まで来ると、静かに告げる。「神殿への近道があります。少し危険がありますが、明朝から出発しても、十分間に合います」

「待ちなさい、マースム力」長老が制する。「これは大峡谷の一大事じゃ。皆で話し合って決めねばならん。ダラス、おまえもじゃ。おまえたちが独断で神殿へ行くのを許すわけにはいかん。血気盛んなおまえたちの気持ちはわかるが、ここは抑えて冷静になるのじゃ。良いな」

ラーナは不意に理解した。

長老の判断基準は、事の正誤にあるのではなく、問題が一番起きないという選択をしているのだ。真実はどうであろうとも関係ない。ただ村に、そして大峡谷に問題が起きなければ良いのだ。だから、成人式の競馬の時も、マースム力の言葉が正しいのかどうか、確かめさえしなかった。

マースム力はなにを感じただろうか、沈黙するその後ろ姿にラーナは不安感が込み上げてきた。

今、とてつもない失敗をしたような。

「そんな悠長なこと言ってる場合かよ！」ダラスは長老の言葉を一蹴し、そしてマースム力に「マースム力！ テメエも余計な口出しするんじゃない！ 臆病者は引っ込んでろ！」

マースム力は二人とも無視した。返事もせずに踵を返すと、人の

集まりから離れるように足を進める。

「おい」ジェドムが前に立ちはだかった。マースム力よりも大きな体で遮り、嘲る笑みを浮かべて「マースム力、ダラスの話を聞いていけよ。だいたいな、おまえみたいな役立たずが、王女を助けに行くなんて言うこと事態おこがましいんだよ。おまえは村に残ってる。いいか、リグヴェーダ王女は俺たちが助け出す。わかったな」

マースム力は返事をしなかった。

「おい、なんとか言えよ」

マースム力はやはり返事をしなかった。

ダラスは怯えているのだと思い、小気味よくその様子を見ていた。マースム力は少し脅せばなにもできなくなる腰抜けの臆病者なのだ。きつと騎士の前で醜態を晒すに違いない。残酷な期待を込めて、ことの推移を待った。

だが、不意にジェドムはなにかに気付いたかのように顔を強張らせると、やがて顔を青くして、一歩後ろへ下がった。

ダラスやラーナ、ラッガートとセリナ、その他の村人も、なにが起きているのか怪訝に思った。

だがマースム力は彼らに背を向けていて、その表情を知ることはいできない。

マースム力は力なく一歩進むと、ジェドムが一歩後退し、さらに一歩進むと、一歩後退し、三步目にはジェドムは横へ逸れて道を譲った。

ジェドムの背に他の村人が当たり、そこで動きを止めるが、その表情からはもつと後ろへ下がりがたがっているのは明らかだった

「おい？」ジェドムの背中を支える形となった村人が、怪訝な表情で尋ねるが、ジェドムは答えない。その体が震えている。

マースム力は開いた道を緩慢に進んで行き、夜の闇へ姿を消した。ジェドムはただ見つめられただけだ。何一つ表情はなく、睨まれたわけでも、怒気を向けられたわけでもない。そして別に武器を持っていたわけでもなく、ましてやそれを向けられたわけでもない。

そもそもジエドムはその程度で怯むような若者ではなく、ましてやマースムカが粹がっても誰が怯むというのか。

「うう……うう……」

だが、ジエドムは明らかにマースムカに怯えていた。

「み、皆、いいのか。あいつでさえリグヴェーダ王女を助けに行くと言ったんだぞ。それなのに皆は黙っているのか」

ダラスが再び演説じみたことを始めるが、それは勢いを失っていた。

結局、リーバとジエドム以外、誰も立ち上がる者はいなかった。

マースムカは納屋で包みを藁の上に置く。セネロが好きだった木の実とミルクを沿えて。

「クウー」

ジャリスが一声嘶く。彼女は知っていた。その包みにセネロが包まれているのだと。運んだのは彼女なのだから。そして長い年月をセネロと同じ小屋で過ごしたジャリスは、今なにを感じているのか。「セネロ、ごめんね。少しの間ここで我慢してくれるかい。すぐに戻ってくるから」

そしてマースムカはジャリスに向かうと、その手を額に添えた。

「ジャリス。父さんが死んだよ」

その意味を理解したのだろう、瞳を閉じて、頭を垂れる。

「ジャリス、お願いだ。僕に力を貸してくれ。僕はもう一度あいつらと戦う。でも、神殿へ行くには君の力が必要なんだ。ジャリス」
ジャリスは頭を上げると遠吠えを上げた。

その意思を示す、力強く、限りなく澄んだ声で。

「ありがとう、ジャリス」

不意に、戸口が開いた。

「誰？」

「マースムカ、私」

ラーナがそこに佇んでいた。

「ラーナ、どうしたんだい？」

「マースムカ」ラーナはマースムカの前に立つと、「どうしてあなたが行く必要があるの？」

「え？」マースムカはすぐにその言葉の意味を理解することができなかった。

「あなたがリグヴェーダ王女を助けに行く理由なんてどこにあるの？ それともジフさんの敵討ち？」

「違うよ。……いや」マースムカは首を振って「それもあるけど、僕がリグヴェーダ王女を助けに行くのは……」

「名誉のため？」ラーナが科白を遮った。「狩人の誇り？ 勇者の称号？ ダラスみたいに」

マースムカは二日前と同じ誤解をした。ラーナは自分がダラスの名誉を横取りしようとしているのだと思い、それを責めに來たのだと。

「違う。僕はダラスの邪魔をするつもりはないよ。栄誉とか、名声とか、そういうのは全部ダラスに譲るよ」

「ダラスなんかどうだっていいわよ！」ラーナが突然怒鳴った。

驚いて思わず身を竦めるマースムカ。

「ラーナ？」

「皆で私とダラスを恋人に仕立て上げようとして」ラーナの肩は震え、その目に涙が滲んでいる。「私はダラスなんて、ダラスが嫌いなよ。なんでも自分の思い通りになると思って、自分の考えは全部正しいと思い込んで、人のことを考えないで好き勝手にして。中身は七歳の子供じゃない。なんで私がそんな奴の恋人になってるのよ。私が嫌がつているってわからないの。私はダラスの恋人なんて、結婚するなんて絶対に嫌よ！ 私はダラスが大嫌いなよ！ 私は、私は……」

マースムカはどこか呆然としながら「ラーナ」

ラーナは目尻からこぼれる涙を拭いながら「私はちゃんと好きな人がいるの。なのに、その人も私とダラスが恋人だって思ってる。私はその人のことが好きなのに」

その人が目の前にいる人なのだと、マースムカには伝わらなかった。

マースムカはしばらくの沈黙の後、呟くように「ごめん、ラーナ」自分の意思を無視され、その心さえ他人の都合の良いように捏造されることの辛さは、よく理解できた。

「ううん」ラーナは首を振り「あたしのほうこそごめんなさい。こんな時に変なことを言って」もう泣いてはいなかった。そして改めて「マースムカ、どうしても神殿へ行くの？」

「うん」マースムカは肯く。

「どうして？ 王都の陰謀や政略なんて私たちには関係ない。あなたが行く必要なんてないわ。それとも、やっぱりジフさんの仇を取るつもりなの？」

マースムカは首を振る。

「なら、どうしてなの？」

マースムカは答えを探すかのように目を瞑り、静かに答えた。

神殿にて目を覚ましたパレスが、ゲシュタルに食って掛かる。

「なぜあいつらを生かしておいたんだ！ なぜ殺さなかった！」

「落ち着け」ゲシュタルは冷淡に制する。

「落ち着けえ！？ 落ち着けたってえ！？ 落ち着いてなんかいられるもんかい！ キイイイ！」パレスは頭を掻き毟ると「こうなったらあのクソガキの村まで行ってやる。村の人間を全員あのクソガキの前で殺して最後にあのクソガキを嫩ってじわじわと痛めつけて苦しめてヒヒヒ、ヒヒヒヒヒ」

最後には恍惚として狂喜の笑い声。

「待て、その必要はない」

ゲシュタルは後ろから止めるが、パレスは拒否した。

「あんたには必要なくても、あたしには必要あるんだよ！」

ゲシュタルは続けて「あの少年はここへやって来る」

「なんだって!？」歓喜とも驚愕とも取れる声。

「リグヴェーダ王女を助けに、彼らはもう一度ここへやって来るだろう。その時にあの少年を殺せばいい。勿論、やり方はおまへの自由だ」

パレスは狂喜に歪んだ満面の笑みを浮かべて確認する。

「本当かい？」

ゲシュタルは無言で首肯する。

「そうか。なら私から行く必要はないわけだね。そうか、あいつは私のところへ、ヒヒヒ。そうかそうか、ヒヒヒヒヒ」

この女は正常な判断ができていない。今の話を半ば嘘だということさえ見抜けないでいる。だが構わなかった。自分の目的を果たすために動いてさえいれば、駒がなにを考えていようと、どんな状態になろうとも、知ったことではない。

そしてゲシュタルはその場を後にした。少年はともかく、ラツガートたちは戻ってくるだろう。そのための備えをしておかなくてはならない。

アジアディースム

名の無い魔獣は必ず召喚する。

それが、目的を果たす最後の手段であるがゆえに。

傭兵団は儀式の準備を終えた。

その光景を眺めながら、禁断の魔法を想像した。しかし、具体的に想像することは彼らにはできなかった。

神殿の最奥に位置する儀式の間に作られた、巨大な魔方陣は、確かに知識のない者には、異様な光景に写るだろう。

しかし傭兵団の彼らにとって、それは特に気になることはない、普通の魔法儀式のように思えた。彼らの中には魔法使いはいないが、それでも係わったことはある。魔法儀式に関しても、初めてというわけではない。

名の無い魔獣と言うから、どれほどのものかと想像したが、指示通りに造ったのは、ごく普通の魔方陣。

「隊長。名の無い魔獣なんて本当に出るんですかね？」

「知らねえよ、そんなこと。大体、俺たちに関係ないだろ」

「でも、魔獣が出たら、世界が滅ぶんじゃないですか？」

「バカ。世界が滅ぶわけないだろ」

根拠のない断言は、しかし誰もが納得した。世界が滅ぶはずがないという先入観は、誰もが持つ。奇妙なことに、いつか世界が滅びると言う考えも同時に存在する。

それは自らの死について考えることに似ているのかもしれない。その日はいつか必ずやって来る。だが、どうしても現実に起こることとして感じることができない。

「とにかく、仕事はもうすぐ終わりだ。細かいことは気にするな」
隊長の言葉に従って彼らは深く考えるのを止めた。

金さえ貰えば、彼らはどのような雇い主にでも従う。それが王女を生贄として使おうとしている者であっても、傭兵は気にしなかった。

八章・真実・3

薄暗い地下牢で、鎖に繋がれたリグヴェーダの顔には、疲労が色濃く映し出されていた。

一度この牢から逃げ出したからには、警戒を厳重にせねばならないと、見張りを二人付け、さらに彼女自身の両手足を壁に綱がる鎖の枷で封じてある。

もう彼女自身で脱出することは完全に不可能だ。もっとも最初から結局脱獄することはできていなかったのだが、敵はそのあたりのことは知らないし、彼女も説明する気はなかった。

今も可能性があるとするれば、リィジスが助けに来てくれることだけだが、あの少女の姿をした妖精は戦う力がほとんどない。だから、パプロが来るまでなにもしなかったのだ。

そのパプロは死んでしまった。ボツズルに受けたあの傷は致命傷。さらに手当てもできないまま河に流された。

妖精族はこの世界で活動するためには、肉体を必要とする。肉体を得た妖精族は、この世界で自由に活動することができるが、同時に肉体という弱点も得てしまう。

肉体の損傷は、妖精族の本質にも直接影響を及ぼす。

肉体が死ねば、宿る炎の民も死ぬ。

パプロが妖精であっても、あれではもう助からない

ルマジヤーンとシエルダックも死んでしまった。人間である二人は、パプロよりも容易く死んでしまう。

ルマジヤーンは触手に貫かれて。

シエルダックは暗殺者の凶刃に貫かれて。

若き騎士はその忠義を示し、老騎士は忠義を果たして。

王国のために献身を捧げ、王女である自分を助けるためにその身

を捧げた、誠の騎士。

すまぬ、私が至らぬばかりにそなたたちを死なせてしまった。リグヴェーダは心中謝罪する。三人は自分を救うために命を落としたというのに、自身の命の時間は残り少ない。

セリナとラツガートのことを思う。意識を失うまでは、まだ生きていた。幸運に恵まれて無事であることを祈った。

そして途中で出会った老狩人。リグヴェーダは初対面だったが、他の者には既知の人物であったようだ。話を聞く限り、少年の父らしい。少年が七年前からどのような人生を歩んできたのか、預かり知らぬことだったが、少年の養父なのだろう。

少年の育ててくれた老狩人は無事でいるだろうか。

そして少年自身は。

そなたは無事か？ 生きているだろうか？ また私を残して逝ってしまったのではないだろうか？

私は死すまでそなたに会えぬと思っていたというのに、生きているうちに再会できた。そなたが生きていた。それはこの上なき喜びだが、私は俄かには信じられぬのだ。そなたに再び会えたのは、この薄暗い牢で見た夢現なのではないか？

リグヴェーダは少年の名を呟こうとした。夢ではけして口にするのでできなかった名。

その時、階段を誰かが下りてくる足音が響いてきた。リグヴェーダは身を硬くして身構えようとしたが、鎖で手足を束縛されており、鎖が音を鳴らすだけ。

蠟燭の明かりに照らされて、見知った顔が現れた。どこか卑屈な笑みを浮かべた初老の男。

「ご機嫌麗しゅうございます。リグヴェーダ様」

リグヴェーダはその声の主に、驚愕に目を見開いた。

「ザーラディース將軍」

「左様でございます」

「貴様が！」鎖を引きちぎる勢いで前に出て叫ぶ。「貴様が首謀者

か!？」

「ご明察でございます。さすがはリグヴェーダ様」

ザーラディースは慇懃無礼に答える。それは普段上に立つ者より、優位に立っているという優越感からだった。

「なにが目的だ!? 貴様は一体なにを企んでいる!？」

「企みとは人聞きの悪い。私は王国のために働いているのです。そう、全ては王国のため」

「ふざけるな! サリナを殺したことも! 他の者たちを殺したことも! 全て王国のためだというのか!」

ザーラディースは気まずそうな仕草をして見せたが、それが意図的であることは誰にでもわかるほどわざとらしいもので、極めて不快感を催す。

「あー。まあ、あれは不慮の事故というものでして」

バン! リグヴェーダは地を蹴り、ザーラディースへ手を伸ばす。だが伸ばした手は、束縛する鎖が一杯に張ったところで止まる。リグヴェーダはそれでもなお手を伸ばそうとする。目の前にいる不快な男を殺そうと。

ザーラディースは一瞬怯んだが、自分の身に危険が及ぶことはないとわかると、嘲る笑みを浮かべた。

「リグヴェーダ様。一国の王女ともあるう者がはしたないですぞ。もう少しお淑やかになさってはいかがですか」

その言葉は、以前ゲシュタルが言ったことと同じだった。ザーラディースは知る由もなく、またゲシュタルは殺意の手に怯えたりはしなかったが。

ザーラディースは続けて「よろしい、お教えいたしましょう。私がいかに王国のために身を尽くしているかということ。なにも知らずに死ぬのは、お辛いでしょから」

帝国が開発した新兵器。名の無い魔獣の召喚。儀式の生贄。一通りの説明を聞き終えたリグヴェーダは、怒りより寧ろ啞然としてしまった。

「おまえは、そんなばかばかしいことに、幾人もの命を奪ったのか」
「ばかばかしい!?」ザーラディースは激昂する。「私が考えた帝国の対抗策がばかばかしいだ!」

「名の無い魔獣が存在するなど本気で信じているのか? あれはただの神話、おとぎ話だ」

「黙れ!」

子供の戯言扱いされたことが怒りを誘発させたのか、ザーラディースは上辺の礼儀を捨てて怒鳴る。

「魔獣は召喚できるのだ。そのような虚言で助かるなどと思うな! おまえは魔獣の生贄になり死ぬのだ。次はあの村だ。この召喚を知った者がいるに違いないベドウィルム村は、王国にとって危険だからな。魔獣を召喚したさいは、最初にあの村を実験として滅ぼしてやろう。そう、王国のために!」

しばらく息継ぎをすると、再び慇懃な態度に戻る。

「いやいや、リグヴェーダ様、私が好きでこのようなことをしているのだと勘違いされては困ります。私はあくまで王国のために、献身を尽くしているのですよ。あなたも王族の一人であるのなら、ご自分を王国に捧げることを光栄に思わなくては。フハハ、フハハハハハ」

リグヴェーダは返事をしなかった。この男の言う王国とは、己のことに他ならないと気付いたから。

王国と己が置き換わっていることに、この男は気付いていない。自他の区別が付いていないことは、その瞳に宿る卑屈な欲望が物語っていた。

力を得るために、全てを犠牲にし、その責任が自分にあると考える。すべては責任を逃れるための言い訳だ。

献身を尽くしているなど、そのような世迷言は、命を捧げた忠義の騎士に比べれば、下劣な戯言以下。答える価値さえない。

「あ、そうそう」ザーラディースは思い出したように「もう一つあなたにお伝えしておかなくてはならないことがあります。もう、

お忘れになつてしまつたでしょうが、クラノフ家の襲撃を命令したのは、実は私です」

「……なに？」

「おや、覚えていらしたようですね」ザーラデイスは楽しそうに「いや、あなたの婚約者になるはずだった、あの少年には可哀想なことをしてしまいました。本当はアフアマッド・クラノフだけを暗殺するように指示をしたのですが、どうも手違いがありました。襲撃という形で、あの屋敷の者の全員の命を奪つてしまいました」

「……あれも、おまえが……おまえがやったのか？」リグヴェーダは呆然と問う。

「いやいや、あれは少々罪の意識を感じてしまいます。ですが、まあ仕方のないこと。あのような成り上がりの分際で、貴族連盟の主席を狙うなどとおこがましいことを考えたクラノフを制裁しなければ、王国にとつて悪しき前例を作つてしまうところでしたからな」

明らかに皮肉としかいいようのないことだった。

古来より続く王族貴族の身分は、近年急速に廃れつつあり、百年前には考えられなかったことが、当然のように受け入れ始めた。

アフアマッド・クラノフ侯爵は、平民という立場から、商人として成功し、貴族の肩書を手に入れるために、絶えかけた侯爵家の最後の娘を妻として娶り、そうして絶大な権力を手に入れた。資産家とはいえ、平民が金で貴族になることなど、一昔前では考えられなかったことだ。

だが、それは逆のことも言えた。

王族貴族という立場は奇妙なもので、重要で安楽な地位にいるようで、実は他のことがほとんどできないという、拘束にもなっている。王族を辞めることを希望しても、叶えられることはなく、自分の望んだ人生を歩む機会さえなかった。

例えばそれが誰も気にとめないような末席に位置するものであったとしても。

寧ろ、王族の中では、肩書にすらならないような末席のザーラデ

イスには、優遇を受けることなく、地位に縛られた人生を送ることになりかねなかった。

だが、慣習が廃れ始めたことによって、ザーラディースは軍部に入ることで、將軍という地位に昇りつめた。

ザーラディースは逆の立場での成り上がりだ。

おそらくは、本人もそのことをわかつている。

だからこれは、悪意に満ちた皮肉だ。

「そう、あれは必要なことだったのです。あなたの婚約者も、必要のために仕方のない犠牲でした。しかし、あなたもまた私の手によって尊い犠牲となるのですから、きつとあの世で再会できることでしょう」

リグヴェーダはなにも言わずに俯いて、泣いているかのように肩を震わせていた。

「……フッフ」だが、不意に笑い声を上げ始めた。「フハハハ、クハハハハ！　そうか、ククク、だから、フハハハハハ！」

いったいなにがそれほど楽しいのか、享樂に満ちた笑い声を上げるリグヴェーダに、ザーラディースは戸惑った。

「なにがおかしい!？」

リグヴェーダはザーラディースを見据えると、不適な笑みを浮かべる。

「私の婚約者は生きているぞ」

ザーラディースはその言葉が理解できないのか、しばらく呆然としていた。

「なにをばかなことを？」

「おまえが殺した少年は生きている」リグヴェーダはザーラディースの否定を取り合わずに繰り返す。「あの者はここへやって来た。私を助けるために。そして仇を討ちに、おまえを殺すためにだ」

「少年が、生きている？」

ザーラディースはあの中に少年がいたのだとようやく理解したのか、しかし鼻で笑う。

「ふん、だが失敗した」

「あの者はもう一度ここへ来る。一度死んだ者が二度も死ぬものか。おまえを殺しに必ずやって来るぞ」

理屈になっていない理由だったが、自信に満ち溢れた断言は、恐怖を喚起させるには十分だった。ザラディースの顔が見る見るうちに恐怖で青ざめる。

「あの者はここへ来る。もう一度やって来る。必ずやって来る。私を助けに、そして家族を殺したおまえを地獄に送るためにだ」

何度も繰り返すりグヴェーダは、やがて彼女自身確信する。

そうだろう。おまえはそのためにも蘇ったのだろう。

当面の物資を保管するための倉庫にしておいた部屋で、切り札を起動したゲシュタルに、ボツブルが聞いた。

「こんな物、本当にいるのかよ？ あいつら怪我人の集まりだぜ」

「わからん。だが、必要ないとも言い切れまい。少なくとも、奴らがもう一度ここへ来るのは間違いない」

その中に、あの少年がいるとは限らないが。

「だからあの時さっさと殺しちまえばよかったんだ。簡単に終わってたぜ」

「ジフの息子がいた」

「あ？ それがどうかしたのか？」ボツブルは意味がわからず「まさか、昔の仲間の子供を殺すのは忍びないとか言う気じゃねえだろうな？ そんなこと言われたら、言っちゃ悪いけど、俺、笑っちゃまうぜ、ゲーゲツゲツゲツ」

もう笑っているボツブルに、ゲシュタルは気分を害するでなく、端的に一言。

「違う」

「じゃあ、なんだよ？」

「アザニスの悪魔仕込みの戦闘技術を習得しているかもしれん。もしそうならば、現役のアザニスの悪魔と同じ戦闘能力を持っていると推測される」

「でも、あいつビビッて震えてたぜ。シヨンベン漏らしてたんじゃないか？ ゲッゲッゲッ」

「だが、最後には戦った。迷いを振り切り、最初の戦闘における恐怖を克服したのだ。わずか半日足らずで」

ボツルは笑みを止めた。未知の危険性を理解したのか。

「ゲシユタル！」唐突に銀髪の男を呼ぶ声と同時に、ザーラディースが現れた。「ゲシユタル、準備はどうなっている？ ああ、いや、違う」質問を間違えたらしく頭を振って「ラッガートらはどうした。何人始末した？ 誰と誰を消した？」

彼はゲシユタルが返事をするのを待たずに、矢継ぎ早に質問する。その様子はなぜか取り乱していた。なにかを恐れていた。

ゲシユタルは怪訝に眉を顰めたが、冷淡に返答する。

「騎士を二人、雇われた男を二人消した」ジフはまだ息が合ったようだが、あの傷では助からないと判断して、数に数えた。

「たった四人か！？ 他はどうした？！」

「まだ生きている。だが、負傷している」

「手傷を負わせたのなら、なぜ止めを刺さなかった？」

「こちらの被害が大きかったため、一旦引いた」

「なぜそんな悠長なことを！？」

興奮するザーラディースに、ボツルが宿める。

「落ち着けよ、旦那。どうしたってんだ？」

だがザーラディースは聞こえなかったのか、もしくは無視したのか「対策は？ 奴らはまたここへ戻ってくるのだろうか？ ちゃんと対策は考えてあるのだろうか？」

ゲシユタルは無言で背後の物を指差す。

そこにある物を見たザーラディースは、顔に安堵と喜びの色を見せた。

「おお、こいつを起動させたのか。そうか、なら問題はないな。うむ、大丈夫だ」

一人で納得しているザーラデイスだったが、ゲシュタルは、そしてボツズルでさえも、この男が正気であるのかどうか、疑っていた。

ザーラデイスは王家の遠縁だった。その家系図が正確に残っていたため、王族の一員として、末席に加えられているが、ただの名称だけで、なんの権限も持たず、恩恵も受けられなかった。

それなのに、自分の行動は制限される。

彼にとつて、王家に列席していることは、自由を縛られ、不当な扱いを受けているとしか感じられなかった。

それが、彼の劣等感を刺激し続けた。国王の近親者は豊かな生活を甘受しているのに、自分は平民と同列の扱い。

その待遇の差は、現在の王とその家族への嫌悪につながった。

なにも知らず、なにも理解せず、安寧な生活を保障され、傲慢に振舞っても許される、雲の上の、無能な存在。なにもできない無能どもが、胡坐を掻いて安寧に耽るだけの、唾棄すべき存在。

王家の血に連なりながらも、末席であつたために、平民と同じ境遇にあつた彼からすれば、不快感でしかなかった。

能力もなく上に立つものなど、畜生以下の存在でしかない。

畜生は田畑を耕し実りをもたらすが、彼らはただ浪費するだけ。そのために有能で優秀な自分は、王家の血が流れているにも関わらず、末席と言うことで蔑ろにされ、平民と同じ底辺から這い上がらなければならなかった。

だが、それでも王家がこの国の万民のためにあると言つたならば、その義務を果たしてもらわなければ。

自分が果たしているように。

だが、邪魔者が現れた。
アフアマッド・クラノフ。平民から成り上がろうとした、愚かな存在。

能力のある者が、しかるべき地位に付くのは当然のことだが、それは高貴な血が流れているという条件の元にだ。

王家を憎み、同時に羨望する。彼の奇妙で矛盾した精神は、単純な解決方法を選択した。

暗殺。

政敵だったクラノフが王家と手を結ぼうなどと考えなければ、殺す必要はなかったかもしれない。

ザーラディースが自分の地位を確固たるものにするには、アフアマッド・クラノフは将来的に邪魔になるのは目に見えていた。

だからその前に消した。

王家の血筋に連なり、同時に能力を持った、相応しい者が権力を手にするために。

名の無い魔獣の召喚と制御の成功は、確実に権力を手にすることができる。

やがては、自分が王になることも可能だろう。

世界に滅びをもたらす存在が、自分の輝ける未来を拓く。

だが、下らぬ邪魔が入り、さらには死んだはずの少年が生きているかもしれないという。

たったそれだけのことが、ザーラディースに恐怖を与えた。騎士以上に。

ザーラディースはなぜこれほどまでに、少年を恐れるのか。それは誰にも、自分自身でも理解できないことだった。

つまりは罪の意識。己の犯した罪が、巡り巡って自らに帰ってくる。

因果応報。

目に見えないなにかが、誰もその存在を本当は信じていないなにかが、その見えざる手によって、自分を罰しに来る。

死んだはずの、死んだと思っていたはずの少年が生きていたということが、そんな迷信じみた妄想を加速させていった。

九章・変化・1

明朝、ラッガートは志願した四人の若者を連れてベドウィルム村を出発し、神殿を目指して進んだ。

マースム力が案内する近道は、迂回する必要がほとんどなく、前回と同じく夕刻に近付いた頃、神殿の近くまで到着した。

なぜ以前にこの経路を使わなかったのか疑問に思ったが、その答えは神殿に到着した時に理解した。

彼らの前にあったのは、高さ数百メートルの鋭い傾斜。ほとんど崖と言ったほうがいい。

神殿へ入るには、ここを降りなければならない。もしそれ以外の経路を使えば、大きく迂回しなければ辿り着けない。確かに最初に使わなかった理由がわかった。

そして、マースム力のいう近道の意味も。

ここを直接降りれば迂回することもなく、一気に神殿へ辿り着ける。だが慎重を要するため人の足で降りれば丸一日かかるだろう。結局普通に神殿に行くのと変わりはない。そして、こんな崖を降りるための専用の装備品もなく、あったとしても危険を伴う。

「こんな場所に来てどうするってんだ！ おまえ、頭おかしいんじゃないのか！？」 ああ！」

ダラスが早速非難の声を上げる。ここ数日の付き合いで理解したが、彼はマースム力を理不尽で不条理なほど軽蔑している。そのため能力も実力も正しく評価することなく、自分よりも先頭に立つことに我慢ならない。

ダラスを連れてきたのは、敵と戦わせるため。少しでも多く戦力を得るためだ。もし足手まといになることがあれば、今度は躊躇わずに見捨て、使い捨てにさえするつもりだった。

ラッガートは、自身に言い訳をしていることに気付いた。ダラスの人格を理由に、死なせても構わないのだと言い訳している。

たとえば彼が正義感によって志願したとしても、やはり連れてきたし、状況次第では見殺しにするだろう。

数日前とは状況が違う。すでに王女一人の命の問題ではない。犠牲を考慮しても、それだけのことをする理由があった。

名の無い魔獣。

ラッガートは彼らを連れてきた理由を改めて認識し、しかし後悔はしなかった。

非難を受けたマースム力は、ダラスに目を向けずに冷淡に答える。
「ティダと馬で降りればすぐだ」

ダラスは続けて「ふざけたことをぬかしてんじゃねえ！　こんなもの降りられるわけがないだろうが！」

「待て」ラッガートが制する。「軍事戦略の講習で聴いたことがある。難攻不落の要塞を、その背後にある崖を騎馬軍団が駆け下りて、落城させたという」

ダラスは忌々しげではあったが、それ以上は沈黙した。王都の騎士に自分を売り込みたいダラスは、騎士の意見に反論すれば、反抗と受け取られると危惧したのだろう。

ダラスの沈黙を確認して、ラッガートは続けて「だが、それは勿論犠牲を伴うものだったと聞く。マースム力、ここを降りることは本当に可能なのか？」

「前に、野生のティダがここを下りるのを見たことがあります」

「それだけかよ。たったそれだけでここへ連れて来たのか」ダラスは、なぜか嬉しそうに指摘した。マースム力をやり込める材料を見つけたからか。

「来たくないのなら、来なくていい」

マースム力はやはり冷淡に答えると、手綱を軽く操った。すると、ジャリスは一気に駆け下り始めた。二本脚で走る速度は土煙を巻き上げるほどで、しかし転落することなく傾斜を下っていく。初めて

ジャリスに乗ったとは思えないほど。

「すげえ」リーバが思わず称賛の言葉を呟く。

ダラスが怒りの眼を向ける。自分の子分が自分以外の誰かを賞賛することなどあってはならないことだと感じているのだろう。

リーバは身を竦ませ「あ、いや、俺は別に」

ダラスはリーバの言い訳など聞かずに、自分も降りようと鞭をテイダの尻に振るった。だが動かない。

「あ？！ なにやってんだ！？」言いつつ鞭を数回振るう。だが、それでも動かない。「行けよ！ なにビビッてやがる！」

リーバとジェドムは、お互い困ったように顔を見合わせ、ダラスに目を向ける。相変わらずテイダは動かない。

「動けつつってんだろぅが！ なにしてやがる！」

テイダは何度鞭を振るっても動こうとしなかった。傾斜が恐ろしく、命を危険に晒すのは嫌であるらしい。

「テメエ、殺されてえのか」ダラスは感情が高ぶり、腰のナイフに手をかけた。

同時にテイダはいきなり傾斜を駆け下り始めた。

「うお！」

唐突に走り出したため、ダラスは後方へ大きく仰け反り、落ちそうになるが、なんとか踏ん張り、崖を降りて行く。

セリナはその様子を見て嘆息し「私たちも行きましょう」

そしてラッガートも「ああ、気をつける」

二人は馬の手綱を鳴らすと、傾斜を降り始めた。

マースムカほど鮮やかには行かないが、それでも崖を転がり落ちることなく、なんとか下りて行った。

神殿にて、ゲシュタルとザーラディースは、望遠鏡でマースムカたちの姿を確認した。

「ついに来たか」ザーラディースは忌々しげに、そして微かに怯えが混じった声で呟いた。

ゲシュタルは「おまえは奥に避難している。対処が終わるまで我々が……」

「いや！」言いかけた科白を遮って、ザーラディースは「私が指揮を執る」

「なに？」ゲシュタルは眉根を顰めた。

「おまえに任せられるか。おまえが奴らを殲滅しておけばこんなことにならなかったのだ。ここは私が指揮を執る」

ゲシュタルは怪訝に思う。昨日からこの男は明らかに冷静さを欠いている。普段から自分を過信する傾向にあつたが、それでも正しい分析と判断をしていた。だが今日は明らかに様子がおかしい。

「なにかあつたのか？」

「……いや、なにもない。おまえは儀式の準備を進めておいてくれ。あとどれくらいで召喚儀式を始められる？」

なにかを黙っていることに気付いたが、ゲシュタルは追求するのには止めた。ここまで来たのならば、取るに足らない些細なことだろう。

「基本的な準備は終わった。半刻程度で開始できる」

「そうか。ではそこまで進めておいてくれ。ああ、魔獣召喚は私が来るまでするなよ。魔獣が出現するところは見ておきたいからな」

ザーラディースは少年が生きていることを説明しようとして、止めた。今更教えたとしても意味がない。

そしてこの男とは、これを最後に手を切ることにした。

最初の仕事、アフアマッド・クラノフ暗殺依頼を完遂していないのならば、思っていたよりゲシュタルは有能ではなかったのだ。そして今回の件も、詰めが甘い。

この男が多少の犠牲を厭わずに、奴らを全員始末していれば、憂いなく儀式に集中できたのだ。

ゲシュタルがいなければ、そもそも名の無い魔獣を召喚することができなかったのだとは、ザーラディースは考えなかった。

崖を全員無事に降りたことを確認し、以前侵入した時と同じ場所で馬を止め、セリナは周囲を確認する。

魔法使い特有の広範囲に亘る知覚には、敵の存在は確認できない。いるとすれば神殿の中だろう。

「死ぬかと思った」崖を一気に下降するという難行を、それこそ死ぬ思いで成し遂げたリーバが呟く。

「だらしねえこと言ってんじゃねえぞ。これからもつきついことになるんだからよ」ダラスは言いつつ、ティダの足を蹴る。「てめえ、帰ったらどうなるかわかってんだろうな」

ラッガートも馬を岩に留め、神殿に入る準備を整える。

「よし、では、行くぞ」

今度は、潜入して発見されずにリグヴェーダ王女を取り戻すという方法は不可能だろう。敵は戻ってくることを予想しているはず。

ならば、真っ向から戦い敵を殲滅する。勝率は低いが、それしか方法はない。

マースムカが警戒する様子もなく、先頭に立ち早足に神殿へ進んで行く。

「おい、ちょっと待てよ」ダラスが「なに先に行つてやがんだ。おまえは後ろに引つ込んでろよ」

マースムカは無視した。聞こえていないのではないのかと思うほど、まったくの無反応。

「おい！」ダラスは癪に障り怒鳴ったが、やはり反応なし。

「ダラス、ほっとけよ」とジェドム。「びびってやがんだよ」

「ああ、そうだな」

ダラスはその言葉を採用して、それ以上は止めた。聞こえがよしに舌打ちして。

だが、マースムカは不快感を示すわけでもなく、神殿を見つめて
いるだけ。

セリナは唐突に、マースムカから得体の知れない不気味な、恐怖に近い感覚を抱いた。少年は一連の出来事から、大きく変化した。臆病さは消え失せ、物事に動じないというより、無関心なまでに冷淡。

殺し合いを経験し、父親を失ったことが、少年の心にいかなる変化をもたらしたのか。少なくとも、それは成長と呼べる代物ではないことは確かだが。

そのマースムカに続いて、セリナたちも神殿へ向かう。

「静かね」セリナはラッガートに呟いた。

神殿の正面の門へと続く階段が上がっていくが、敵の姿は現れない。自分たちが再び神殿に戻ってくることは予想しているはずなのだ。

「すぐに出てくると思ったのだが。まさか、引き払ったのか？」

「ありえないわ。名の無い魔獣を呼べる場所なんて、そうあるわけじゃない。召喚するならここだけよ」

「もう魔獣を呼び出してしまったということとは」

「もし儀式を行ったのなら、私が感知している」

魔術師であるセリナは、常人より遥かに鋭敏で広域に渡る知覚を持っている。それは、その感覚を持っていない者に説明しても理解できないものだが、それでも感知できるのは確かだ。パブロとリィジスの精神の会話を聞き取ったように。

長い階段を上がると、門を通過し、そこには前に来た時と同じ、礼拝堂のような広い祭壇の間だった。前と変わらず、三つの石像と三人の壁画が、彼らを見下ろす。

そしてその下に偶像の使徒の如く、ザーラデイスがいた。

脇にボツズル。妹の仇。今ではパブロとシエルダックも含まれる。前方に五人の暗殺者。そのうち一人は顎に包帯を巻いている。リグヴェーダが砕いた顎。

その周囲を浮遊しているのはパレスと青い魔導士。

敵は待ち受けていた。

「へ、出やがったな」ダラスは不適な笑みを浮かべ「おい、リーバ、ジエドム。あれを出せ」

「ああ」

「わかった」

二人は初めて相対する敵に多少腰が引けていたが、荷物から用意していた物を出すと、ダラスに渡す。そして自分たちも一つずつ装備しておく。

ダラスは受け取ると、それを駆動式短弓に装着した。

「ザーラディース」ラッガートは怒りを滲ませてその名を呼ぶ。

「おお、これはこれは、ラッガート近衛隊長」ザーラディースは意図的に余裕であることを見せるように「リグヴェーダ王女がさらわれたというのに、こんなところでなにをしている？ 近衛隊長ともあるう者が、こんなところで遊んでいて良いのか？ んん？」

「ザーラディース！」激昂したラッガートは叫ぶ。「貴様の企みは全て知られたぞ。観念して縛につけ」

「ふん、貴様らを始末してしまえば良いだけの話だ。私の邪魔はさせんぞ」

不意に地響きが一つ。重量のある石の塊が落ちた時のような。

「な、なんだ？！」ダラスは思わず声を上げる。

再び地響き。続けて鳴り続け、巨大ななにかの足音だと気付いた時、後方から現れた。

身の丈二メートル以上の、四つの腕を持つ女神の石像だった。それぞれの手には剣と盾を持つ。女神像は生物のように滑らかな動きで四人に向かって足を進める。女神像の重量は見た目の通りらしく、一歩進むごとに足音が響く。

続けて広間の両脇にある四つの扉のうち、奥にある二つ扉からも現われた。

動く三体の女神像。

神殿に侵入した不信心者に怒りの鉄槌を与えようとするかの如く武器を構える。

「怒りの女神？！」ラッガートが慄いて叫ぶ。

「いいえ！」セリナが否定する。「魔法で製造された戦闘用の石人形よ！」

ゴーレム。魔法によって仮初の知性と命を与えられた自動人形。

古代において戦争に使用されたと文献では記されており、その力は一体で百の兵士に匹敵するという。だが、その製造法は失われ、現存しているものは僅か四体。

「これも、あの魔導士が作ったの？」

製造法が失われた魔法の空飛ぶ絨毯と、石人形を作り運用するのは、あの銀髪の魔導士はいつたい何者なのか。

女神像が少しずつ間合いを狭めていく。

前後挟み撃ち。ここまでなにもせずに入れたのは、これが狙いか。

「はっはっはっ、これで逃げ道はないな」

マースム力が不意にザーラディースへ向かって歩き始めた。

それはあまりにも自然で、誰もが、ザーラディースたちでさえも魔法の石像の傍を通過するのを見過ごしてしまうほど、何気ない歩みだった。

セリナはマースム力の行動の危険に慄然とする。

「なにを考えてるの？ あの子」このままでは殺される。

リーバがダラスに「お、おい、ダラス、どうするんだよ？ あいつ一人で行っちゃったぜ」

「ほっとけ！ 勝手な真似しやがって」ダラスは言いつつ駆動式短弓を魔法の女神像に構える。

マースム力を巻き込む可能性があるが、少年はもう魔法の女神像を通過しており、正面にはザーラディースと暗殺者。マースム力は

敵に囲まれ孤立している。今更呼び止めても意味がなかった。

なのに、マースム力はまるで自分がどれほど危険な状況にいるのか認識していないかのように、平然としている。自信に満ちているわけでもなく、虚ろな感じでもなく、ただ自然にそこにいるのだ。

「うつ……」

ザーラディースは、少年のあまりにも自然な態度に、なぜか威圧感を感じた。

待て。名前はなんだった。ザーラディースはラッガートたちの会話から名前を思い出していく。

ラッガート。セリナ。ダラス。リーバ。ジエドム。そして目の前にいる若者は？

死んだはずの名前を思い出す。自らの野望のために、家族と一緒に殺すはずだった少年。

それはただの偶然。ただ彼らの口からマースム力という名が出てこなかっただけ。それは、偶然にも正解に導いた。

「なにをしている！」ザーラディースはマースム力を指差し「早くそいつを殺せ！」

「キヒヒヒヒ。そいつを待ってたよ！」

パレスは嬉々として両手に鋏を構えた。どういたぶってやろうか、こいつをどう虐めてやろうか。抑えきれない恍惚とした狂気が滲み出る。

この時のために、今日は念入りに鋏を研いでおいたのだ。いつもより切れ味は良い。肉を切る感触もずっと良いはずだ。ましてやそれが、このクソガキなら。

パレスはマースムカへ向かって跳躍しようとした。魔法を行使し、重力を中和して浮遊する。

だが、不意にマースムカは肩に担いでいた駆動式短弓を頭上に向けてると、何気なく三本発射した。

見当違いの狙い、あまりにも大外れで、思わずパレスはその矢を目で追って上を向いた。ザーラデイスも、そしてボツズルも、他の暗殺者や、ラッガートたちまで。

パレスのすぐ隣で、鈍い音が聞こえた。

「……あ？」

パレスは聞こえた音に目を向けて、だがしばらくの間、なにが起きたのか理解できなかった。

青の魔導士の喉元に矢が突き刺さっており、青の魔導士は喉を左手の平で押えようとしたが、突き刺さった異物が邪魔をしてできなかった。白い仮面の隙間から大量の血が溢れる。

「オ、ガボ、ゴボボ」

なにが起きたのか、パレスが理解したのはマースムカが駆動式短弓を向けていることに気付いてからだった。

ほんの一瞬の間、マースムカはなぜわかったのだろうか、攻撃態勢に入り結界を張る一瞬前の無防備な時間。そこに、矢を上に向けて放つことで標的の意識を逸らし、その瞬間を狙って矢を首へ向けて放った。

敵の意識を意図的に異なることへ向けるといふ、極めて単純で基本的な、戦闘術の一つ。

「アあ？ アあ？！ あアああアあ！！」

パレスは悲鳴をあげて青の魔導士に手を伸ばそうとした。それは助けようとしたことだったのか。

青の魔導士はマースムカに手を伸ばす。それは復讐をすることだったのか。しかし、他の者には助けを求めているように見えた。

マースムカは無情に数本の矢を立て続けに放ち、それは全て青の魔導士の急所に命中する。

「ア！　ゴ！　ガ！」

一本突き刺さることに奇妙な呻き声を上げ、合計七本の矢が突き刺さったところで、青の魔導士は仰向けに倒れた。

「アズラク！」

悲痛な叫び声をパレスが上げたと同時に、ボツブルの真横で「オグ！　オ、オゴ」奇怪な呻き声が上がった。

その声の主、暗殺者の一人には、頭の頂点に三本の矢が植木のように突き立っていた。マースム力が最初に上に向けて放った矢が、重力の法則に従い落下を始め、そして落下地点にいた暗殺者に命中した。

これも単純な方法。上に放った矢の落下地点を計算して、そして別のことに敵の意識を向けさせて、避けるということそのものを考えさせない。

暗殺者は足が覚束ない様子で立っていたが、マースム力がとどめに放った矢が額を貫き、絶命した。

「ひい！　ひいひい！」

ザーラディースが無様な悲鳴を上げて尻餅をつき、二つの死体から離れようを這うように手足を動かしていた。

「殺れ！」ボツブルが叫ぶ。「そいつを殺せ！」

瞬間的にボツブルは判断した。この場でもっとも強い敵は、この年端も行かない少年だ。

ゲシュタルの考えは正しかった。人を殺すことを躊躇しないマースム力は、ジフが狩の技術と称して、そして護身術と称して教えた戦闘技術を完全に習得し、体得した、紛れもなく現役時代のアザニスの悪魔に匹敵する存在だ。

九章・変化・2

四人の暗殺者は四方向から同時に間合いを詰めた。

マースム力は動じることなく駆動式短弓を向けた。だが、引き金をすぐに絞らなかった。

向けられた暗殺者の一人は体を射線から移動したが、矢が飛んでこないで再びマースム力へと跳躍しようとして、できなかった。

他の暗殺者が移動方向にいたため、一旦動きを止めて、前にいる暗殺者は移動してから、改めてマースム力へ飛ぶ。

同時に、もしくはそれより一瞬前、乾いた破裂音が響き、頭部に衝撃を受け、後方へ弾かれた。

マースム力の手には発砲し終えたあとの硝煙が立ち昇る、単発式拳銃が握られていた。

前にいた暗殺者の体で視界が遮られ、銃を撃つ瞬間が隠されてしまった。

頭蓋骨を砕かれ脳を後頭部から吹き飛ばされた暗殺者は、それに伴う身体機能が停止し、今のはマースム力が意図的にしたものなのか、偶然だったのか考えようとしたが、脳の思考能力はほとんど機能しておらず、意識は急速に薄れ、考えるということもできず、三秒も経過しないうちに、完全に全機能が停止した。

障害物となった暗殺者は、それを見て思い切りよく、向かって右後方へ跳び、マースム力と間合いを取った。それは暗殺者として育成されたものにはあるまじき感情、恐怖が体を走ったからだだった。しかし一瞬後にはすぐに機械的な精神状態に戻り、再びマースム力へと向かう。

撃たれた者の二の轍を踏まないよう、他の二人に今まで以上に気を配りつつ、間合いを一気に詰めた。しかし銃を向けられたため、

射線から外れるために、横へ飛ぶ。注意していたため、同じ失敗はしなかったが、異なる失敗をしたことに気付く。

マースム力の持つ銃は旧式の単発式拳銃。弾込めをしていない今は、弾切れの状態だ。

だが、それに気付いた時は、他の二人がマースム力を攻撃範囲に捕らえた。

マースム力は一人の攻撃を駆動式短弓で受け止めた。だが麻薬で向上させた腕力に対抗しきれない。そしてもう一人の攻撃には、両手が塞がって対応できない。

背後に回りこんだもう一人の暗殺者の凶刃が煌く。その切っ先は背中 of 急所へと。

マースム力は力比べをしていた腕の力を、唐突に抜いた。力で押えようとしていた暗殺者は反応しきれずに、マースム力のほうへ前のめりに倒れそうになる。

そしてマースム力は横へ体の軸を移動させ、暗殺者が倒れる方角へ後押しする。

背後から攻撃しようとしていた暗殺者と、転倒する暗殺者が、激突し、二人が一緒に床に転がることになった。そして攻撃しようとしていたナイフは、もう一人の暗殺者の胸に刺さる。

しくじったと思った瞬間、ドキュ、という頭蓋骨が貫かれる音。絡まるように転倒した二人の、上にかぶさっている位置にいる暗殺者の口から、マースム力が後頭部へ至近距離で撃った駆動式短弓の矢の鏃が、顔を覗かせていた。流れ出る血が下に位置する暗殺者の顔に降りかかり、視界を赤く遮る。

力任せにかぶさっている死体を押し投げると、足音が前方で鳴る。あと一歩で接近攻撃の範囲に入る距離まで接近された。

暗殺者は間合いを取ろうとして後ろへ飛ぶ。目に血が入り見えなくなってしまうが、一時的なものだ。十秒もすればすぐに元に戻る。それまで時間を稼げばいい。そう判断して後ろへ跳躍した。

そして永遠に見えなくなる。

背後にいた魔法の女神像の剣が、その暗殺者の背中から貫いた。跳んだ方向に待ち構えていたかのように、剣が突き出された状態で、魔法の女神像は待機していたのだ。跳躍の勢いと体重が剣先の一点に集中し、暗殺者の体を貫き、腹部から剣先が覗く。なにが起きたのか理解できず、視界を閉ざされた暗殺者は、背後に敵、ラッガートが誰かが待ち構えていたのだと考えたが、振るうナイフは攻撃が届かず、数秒後には心臓が停止した。四人の暗殺者が攻撃を開始してから十三秒。死体が三つ。マースムカは残りの敵、四人へ駆動指揮短弓を向けた。奇妙に感じるほど冷淡に。

そうだ。

始めからこうすればよかった。

最初からこうしておけばよかった。

躊躇う必要なんてなかった。

躊躇う理由なんてどこにもなかったんだから。

始めから迷わずに殺しておけばよかったことだったんだ。

ダラスはしばらく呆然としてしまった。戦いは始まっており、本来ならすぐにマースムカに続き戦闘体勢に入らなければならないはずなのだが、そんなことも思い付かずに、呆然としてしまった。

「あ、あいつ、あんなに強かったのか」リーバの畏怖の念が籠もった呟き。

「なんだと！」ダラスが激昂する。

ふざけんじゃねえ、あいつが強いだと、そんなわけねえだろ、あいつはなにもできない役立たずの臆病者のクズ野郎だ！ 今のは偶

然に決まっている、絶対にそうだ、あんなことを狙ってできるわけがない、ありえないんだよ！

言葉には出さなかったが、ダラスは胸中否定する。マースムカの全てを否定し続ける。そうしなければ、今までの自分を、自分自身で否定してしまうことになってしまふから。

「旦那！ なにやってんだ！？ 早く人形を動かしてくれ！ ゲシユタルの旦那から動かし方は教えてもらったんだろ！？」

ボツズルが叫ぶと、ザーラデイスは我に返り、持っていた宝玉に念をこめる。魔法の才がない者でも、石人形を操れるようにと、ゲシユタルが事前に造っておいたもので、複雑な命令はできないが、簡単な指示なら問題ない。

「そいつらを殺せ！」

魔法の女神像は、ラッガートたちへ動き始めた。

ラッガートは間合いを詰める魔法の女神像に対して構えた。体中に残る怪我が痛むが、精神で抑制する。

セリナも魔法の短剣を展開し、濃い青のドレスは一瞬で戦闘形体の防護服へ変形する。

「セリナ、魔法の人形は倒せるのか？」

「倒せる。魔法の石人形は中核となる刻印がどこかに刻まれている。それを破壊すれば、魔法の効果がなくなって停止するわ」

女神像には一見刻印らしきものは見えない。どこにあるのか。

「刻印を見つけられないなら、完全に破壊する方法もあるわ」

ラッガートはその意味することを理解し、ダラスに命じる。

「ダラス！ 撃て！」

「はい！」

ダラスは喜々として駆動式短弓の引き金を絞った。

火薬を仕込んだ矢は、風を切り女神像向かう。今度の起爆方法は導火線。石人形に命中し、貫通力を高めた形状の鏃は表面に刺さり、導火線は火花と煙を発生させる。

女神像が自身の胸に突き刺さったものを見るかの様に顔を動かすと同時に、火薬に引火した。

耳を劈く爆発音。

マースムカの時より爆発は小さいが、それでも怒りの女神の右上半身が砕けた。

「どうだ！ 俺が考えたんだぞ！」

矢に火薬を仕込むというのはマースムカの考案なのだが、リーバとジェドムは知らなかったし、セリナとラッガートは取るに足りないこととして指摘しなかった。今はそういう状況でもない。

「まだ完全に破壊していない！」

ラッガートが叫ぶ通り、女神像は崩れかけたまま接近し、攻撃を仕掛けようとしている。その一撃は必殺の剣撃。

「リーバ！ ジェドム！ 撃て！」

ダラスが指示を出すと、二人は同じ火薬仕込みの矢を放つ。爆発が二度。上半身が完全に砕かれ、続けて下半身部分も砕けた。

ダラスたちは、すぐに火薬仕込みの矢の再装填を行い始めた。

現在の敵数。楽園の暗殺者、二人。魔導士、一人。女神像二体。

そしてザーラデイス。

「ダラス、入口の方は任せたまぞ」ラッガートは指示を出すと、前方に残っている女神像へ向かう。「セリナ、援護を頼む」

「了解」

セリナの周囲に、七つの短剣が浮遊し、展開された。

ザーラディースはうるたえる。

女神像がいきなり一体破壊されてしまった。火薬など考えもしなかったのだ。ゲシュタルの報告は受けていたのに。

「チッ」ボツズルが舌打ちして「旦那、なにやってんだよ。全部動かせて」

「おお、そうだ」ザーラディースは言われてすぐに、宝玉に命じる。まずは火薬をなんとかしなければ。

そこにマースムカが矢を放った。ザーラディースは反応することさえできなかったが、ボツズルが二本の矢をカタールで弾き落とす。「おおっと、あぶねえあぶねえ」

マースムカは標的をボツズルに移して構える。

「おいおい」ボツズルはおどけて見せて「おまえの相手は、俺じゃあないぜえ」

空中を浮遊していたパレスが、不意にその姿が消え、次の瞬間マースムカの背後に出現し、大剣で首を切断しようとした。

「死ねええええ！」

マースムカは剣が閉じられる寸前、屈んでそれを回避したが、駆動式短弓が鋏に挟まれ破壊された。

魔法的に攻撃量を増加してあるのか、木製の駆動式短弓は神のように切断される。

マースムカは屈んだ状態のままから、地面を転がって間合いを取る。

「よくも息子を二人とも殺してくれたね！」

厚化粧が涙と涎と汗で剥がれおち、まるでこの世ならざるものの体液が流れおちているかのようで、あるいはそれが彼女の狂気を表しているのかもしれない。

「おまえにも同じ目にあわせてやる。おまえの家族も、友人も、知

り合いも、顔見知りも、声を聞いただけのやつも、姿を見ただけでも、あんたにかかわった人間全員皆殺しにしてやるうつつあああ
！！」

パレスは両手に大剣を構えると、再びその姿が消えた。

空間転位や瞬間移動ではない。姿を透明化する魔法。

マースム力は狩猟用ナイフを構えると、目を閉じた。

ラッガートは魔法の女神像に攻撃を繰り返していた。だが材質が硬質の石材であるため、完全に破壊するのは難しい。それでも数回の攻撃で、女神像の左側の二本の腕は破壊した。

続けて右側を破壊すれば、攻撃方法がほとんどなくなる。セリナがその援護に短剣を放とうとしたその時、もう一体の女神像がラッガートに攻撃を仕掛けた。

「ぐう！」盾で防御したラッガートは、しかしその威力に呻き声をあげる。

女神像は連続して攻撃を繰り返し、ラッガートはそれを盾で防御し続けるが、衝撃に耐え切れずに、盾が砕かれた。

「うお！」弾かれて、飛ばされたラッガートは床に背を叩きつけられる。

立ち上がろうとしたが、盾を持っていた腕に激痛が走った。骨が折れている。

そして女神像は、火薬仕込みの矢を持つ、ダラスたち三人へ疾走した。その重量からは想像もつかないほど俊敏な速度で。

「え？」ジエドムが気付いた瞬間「ゴボ！」

その腹に女神像の剣が貫いた。背中から血と内臓の一部がこびりついた刃が突き抜けている。

「ジエジエジエジエ！」リーバが名前を呼ぼうとするが、驚愕で舌が回らない。

ジェドムの駆動式短弓の矢に仕込んだ火薬の導火線が、残り一センチにまで達していた。

「逃げる」ダラスが叫ぶが否やその場を離れる。

一呼吸遅れてリーバも。

そして女神像も。

爆発。

ジェドムの体が四散し、すぐ傍にあった荷物も吹き飛んでいた。当然中であつた火薬仕込みの矢も。誘爆は免れたようだが、火薬筒は破けて中身が拡散してしまい、もう使えない。

「火薬が!? チクショウ!」と自分の矢を見ると、導火線が後もう少して火薬に引火する状態だった。「うわあ!」

ダラスは狙いをつけることも忘れて、思わず発射し、火薬矢はマースム力の方向へ。

「いかん!」

ラッガートは思わず叫んだ。

自らの姿を透明化したパレスは、息を潜めてマースム力の背後に忍びよつた。空中に浮遊している状態では、足音を立てることもなく、察知されることはない。

そしてマースム力の型に鋏を突き立てようとした。まずは腕を使えなくする。その後は足。動けない状態にして生きたまま捕え、拷問にかけてやる。どれぐらい長く生きていられるか、じっくり試してやる。

振り上げた鋏を突き立てようとした瞬間、マースム力は前方へ地面を転がって回避。すぐに振り向いてクロスボウを発射。

矢はパレスの胸に命中。だが魔法防護を付加されたドレスは、鎧を皮膚まで貫かせない。しかし攻撃が命中したため、透明化の魔法が解除されてしまった。

「キイイヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

パレスはその場で連続して鋏を繰り出す。ナイフとは異なり挟むという動作を必要とするが、両側から挟み切断し肉を挟り取ったその傷は、直すことができずに出血が続くことになる。

マースム力は後方に下がりながら鋏を回避するが、いつまでも続くわけではない。

壁際まで追い込んだ。

「もう逃げられないねえ」

愉悦の笑みでパレスは両手に持つ鋏を構え、突きだした。

マースム力は狩猟用ナイフを、挟みの根元へ叩きつけた。

「なに！？」

鋏の可動部分が変形して動かなくなり、パレスは一瞬戸惑う。そしてマースム力が至近距離で、パブロが残した六連装拳銃を発砲するのを見逃してしまった。

魔法防護で防いだが、衝撃は重力中和をして浮遊しているパレスを後方へ弾き飛ばし、そしてダラスが放った火薬付きの矢が、パレスの背中に刺さった。

「あひ！ あひいいい！」

悲鳴をあげて振り払おうとするが、取れない。結界によって体には到達しなかったが、矢の鏃は両側が鉤爪状になっているためドレスから取れ難いのだ。

「ひいやあああああ！」

そして爆発。

残虐性と狂気に彩られた精神の持ち主である、ドレスで着飾った魔導士は、その復讐を達成することなく、拍子抜けするほど簡単に死んだ。

ザーラディースは念じる。あいつだ。右顔に火傷の跡のある少年

を殺せ。

この中でもつとも恐怖を与える存在である少年をなんとしても殺さなければならない。

すべての原因は少年にある。騎士が神殿へ来たことも、そして計画に狂いが生じたことも全て、少年が生きていたために起きたに違いないのだ。

ザーラディースは理屈にならない理論で、マースム力に標的を定める。あるいは、それは本能的な恐怖に起因し、説明など後付けにすぎなかったのかもしれないが。

女神像の一体は攻撃対象を明確に指示され、他の者を無視して、マースム力へ向かって跳躍する。

マースム力は横へ跳ぶ。その場所の床に女神像の剣が真上から叩きつけられた。地響きのするほどの衝撃。一撃でも命中すれば、ジエドムと同じ運命を辿ることになる。

「おお！ いいぞ！ 殺せ！ 殺ってしまえ！」

ザーラディースは、まるで新しい玩具を与えられた子供のように歡喜して、快哉を送る。

マースム力は一瞬ラッガートたちに目を向けると、突然踵を返して、全速力で扉の一つへ走った。女神像を一体を引き付けるためか。「逃がすな！ 早く追え！」

ザーラディースの意思を受けて、女神像はマースム力を追跡した。

九章・変化・3

神殿の奥へ走り続けたマースム力は、一旦壁の影に身を潜めて隠れる。

走ってきた通路の方角から、女神像の影が見える。歩いているのか、壁に映る影の速度は遅い。だが、確実にこちらに近づいてきている。

どうする？

駆動式短弓は魔導士に破壊されてなくなった。パプロの六連装拳銃の弾は、あと三発しか残っていない。単発式拳銃はまだ三十発ほど残っているが、一度発砲するたびに弾を再装填しなければならぬ。一撃で女神像を破壊するのは不可能だ。狩猟ナイフでは、強硬度の石像には貧弱だ。

あの憤怒の女神の姿をした、魔法の石人形は、一撃で仕留めなければ、次には自分が死ぬことになる。

だが、決定打となる攻撃方法がない。

セリナが言っていた刻印に命中させれば可能かもしれないが、どこに刻まれているのかわからない。

女神像の姿を改めて確認しようとしたが、その姿が見えなかった。え？

「！」

瞬間、背中に電撃が走ったかのような感覚に襲われ、思わずその場から飛び退いた。

同時にその壁から衝撃音。いつの間に移動したのか、すぐ傍で女神像が右拳を繰り出したのだ。直感的に避けたので助かったが、次は避けられない。

マースム力は連装式拳銃を発砲し、間合いを取る。もっとも脆そ

うな首筋を狙った。頭部を破壊すれば、動きを止めるかもしれない。女神像は盾を構えてそれを防いだ。

三発の弾はすぐになくなった。

そして女神像は一直線にマースムカへ突進し、間合いを一瞬で詰める。

マースムカは女神像へ向けて両手を伸ばす。格闘をまったく知らない子供が怯えのあまりにしてしまっ、攻撃を防ごうとして両手を突き出す行動に似ていたが、体重の軸がまったく違う。そして手が女神像と接触した瞬間、マースムカは半身を右へ回転させ、体重軸を後方へ移動させた。

女神像はその突進力を利用され、投げ飛ばされた。

それはジフから教わった、興奮したティダを取り押さえる時の技術。力に勝るティダを転倒させて捕らえる方法。

マースムカは知る由もなかったが、それは東洋武術における合気に似ていた。

女神像自身の速度に、マースムカの力が加わり、体は縦に回転して、女神像は頭から床に叩きつけられ、その頭部に亀裂が入る。

「うっ」

だがマースムカの右手首にも激痛が走った。女神像の力と速度も対応しきれず、関節を痛めたようだ。骨が折れていることはなさそうだが、数日は使い物にならない。

床に叩きつけられた女神像は何事もなかったように起き上がる。

マースムカがそのことに気付いた時には最高速で迫ってきた。

回避が間に合わない。マースムカは死を予感した。

だが、女神像はマースムカの真横を通過して、そのまま壁に激突した。酷く滑稽なほど。

「え？」

マースムカは疑念の声を上げた時には、女神像は起き上がり再び疾走する。だが、見当違いの方向へ向かい、唐突に転倒した。

「そつか……」

先程女神像は頭部を強打した時、人間でいう平衡感覚が狂ったのだ。それは微小なものだが、おそらく最高速度で移動する時は、その僅かな差が大きく現れる。

頭部に入った亀裂が原因か。

マースム力は勝機を見出した。

同時に全速力でその場から離れ始めた。

「付いて来い！」

儀式の準備が終了したことを確認したゲシュタルは約束の報酬を渡した。

傭兵団の頭は袋一杯に入っている金貨宝石類を確認する。どこへ行っても換金可能なため、特定の国を持たない傭兵たちには、こういった報酬が喜ばれる。

ゲシュタルは続けて「おまえたちはここから離れろ」

「どこで待機していればいい？」

指示に具体性を求めた傭兵団の隊長に、ゲシュタルは首を振る。

「違う。この神殿から離れろと言った。仕事はもう終わりだ」

十人の傭兵は顔を、戸惑ったように見合わせる。仕事はこれで終わりだと言われても、納得するわけではない。敵が襲撃しているという連絡は受けた。先程は爆発音がここまで届いた。戦いは始まっている。それなのに戦わなくても良いと言っのか。

「敵はどうするんだ？」

「ザーラディースは負ける」

断言するゲシュタルに、傭兵団は怪訝に思う。

「負けるのに、加勢しなくてもいいのか？」

「おまえたちが加戦しても結果は同じだ」

それは傭兵団の実力を侮っているでも、過小評価しているでもない。正確に評価した上で、負けると分析している。

「戦力差を考えれば、ザールデイスのほうに分があるだろう。ラッガートがどのような対策を考えてきたのか、それは想像しかできないが、おそらく戦力差は埋められない。だが、それを考慮に入れたら、ザールデイスは負ける」

ザールデイスは王国軍の將軍職に就いているが、戦闘訓練を受けたことなど一度としてない。事務員として上り詰めただけの男だ。実戦経験も、実戦における知識もない。そんな人間が指揮を取れば、如何に兵士が優秀であっても勝ち目などない。ボツブルが善戦すればあるいは勝てる可能性がでるかもしれないが、おそらく無理だろう。

傭兵団を投入しても、大して変わりはない。

「それに、おまえたちの仕事はこの儀式の準備をすることだけだ。ならば、命を無駄に捨てることはないだろう。裏の出口はわかるな？　そこからなら安全に撤退することができるだろう」

説明を聞いた傭兵団は、自分の雇い主を、目的のために利用しても平然としているゲシュタルに慄然としたが、彼らを雇用しているのは、正確にはザールデイスではなく、ゲシュタルだ。彼の指示に従うのが筋だろう。

「あんたはどうするんだ？」

「私は、まだやることが残っている」

名の無い魔獣の召喚。

「それが、あんたの目的なのか？」

ゲシュタルは答えなかった。

名の無い魔獣を召喚することだけが目的のはずがない。もしかすると、この男が狂気に犯され、世界を滅ぼそうとしているのかとも思ったが、それならば逃げるなどとは言わないだろう。命を無駄に落とすことはない、などとは言わないはずだ。

事実、ゲシュタルの眼は狂気には程遠い。どこか疲れたような眼だが、正気だ。

「まあ、いいさ。それじゃあ、俺たちは行くぜ。成功するといいな」

傭兵団は深く追及せずに、神殿から脱出することにした。

傭兵たちが神殿から撤退するのを確認した後、儀式の間に来たゲシュタルは、一通りの確認をする。

複雑な魔方陣。魔法の媒体。場に満ちる、霊脈から給汲される強大な霊力。

完全であり、完璧だ。

そして祭壇に横たわるリグヴェーダ王女。

彼女を殺せば、名の無い魔獣は出現する。その身に秘めた万物を支配する神の力によって。

ゲシュタルは短剣を握り締め、彼女に声をかける。

「リグヴェーダ王女。なにか言い残すことはあるか」

それは犠牲とする者へのささやかな慈悲だったのか。

祭壇に手足を鎖で束縛され、身動きの取れないリグヴェーダ王女は、逃げ出すことも、抵抗することもなにもできないにも関わらず、ゲシュタルに向けるその目は、不思議にも怯えがまったくなかった。つい昨日までは、抑えても隠しきれない死の恐怖があったのに、なぜ今はないのか。その理由はわからないが、騎士たちが助けに来たことが、彼女になにらかの精神的な成長と強さを与えたのかもしれない。

そして彼女は淡々と告げる。

「ある」

続きを口にしない。こちらからの質問をあえて待っているのだ。

「なんだ？」

「殺さないでくれ」

「……」ゲシュタルは沈黙。まったく予想のしていなかった言葉だったので、珍しいことにこの男は少し呆然としてしまった。

「というか、助けてくれ」リグヴェーダは重ねて「ついでに逃がし

てくれるとありがたい。死ぬのは嫌だからな。特に生きる理由があるわけではないのだが……ああ、これはここ数日牢の中で考えて、自分には人生の目標がこれといってないことに気付いたと言うことなのだが、しかしそれを踏まえても、とにかく死ぬのは絶対に嫌だ、という結論に至った。そういうわけで、ここで逃してくれるなら、まあ、おまえを躍起になつて捕まえることはしないから、ここは取引ということで、殺すのはなしにしてくれないか？」

ゲシュタルは無言のまま、彼女の言葉を考えた。

もしかすると時間稼ぎのつもりなのかと思つたが、すぐに違つのだと理解する。彼女は、冗談を言っているのだ。こんな状況で、自分を殺そうとしている相手に向かって、つまらない冗談を言っているのだ。

「クックククツ」ゲシュタルはいつしか笑い始める。つまらない冗談だが、おかしかつた。「ハツハツハツハツハツ」

リグヴェーダは不敵な笑みを浮かべて、それを眺めていた。何一つ感情を見せなかつた男が、今彼女に始めて、その感情を隠すことなく見せているのを、彼女自身面白い見世物のように、眺めていた。「ああ、いや、失礼」ゲシュタルは笑いの発作を抑えつつ。「悪いがそれはできない」

「で、あろつな」手足の自由がきけば、肩を竦めて見せただろう、そんな同意。

「そうだ。では、そろそろ覚悟を決めていただこう」

「ああ、待つてくれ」リグヴェーダは思い出したように「今度はこちらから質問をしたい」

ゲシュタルは怪訝に「なにか？」

「おまえの目的はなんだ？」

「ザーラディースが説明しなかつたか？」

「違う。おまえの目的だ。ザーラディースは、帝国の新兵器に対抗するためだと言う口実で、王国軍掌握の手段として魔獣召喚を考えているようだが、おまえは違つのだらう。ザーラディースを利用し、

暗殺教団、楽園を使い、魔導士を招き、傭兵団を雇い、そうまでして達成しようとする、おまえの目的は、なんだ？」

ゲシュタルはリグヴェーダに敬意の目を向けた。少しの時間で、その人物の人となりを見抜き、目的の相違を見抜いた、その観察眼と洞察力。

もしかすると、将来とてつもない大人物になるかもしれない者を殺めようとしているのかもしれない。もっとも、それで名の無い魔獣を呼ぶことを止めるつもりはないが。

「……どう説明すればいいのかな」答えを思案して「簡単に言えば、私の目的は、神を殺すことだ」

「……なに？」リグヴェーダは戸惑った。「なんだって？」

「私は神を殺す。……いや、違うな」言葉を捜すように視線を彷徨わせ「私は神を消滅させたいのだ。あの強大で偉大な存在を。過去、現在、未来、その全ての時空から、神の存在を消去する。それが私の生き延びる唯一の方法だからな。そして名の無い魔獣ならば、それが可能だ」

「どういう意味だ？」リグヴェーダは純粹に理解できずに問う。

「私は……」

ゲシュタルは背を向けて、頭上を仰いだ。リグヴェーダからはその顔が見えなくなる。

「……私はあの日、あの時、神が如何なる存在であるのかを知った。そうして私は、我らは、神の配役によって滅びの運命を背負わされた。おまえには理解できないだろうが、おまえたち人間には理解できないだろうが、我らは神を滅ぼさねば、我らの未来を手にすることはできないのだ。そして名の無い魔獣は、今や神を滅ぼす唯一の方法なのだ。死も、炎の王も役割を果たした今、残された名の無い魔獣だけが最後の手段」

ゲシュタルの肩が震える。それは笑っているのか、嘆いているのか。

「私にあの頃の力があれば、死が我らを地獄の底へ落とす前の力が

あれば、このような手間は要らなかった。だが、皮肉にも、力を失ったことよって、神の瞳から逃れることができたのだ。神は私を見逃してしまった。まったく、皮肉なものだ」

「おまえは一体何者なのだ？」

「私は……」

マースムカが女神像の一体を引き付けて、扉の向こう側へ走ってから五分ほど経過した。

「うおおお！」

ラッガートは雄叫びを上げて、女神像の盾を持つ右腕を粉碎した。同時にセリナが破壊の力を帯びた短剣を三本同時に投擲する。頭部、胸部、腹部を連続して粉碎する。

女神像は原型をとどめず、動きを止め、下半身部分が倒れた。魔法の刻印を破壊されたのかはわからないが、少なくとも動く状態ではなくなった。

「やった！」リーバが駆動式短弓を構えたまま、快哉を挙げる。

「グウ」だがラッガートは膝を突いた。

元々強行軍で神殿に來たために体力は限界に達し、新たに受けた傷から血が流れ、先日受けた傷も開いてしまった。

セリナも肩で息をしている状態で、体力がほとんど残っておらず、魔法はもう使えないだろう。左腕からも出血が再び始まっている。治癒魔法である程度は塞いだが、激しい動きで開いてしまったらしい。

こちらはすでに满身創痍。

だが、やつらの戦力はボツズルと、暗殺者が一人。そしてザールデイス。魔法の女神像を二体とも破壊した今なら、まだ勝算はある。

「フハハハハハ」

しかしザーラデイスは勝利を確信した哄笑。そしてザーラデイスが持つ宝玉を掲げると、扉の一つからさらに一体、魔法の女神像が現れた。

「チクシヨウ！ まだいたのか！」

ダラスが悲鳴を上げた。

「戦力を隠すのは基本だ、基本」

女神像は突進して剣を振り回す。

少年二人は走り回って逃げる。

ラッガートは盾で防いで反撃に転じたが、振り降ろす剣の威力は弱く、魔法の女神像はその攻撃を腕で直接受け止めると、拳を腹部へ繰り出す。

「ぐぼ！」

まともに受けたラッガートは苦悶の声を上げて床を転がる。

「ご、ゴボ」口から夥しい血を吐いた。内臓に損傷を受けている。

女神像は続けてセリナに剣を振り下ろす。セリナは横へ転がって回避。その位置の床に、突き刺さる勢いで叩きつけられる。剣先から火花が飛ぶほどだが、床に損傷はない。時間が停止された物質であるため、どのような影響も伝わることはない。

魔法の女神像は床に伏せるセリナを蹴り飛ばす。

「あうっ！」

右腕で防御したが、蹴りの威力は彼女を数メートル浮かせ、そしてセリナは床へ叩きつけられた。そして蹴りを受けた右腕が不自然に曲がっている。骨が完全に折れた。

ラッガートとセリナは動ける状態ではなく、ダラスとリーバに至っては、火薬がなければ攻撃方法などない。

魔法の女神像を破壊するだけの戦力はない今、勝算は完全になくなった。

これで終わりか。ラッガートの精神に諦念が芽生えた。

まだだ。ラッガートは気力を振り絞る。ここで諦めては死んでしまった者たちに申し訳が立たない。命が終えるその瞬間まで、戦う

ことを諦めるな。

だが、その闘志とは裏腹に、体は思うように動かず、立ち上がる
ことさえできなかった。

「ボツズル、やってしまえ。そいつらはもう戦えん。残り二人も、
雑魚だ」

「わかつてるって」ボツズルは言いつつ、カタールをジャッグルし
ながら四人へ足を進める。「さーで、どう料理してやろうかね。刻
んで焼いて茹でて炒めて蒸して煮て揚げて食わずに捨ててやろうか
あ、なー！ ゲーゲツゲツゲツゲツ」

ザーラディースは勝利を確信した笑い声を上げる。

「ハハハハハ！ わかったか！？ 私に逆らうことがどういうこと
か！？ 私に逆らうものはみな死ぬのだ！ 貴様らにはなにもでき
ん！ 無力な貴様らができることは、ただの無駄死にだ！ 犬死が
お似合いだ！ ハーハッハッハッハッハッハッ！」

全てが自らの思いのままになる充実感が、狂喜の嘲笑を掻き立て
ていた。

九章・変化・4

「そいつはどうか」

唐突に頭上から声が聞こえた瞬間、なにかが投擲され、丁度女神像の頭部に落下。次の瞬間、爆発が起きた。女神像の頭部の破片が周囲に飛び散り降り注ぐ。だが、致命打にはなっていないのか、視覚情報を捕らえる部位を失っても、動き続けている。

しかし、さらに爆発物が落とされた。筒状の紙製の入れ物に、火薬を封入した物。ダイナマイト火薬筒の導火線の火花が輝き、それは火薬に引火すると同時に、その威力を最大限に発揮する。

女神像の至る箇所ので、爆発する。

そして爆発が収まり、煙が晴れた時、女神像の姿はなく、大小の石材の破片が散らばっているだけ。

爆発物を投げたのは、神殿の天窓の淵に救世主の如く堂々と姿を見せるのは、バンダナで髪を纏め、遮光グラスのゴーグルをつけた男。

「パプロ！」セリナはその名を呼んだ。

「遅くなってすまねえ」

パプロが言いつつそこから続けて、導火線に火が付いた火薬筒をボツズルへ向けて投げた。

「うお！」

ボツズルはその場から飛び退く。爆風に煽られ体勢を崩すが、空中で整えて着地する。

だが、その横で「ぐえ」蛙の潰れたような声。

見るともう一人の麻薬服用暗殺者が、その腹と胸に一本ずつ、顔に二本、合計四本の矢が刺さっている。すべて急所に命中し、ほぼ即死だろう。

爆風に煽られた隙を狙って撃ったのは、駆動式短弓を構えているリーバ。自分のしたことが半ば信じられないかのような、しかしそれでも敵を仕留めたことで喜びが混じった表情。

「や、やった」

ダラスはそれを見て「てめえ！ 勝手なことするんじゃないねえ」

この期に及んでも、まだ手柄を立てることしか考えないダラスに、リーバは戸惑うだけ。

「ええ？！ 俺はただ敵を倒そうと……」

「うるせえ！ 黙ってる！ 俺が英雄になるんだ」

ダラスはボツズルへ向けて駆動式短弓を撃った。

「おわ！ っと、とと」ボツズルはそれを難なく躲す。そしてザーラディースに「旦那、もうだめだ。俺は逃げるぜ。旦那も逃げな」
「なにい！？」

あまりにも簡単に敗北宣言し逃亡しようとするボツズルに、ザーラディースは驚愕するが、ボツズルは構わずに扉の一つへ走った。
ザーラディースも遅れて反対の扉から逃げ出す。

「ま、待て！」セリナはボツズルを追跡しようとするが、体力の限界で、意思に反し、足は引きずるようにしか動いてくれない。

「逃がすかー！」

だがボツズルが逃げようとした扉から、場違いに可愛らしい少女の声がすると、ボツズルが開いている扉を通過する直前、見えない壁に激突したかのように弾き飛ばされた。

「おわ！ な、なんだあ！？」転倒したボツズルの両膝に弾丸が命中した。「あひ！ ひあ！」

奇怪な悲鳴を上げて足を押える。明らかに膝の骨が砕けている。これでは麻薬による強化した身体能力も意味を成さず、動くことができない。

硝煙が立ち昇る六連装拳銃を手にしたパブロが、セリナに叫ぶ。

「殺れ！ セリナ！」

今が好機。膝を砕かれたボツズルは、今までのように避けること

ができない。そして守る魔導士も、部下も、魔法の石像もない。
セリナは残った体力を振り絞り、一本の短剣に魔力を込めた。

「行け！」

一筋の閃光が空気を焼き尽くすほど輝く。

「ウソオオオオ！？」

楽園の暗殺者、最後の一人の、最後の叫び。

パプロは神殿の上から降りた。

「よお、久しぶり。元気か？」

様子を見れば、元気のはずがないのはわかっていたが。

「あたしもいるよ」

隣にリィジスが来た。こんな状況だというのに、子供みたいに元
気いっぱい笑う。

「なんだ、それは？ 背中から、蜻蛉の羽が生えているぞ」ラッガ
ートが尋ねる。

「あれ？」パプロは首を傾げて「あ、そうか。おまえらは初めて会
うんだっただ」

「ああ、そう言えば、そうだったね」リィジスも気が付く。

パプロはリィジスを示して「改めて紹介する。密告屋のリィジス
だ」

「よろしく」軽く敬礼して、羽根を広げて見せる。

「妖精族。炎の民か」ラッガートはその正体は理解したようだ。

「は、はじめまして」セリナが息切れしつつ答えた。

限界まで魔法を行使したので、もう立つこともできないようだ。
言葉を使うことさえ重労働だろう。切断された左腕からも出血して
いる。

「パ、パプロ。でも、どうして？」

「ああ、無理に喋るな。辛いんだろ」パプロは制する。

「だが、どうして助かったんだ？」ラッガートが代わりに質問する。
「あの傷は致命傷だったはずだ」

パプロの衣服はナイフが突き立てられた跡があるが、その下の皮膚は綺麗で、傷跡一つない。

「それはな……」リイジスに目を向けて「セリナを頼む」

「あいよ、つと」

リイジスはセリナの胸に手をかざすと、その手の平と、蜻蛉の羽が、ぼんやりと輝き始めた。

セリナの左手の出血が止まり、他にも敵に受けた傷も消え始め、不自然に曲がった右腕も元に戻る。

「あら？」

パプロは肩を竦めて見せた。

「こういうこと。とはいっても正直かなりやばかったんだがな。あと数分でもリイジスが河の中から俺を見つけ出すのが遅れていたらまあ、助からなかっただろうな」

勿論、炎の民であるということも、助かった要因の一つだろうが、そのことは黙っておく。

そして河の中から這い上がったのだが、分岐している別の支流に流されたため、ベドウィルム村からは遠く離れた位置だった。運よく砂漠を旅する旅隊商に助けられ、馬と武器を調達し、急いでベドウィルム村に向かった。今日の朝になって到着したが、村人から事情を聞くと、すでに出発したあとだった。そして急いで跡を追ってきた。

ラッガートは少女の姿をした妖精に目を向けた。

「妖精族が密告屋、か。おまえは一体何者なんだ？」

「秘密だ」言ってからパプロは、気取って顎に手を当てると「ふっふっふっ、俺は謎に包まれた男なのだよ、ラッガート君」

「王女の諜報員だというのは、セリナから聞いたのだから」

「あら」パプロは肩を落とし「言っちゃったの、それ」

「その部分だけはね」セリナは楽になったのか、上体を起こし「で

も、他のことは言っていないわよ」

「他のこと？」とラッガート。

「ああ、秘密秘密。企業秘密だ」パプロは手をパタパタと振ってから「リイジス、ラッガートも頼む」

「はいはい。まったく人使いが荒いんだから」

言いつつラッガートの怪我も治し始めた。完全に治すには時間がかかるが、ある程度ならば急速に治癒できる。傷口を塞ぐだけなら問題ない。

「左腕はあるか？」

セリナは首を振って、ボツズルを示す。

「やつが持つて行ったけど、今はどこにあるのか」

ボツズルがどこかへ捨てたとしたら、広大な大峡谷で発見するのは不可能に近い。運よく発見できたとしても、おそらく腐敗か乾燥が始まっている。炎の民の力でも、そんな状態の腕を接合するのは不可能だ。

「そうか」パプロはジェドムの死体に目を向けた。「名前知らないけど、あいつはもう助からないぞ。死んだら、それまでだ」

「ああ、わかつている」ラッガートは始めから納得していたかのようになにを答える。

「すまない。もう少し早く来ていたら」

「いや、おまえの責任ではない。全て私に責任がある。危険を承知で勇志を集ったのだからな」

「……あ、あの」それまで呆然としていたダラスが「俺たち、ザーラディースを追いかけます」

言うが否や、ザーラディースが消えた扉へ二人は走った。

「あ、おい」パプロが止めようとした時は、扉の向こうへ。「元気だね、あいつらは」そして周囲を見渡し「他の連中は？」

「マースム力は魔法の石像の一体を引き付けて、あの扉へ入った」ラッガートが扉を示す。「早く追いかねければ、危険かもしれん」
「わかった。ルマジャーンとシエルダックは？」

ラッガートとセリナは答えずに目を伏せた。それだけで、意味は伝わった。

「……そうか」パブロは六連装拳銃の弾を入れ替えると「リィジス、二人を頼む」

「どこへ行くの？」

「王女の所だ。マースムカも探さないと。ああ、寝とけつて」一緒に
行こうとしてのことだろう。立ち上がろうとする二人を制して「
あとのことは俺に任せな」

そしてパブロは扉の向こうへ消えた。

リーバはダラスに聞く。

「なんだよ、あれ？ 妖精族って本当にいたのか？」

迷信深い大峡谷の住人でさえ、炎の民も名の無い魔獣も、おとぎ
話の存在にすぎなかった。

「いたじゃねえかよ。見ただろ」

「でもよお、騎士様、なんであんな平然としてるんだ？」

ラッガートが平然としていたのは、驚愕することが続いて起こつ
たため感覚が少し麻痺してただけなのだが、それは二人にはわか
らなかったし、セリナが平然としていたのは、すでに知っていたか
らで、それも二人にはわからないことだった。

「知るかよ、そんなこと。それより、今はあのザーラディースを倒
すことが先だろ」

ダラスは自分の活躍する見せ場がまったくなく、このままではリ
グヴェーダを救った英雄になれないのではないかと、焦燥していた。
リーバはそんなことを考えなかったが、言っていることはもつと
もなので同意する。

「ああ、そうだな」

そして二人はザーラディースを探して神殿を走り回った。

三分後、二人はどこにいるのかわからなくなってしまった。自分たちがどこにいるのか。

怒りの女神のような姿の魔法の石像には眼がなく、眼に当たる部分は少し窪んでいるだけなのに、まるで誰かを探すように首を左右に動かしていた。もしかするとその部分は人間のような眼球はないが、視覚となる機能が付いているのかもしれない。

とにかく、視覚に頼って周囲を認識しているのなら、好都合だ。通路の角の陰に隠れて様子を伺っていたマースム力は、突然女神像の前に出て姿を見せた。

距離二十メートル。十字路になっている通路の陰から現れたマースム力を、女神像は確認すると同時に走り始めた。

その速度は若干遅いが、バランスを崩すことなく走っている。どうやら平衡感覚の調子が狂っているのだと、この命を持たぬ人型は理解して、速度を調節しているらしい。

マースム力は背を向けて全速力で走った。女神像が追跡してくるが、女神像は最大速度で動くバランスを崩して転倒すると確信していた。

一人と一体の競争は、すぐに終わる。

百メートルも走ったところで、マースム力は開けた場所に出た。直径十メートルほどの螺旋階段。以前、あのドレスを来た魔導士と戦った場所。そして初めて人を殺した場所。

マースム力はそこへ出る直前、なにかを飛び越えるように軽く跳躍した。そして螺旋階段の手前で停止して、女神像を待ち構える。「来い」

酷く冷淡に女神像を見据えて呟くマースム力に、女神像は反して急停止する。先程の突進を利用した投げを狙っているのだと分析したのかもしれない。このまま走り続けると、螺旋階段の遥か下へ落

下することになる。

走る速度の勢いを殺すため、地面を数メートル擦る。

その足元で、爆発が起きた。それは小さいが、女神像は転倒して数メートル転がる。右足首と、左膝あたりまでが砕けた。

マースム力は簡単な罠を仕掛けておいた。旧式拳銃の火薬を、足元の床に撒いて、足を踏む、理想としては止まるために擦るのが良いのだが、とにかくそうして床の部分に撒かれた火薬が瞬間的に発火し、その中心に設置した薬莢が連続して反応を起こす。

マースム力は女神像の状態を離れた位置から確認して、ふと些細な疑問が起きた。

予想より爆発が小さかった。膝の辺りまでしか砕けていない。ダラスが女神像を吹き飛ばしたが、あれは専門の火薬を使ったからなのか。だが、先日門に矢で使った時は、予想以上に爆発力があり、破壊専門の火薬と同等だった。

だが少なくとも、足を破壊された女神像はもう動くことができない。そして近付かないほうがいいだろう。迂闊に接近して掴まれたら組合状態になる。その状態では力が圧倒的に上の女神像には対抗できない。

女神像を完全に破壊できる武器もない。薬莢は、もう五発分しか残っていない。

マースム力は這いずる女神像をそのままにして、軋むように痛む手首を押えつつ、螺旋階段を降り始めた。ここまで来たのなら、ラツガートたちのところへすぐ戻るより、一旦地下牢を確認したほうがいいだろう。今も地下牢にリグヴェーダが閉じ込められているかもしれない。

しばらくして、最下層に到着する。

広い空間。螺旋階段の下から二回り下辺りで、壁が二部屋分なくなり、それだけ広がっている。螺旋階段だけはそのままの広さなのだが。

マースム力は右側の扉へ向かう、その先は直線の階段があつて、

それを降りると地下牢だ。

この事件にかかわる前に来た時は不気味で、恐ろしくて仕方がなく、逃げるようにして帰ったことを思い出した。成人式の一ヶ月ほど前のことだった。あの時は、こんなことが起こるなどマースム力には思いもよらなかった。

リグヴェーダと再会することも。

マースム力は扉に手をかけた。

なにかが叩きつけられたような大きな音が螺旋階段に響いた。まるで重量のある物体が落下したような音。

マースム力は即座に振り向いて拳銃と狩猟用ナイフを同時に構えるが、螺旋階段にはなにもない。

「？」マースム力は疑問符を浮かべた。

だが再び大きな音。上だ。螺旋階段の二階上ほどで音がした。目を向けると、女神像が逆立ちして降りきている。先ほどは角度の問題で見えなかったが、逆立ちしたことによってその姿が見えるようになった。

その酷く滑稽なその姿は、見る者によっては啞然とするか、戦慄するのか。マースム力はどちらだったのか。

女神像はバランスを取るためかゆっくりと降りてくるが、不意に転倒し重い音が響く。そして再び立ち上がろうと、正確には逆立ちしようとしたが、今度は失敗して前転のように転がり、そして止まらずに螺旋階段を二週すると、マースム力のいる最下層まで転がり落ちた。

女神像は再び逆立ちすると、腕を曲げて反動をつけ、マースム力へ向かって跳躍した。腕だけで飛んだとは思えないほどの速度。

マースム力はその場から横へ飛んで回避。

女神像の体当たりによる、重量と速度が合わさった攻撃力は、一

度でも受けると、内臓が破裂するか、骨を砕かれるか、それとも両方か。

マースム力は動きを確認できるように間合いを取る。

足が使い物にならなくなった今の状態の女神像は、移動に腕を使っているためか、予備動作が大きい。落ち着いて確認すれば回避は難しくない。それに女神像は武器を持っていない。移動に腕を必要とするため放棄したようだ。

だが、どうする？

武器は旧式の単発式拳銃のみ。そして弾は残り五発。女神像を破壊するのは、全弾使ったとしても不可能。

女神像は再び逆立ちして、マースム力へ跳躍した。意思も命も持たない魔法の女神像は、足を失ってもその命令を最後まで実行しようとしている。体当たりだけで殺そうというのか、それとも移動力が関係ない掴み合いに持つていこうとしているのか。

「くそ！」

マースム力は横に転がって回避。

女神像は攻撃対象に命中しなかったため、勢いで床に激突し、数メートル滑る。

しかし、いつまでも繰り返してはいられない。こちらの体力が尽きるのが先か、それとも女神像がその愚考とも取れる攻撃を繰り返して、体が碎けるのが先か。だが、女神像は頑丈にできている。短時間で碎けることはないだろう。避けるだけで終わらせるなら、長期戦を覚悟しなければならない。

しかし、そんな時間があるのか。リグヴェーダはこうしている間にも生贄にされて殺されるかもしれないのに。

再び逆立ちをする女神像から、小さな破片が落ちたのをマースム力は見逃さなかった。

あの女神像は体の数箇所に亀裂が入っている。最初は頭部。次は足。そして階段から転がり落ち、己の体を省みない攻撃のため、亀裂が徐々に広がっていた。

決定的な衝撃を与えれば碎けるかもしれない。上手く銃撃を亀裂に命中させることができれば。

だが、外せば体当たりを食らうことになる。命中したとしても、本当に碎けるのだろうか。

女神像は腕を曲げて反動をつける。

やるしかない。マースム力は旧式拳銃を向けた。

女神像がその体をマースム力に命中させようと、三度目の跳躍。同時にマースム力は発砲した。狙いは頭部。

碎ける。なにに祈ったのか、祈りは聞き届けられたのか、命中した瞬間、頭部が大金槌で力任せに叩いたかのように割れた。
「やつ」た。と快哉の声を上げようとして、できなかった。

まだ無事だった胴体部分が迫った。

咄嗟に横へ跳び、しかし完全には避けきれず、女神像の右腕が通過するさいに脇腹を殴打する。

「ウツ」マースム力は呻き声を上げて膝をつき、肋骨が折れたのを自覚した。

だが、生きている、内臓もやられていない。それに今度こそ女神像を破壊した。

残った胴体部は壁に激突し、その亀裂がさらに広がっていた。

マースム力は立ち上がろうとしたが、唐突に右足になにかが接触して、再び膝を崩す。

「?!」

女神像が倒れたマースム力の右足首を掴んでいた。

しまった！ まだ女神像は動く。

マースム力は必死にその手を振り解こうとするが、万力で締められたかのような激痛が骨にまで浸透する。

そして女神像はマースム力の足を掴んで離さず、力任せに引き寄せて、拳を振り上げた。

自分の頭を碎いたように、今度はマースム力の頭を碎こうとする。
「うあああ！」

雄叫びを上げてマースム力は単発式拳銃を女神像に向けた。
その距離十センチの至近距離。

拳が振り下ろされるのが早いか、引き金を引くのが早いか。
マースム力は引き金にかけた指に力を込めた。

そして、碎けた。

弾丸が胴体部を貫き、壁に命中した。

「……助かった？」

マースム力は、胴体が碎けて動きを止めた女神像を押し退けた。
右側肋骨が二本ほど折れているらしく、動くたびに痛みが走る。
右手首の関節も痛めている。特に最後に銃を撃ったのは激痛としか
言いようがないほどだった。

呼吸をするたびに鈍痛が起こるが、それを堪えて女神像から離れ
る。

立ち上がると右足首に激痛が走った。掴まれた時に骨が折れたの
かもしれない。

だが女神像はもう完全に動かない。
今度こそ破壊した。

そしてマースム力は拳銃の弾を再装填する。痛みで手が震えて上
手く動かないが、問題なく弾丸を込めた。

「……？」

弾を交換して、不意に気付いた。旧式の単発拳銃。女神像の頭部
を撃った後、弾を交換していない。胴体部を撃つことなどできな
かったはずだ。

「……どうして？」

疑問を呟いたその時、不意に壁が崩れた。ちょうど、胴体部の弾
丸が貫通して命中した場所だ。女神像が瓦礫に埋まる。

老朽化して脆くなっていた箇所が、戦いの衝撃で耐え切れずに崩

壊したのだろう。女神像の体当たりを受け、続けて弾丸を受けたた
めか。

だが、弾丸はないはずなのに。

マースムカは疑問に思いながらも、その崩れた壁から向こう側を
覗いた。

十章・正体・1

リグヴェーダはゲシュタルに問う。

「おまえはいつたい何者なのだ？」

その説明だけを聞いていると、突拍子もなく荒唐無稽で、滑稽でさえあるのに、なぜか信じてしまう、得体の知れないなにかが、この男から感じた。

神殺しとはどういう意味なのか。なにかの例えなのかとも思ったが、しかしそうとも聞こえない。狂気に犯されているのかとも思ったが、この男は狂気に程遠い。

ゲシュタルが質問に答えようと口を開く。

「私は……」

「ゲシュタル！」

唐突に第三者の声が答えを遮った。

「ザーラディース？」ゲシュタルは唐突に戻ってきたザーラディースに、思わず疑念の声。

「ゲシュタル！ 傭兵は？！ 傭兵団はどこへ行った！？」

ザーラディースはなにがあつたのか酷く慌てている。もっとも大体の予想は付くが。そして楽園の暗殺者や魔導士に比べて、戦力としては遥かに劣る傭兵団をおうとしている。

「奴らはどうやら逃げたようだ」

ゲシュタルの説明は面倒なので適当な虚言でごまかしたものとわかつたが、ザーラディースはまるで気付かなかつたようだ。

「逃げた！？ 逃げただと！？ なぜだ！？ なぜ逃げた！？」

混乱し、怒り狂っている。よほど追い詰められている。

「知らん。それより、他の者はどうした？」

「全滅だ。全員倒されてしまった」

予想通りだった。

「ぬうつう」ザーラディースは齒軋りし、ふと妙案が思いついたかのように「儀式は？ 儀式はどうなっている？」

「すでに最終段階だ。あとは、贅を捧げるだけだ」

「ならば、すぐに魔獣を召喚するんだ。魔獣の力をもってすれば、奴らなど恐れるに足りん」

「それが良さそうだ。これ以上の妨害を受けては困る」

迅速に儀式を終えるためにゲシュタルは持っていた短剣をかざす。

「では、リグヴェーダ王女。これでお別れだ」

煌めく刃の輝きは死をもたらず。だがリグヴェーダはまるで恐れていなかった。強い瞳をゲシュタルに向けたまま動じなかった。

まるで、自分が絶対に死なないと確信しているかのように。

その時、壁の一角に重厚な音を立ててひびが入った。そしてすぐに崩れ、人が一人通れるほどの大きさの穴が開く。

「な、なんだ！？」ザーラディースの声は金きり寸前。

ゲシュタルは、この男には珍しいことに、驚愕で呟く。

「バカな。ありえない」

なにがあり得ないのか、リグヴェーダが疑念を言葉にしようと思いつ前に、崩れた壁から一人の少年が現れた。

少年の姿に、些細な疑念など忘却した。

「やはり来てくれた」歓喜の声でリグヴェーダはその名を呼ぶ。

「やはり来てしまった」恐怖の声でザーラディースはその名を叫ぶ。少年が崩れた壁を潜り抜けると、祭壇の間にいるリグヴェーダに叫んだ。

「リグ！」

「来てくれると信じていたぞ！」

リグヴェーダが答えると同時に、少年はゲシュタルに銃を向けて引き金を引いた。弾丸はゲシュタルの持つ短剣に命中し、その刃を折る。折れた刃が宙を舞い、甲高い音を立てて床に落下し、転がり滑る。

ゲシュタルはそれには目を向けず、それどころか短剣を撃たれ刃が折られたことさえ気付かなかったかのよう、その顔に驚愕を浮かべたまま呟いた。

「どういうことだ？」そしてザーラディースに尋ねる。「今のはどういう意味だ？ あの少年がアフアマッド侯爵の息子とは？」

ザーラディースが忌々しげに答える。

「貴様はあの時の仕事に失敗したんだ！ アフアマッドの息子を始末し損ねてしまいおつて。今、私を殺しに、おまえと私を殺しに、アフアマッドらの仇を討ちに來たではないか！」

「バカな！ あの少年は確かにジフが……」そこでなにかに気付いたのか「そうか、あいつはあの時……」

どのような経緯に気付いたのか、ゲシュタルは明らかに動揺していた。それでも混乱しなかったのは、この男の冷徹な精神力によるものか。

「リグから離れる！」少年は弾を込めると、再び銃口を向ける。

ゲシュタルは一步後退した。その瞳に微かにだが、明らかに恐怖の色を滲ませて。だが、この男が銃を恐れるだろうか。少年の、少女のように整った左目と、異形の怪物のような右目に、揺ぎ無い意思を感じたとしても、怯えたりするだろうか。

「おまえこそ捨てろ！」ザーラディースが懷から銃を取り出すと、リグヴェーダに向ける。「王女がどうなってもいいのか!？」

少年は拳銃を撃つのを躊躇った。ナイフと違い、下手に衝撃を与えると引き金が引かれてしまうかもしれないと考えたのか。発砲された弾丸はリグヴェーダに命中するかもしれないと恐れたのか。

「私に構うな！ 撃て！」

リグヴェーダは撃つように促したが、少年は苦渋の表情で拳銃を向けたまま行動を起こさない。

ザーラディースは自分が優位に立ったことを確信した、不快な笑みを浮かべると、ゲシュタルに「おい、あの小僧を始末しろ。今度はいしくじるなよ」

ゲシュタルは、動かなかった。ただ、少年を奇妙な表情で見つめている。驚愕と畏怖の混在した表情。

「……おい、ゲシュタル。なにをしている？ 早く始末しろ」

だが、やはり動かない。やがてゲシュタルは苦渋の思いを搾り出すかのようにその名を呟く。

「おまえは……いや、違う。おまえは……」

違う？ リグヴェーダがその呟きに疑問を持った瞬間、乾いた音が儀式の間に響いた。

ザーラディースの拳銃が床を転がる。

その様子を拳銃が止まるまで見ていたザーラディースは、銃を持つていたはずの右手に目を移した。人差し指と中指が千切れている。「うあ、あ、うあああ！」そこで初めて悲鳴を上げた。

人間の感覚は時として奇妙な現象を起こす。怪我を負っても一時的に痛みを感じず、視覚で確認して初めて激痛が襲いかかる。

ザーラディースは二本の指を失ったことで錯乱し、実際の痛みよりも倍加していると錯覚し、混乱して恐怖している。

そしてザーラディースの指ごと拳銃を弾いた者は、先程ザーラディースが現れた扉の所で、硝煙の立ち上る六連装拳銃を手にした。た。

「ヨウ」場違いにひょうきんな挨拶の声。

「パプロさん!？」

「パプロ!？」

リグヴェーダと少年はその姿に、歓喜と驚愕。

「無事だったみたいだな」パプロは軽く手を振って答える。

「それはこちらのセリフだ!」リグヴェーダは言い返す。この神殿では本当に死んだと思っていた者たちと再会することが多い。

パプロは改めてゲシュタルとザーラディースに拳銃を向ける。「さーて、残ったのはおまえら二人だけだ。王女さまを返してもらおうか」

ザーラディースは失った指の傷口を押えつつ「ゲシュタル! な

んとかしろお！」

「おっと」パプロはゲシュタルに拳銃を向けて「妙なまねはするなよ」

そして少年に、相変わらずゴーグルを外さない眼を向けた。なにかを指示しようとしたようだが、なぜかしばらく沈黙する。

「……マースムカ」

「はい」

「その壁、おまえが壊したのか？」

「？」こんな時になにを言うのだろうか。

リグヴェーダは疑念に思った。

「ええ、一応そうですが」少年も同じらしいが、一応答えた。

パプロはその返答に、なにを言えばわからなくなったような表情。ゲシュタルが、リグヴェーダだけにしか聞こえないほど小さな声で呟く。

「絶対に破壊することのできない、時間の止まった物質で構築された壁を破壊した。やはり……」

そしてゲシュタルは懷に手を入ると、小石程度の大きさの玉を三つ取り出した。

「なにかするぞ！」

リグヴェーダは警告の声を上げる。

「だから妙なまねをするなって！」

叫ぶパプロを無視して、ゲシュタルはその玉を投げて地面に叩きつけた。破裂し濛々と煙が立ち込める。

「あ！ くそ、煙幕か」パプロは思い切りその煙を吸い込んでしまい、咳き込む。「ゲホッ、ゲホッゲホッ」

リグヴェーダは煙を吸い込みはしなかったが、視界が遮られる。煙は数秒で晴れ始め、だがリグヴェーダの傍にいたはずのゲシュタルの姿はなく、ちょうど扉の一つを通ったところだった。

「あー！ 逃げやがった！」

「なんだとお！」ザーラディースは完全に予想外の出来事に混乱を

起こす。「う、うう……」

後退りながら少年とパブロへ交互に視線を動かすと、別の扉へ全力で逃げ出した。

パブロは拳銃を撃ってザーラディースを止めようとしたが、煙のために涙が出たせい、狙いを外し、ザーラディースは姿を消す。

「くそ！ マースムカ、俺はゲシユタルを追う。おまえは奴を」パブロは返事を待たずに、ゲシユタルが消えた扉をくぐった。

リグヴェーダの傍へ少年は右足を引きずるように走ると、手枷を外そうとし始める。

「リグ、大丈夫かい？」

「早くザーラディースを追え！」

少年は追跡しようとはせずに重ねて尋ねた。

「怪我はない？」

「私のことより奴を追え！」

「あいつらになにかされなかった？」

「おまえの両親を殺したのは奴らだ！」

「知っているよ。それで、君は大丈夫なの？」

「早くザーラディースを追わぬか！ 仇を討つんだ！」

「大丈夫みたいだね」

噛み合わない会話にリグヴェーダは気付いた。

「私の話を聞いているのか？ ザーラディースはおまえの父と母を

……」

少年は首を振る。

「いいんだ。君が無事なら、それで」

そして少年はリグヴェーダの動きを封じる枷は鍵がないと外せないと判断したのか「少しここで待っていて。鍵を探してくる」

そして少年は、怪我をしているのか右足を庇う歩き方で、儀式の間を出た。

リグヴェーダはその後ろ姿に、不思議な感覚を覚えた。

脱力感に似た、うまく言葉が見つからない、説明のできない感覚。

「……仇を討ちに來たわけではなかったのか」

ザーラディースは神殿内部を走り続けながら考えた。

なぜこんなことになったのだ。全てはうまく行くはずだったのに、なぜ失敗した。

名の無い魔獣の召喚に成功すれば、戦車に対抗する新兵器として使役することができたはずだ。そして軍を掌握し、帝国との戦争を開始できた。その功績を利用して、王国を支配することも、国王になることも。最終的には世界を動かすことさえ可能だった。

それなのに、なぜ失敗する。これで身の破滅だ。全てを公に知られ、極刑に処せられる。

逃げなければ。王国にはもういられない。国のために身を尽くしたこの私が、国を追われて逃げなければならない。

なんとこの屈辱。

なぜ、こんなことになるのだ。

そして一人の男を思い出す。

ゲシュタルだ。あいつが私を陥れたのだ。

それは被害妄想としか言えない思い込みだったのだが、ザーラディースはそう思えてならなかった。

あの男が私から全てを奪い去ったのだ。

私の野望を、私の成功を、私の輝かしい未来を。そうだ、そうに違いない。あの男は私を裏切って、名の無い魔獣を奪い取ろうとしたに違いない。だからこんなことになったのだ。奴が素直に私に従っていれば、こんな事態にはならなかったのだ。いや、ゲシュタルは始めから私を裏切るつもりだったのだ。でなければ説明がつかない。

どのような説明が付くというのか、ザーラディースはそれすらも考えることができない。冷静であれば、自分の考えが支離滅裂で、

何一つ説明になっていないことも気付いただろうが。

ただ、結論だけは、正解だった。

そうだ、あの男は私を利用して、なにかを企んでいたのだ。

「おのれ、ゲシュタル」

忌々しげに呟くザーラディースは、角を曲がったところで、誰かと衝突した。

「うお！」転倒したザーラディースは、なににぶつかったのか理解できずに、上体を起こす。「な、なんだ?！」

「イツテエ」同じく転倒し、上体を起こした相手と目が合う。

礼拝堂で騎士と一緒にいた少年たち。ダラスだった。その後ろにはリーバ。

「あー！」ダラスは指差して叫ぶ。「見つけたぜ！」

その目を歓喜の殺気で輝かせる。

「うあ、うわあああ！」

ザーラディースは悲鳴を上げて、ダラスから逃げようと、酷く無様に床を這う。

「逃がすかよ！」

背中にナイフが突き刺さり、灼熱の激痛が走った。

「ギャア！」短い絶叫を上げ、しかしそれでも逃げようとする。「

アヒ、ヒアアア……」

殺される。逃げなければ。早く逃げなければ。

「この！待ちやがれ！」

だが背中に馬乗りにされて動きを封じられ、ナイフがさらに突き刺さる。

すぐに激痛を感じなくなり始め、意識が朦朧とし、それが死の訪れの予兆だと理解し、ザーラディースは恐怖で助けを求めようとしたが、声すら上げることができなかった。

いやだ、嫌だ、イヤダ。

死にたくない死にたくない死にたくない……

かつて自分が死に追い込んだ者たちと同じ願いを、声にならない

声で叫んでも、救いは与えられなかった。

ダラスは床を這うように逃げようとしたザーラディースの背中に馬乗りになると、立て続けにナイフを突き刺した。何度も、何度もどこか恍惚とした表情を浮かべて。

「……お、おい？　ダラス？」リーバがその執拗さにおぞましさを感じて、なぜか疑念の声を上げる。

ダラスはそれに答えず、やがて完全に動かなくなったザーラディースの首を、ナイフで切り落とそうとする。興奮しているのか、狩で行う獲物処理する時とは違い、酷く雑で手際が悪かったが、何度も切りつけ、刺し、抉り、そうしてなんとか首を切断した。

「へ、へへ」笑ってダラスはザーラディースの髪を掴み、勝利のトロフィーのように、首を高々と掲げた。「やったぜ！　どうだ！　リーバ！　親玉の首を取ったぜ！」

「あ？　ああ、そう。そうだな」首謀者を倒した喜びよりも、人間の生首が不気味で恐ろしく、生返事しか出てこない。

ダラスはそれに気付かないのか、返事を聞いていなかったのか、一人喜ぶ。

「やったぞ！　俺が首謀者を倒したんだ！　俺がやったんだ！　俺が邪悪な野望を打ち砕いたんだ！　俺が名の無い魔獣の召喚を阻止したんだ！　俺が世界を救ったんだ！　俺が英雄だ！　俺が勇者だ！　俺が救世主なんだ！　リグヴェーダの心は俺のものだ！」

リーバはその様子に恐怖を感じて、一歩下がった。

なんだ？　なにを喜んでるんだよ？　ジエドムが死んだんだぞ。殺されたんだぞ。仇を討つためじゃなかったのかよ？　名誉とか勇者とか、それだけなのか？　他にはなにもないのか？　マースム力も無事かどうか知らないのに。邪魔な奴だけど、村の仲間だろ？　それなのに、なんなんだ、こいつ？

リーバは同じ村で生まれ育った者が、まるで得体の知れない怪物に思えてきた。

ダラスは一人で喜び続けていた。

十章・正体・2

ゲシュタルはその年齢からは想像できない俊足で、外へ通じる扉に辿り着き、門を外そうと手をかけたが、扉に弾丸が命中して金属音と共に火花が散り、その動きを止める。

パブロは十メートルほど離れた位置で六連装拳銃を右手で構えていた。

「逃がすかよ、ゲシュタル」二人は気付かなかったが、パブロが銀髪の名を呼んだ始めての瞬間だった。

「パブロ、だったな」ゲシュタルもまた、その名を始めて呼んだ。

「なぜ助かった？ あの名は致命傷だったはずだ」

「へっ」パブロは鼻で笑って「なんでだろうな？ 自分で考えてみな」

ゲシュタルはパブロを見据えるかのように、目を細めた。

「なるほど、炎の民か」

パブロは笑みをその顔から消した。いくら魔法使いだからといって、正体を見破るのが早すぎる。魔術師団の一人であるセリナでさえ、正体を見極めるのに一週間も必要としたのだ。

「なんでわかった？」

今度はパブロの質問にゲシュタルは「なぜだろうな？ 自分で考えてみるからだ」

パブロは首を振って「まあ、いいさ。あとでゆっくり考えよう」。

なんだったら、おまえからじっくりと聞き出せばいいんだしな。捕まえたあとで」

「捕まえられると思ってるのか？」

魔法による防御の結果がある。散弾銃も防御した結果は、六連装拳銃の銃弾では通用しない。

「思ってるさ。俺がなんの策もなく戻ってきたと思ったのか」そして弾丸を一つ見せる。「対魔法用特殊弾丸。こいつは結界を貫通するぞ」

旅隊商の商品の中にあつた特注品。これを売ってもらうには少々、交渉の苦勞と金が必要だったが、その価値はあつた。

ゲシユタルは納得して頷いた。

「なるほど。助かったにしては戻ってくるのが遅いのではないかと思つたが、それを手に入れるのに時間がかつたのか。しかし、どこで手に入れた？」

「河から旅隊商に助けられてね。商品の中にあつたんだよ」

「ふん。運がいいというべきかな」

「さて、そろそろお縄についてもらおうか」

「それは断る。私はこんなことで止まるわけにはいかんだ」

「？」その言葉の意味はわからなかつたが、パプロは「逃げ切れるとも思ってるのか？ それとも戦うつもりか？ 結界と魔法の石像がなけりゃ、おまえの戦闘能力は人並み程度しかないんだろ」

魔法を行使するより、拳銃を発砲する方が早い。常に展開しているらしい魔法防御を無効化できるのならば、パプロのほうが圧倒的に有利だ。

「そのとおりだ。だが、他に方法がないのでな」それは逃げるといふ意味か、それとも戦うという意味なのか。

「名の無い魔獣を召喚しようとは考えなかつたのか？ まあ、王女になにかしようとしたら、すぐ撃つつもりだったけどよ」付け加えて「つつても、どっちみちおまえらが名の無い魔獣を制御できるとは思えないがな。あれは俺たちの想像を遥かに超える、なにかだ。炎の王や死と同じ滅びを司る、だがまったく異なる存在。呼び出せば、制御も支配もできず、すべての名は剥奪され、滅びは完成する」

「まるで見てきたことがあるような言い方だな」

「あるわけねえだろ。だが、炎の王なら対面したことがあるぜ。二度と会いたくないけどな」言うパプロに微かに恐怖が現れた。

「なるほどな」ゲシュタルは納得したのか「しかし、勘違いするな私が考案した魔獣召喚法と、制御支配の技は完璧だ。こちらから意図的に呼び出し、そして現出したその時であれば、確実に魔獣を支配し、意のままに操ることができる」

そこまで断言するゲシュタルに、パブロは疑問を感じた。同時に違和感も。

「じゃあ、なんで召喚しようとしなかった？」

「こちらから呼び出した、その瞬間でなければ成功しないのだ。だがあの少年が生きていた」

パブロは思い出す。「ああ、そう言えばマースムカのことを別の名前で呼んでいたな。あれはどういう意味だ？」

「知らないのか？」

「知らないから聞いてんだろ」

「リグヴェーダ王女の婚約者だ」

「婚約者！？」パブロは純粋に驚いた。「え？　じゃあ、あいつって、あの？　七年前に一家全員殺されたクラノフ侯爵の」

「そうだ。少年が家族の仇を討ちにきたのかどうかは知らないが」

「仇？」パブロはその言葉の意味を理解する。「アフアマッド侯爵の襲撃はザーラディースがやったのか」

「正確には依頼しただけだ。あの人間は自分で実行するだけの力はない」

「実行したのは、おまえか」

そして、アザニスの悪魔。自分の過去を少年に知られることをあれほど恐れた理由は、彼の本当の両親を殺したからか。

「そうだ。少年の目的はなんであれ、とにかくリグヴェーダ王女を助けに来たというわけだ。政略上の婚約とはいえ、友人とは思っていたのかも知れんな」

パブロは大体の事情を察する。こいつはクラノフ侯爵襲撃事件にかかわっていたわけか。もっとも、リグヴェーダとザーラディースが名前を呼ぶまで気付かなかったようだ。

あの少年も気付いていた様子はなかった。今回の件は、おそらく偶然。マースムカもこいつも、本人が気付かないところで、因縁が深かったらしい。

「で、マースムカが死んだはずの人間だったからって、それが名の無い魔獣とどう関係して来るんだ？」

意外な関係はわかったが、肝心な話につながらない。

もつとも、どんな話を聞かされたところで、驚くようなことがあるとは思えなかった。

だが、驚くことなどないと確信している時に限って、驚愕するべきことに直面する。

あるいは、驚愕を通り越して、理解が難解であるかもしれない。ゲシュタルの端的な言葉は、まさにそれだった。

「あの少年が、アジアドリースム名の無い魔獣だ」

「……は？」

端的な答えの意味を、パプロは理解できなかった。

「私は十五年前に一度、アジアドリースム名の無い魔獣を召喚したのだ。そして、失敗した。だが、幸い世界は滅びなかった。名の無い魔獣は、その審判を保留としたのだ」

十五年前、魔獣召喚と制御支配の術を発案、考案したゲシュタルは、それを実行に移した。

だが、失敗に終わる。

古代神人の末裔たる生贄の選抜を誤った。

生贄に選んだ人間は、王家の血に連なる家系に生まれた者だったが、いかなる理由か王家の血を受け継いでいなかった。つまり古代

神人の力をまったく持つていない。古代神人の、その死の瞬間に放出される、特殊で強大な神力を利用することがどうしても必要であるにもかかわらず。

おそらく、その家系は過去において、なんらかの形で血脈が途絶えており、秘密に養子を迎えるなどして、家を継続させたのだろう。いつの時点なのかはわからず、生贄に選んだ人間自身がそうなのかもしれないが、とにかく、その時はそれに気付かずに、魔獣召喚を行い、支配に失敗し、名の無い魔獣は己の意思で行動する結果になってしまった。

「しかし、どのような理由があつたのか、その必要があつたのかはわからないが、魔獣は召喚者である私に語った」

世界を滅ぼすか否か、その審判を下すには、世界のことをなにも知らない。知識が不足しているのは明らかだ。よって現時点では保留とし、知識を得る手段として、人間になろう。

人間として世界に生まれ、人間として世界を見て、人間として世界を聞き、人間として世界を感じ、人間として世界を知ろう。

「そして世界は救われた。一旦はな」

名の無い魔獣が姿を消した後、ゲシュタルはその時の魔獣の痕跡を徹底的に調査し、突き止めようとした。魔獣はどこで、誰に生まれたのか。

「七年の歳月をかけて、私は見つけたよ。人間として生まれた名の無い魔獣を」
アデイスム

人間として、人間から誕生した、人の形をした、人ならざるもの。
アシアデイスム
名の無い魔獣の化身。

「ふざけたことぬかすな」パプロはどこか心あらずといった感じで、しかし次にははっきりと「ふざけたことぬかすな！　ンなわけねえだろうが！　あいつが名の無い魔獣だと。そんなことあるか！」
アシアデイスム

ゲシュタルはパプロの動揺に特に頓着せず続ける。

「私は名の無い魔獣の召喚をやり直すために、その子供を消すことにした」

人間となつた名の無い魔獣は、人間としての状態を徹底的に破壊されると、一旦元の状態に戻らざるをえなくなる。すなわち空虚なる混沌に帰る。

問題は、その子供に魔獣としての力と自覚があるかどうかだった。だが、名の無い魔獣は正確な情報を得るために、そして完全に人間になるきるためには、不必要で寧ろ阻害となる名の無い魔獣としての記憶を、一旦封じるだろうと推測した。

「そして正しかったよ。子供はなにも憶えていなかった。普通の人間の子供と変わらない状態だった。あとは、実行するのみ」

そしてザラディースの依頼がきた。

それは偶然だったが、確実性と迅速性を考えて、その依頼を受け、家族ごと子供を抹殺することにした。

同時に、それは後々に再度魔獣を召喚するための援助者を確保する布石でもあった。

そして自分の思惑を誰にも悟られずに、アフアマッド侯爵一家を全員殺害した。

名の無い魔獣の生まれ変わりとも呼べる子供も。

「だが、生きていた。ジフが裏切ったのだ。なにを考えたのかは知らぬし、奴が死んだ今となつてはもうわからぬことだが、ジフは子供を殺さずに逃がしてしまったのだ。そして子供を引き取り、大峽谷で自分の息子として育てた」

パプロの拳銃を持つその手が震えていた。それは怒りか驚愕か、それとも恐怖か。

「……本当なのか？ 本当にマースム力は名の無い魔獣なのか？」

「今のあの少年には自覚も記憶もないだろう。だが、間違いなくあの少年は、世界を滅ぼす存在、名の無い魔獣アシ アディースムそのものなのだ。おまえは妖精族、炎の民なのだろう。傍にいてなにも感じなかったのか

？ なにか気付くことはなかったのか？」

拳銃用の火薬で、しかも量が少ないにも関わらず、とてつもない爆発力を起こし、神殿の門を吹き飛ばした。

儀式の間で、時間の存在しない、破壊不可能の物質で構築された壁を崩壊させた。

「あれが、名の無い魔獣の力の、片鱗か」

同時にパプロは疑問に思う。目の前にいる男は何者だ？ 魔獣の召喚法を考案し、操ることを考えたこの男の目的はなんだ？

「おまえはなにが目的だ？ おまえは、なんだ？」

「気がつかないか、炎の民^{ジンニ}よ。私が誰であるのか？ この世界に無理なく自然に存在するために、本来の力をほとんど失ってしまったようだ。その点は私に似ている」

その眼球が不意に窪んだ。

「！」

眼球のないそこには、深淵の虚無が広がる。空虚にして虚空の、その魂を現すが如く。

「私は、この世界に辿り着くのに長い年月を要した。千年、二千年の長い時間を。そうして地獄の底から這い上がった時には、私はかつての力をほとんど失っていた。あの頃の力があればこのような迂遠なこともする必要はなかっただろうが、失われた力を取り戻すこともできない。結局、私ができることと言えば、策を弄して名の無い魔獣を利用することだけだ。もつとも、かつての力があつたとしても、名の無い魔獣に頼るしかなかっただろうが。私には、我らは神に対抗することさえできないのだから」

ゲシュタルは深く嘆息する。深い疲労と、深い絶望を、絞り出すように。

「私の望みは、目的はただ一つ。神を滅ぼすこと。それが我らの未来を掴み取る唯一の方法であるがゆえに」

「おまえは……」パプロは悟った。目の前にいる男が何者なのか。

「私は何者であるのか、それは本当に意味では私自身わからない。

だが、私はそれでも存在し続けよう。私の存在が消えるなど、私は許さぬ。そのような運命を背負わせた神も許さぬ。ゆえに、私は神に反旗を翻した。魔族たちを支配化に置き、神に忠実な下僕たる天使と戦い、そして神を討ち滅ぼそうとした。その時から私はこう呼ばれるようになった……」

パプロと、その存在は、同時に言葉にした。

「「シャイターン
魔王」」

突然神殿が震動し始めた。

連続して続くそれは、地震とは異なるようだが、足元を揺らし、立つことも困難になっていく。

「なんだ!?!」

叫ぶパプロに、ゲシュタルが答えた。

「ザーラディースが殺されたな」

「なに!?!」

「ザーラディースも王族の末席に名を連ねている。一応は古代神人の末裔だ。本家の王族に比べれば血脈は遠く薄く、本人の力も微弱だが、それでも魔獣召喚儀式の最終段階だ。その死はなんらかの影響を及ぼす」

「影響つてなんだ?! なにが起こる!?!」

「十五年前、世界に現出した時と酷似した状況なら、あるいは名の無い魔獣がすぐ傍にいるなら、あるいは」

「あるいはつてなんだ!?! 早く言え!」

「名^{アシアディースム}の無い魔獣は審判を下すかもしれん」

「そんなことだろうと思ったぜ! クソツタレが!」

パブロはゲシュタルに背を向けると、全力で儀式の間へ戻り始めた。

十章・正体・3

「鍵を見つけたよ。すぐ隣の部屋にあった」

戻ってきたマースム力は、リグヴェーダの両手足を封じる、鎖を外した。

ようやく自由となったリグヴェーダは、なんとも形容しがたい奇妙な瞳でマースム力を見つめた。

「……私は、おまえに……」

リグヴェーダがなにかを告げようとしたその時、突然、魔方陣から膨大な光の量が放出された。

それは光の柱となって神殿を貫き、遙か天空に達する。

あまりの眩しさに、マースム力とリグヴェーダは目を暗まされる。「なにが起きた!？」リグヴェーダが叫ぶ。

「僕から離れないで!」マースム力がリグヴェーダの手を握り締める。

神殿全体に振動が始まる。隣にいるリグヴェーダの声も聞き取りにくく、なにを言っているのかわからない。

「なに? よく聞こえない」

マースム力は聞き返したが、リグヴェーダは意味がわからなかった。

「なんだ? 私はなにも言っていないぞ」

「え?」気のせいかな。マースム力は思ったが、やはり聞こえた。

答えは?

「……答え?」

答えは如何に?

今度は明瞭に聞こえた。

「……誰? なにを言ってるんだ?」

汝が答えは如何に

「なんだ？ なにを聞いてるんだ？」

リグヴェーダは一人叫ぶマースム力に怪訝に尋ねる。

「どうしたのだ？ 誰と話している？」

マースム力にしか聞こえない声は続けて答えを要求する。

問いに答えよ。汝が答えは如何に？

光の柱からの声に、マースム力は慄然とする。

「まさか……」

アジアティースム
名の無い魔獣。

儀式が不完全ながらも遂行され、出現したのか。

問いに答えよ。人間として生まれ、人間の心を持ち、人間と関わり、人間として生きた、汝が答えは如何に？

そして、名の無い魔獣は、なぜか自分に答えを要求している。

「そんなことわかんないよ！」

答えは如何に？

声は厳しく問う。曖昧な返答など許さぬ、二者択一の答えを要求するのみ。

滅びか、存続か。

「……どうして僕に聞くんだ？」

なぜ他の人に答えを聞かないのか。なぜ、よりにもよって自分なのか。

偶然、名の無い魔獣が現出した場所に居合わせたからなのか。それとも違う理由なのか。

どちらにせよ、困窮するしかない。

世界の運命を選択することなど自分にはできない。

答えは如何に？

「僕は……」

僕はどうしても答えたくないのだろうか？

選択できないという問題ではない。選択肢が二つしかないのなら、答えは始めから決まっている。

滅びを選択すれば、おそらく本当に世界は滅ぶ。

ならば、答えは明確だ。迷う必要さえない。

「僕は……」

それなのに、答えたくない。

「……僕は」

どうして答えたくないのか、その理由はわかっていた。

裕福な家庭に生まれても幸福ではなかったから。

家族がいても、孤独だったから。

その家族さえ、殺され、奪われ、いなくなったから。

大峡谷に連れられて、そこでも余所者と嫌われ、醜い顔と蔑まれ、のけ者に扱われたから。

そして自らの欲望のためなら人の死を厭わない人間が現実にいると知ったから。

人を殺すことに狂喜する人間が実在すると知ったから。

人を殺すことを厭い、それでも望まざる殺人を犯さなければ生きていけないほど、世界は酷薄で残酷だと知ったから。

それでも父とセネロがいたのに、その二人が殺されたから。

そして、心から慕っていたジフが、本当の両親を殺したのだと知ったから。

「……僕は……」

大切な宝物を始めから持たず、ささやかな小さな宝物が手の平にあると思っても、それはすぐに奪われ、踏み躪られ、塵のように消され、その拳句に偽物だと思い知らされる。

心の中で芽生えたその思いは、少しずつ、だが確実に、純粋な命を持って生きる歓喜さえをも蝕んで、侵食して、腐敗させ、朽ちさせる。

清らかなる心の純粋なる善意が太陽の輝きならば、清らかなる心の純粋なる悪意は暗黒の輝き。

穢れの無い黒曜石の如く澄んだ憎悪の光は、真直ぐに進み、迷走することなく究極の答えに到達する。

問いに答えよ。汝の名はなにか？
マースムカ

「僕には……」

大切に思う者は誰もいない。

大切だと思える人は誰もいない。

大切だと思ってくれる者は誰もいない。

「僕には……」

名を呼んで欲しい人など誰もいない。

本当に孤独な少年が思うことはただ一つ。

こんな世界など消えて無くなってしまえ。

「しっかりしろ！」

リグヴェーダは少年の肩を掴んだ。

「しっかりするんだ！ 私を見るんだ！」

少年の様子がおかしい。光の柱を凝視して動かず、なにかと話をしている。自分がすぐ傍にいることも忘れて、なにを言っても気付かない。

光の柱の正体はわからないが、少年が突然おかしくなった原因は、これ以外にない。

だが、実体のないこれに対処する方法がない。魔方陣を構成する媒体を破壊すればいいのかとも思ったが、それらはすでに神殿が揺れた時に、崩れてしまっている。

とにかく注意をこちらに引かせようと叫ぶ。自分の声を届かせなければ。

「光に囚われるな！ 私の声を聞け！ …… あ？」

リグヴェーダは少年の名を呼ぼうとして、慄然とした。

「名前？」
イースム

少年の名は？ 何度も呼んでいたはずなのに、思い出すことができない。

「おまえの名はなんだ？」
マースムカ

何度も呼んでいたはずの少年の名が思い出せない。

あの悪夢のように。

名を呼ぶことができない。

「名の無い魔獣が……」
アジアティースム

名の無い魔獣が、少年の名前を奪ったのか？

神話にあるように。

名を剥奪し、その全ての意味を消し去り、滅びは完成され、全ては真なる永劫の内に終焉する。

「うつ……ええい！」

リグヴェーダは少年の体を抱き寄せると、引きずってでもその場から運ぼうとした。とにかくここから離れなければ。

「あ！？」

だが、光の柱から、光の粒子で構成された無数の触手が、少年の体を束縛した。

「おのれ！」

触手を解こうとするが、光の触手は実体がないように、掴もうとした手が通過して、接触することができない。

それなのに少年の体だけは、束縛してその場に拘束している。

「私だ！ 私の声を聞いてくれ！ 光の声に耳を貸すな！ 返事をしてくれ！」

少年の、その精神は光に囚われ、名を奪われ、心を奪われようとしているのか。

「行くな！ 私と約束したではないか！」

光から庇うようにして、その体を抱きしめる。

このままではまた少年は遠くへ行ってしまう。

今度こそ、二度と帰ってこない場所へ。
真なる永劫へ。

「私の傍にいと約束したではないか！」
名だ。

名を呼ばなければ。

名を呼ばない限り少年は答えてくれない。

それなのに、喉元でせき止められたかのように、名を呼ぶことができない。

名を一言呼びたいのに。

「私の側にいてくれ！」

名がわからない。

「私から離れないでくれ！」

名を思い出せない。

「私と一緒にいてくれ！」

その名を、ただ一言呼びたいのに。

「私と約束したではないか！」

不意に、少年の瞳が、一瞬だけ抱きしめる少女に向いた。

その温もりがとても暖かくて。

とても優しくて。

それはなによりも望んだ、たった一つの願い。

優しく名を呼んでくれる人。

彼女は少年の名を呼んだ。

少年が育った村の、少年の住む家の納屋で、一人の少女はこう聞

いた。

「どうしてあなたが助けに行くの？」

少年は静かに少女に答えた。その顔は微笑を浮かべていたけれど、どこか悲しそうな瞳で。

「彼女はね、僕の友達なんだ」

「……え？」

少女は一瞬理解できなかった。

少年は続けた。

「王都にいた頃、彼女と会ったのは数えるほどでしかないけれど、僕には大切な思い出で、忘れなかった。でも、彼女は忘れてしまっていると思っていた。憶えていてくれるほど大切にするとは思ってなかった。でも、憶えていたんだ。七年も経ったのに。七年間で僕は成長して顔も変わって、それに……」

顔右側にある火傷の痕をなぞる。焼け爛れた痕跡。瞼が異様に捲り上がり、眼球が飛び出しているように錯覚する、異形の右目。

「元々の顔もずいぶん変わったのに、それなのに、僕だってすぐに判ってくれた。だから、今でも彼女と僕は友達だ。今はたった一人の友達なんだ。友達だから、友達が危険な目にあってるのなら、助けないといけない。いや、助けたいんだ。たった一人の、僕の最後の友達を、助けたいんだ」

彼は栄誉も名声も求めていない。

そんな少年を少女は引き止めることができなくなった。

ただ、名前を呼んでくれる友達を助けたいだけなのだから。

アジアティースム

名の無い魔獣は問いに答えた。

受理した

十章・正体・4

パプロは全力疾走して儀式の場所へ戻った。

同時に、六連装拳銃を構え、名の無い魔獣へ向けた。

少年は王女に抱きしめられていた。

優しい姉に抱かれる弟のように、安らぎに満ちた、そしてどこか寂しげな微笑で。

リグヴェーダは、抱きしめる少年に囁く。

「この大嘘吐き者が。私とずっと一緒にいると約束したではないか。私の傍にいと約束したではないか。私がどれほどおまえに会いたいと思ったか……」

「……ごめんね、リグ。」

それは、約束を破ったことに対する謝罪だったのか、それとも今から告げることに對する謝罪だったのか。

「僕はもう……」

なにを告げようとしたのか、その言葉は最後まで口にする事はなかった。

「パプロさん？」

少年はパプロに気付いた。その瞳は以前となにも変わらない。

少女のように整った左顔。

異形の怪物のような右顔。

相反する美醜が同居する顔にある二つの瞳は、人間の瞳だ。

善でもあり悪でもある。

善でもなく悪でもない。

人間の性質を現すように。

パプロは安堵の息を吐いて、六連装拳銃を下ろす。

そしてリグヴェーダもパプロに気付くと、急に少年を離れた。少

し赤面している。少年を抱きしめているのを見られたことが恥ずかしかったらしい。変なことで照れる。

「……終わったのか？」

全速力で戻ってきたため息切れする呼吸を整えながら、パブロは周囲を見渡し、異常がないことを確認する。

「そのようだ」リグヴェーダが肯定した。

改めてパブロは周囲を見渡した。魔法陣はその原型をとどめていないほど崩れている。だが、それだけだ。

世界は滅んでいない。

リグヴェーダも、少年も、自分も確かにここにいる。

「名の無い魔獣は、元の世界へ帰ったみたいですよ」

その言葉でパブロは、少年がなにも思い出していないのだと理解する。自分自身の正体も知らないままだ。

世界の命運は確立二分の一。そんな分の悪いくじ引きを実行させるわけには行かず、パブロはたとえ少年を殺してでも止めるつもりで戻った。

名の無い魔獣と戦って勝てるのかどうか、それ以前に迷いなく少年を殺すことができるのか。

短い時間に覚悟を決めて、最後の審判に挑むためにパブロは儀式の間に戻った。

しかし、そこには、なにやら抱きしめ合っている少年と少女。

感動的な場面なのだろうが、名の無い魔獣との戦い、そしてこの少年を殺すこと。全てを覚悟して走ってきた身としては、安堵を通り越して、肩透かしを食らった気分でもある。

もっとも、二人にこのことを言うわけにはいかないが。とても、言えない。終わった今では、言う必要もない。

そして名の無い魔獣が下した審判の結果は訊かなくてもわかっていた。

「……パブロさん。大丈夫ですか？」

少年はまだ力が入っていない声で聞く。

「大丈夫だ、一応。それより、おまえこそ大丈夫なのか？」

少年は微笑むが、やはりそれも力が入っていない。

「ちよつと、大丈夫じゃないかもしれせん」

見たところ、右手首と右足首を痛めている。右側肋骨も二本骨折。打撲もあるが、命に別状はない。リイジスに頼めばすぐに治るだろう。

「ま、世界が減んでなくてなによりだ」

パプロは少年に手を差し伸べた。

少年はその手を握り、立ち上がった。

続いてリグヴェーダにも手を貸して立たせた。

リグヴェーダはパプロに「なにがあつたのか、知っているのか？」

「状況から大体の予想はつく。だから決死の覚悟で全速力で戻ってきたんだが、もうやることないみたいだな」

「ははは」少年は軽く笑うと「戻りましようか、パプロさん。リグ」

「ああ、そうだな」リグヴェーダが答える。「みなのところへ戻ろう」

少年がリグヴェーダに肩を貸してもらつと、神殿の通路を三人は歩き始め、ラッガートたちのいる礼拝堂へ向かう。

パプロは煙草に火をつける。本来ならば、雇い主である一国の王女に代わり、少年を支えるべきかもしれないが、異形の目を遮光ゴーグルで隠す妖精は、そうしなかった。

馬に蹴られたくないので。変わりに間延びした声で聞いた。

「なんか痛そうだが、大丈夫か？」

「あまり大丈夫じゃありません。骨が折れてるみたいですから」

しかし少年はそれほど苦にしていないうた。どこか冗談混じりで答えている。もう戦いが終わったからだろう。

「そりゃ、そうだな。でも、まあ役得つてことで」

王女様とべたべたできるんだからな。

しかし少年は意味がわからず「なにが役得なんです？」

「気にしない気にしない」

手をパタパタと振って返事をごまかす。

リグヴェーダはパプロに向ける表情から意味を理解したようだが、この奇妙な妖精がそういうからかうようなことを言うのはいつものことなので、相手にしないことにしたようだ。

気になるのは、他にあった。

リグヴェーダは少年に聞く。

「あの時、おまえになにが起きたのだ？ おまえは私の声が聞こえていなかった。そして私は、おまえの名を少しの間ではあるが、どういうわけか思い出すことができなかった。なにが起きていた？」

少年が説明したことは少なかった。実質一つだけだ。

「光の柱から、名の無い魔獣が、僕に聞いたんだ。答えは如何に？
って」

リグヴェーダはそれで納得したようだ。完全に全ての説明がつくわけではないが、しかし大体理解できれば十分らしい。もっとも根本的なことに間違いがあるが、パプロはそのことを説明するつもりは、やはりなかった。

「なるほど。そして、名の無い魔獣は元の場所へ帰したか……いや、あれは本当に名の無い魔獣であったのか？ 光の柱の正体は、本当に、名の無い魔獣だったのか？」

鋭いな。パプロはリグヴェーダの直感に感心しながら「さあな。わかんね」

そして胸中付け加える。嘘だけだな。

少年に答えを求めた存在は、名の無い魔獣ではない。

少年自身が名の無い魔獣だ。

当然、問い掛けたのは異なる存在。

それは、誰もが知る存在。

見ることも聞くこともできないが、常に感じる、あらゆる世界でもっとも強大にして偉大なる存在。

再び奇跡を起こしたのか、それとも見捨てたのか。その心を推し量るのは、限られた存在である自分には不可能なのだろう。

パプロの馳せる思いを知るよしもない少年は、淡々と告げる。

「わかるのは、名の無い魔獣は本当に現出して、審判の答えを僕に、人間に求めたんだ」

パプロは胸中付け加える。おまえが人間になることだな。

そして言葉にして付け加えるのは「だが、人間が自殺をするようなことをするわけがない。なのに、なんで人間に審判を求めるんだか」

なんとなく、理解できるような気もするが。

人間は死に恐怖する。

人間は古い、腐し、朽ちることに嫌悪する。

人間は滅びを拒絶している。

滅びを求めない人間が、滅びを願った時。

その時、世界には存続する価値などない。

世界は在るに値せず、滅ぶに値する。

ただ、それだけの単純な理由。

だが、少なくともそれは今ではなかった。

「まあ、良い。こうして助かったのだから」リグヴェーダは少年の体に回した腕の位置を少し直す。少しだけ、少年の温もりを多く感じるように。「それに、そなたが生きていてくれたのが、私は嬉しい」

「リグ」少年も笑顔を見せた。

パプロはしばらく二人を眺めていたが、ふと気になり、水を差すように気が引けたが、尋ねた。

「それで、結局、どっちの名前で呼べばいいんだ？　おまえの名は^{マース}なんだ？」

「知ってるんですか？」少年は少し驚いた。

「途中で気付いた。王女さまが何度も別の名前で呼んでいただろ」

肝心な個所は話しておらず、説明も端折っているが、少年は取るに足らないことだと思ったのか、すぐに答える。

「マースムカと呼んでください。昔の名前は捨てました」

それは王都には戻らないという意味の現われ。貴族の身分も、それに伴う裕福な生活も。そして一国の王女を救ったのだという、名声も栄誉も、全て捨てるという意味。

すなわち、過去との決別。

「良いのだな、それで」リグヴェーダが確認する。

「うん」少年は力強く肯く。そして、ふと付け加えて「でもマースム力って言うのも、本当の名前じゃないけどね。ああ、なんだか名前がないみたいだな。そうか、だから魔獣は僕に聞いたのかな。名の無い者に、名の無い魔獣は」

それは奇妙な符号。

不思議な一致。

偶然の合致。

「そうかもしれないな」リグヴェーダは合点がいったように、そしてどこか感慨深く同意した。

パプロは考える。もしかすると、この少年は記憶の片隅のどこかで、自分が名の無い魔獣であることを覚えているのかもしれない。だから、名前を持たないようにし、名を持つことを避けているのではないだろうか。

誰も少年の名を知らない。

だから誰もが少年に尋ねる。

マースムカ

汝の名はなにか？

その問いに、名を持たない少年は、答えることはない。

ただ、異なる言葉で質問を繰り返すだけ。

汝の名はなにか？

マースムカ。

ゲシュタルは騒動に乗じて逃げただろう。捕まえて置く余裕などなかった。二三発撃っておけばよかったかもしれないが、魔王であるあの男がその程度で死ぬとは思えない。

そして魔王の目的の遂行に、名の無い魔獣が不可欠ならば、いつか再びこの少年を狙うはずだ。

その時、少年は自分の正体を知ることになるかもしれない。

自分が何者なのか気付くかもしれない。
自分が誰なのか理解するかもしれない。

その時、この少年はいつたいどうするのだろうか？

名を問われた時、なんと答えるのだろうか？

この、名^{アジアデイスム}の無い魔獣は。

三人はしばらくして礼拝堂に到着した。

リイジスによる治療を終えた、騎士と魔術師が、王女の姿に喜ぶ。
「王女！」ラッガートが厳つい顔に安堵の笑顔を見せて「ご無事で
したか」

「うむ、大事ない」リグは自身の無事を伝える。だが、笑顔は返す
ことなく、「シエルダックとルマジャーンは残念であつた。私一人
のために。真に無念だ」

「いいえ、王女」ラッガートは首を振り「二人の犠牲は、王女一人
のためだけではありません。王国の未来。騎士の教義。二人は自ら
の意思と誇りのために戦つたのです」

リグヴェーダは感慨深く「そうだな。そのとおりだ」

「パブロ」セリナが「ありがとう。色々助けてくれて。妹の仇も討
てたわ」

「たいしたことじゃないさ」パブロは笑って答える。

リイジスがパブロの周囲を飛び回る。

「ところで、さっき揺れたよね。いつたいなんだつたの？ 地震と
は違うみたいだし」

マースムカがなにか言おうとしたが、パブロは誰にも気付かれな
いように、マースムカだけに見える程度に首を振って止めた。

名の無い魔獣の一件は伏せておくべきだ。このことが明るみに出
たら、どのような事態が起こるかわからない。ザーラデイスのよ
うな人間が他にもいないとは限らない。

マースム力はパブロの意を汲んだのか、なにも言わなかった。

「よくはわからないが、どうも中途半端に召喚魔法が作動したらしい。だが、生贄がないままで行われたから、魔獣は出なかったみたいだな」

「……そう」セリナが微笑んでいたが、含みがあるような気がするのは、たぶん気のせいではない。

気付かれたか。だがセリナは追及する気はないようだ。

「騎士さまあ！」

唐突に元気な声。扉の一つから息を切らしてダラスが駆け寄ってくる。その後ろからリーバが現れる。

「騎士さま！ やりました！ ザーラディースの首を取りました！」その首を振り回すようにして見せる。昔の戦争で討ち取った敵の首を持つてくることが褒賞と引き換えとなっていたが、それを真似ているのか、それとも現在でも同じだと思っているのだろうか。しかし、それは英雄が敵将を討ち取った時の栄光ある姿というよりは子供が玩具で遊んでいるようにしか見えなかった。

「ああ、そうか」ラッガートは生首を不気味としか感じていないのは明白で、近付けられて引いている。「よ、良くやった。ダラス」首謀者を仕留めたというのにラッガートには喜んでる様子はなく、賞賛の言葉もうわの空といった感じで、本当に褒めているわけではないだろう。

「はいっ、ありがとうございます」だがダラスは全く気付かずに単純に喜んでいる。

「あ、そうだ。ところで、今の地震なんだったんでしょね？」

「さあな。わからん」ラッガートは肩を竦める。

だがダラスは可能性の一つを考えた。

「マースム力だな」ダラスはマースム力を睨みつける。「てめえ！ なにかへまやかしゃがったな！ なにしゃがった！」

一方的に決めつけてマースム力を糾弾するダラスに、皆が呆気にとられ、啞然とした。

そして不意にダラスまでも呆氣にとられたような顔をした。自分の行いに気付いたからではなかった。

「おまえ！ なにリグヴェーダに触ってやがる！ どけ！」

リグヴェーダがマースムカに肩を貸していることに気付いたダラスは、怒りにマースムカの胸倉を掴んで、リグヴェーダから力任せに引き剥がした。

「あう！」

マースムカは疲労と怪我で、足の踏ん張りが利かずに転倒する。

「リグヴェーダ女王！ 見てください！ やりました！ 首謀者の首を取りましたよ！」ザーラディースの首を掲げて見せる。そしてリグヴェーダの体にいきなり密着した「さ、俺が肩を貸します」

つまりダラスは、マースムカがリグヴェーダに肩を貸しているのだと勘違いした。そのことが、怒りさえ感じるほど不愉快だったのだ。

それがこの横暴な行動の理由。

パプロはダラスに凶暴な感情が芽生えた。一緒に戦った仲間だが、行動を共にしている間、一度としてこの人間に良い感情を持ったことはなかった。時折見せる幼稚さは不快でさえあった。そして今、かなり本気でぶん殴りたくなった。

この人間は、ザーラディースやボツズル、パレスと同じ、悪意の人間だ。

「ダラス！」

マースムカがダラスのあまりの横暴さに頭に血が上ったのか、怪我の痛みも忘れて、殴ろうと拳を振り上げた。

「ブヘッ！」

そしてダラスの間の抜けた声。

「……あれ？」

マースムカの間の抜けた声。

ダラスは、リグヴェーダに殴り倒された。

「貴様、この者への暴挙は私への暴挙と思え」

リグヴェーダは眉目を危険な角度に上げて、反論も言い訳も許さない口調で断ずると、殴られた鼻を押さえて呆然と床に尻をつけてしまっている無礼者には、それ以上目もくれなかった。

そして表情を柔らかくして、拳を振り上げた状態で呆氣に取られているマースム力に、心配そうに訊いた。

「大丈夫か？ 怪我が痛むか？」

「……う、うん。大丈夫」

強い意志が空回りして少し呆氣にとられているマースム力を、リグヴェーダは改めて支える。

「治療道具は、外にあるのだな？ そこまでがんばれるか？」

「なんとか」

「では、行こう」

二人は体を寄り添わせて、神殿の外へ向かった。

ダラスはわけがわからず、腰を地面についたまま動かない。そしてこの人間を助けようとする者は誰もいなかった。

「では、俺たちも行くか」

「そうね」

魔術師も騎士も、王女に続いて神殿を出る。

ダラスの仲間であるはずのリーバも、殺された仲間の遺体を担ぐと外へ出て行った。

共に戦った仲間であり、いくつかの功績を取ったはずだが、誰一人ダラスに見向きもしなかった。

「あ、あの？ 俺は勇者に……」

ダラスは栄誉の証明であるザーラディースの首を掲げて見せるが、誰も見ようとしなかった。

急速に暴力的な気分が消え、パプロはリィジスに一言。

「行くぞ」

「うん」

そして二人で神殿を出る。

神殿の門を通過し、階段を下り始めたパプロは、急に実感する。

今回の事件は、世界が滅亡する寸前だった。

まさに滅亡寸前だったのだと、パブロは明確に理解し、恐怖した。あの村で、マースム力はダラスのような人間と常に接触し続けていた。

そして今回の事件でマースム力が遭遇した、数々の悪意の人間に、マースム力はなにを思ったのか。

滅びを完成させる名の無い魔獣の周囲には、悪意に満ちた人間ばかりだったのだ。

そんな悪意にさらされ続けた名の無い魔獣は、人間の存在をどのように定義したのか。

それは世界の存続にかかわることでありながら、世界全体からみれば小さなことなのかもしれない。

ほんの一部の、それこそ数えるほどでしかない人間によって、人間全体の属性が決められるなど、かわりのない者には不条理に思えるかもしれない。

だが、世界が存続したのも、やはり単純でささやかな理由だ。妖精は、少年の体を支える、一人の人間を見つめた。

階段を降りるマースム力を、リグヴェーダが大切に支える。

弟を守る姉のように。

「ほら、もっとしっかり掴まれ」

「うん。ありがとう」

ラッガートとセリナは、不思議そうな表情でお互いの顔を見合わせた。二人がなぜあれほど親しいのか、事情を知らない者には理解が及ばないことだ。

そして誤解することもある。

ラッガートは姉弟のような二人に聞こえないように、セリナとパブロに囁いた。

「国王にどう説明すればいい。王女が一目惚れされたなどと」

それはパブロの笑いのツボを刺激した。

「ブハハハハハ」

笑い続けるパブロを、不思議そうに見るリイジスが、やはり不思議そうに呟いた。

「一体なんなの？」

リイジスが怪我を治療できるが、パブロはもうしばらくの間、黙っておこうと思った。

終章・約束

その後のことは簡潔に記そう。

十日後、リグヴェーダ王女は王都へ帰還した。

その事件の全容は、不明確な部分が多く、これから先、長い調査が必要だろう。

しかし、多くの犠牲を出したこの事件は、騎士たちの活躍により、さらなる多くの犠牲者が出ることは未然に阻止され、そして王女の帰還にて一応の決着を見せた。

王宮の人々はそのことを喜び、王女の無事を喜んだ。

リグヴェーダ王女は、家族と多くのことを語り、また語りきれない多くのことを残し、帰還した最初の日を終えて、一夜の眠りに入った。

それまでの疲れを癒すために。

ラッガートは緊急事態の時に休暇をとったことや、一連のことで実質独断行動をとったことの責任は追及されることはなく、王女を救出したことで、逆に国王から賞賛と栄誉を与えられた。

また、遺体を王都へ運んだルマジャーンとシエルダックにも同じ栄誉が与えられた。

若き騎士と、長年仕えてきた騎士。

二人が果たした忠義の誓いに。

諸々の事情によって公表はできないが、事情を知る騎士団内部でも、三人を英雄と称えた。

ラッガートはそれを誇りに思い、そして二人の騎士の死を悼んだ。
ルマジャーンの剣。
シエルダックの銃。

その二つを形見として、彼はその騎士道を生涯において貫く決意を固めた。

二人の仲間のために。

セリナは王国軍へ戻った。休暇願に書いた理由、私用につきはもう終わった。

誰よりも愛する、双子の妹の仇は討った。

国王からの栄誉は辞退した。独断行動をとったことは許されるかもしれないが、それを抜きにしても、栄誉を授かることが、まるでサリナの死と引き換えであるような気がして、受け取る気にはなれなかった。

王都へ戻ってから数日後、サリナの葬儀を行った。両親に事件の全てを告げて。

両親は悲しみ、涙を流し続けたが、少なくともこれから先、娘に死を与えた者を憎み続けることだけはなくなった。許すことはできなくとも、憎しみに満ちて生きていく必要はなくなったのだ。

セリナ自身も。

ダラスは自分の武勇伝を誇張交じりに村人に話し、自慢話に花を咲かせ、村人から勇者と称えられた。

ちなみに彼のティダは、神殿から馬を停留している場所に戻るとその姿がなかった。普段の行いの悪さがついに祟って見限られたらしい。彼はラッガートに頼んで馬に乘せてもらうことになってしまった。

そして彼はラッガートたちに付いて王都へ向かい、騎士見習い学

校へ入った。行く行くは騎士団長に考えているが、それを果たせるかどうかは誰にもわからない。

それから、ダラスはラーナも一緒に連れて行こうとしたが、彼女は頑として拒絶した。

ラーナがそれほど強い意志を見せたのは初めてで、ダラスを始めとした村人の誰もが驚いた。

ダラスは二人の女に同時に振られたような気分だった。

パブロとリイジスは、王女たちが大峡谷を出立する前に姿を消してしまった。自分たちのことを知られたくない二人は、王都へ一足先に戻ったのだろう。

もつとも、すぐに王女に姿を見せてくれるだろうが。

そしてマースムカは……

事件が終わってから一ヶ月後、村はずれの草原で、マースムカは二つの墓石の前で語る。

「父さん、セネロ。僕は行くよ。ここに理由はなくなったから」
セネロに語る。

「セネロ、君と一緒に大峡谷を走ったこと、たくさんの楽しかったこと、忘れないよ」

ジフに語る。

「父さん。父さんは、僕が父さんと呼ぶ資格はないって言うていたけれど、僕は胸を張って、誇りを持って呼ぶよ。父さん、って」

そして二人に告げる。

「さようなら」

村へ足を向けずに、そのまま村を離れていく。
ジャリスが止まっており、そしてその傍らに、少女と呼ばれる時間
間がすぎたばかりの女性が佇んでいた。

「……ラーナ？」

ラーナはマースムカの傍に来ると尋ねる。

「村を出るのね？」

「うん」マースムカは首肯する。迷いなく、誇らしげに。

「そう……」

ラーナは俯き、少し迷った。止めるべきなのかどうか。一緒に村
にいて欲しいと思う。けれど、それが彼にためにはならないことは
わかっていた。

なにより、彼の心はすでに大峡谷にはない。最初からなかった。

そして今、彼はそれを確信して、旅立とうとしている。

無理に引き止めても、それに意味はない。

それに、彼はもう少年ではない。

独り立ちした大人だ。

自分もまた、少女ではなくなったように。

「この前、言ってたよね。リグヴェーダ王女はたった一人の友達だ
って」

ラーナは顔を上げると、精一杯の笑顔を見せて、告げた。

「でも、大峡谷を出ても忘れないで。私も、あなたの友達だってこ
とを」

マースムカは、ラーナに笑顔を見せた。

それは彼女に見せる、初めての心からの微笑み。

王宮の一室、国王第二王女リグヴェーダの寝室にて、その王女は

夢を見た。

風がそよぎ、華が咲き乱れる、おとぎ話のような庭園で、少年は約束した。

「僕はずっと君の傍にいるよ」

少女は喜びに目を輝かせ、しかし次には疑いの眼差しを少年に向ける。

「そなたの約束はあてにならぬ。この前もそういつて、私の前から姿を消してしまっただではないか」

「あ、いや、それはね、なんていうか」

慌てて言い訳する少年を遮って、少女は続けた。

「だから、私が約束しよう。たとえそなたがどこか遠くへ行ってしまったとしても、私が必ずそなたを探す。たとえどこに消えてしまったとしても、私は必ずそなたを見つけよう」

少年は少し驚いた顔で、しかし次にはとても嬉しそうな笑顔。

少女のように整った左目と、焼け爛れた醜い右目。

人に嫌悪感を催すそれは、しかし少女にはなんの不快感を与えなかった。

彼女の目に映るのは、輝くような、そして優しく温かい笑顔。

「わかった。僕が遠くへ行ってしまうことになっても、君は絶対に僕を見つけてくれるんだね」

「そうだ。そして絶対にそなたを離したりはせぬぞ」

そうして少女は、少女と約束を交わした。

「約束だね」

ワアドゥ

「約束だ」

ワアダ

そして、少女は少年の名を呼ぶ。
ずっと言いたかったその名を。

その名は……

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9982n/>

名の無い魔獣

2011年2月4日12時55分発行